

宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ

長谷町遺跡・斎宮池遺跡・真木谷遺跡・与五郎谷遺跡  
発掘調査報告

2010（平成22）年

三重県埋蔵文化財センター









調査区全景（南上空から）



調査区全景（北上空から）





火葬墓 S X 5 供献品出土状況 (南から)



火葬墓 S X 5 木炭検出状況 (南から)





火葬墓 S X 5 蔵骨器出土状況 (東から)



火葬墓 S X 5 出土遺物





調査区全景（北西上空から）



竪穴住居SH3カマド遺物出土状況（西から）



# 序

本書で報告する長谷町遺跡・斎宮池遺跡・真木谷遺跡は多気郡明和町に、与五郎谷遺跡は同郡多気町に所在する縄文時代及び古代の遺跡であります。これらの遺跡は、明和町・多気町・玉城町に跨る玉城丘陵と呼ばれる丘陵地帯にいずれも立地します。この丘陵地帯には、現在確認されているだけでも500基を超える古墳が立地しており、南勢地方最大の古墳密集地帯として知られているところでもあります。今回報告する遺跡は、縄文時代と古代の集落跡及び古代の墓跡と考えられるものですが、この丘陵地帯には古墳以外にも多くの遺跡が存在することが確認されました。とりわけ長谷町遺跡で確認された平安時代の火葬墓は、三重県内では11例目ではありますが、遺存状態が非常に良好で、古代の火葬による埋葬方法が詳細に把握できる貴重な調査結果が得られました。

今回の発掘調査では、このような地域に残された往時の人々の足跡を、断片的ながらも垣間見ることのできる資料が得られました。今回報告するのは、国営宮川用水第二期土地改良事業に伴い平成18～20年度に行った発掘調査の記録ではありますが、本書が郷土に残された貴重な歴史遺産を、未来に伝える一助となれば幸いと存じます。なお、末筆ながら、現地調査や報告書作成に際し、ひとかたならぬご理解とご協力をいただいた多くの方々に心から深謝し、厚くお礼申し上げます。

平成22年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 河北 秀実



# 例 言

- 1 本書は、三重県多気郡明和町池村に所在する長谷町（はせまち）遺跡、斎宮池（さいくういけ）遺跡、真木谷（まきだに）遺跡、同郡多気町土羽に所在する与五郎谷（よごろうだに）遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本書が扱う発掘調査の原因事業は、平成18・19・20年度国営宮川用水第二期土地改良事業である。
- 3 発掘調査は下記の体制で実施した。

## 長谷町遺跡

調査主体 三重県教育委員会  
調査担当 三重県埋蔵文化財センター  
調査研究Ⅱ課 小山憲一 前野謙一  
調査委託 株式会社イビソク

## 斎宮池遺跡

調査主体 三重県教育委員会  
調査担当 三重県埋蔵文化財センター  
調査研究Ⅱ課 小山憲一 西口剛司  
調査補助委託 安西工業株式会社

## 真木谷遺跡

調査主体 三重県教育委員会  
調査担当 三重県埋蔵文化財センター  
調査研究Ⅱ課 小山憲一 西口剛司  
調査補助委託 安西工業株式会社

## 与五郎谷遺跡

調査主体 三重県教育委員会  
調査担当 三重県埋蔵文化財センター  
調査研究Ⅱ課 小山憲一 山口田美  
調査補助委託 安西工業株式会社

- 4 本書が対象とした実調査面積は、下記のとおりである。

長谷町遺跡 : 946m<sup>2</sup>

斎宮池遺跡 : 824m<sup>2</sup>

真木谷遺跡 : 300m<sup>2</sup>

与五郎谷遺跡 : 523m<sup>2</sup>

- 5 本書が対象とした現地調査期間は、下記のとおりである。

長谷町遺跡 : 平成18年11月6日～平成18年12月22日

斎宮池遺跡 : 平成19年10月5日～平成19年12月13日

真木谷遺跡 : 平成19年10月1日～平成19年10月22日

与五郎谷遺跡 : 平成20年9月17日～平成20年10月17日

- 6 調査にかかる諸費用は、農林水産省東海農政局宮川用水第二期農業水利事業所が全額負担した。
- 7 本書が扱う発掘調査の資料並びに出土遺物等は、三重県埋蔵文化財センターが保管している。

- 8 本書の執筆は小山憲一・田村陽一・林 義男・山口田美・西口剛司・大下 明・久保勝正が行い、編集は小山憲一が行った。執筆の分担は目次と文末に明記している。遺物の撮影は、小山憲一・林 義男・山口田美・西口剛司・杉野直也・前野謙一が行った。
- 9 本書の作成作業は三重県埋蔵文化財センター調査研究Ⅱ課・支援研究課（平成21年度は活用支援課）を中心に行った。出土遺物の実測図は三重県埋蔵文化財センターが作成したが、石器・石製品については、大下 明氏・久保勝正氏に実測図の指導をいただいた。
- 10 長谷町遺跡出土火葬人骨については、榑崎修一郎氏（生物考古学研究所〈依頼当時は財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団〉）に分析鑑定及び報告書作成を依頼した。また、長谷町遺跡及び斎宮池遺跡出土の炭化材他については、パリノ・サーヴェイ株式会社に分析及び報告書作成を委託した。各分析報告については、目次と文末に執筆者を明記している。
- 11 森と水の源流館学芸員成瀬匡章氏より寄稿いただいた、長谷町遺跡古代火葬墓関連の資料紹介を附章として掲載した。
- 12 本書で使用した地図類は、国土地理院発行の1/25,000地形図、多気町都市計画図、農林水産省東海農政局宮川用水第二期農業水利事業所の事業計画図である。
- 13 挿図の方位は座標北を用いた。座標は第60図のみ世界測地系、その他はすべて日本測地系を用いた。なお、磁針方位は西偏6度54分、真北方位は西偏0度20分である（平成9年）。
- 14 本書では、下記の遺構表示略記号を用いた。  
SH：竪穴住居 SX：火葬墓 SK：土坑 SF：焼土坑 SD：溝 SZ：落ち込み・性格不明遺構  
Pit：小穴
- 15 本書で使用する用語は、以下に統一している。  
つぼ：壺 わん：椀 つき：杯 なべ：鍋
- 16 本書で表記する色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』（21版、日本色研事業株式会社、1998年）を用いた。
- 17 挿図と写真図版の遺物番号は相互に対応している。なお、遺物の写真図版は縮尺不同である。
- 18 出土石器・石製品の石材については三重県立博物館津村善博氏に鑑定いただいた。
- 19 現地調査及び報告書作成にあたり、下記の方々に様々なご指導・ご助言をいただいた。（敬称略・五十音順・所属は当時）  
大下 明 （雲雀丘学園中・高等学校）  
岡田 登 （皇學館大學）  
奥 義次 （度会町森添遺跡整理室）  
尾野善裕 （京都国立博物館）  
久保勝正 （三重県立名張高等学校）  
佐藤亜聖 （財団法人元興寺文化財研究所）  
津村善博 （三重県立博物館）  
榑崎修一郎（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団）  
山中 章 （三重大学）  
吉澤 悟 （奈良国立博物館）

# 本文目次

第I章 前言	(小山憲一・西口剛司・山口田美)	1
第1節 調査に至る経過		1
第2節 調査の経過		5
第3節 調査の方法		10
第II章 位置と環境	(林 義男)	12
第1節 位置と地理的環境		12
第2節 歴史的環境		12
第III章 長谷町遺跡	(小山憲一)	16
第1節 遺構		16
第2節 遺物		27
第3節 結語		36
第IV章 斎宮池遺跡	(小山憲一・田村陽一・大下 明・久保勝正)	50
第1節 遺構	(小山憲一)	50
第2節 遺物	(田村陽一・大下 明・久保勝正・小山憲一)	56
第3節 結語	(小山憲一・田村陽一・大下 明)	115
第V章 真木谷遺跡	(西口剛司・小山憲一)	123
第1節 遺構		123
第2節 遺物		123
第3節 結語		126
第VI章 与五郎谷遺跡	(山口田美・小山憲一)	127
第1節 遺構		127
第2節 遺物		127
第3節 結語		132
第VII章 自然科学分析	(小山憲一・榎崎修一郎・パリノ・サーヴェイ株式会社)	135
第1節 分析の目的	(小山憲一)	135
第2節 長谷町遺跡出土火葬人骨	(榎崎修一郎)	137
第3節 長谷町遺跡の自然科学分析	(パリノ・サーヴェイ株式会社)	143
第4節 長谷町遺跡から出土した炭化材の樹種	(パリノ・サーヴェイ株式会社)	152
第5節 斎宮池遺跡から出土した炭化材・種実遺体の種類	(パリノ・サーヴェイ株式会社)	158
附 章		
玉城丘陵内の表面採集資料について	(成瀬匡章)	163

# 挿 図 目 次

## 第 I 章 前言

- 第 1 図 事業関連遺跡位置図 …………… 2  
第 2 図 長谷町遺跡・斎宮池遺跡・真木谷遺跡  
調査区位置図・範囲確認調査坑配置図 …… 4

## 第 II 章 位置と環境

- 第 3 図 遺跡位置図 …………… 13

## 第 III 章 長谷町遺跡

- 第 4 図 長谷町遺跡遺構平面図・小地区割図  
…………… 17・18  
第 5 図 長谷町遺跡調査区土層断面図 …………… 19  
第 6 図 長谷町遺跡確認トレンチ土層断面図 …… 20  
第 7 図 長谷町遺跡 S H 1・S X 5・S K 6  
平面図、埋土土層断面図 …………… 21  
第 8 図 長谷町遺跡 S K 6・S H 1 - Pit 1  
遺物出土状況図 …………… 22  
第 9 図 長谷町遺跡 S X 5 遺物出土状況図・  
断面見通し図・埋土土層断面図 …………… 23  
第 10 図 長谷町遺跡 S F 3 平面図・埋土土層  
断面図・遺物出土状況復元図 …………… 25  
第 11 図 長谷町遺跡 S K 7 平面図・埋土土層  
断面図 …………… 25  
第 12 図 長谷町遺跡 S H 1・S Z 2・S F 3・  
S K 6 出土遺物実測図 …………… 28  
第 13 図 長谷町遺跡 S X 5 出土遺物実測図 …… 29  
第 14 図 長谷町遺跡包含層他出土遺物実測図 …… 30  
第 15 図 坑内法による製炭方法 …………… 40  
第 16 図 太安萬侶墓の占地 …………… 45  
第 17 図 長谷町遺跡火葬墓の占地 …………… 45  
第 18 図 長谷町遺跡火葬墓と被葬者想定対象  
との位置関係図 …………… 47

## 第 IV 章 斎宮池遺跡

- 第 19 図 斎宮池遺跡・真木谷遺跡小地区割図 …… 50  
第 20 図 斎宮池遺跡遺構平面図・土層断面図  
…………… 51・52  
第 21 図 斎宮池遺跡 S H 3 遺物出土状況平面  
図・断面見通し図・埋土土層断面図 …… 54  
第 22 図 斎宮池遺跡 S F 10 遺物出土状況平面  
図・断面見通し図 …………… 55  
第 23 図 斎宮池遺跡遺構他出土遺物実測図 …… 56  
第 24 図 斎宮池遺跡 S K 7 出土遺物実測図 …… 58  
第 25 図 斎宮池遺跡包含層他出土遺物実測図① …… 60  
第 26 図 斎宮池遺跡包含層他出土遺物実測図② …… 61  
第 27 図 斎宮池遺跡包含層他出土遺物実測図③ …… 62  
第 28 図 斎宮池遺跡包含層他出土遺物実測図④ …… 63  
第 29 図 斎宮池遺跡包含層他出土遺物実測図⑤ …… 64  
第 30 図 斎宮池遺跡包含層他出土遺物実測図⑥ …… 65

- 第 31 図 斎宮池遺跡包含層他出土遺物実測図⑦ …… 66  
第 32 図 斎宮池遺跡包含層他出土遺物実測図⑧ …… 67  
第 33 図 斎宮池遺跡包含層他出土遺物実測図⑨ …… 68  
第 34 図 斎宮池遺跡包含層他出土遺物実測図⑩ …… 69  
第 35 図 斎宮池遺跡包含層他出土遺物実測図⑪ …… 70  
第 36 図 斎宮池遺跡出土石鏃実測図 …………… 72  
第 37 図 斎宮池遺跡出土石錘実測図① …………… 73  
第 38 図 斎宮池遺跡出土石錘実測図② …………… 74  
第 39 図 斎宮池遺跡出土石錘実測図③ …………… 75  
第 40 図 斎宮池遺跡出土石錘実測図④ …………… 76  
第 41 図 斎宮池遺跡出土石錘実測図⑤ …………… 77  
第 42 図 斎宮池遺跡出土石錘実測図⑥ …………… 78  
第 43 図 斎宮池遺跡出土石錘実測図⑦ …………… 79  
第 44 図 斎宮池遺跡出土石皿・台石実測図① …… 80  
第 45 図 斎宮池遺跡出土石皿・台石実測図② …… 81  
第 46 図 斎宮池遺跡出土敲石実測図 …………… 82  
第 47 図 斎宮池遺跡出土磨石実測図 …………… 83  
第 48 図 斎宮池遺跡出土楔形石器・粗製剥片  
石器実測図 …………… 84  
第 49 図 斎宮池遺跡出土石錐・削器・R F・  
U F・石核・礫器実測図 …………… 85  
第 50 図 斎宮池遺跡出土磨製石斧実測図 …… 86  
第 51 図 斎宮池遺跡出土ナイフ形石器・垂飾  
実測図 …………… 87  
第 52 図 斎宮池遺跡 S H 3・S F 10・D 16 - Pit 2  
出土遺物実測図 …………… 88  
第 53 図 斎宮池遺跡包含層他出土遺物実測図 …… 89  
第 54 図 斎宮池遺跡遺構分布図 …………… 115  
第 55 図 斎宮池遺跡出土石錘の長幅分布図 …… 120  
第 56 図 斎宮池遺跡出土石錘の重量分布図 …… 120
- ## 第 V 章 真木谷遺跡
- 第 57 図 真木谷遺跡遺構平面図・土層断面図 …… 124  
第 58 図 真木谷遺跡出土遺物実測図 …………… 125
- ## 第 VI 章 与五郎谷遺跡
- 第 59 図 与五郎谷遺跡調査区位置図 …………… 128  
第 60 図 与五郎谷遺跡遺構平面図 …………… 129  
第 61 図 与五郎谷遺跡土層断面図① …………… 130  
第 62 図 与五郎谷遺跡土層断面図② …………… 131  
第 63 図 与五郎谷遺跡出土遺物実測図 …… 133  
第 64 図 与五郎谷遺跡周辺遺跡分布図 …… 133
- ## 第 VII 章 自然科学分析
- 第 65 図 長谷町遺跡 S X 5 炭化材樹種同定試料  
出土位置図 …………… 136  
第 66 図 長谷町遺跡火葬人骨出土部位① …… 141  
第 67 図 長谷町遺跡火葬人骨出土部位② …… 142

## 附章

第68図	遺物出土地・周辺遺跡等位置図	164	第70図	出土遺物実測図	164
第69図	遺物出土地周辺地形図	164			

# 挿 表 目 次

<b>第 I 章 前言</b>			第25表	斎宮池遺跡出土石器・石製品観察表③	106
第 1 表	事業関連遺跡一覧表	3	第26表	斎宮池遺跡出土石器・石製品観察表④	107
<b>第 III 章 長谷町遺跡</b>			第27表	斎宮池遺跡出土石器・石製品観察表⑤	108
第 2 表	長谷町遺跡遺構一覧表	24	第28表	斎宮池遺跡出土剥片・石材集計表①	109
第 3 表	長谷町遺跡出土遺物観察表①	32	第29表	斎宮池遺跡出土剥片・石材集計表②	110
第 4 表	長谷町遺跡出土遺物観察表②	33	第30表	斎宮池遺跡出土剥片・石材集計表③	111
第 5 表	長谷町遺跡出土遺物観察表③	34	第31表	斎宮池遺跡出土剥片・石材集計表④	112
第 6 表	長谷町遺跡出土遺物観察表④	35	第32表	斎宮池遺跡出土剥片・石材集計表⑤	113
第 7 表	三重県内平安時代火葬墓一覧表	36	第33表	斎宮池遺跡出土土器観察表	114
<b>第 IV 章 斎宮池遺跡</b>			<b>第 V 章 真木谷遺跡</b>		
第 8 表	斎宮池遺跡遺構一覧表	53	第34表	真木谷遺跡出土遺物観察表	125
第 9 表	斎宮池遺跡出土土器・土製品観察表①	90	<b>第 VI 章 与五郎谷遺跡</b>		
第10表	斎宮池遺跡出土土器・土製品観察表②	91	第35表	与五郎谷遺跡出土遺物観察表	133
第11表	斎宮池遺跡出土土器・土製品観察表③	92	第36表	与五郎谷遺跡周辺遺跡一覧表	134
第12表	斎宮池遺跡出土土器・土製品観察表④	93	<b>第 VII 章 自然科学分析</b>		
第13表	斎宮池遺跡出土土器・土製品観察表⑤	94	第37表	長谷町遺跡出土火葬人骨一覧表	140
第14表	斎宮池遺跡出土土器・土製品観察表⑥	95	第38表	長谷町遺跡 S F 3・S K 7 微細物分析結果	145
第15表	斎宮池遺跡出土土器・土製品観察表⑦	96	第39表	長谷町遺跡 S K 7 出土炭化材放射性炭素年代測定結果	145
第16表	斎宮池遺跡出土土器・土製品観察表⑧	97	第40表	長谷町遺跡 S K 7 暦年較正結果	145
第17表	斎宮池遺跡出土土器・土製品観察表⑨	98	第41表	長谷町遺跡 S F 3・S K 7 樹種同定結果	146
第18表	斎宮池遺跡出土土器・土製品観察表⑩	99	第42表	長谷町遺跡 S X 5・S F 3 樹種同定結果	155
第19表	斎宮池遺跡出土土器・土製品観察表⑪	100	第43表	斎宮池遺跡樹種同定結果	160
第20表	斎宮池遺跡出土土器・土製品観察表⑫	101	第44表	斎宮池遺跡種実同定結果	160
第21表	斎宮池遺跡出土土器・土製品観察表⑬	102			
第22表	斎宮池遺跡出土土器・土製品観察表⑭	103			
第23表	斎宮池遺跡出土石器・石製品観察表①	104			
第24表	斎宮池遺跡出土石器・石製品観察表②	105			

# 本文挿入写真目次

写真 1	火葬墓の検出状況（南から）	137	写真 6	植物珪酸体プレパラートの状況	151
写真 2	蔵骨器の検出状況（東から）	137	写真 7	長谷町遺跡の炭化材①	156
写真 3	蔵骨器内の火葬人骨	137	写真 8	長谷町遺跡の炭化材②	157
写真 4	長谷町遺跡の炭化材・種実遺体①	149	写真 9	斎宮池遺跡の炭化材・種実遺体①	161
写真 5	長谷町遺跡の炭化材・種実遺体②	150	写真 10	斎宮池遺跡の炭化材・種実遺体②	162

# 写真図版目次

## 長谷町遺跡

巻頭図版 1	調査区全景（南上空から）	巻頭図版 2	火葬墓 S X 5 供献品出土状況（南から）
	調査区全景（北上空から）		火葬墓 S X 5 木炭榔検出状況（南から）

巻頭図版3 火葬墓S X 5 蔵骨器出土状況（東から）

火葬墓S X 5 出土遺物

#### 齋宮池遺跡

巻頭図版4 調査区全景（北西から）

竪穴住居SH3 カマド遺物出土状況（西から）

#### 長谷町遺跡

図版1 火葬墓S X 5 合口土師器皿出土状況（北西から）

火葬墓S X 5 合口土師器皿出土状況（西から）

図版2 火葬墓S X 5 木炭櫛検出状況（西から）

火葬墓S X 5 蔵骨器出土状況（東から）

図版3 火葬墓S X 5 木炭櫛半裁状況（東から）

火葬墓S X 5 完掘状況（西から）

図版4 焼土坑S F 3 完掘状況（南西から）

土坑S K 7 完掘状況（西から）

図版5 土坑S K 6 遺物出土状況（南から）

竪穴住居SH1・火葬墓S X 5 全景（北東から）

図版6 調査区南斜面遠景（南西から）

調査区全景（東上空から）

図版7 火葬墓S X 5 出土火葬人骨取上状況

火葬墓S X 5 出土蔵骨器内の火葬人骨

図版8 火葬墓S X 5 出土遺物

図版9 火葬墓S X 5 出土遺物

図版10 火葬墓S X 5・竪穴住居SH1・焼土坑S F 3

出土遺物

図版11 竪穴住居SH1・土坑S K 6・包含層他出土遺物

#### 齋宮池遺跡

図版12 調査前状況（北から）

土坑S K 7 完掘状況（北から）

図版13 竪穴住居SH3 カマド遺物出土状況（西から）

竪穴住居SH3 カマド完掘状況（西から）

図版14 焼土坑S F 10 遺物出土状況（北から）

調査区全景（南から）

図版15 出土遺物①（縄文土器）

図版16 出土遺物②（縄文土器）

図版17 出土遺物③（縄文土器）

図版18 出土遺物④（縄文土器）

図版19 出土遺物⑤（縄文土器）

図版20 出土遺物⑥（縄文土器）

図版21 出土遺物⑦（縄文土器）

図版22 出土遺物⑧（石器）

図版23 出土遺物⑨（石器）

図版24 出土遺物⑩（石器）

図版25 出土遺物⑪（石器）

図版26 出土遺物⑫（石器）

図版27 出土遺物⑬（石器）

図版28 出土遺物⑭（石器）

図版29 出土遺物⑮（石器・石製品）

図版30 出土遺物⑯（土師器）

#### 真木谷遺跡

図版31 遺跡遠景（東から）

調査区全景（東から）

図版32 調査区全景（南から）

調査区全景（北から）

図版33 出土遺物

#### 与五郎谷遺跡

図版34 遺跡遠景（南から）

調査前状況（西から）

図版35 調査区全景（東から）

平成18年度工事立会調査区全景（東から）

図版36 出土遺物

# 第 I 章 前言

## 第 1 節 調査に至る経過

### (1) 宮川用水事業とのこれまでの経過

農林水産省東海農政局が主管する国営宮川用水第二期土地改良事業（以下、当事業と略表記）は、昭和32～41年にかけて実施された第一期事業で整備された農業用水施設の老朽化やその後の営農環境の変化によって生じた用水不足等の問題を解消するために平成8年3月に計画確定した事業である。当事業に関する埋蔵文化財保護の調整・協議については平成9年度から本格化し、平成10～14年度の5ヶ年には、農林水産省と三重県との間で調査委託契約が締結され、発掘調査を実施している。この間の当事業全般にかかる調査に至る経緯や埋蔵文化財保護協議等については、既刊の「宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ～Ⅴ」<sup>①</sup>に詳述しているため、詳細は前掲書を参照されたい。

平成10～14年度に本格実施された当事業に伴う発掘調査は、平成14年度の中で事業の全体計画の見直しが検討されることに伴い、未実施分の調査が凍結され、次年度以降の調査委託契約の更新も見送られることとなった。

事業計画の見直し後、新たな事業計画をもとに埋蔵文化財保護の調整・協議が本格的に再開したのは平成16年度である。再開後の当事業全般にかかる調査に至る経緯や保護協議等については、既刊の「宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅵ」<sup>②</sup>に詳述しているため、詳細は前掲書を参照されたい。また、当事業にかかる平成16年度以降の協議対象遺跡については、第1図及び第1表を参照されたい。

### (2) 長谷町遺跡

長谷町遺跡は、当事業にかかる平成11・12年度の斎宮調整池池底の分布調査・範囲確認調査によって発見された遺跡である。斎宮調整池は、寛延4（1751）年に自然地形を利用して築造された灌漑用の人工池<sup>③</sup>で、当事業の第一期事業で用水の調整池として利用するため改修された。当該の池には後述する斎宮池遺跡が周知の遺跡として把握されていたが、遺跡は常時水没していることからその範囲等詳細は不

明であり、また、当該の池底に同様の遺跡が分布している可能性が高かったため、池底の全面的な分布調査が必要と判断した。平成11年度の分布調査では、農業用水の通年的な確保の必要性から、調整池の貯水の完全排水が不可能であったため、農閑期の冬季間に可能な範囲で水位を低下させ、池底外縁部の踏査を行った。踏査の結果、池底の広範囲に遺物の散布が認められたため、11・12年度に遺物散布の濃密な範囲に調査坑を設定し、範囲確認調査を行った。調査は便宜上A～G地区を設定し、合計52箇所の調査坑を設定して行った（第2図）。調査の結果、後述の斎宮池遺跡の概ねの遺跡範囲を確定するとともに、真木谷遺跡及び長谷町遺跡を発見した。長谷町遺跡は、当該調整池南側の用水取水口付近に位置し、西側の丘陵部から半島状に派生した低い尾根の緩斜面に立地する。南側の緩斜面に設定した調査坑で、埋土上面に土師器皿が据え置かれた焼土坑が検出されたため、削平地と確認された平坦面を除く当該尾根緩斜面を本調査必要範囲と判断し、東海農政局宮川用水第二期農業水利事業所と取り扱いについて協議することとなった。

協議の結果、現状保存が不可能なため、工事施工工程から本調査の実施を平成14年度に行うこととなった。平成14年8月に調査区周辺の立木伐採や除草等の準備工を行ったが、掘削作業に着手する寸前で前述の事業計画の見直しが行われることとなったため、本調査の実施凍結が決定された。

新たな事業計画をもとに再開された埋蔵文化財保護の調整・協議によって、当遺跡は平成17年度に本調査を行うこととなったが、当該部分の用地買収が遅延したため、調査の実施は翌18年度に延期されることとなり、平成18年11月によりやく本調査に着手することとなった。

### (3) 斎宮池遺跡

斎宮池遺跡は昭和59年には周知されていた遺跡であるが、前述の通り遺跡の大半は常時水没しており、水位低下時に採集された遺物から縄文時代中～後期

を中心とした遺跡と考えられていたものの、詳細は不明であった。当事業にかかる平成11・12年度の斎宮調整池底の分布調査・範囲確認調査によって丘陵西側縁辺部に立地する遺跡の概ねの範囲は確認できたが、遺跡の西限は貯水が完全に排水される池底の工事施工時まで確定することができなかった。池底の工事が施工されたのは平成19年度であるが、斎宮池遺跡の本調査もこれにあわせて行い、未確定であった遺跡の西限は本調査時に確認することとした。

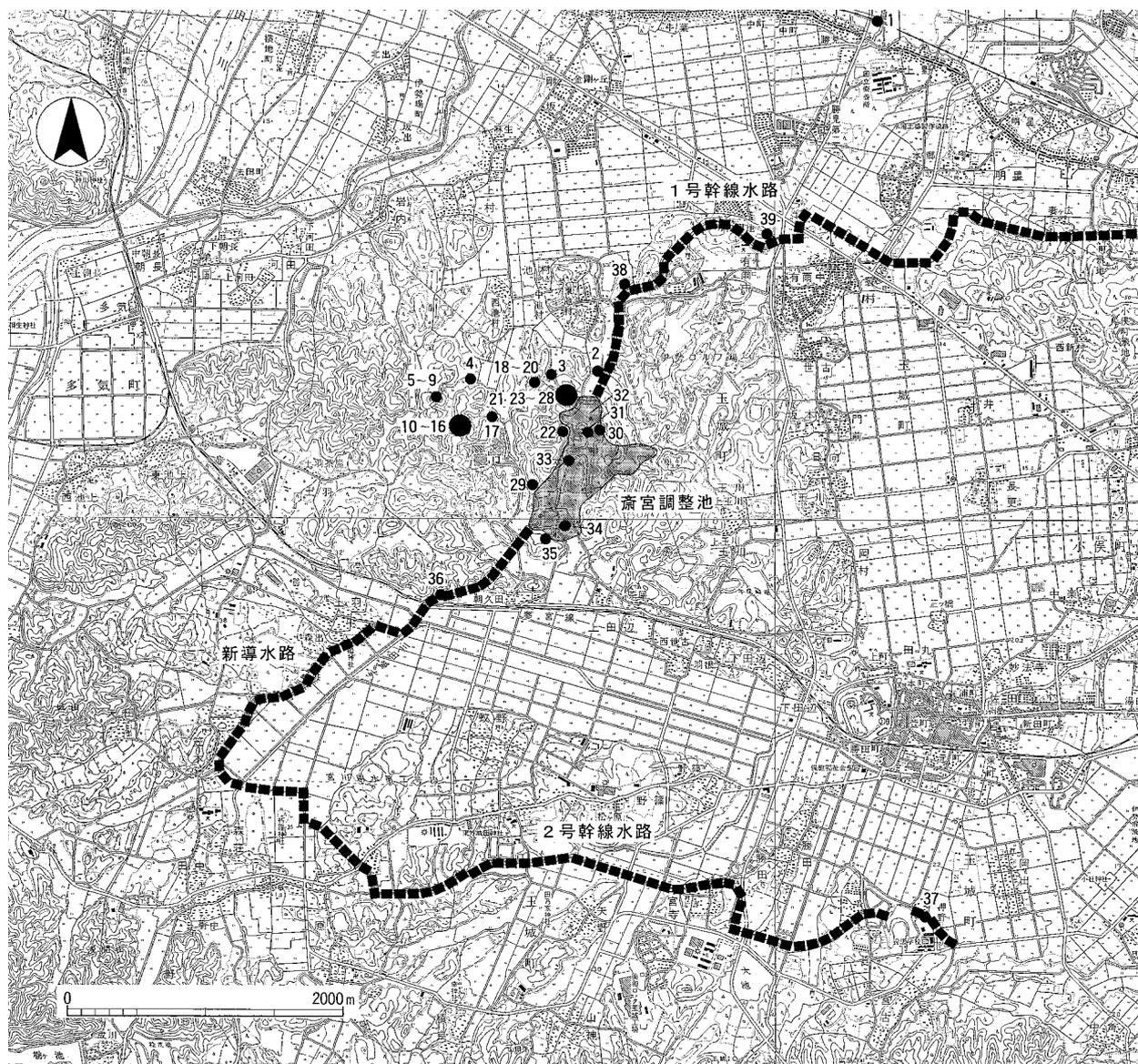
#### (4) 真木谷遺跡

当事業にかかる平成11・12年度の斎宮調整池底の分布調査・範囲確認調査の結果、池中央部西側の半島状に突き出た丘陵尾根の東側緩斜面で土坑・溝などの遺構が検出された。また、表土上や調査坑か

ら縄文土器・土師器・須恵器などが出土したため、当該部分を新たに真木谷遺跡とし、本調査対象とした。しかし、斎宮池遺跡同様、遺跡の東限は斎宮調整池池底にあたり、貯水が完全に排水される池底の工事施工時まで確定することができなかった。そのため池底の工事施工時に本調査を行い、未確定であった遺跡の東限を同時に確認することとした。

#### (5) 与五郎谷遺跡

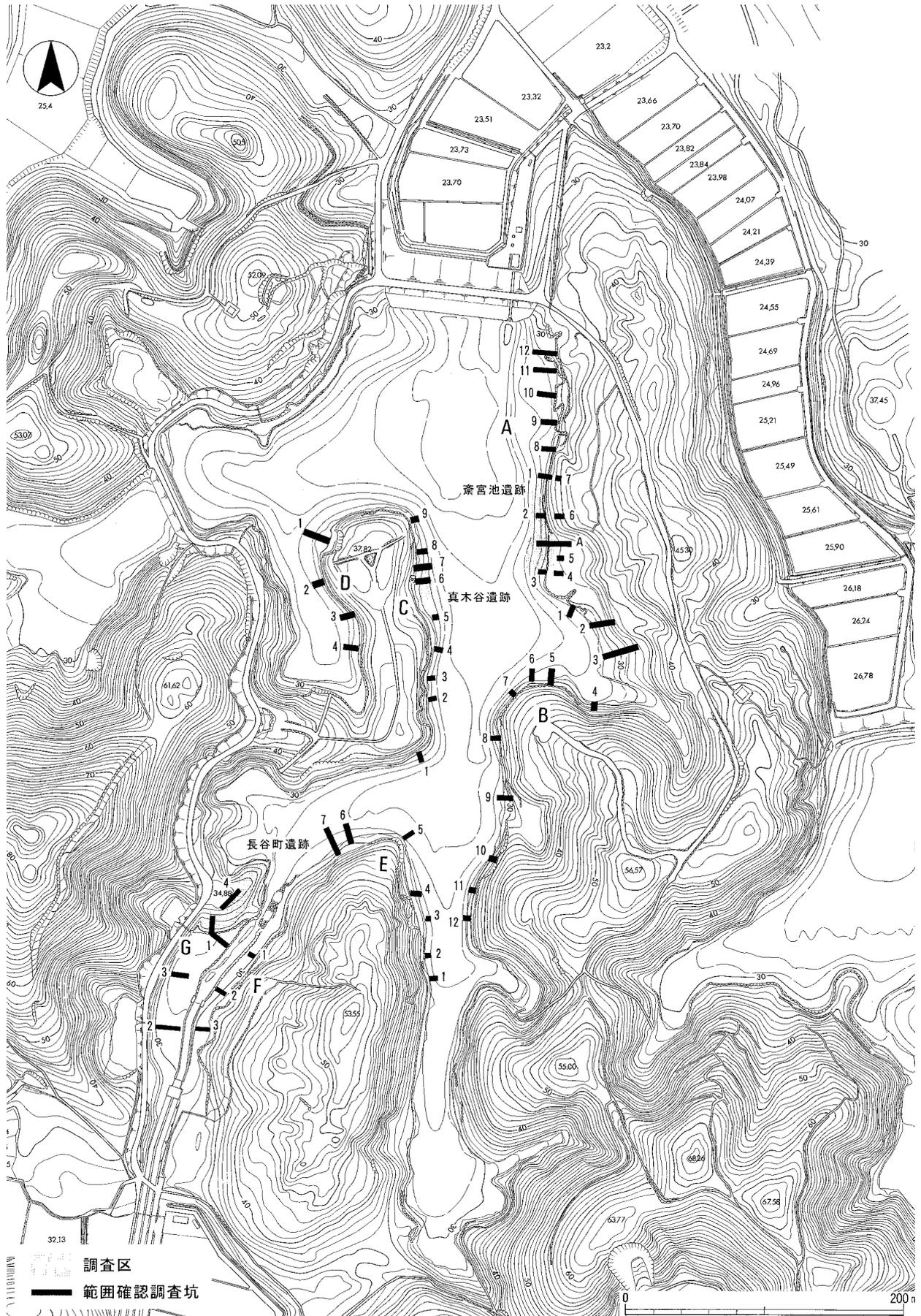
与五郎谷遺跡は、玉城丘陵の南端に位置し、丘陵縁辺の南面する緩斜面に立地する。現況はJR参宮線「外城田」駅の北側に広がる果樹園・畑地及び農業用水路である。当該農業用水路は、当事業に伴う改修工事の対象となっており、前述の斎宮調整池の導水路にあたる。当事業にかかる埋蔵文化財保護の



第1図 事業関連遺跡位置図(1:50,000)〔国土地理院「松阪」「明野」「国東山」「伊勢」1:25,000より〕

No.	遺跡名	所在地	範囲確認調査 (m <sup>2</sup> )	本発掘調査 (m <sup>2</sup> )	工事立会 (m <sup>2</sup> )	調査年度 (平成)	備考
1	丁長遺跡	明和町斎宮	575	2,800	280	18・19	
2	生洲遺跡	明和町池村	432	—	20	16・18・19	施工可
3	黒桂遺跡	明和町池村	288	—	—	16	施工可
4	野田遺跡	明和町池村	368	—	—	16・18	施工可
5	高塚2号墳	明和町池村	18	—	—	20	事業地外
6	高塚3号墳	明和町池村	11	—	—	20	事業地外
7	高塚4号墳	明和町池村	75	1,301	—	19・20	
8	高塚5号墳	明和町池村					
9	高塚6号墳	明和町池村					
10	小金2号墳	明和町池村	78	620	—	20・21	
11	小金3号墳	明和町池村	50	806	—	19・20	
12	小金4号墳	明和町池村	36	—	—	19	事業地外 県事業広域農道範囲
13	小金8号墳	明和町池村	12	—	—	19	施工可
14	小金10号墳	明和町池村	4	—	—	19	事業地外
15	小金11号墳	明和町池村	66	—	—	19	施工可
16	小金12号墳	明和町池村	—	130	—	19	県事業広域農道範囲
17	池村3号墳	明和町池村	3	—	—	19	事業地外 県事業広域農道範囲
18	黒桂3号墳	明和町池村	33	—	—	19	施工可
19	黒桂4号墳	明和町池村					
20	黒桂5号墳	明和町池村					
21	斎宮池3号墳	明和町池村	15	—	—	20	事業地外
22	斎宮池16号墳	明和町池村	15	615	180	11・17	平成17年度事業地外確定 現状保存
23	斎宮池18号墳	明和町池村	—	—	—	—	平成20年度協議で現状保存
24	斎宮池19号墳	明和町池村	39	240	—	20・21	
25	斎宮池20号墳	明和町池村	54	—	—	18	施工可
26	斎宮池21号墳	明和町池村					
27	斎宮池22号墳	明和町池村	18	—	—	18	施工可
28	斎宮池23号墳	明和町池村	47	—	—	18	事業地外 県事業広域農道範囲
29	等峯A4号墳	明和町池村	—	—	—	—	平成17年度事業地外確定 現状保存
30	斎宮池遺跡	明和町池村	120	824	—	11・19	
31	真木谷遺跡	明和町池村	42	300	—	12・19	
32	斎宮池敷内遺跡	明和町池村	592	—	4,000	12・19・20	
33	長谷町遺跡	明和町池村	100	946	—	12・18	
34	大谷遺跡	玉城町上田辺	1,664	5,735	—	16・17・18	
35	長楽寺関連遺跡	玉城町上田辺	—	—	100	19	施工可
36	与五郎谷遺跡	多気町土羽	—	523	5,500	18・20	
37	鉄砲塚遺跡	玉城町宮古	16	—	—	18	施工可
38	戸峯B遺跡	明和町池村	—	—	120	21	施工可
39	発シA遺跡	明和町有爾中	—	—	140	21	施工可
小計			4,771	14,840	10,340	—	
合計			29,951			—	

第1表 事業関連遺跡一覧表



第2図 長谷町遺跡・齋宮池遺跡・真木谷遺跡調査区位置図・範囲確認調査坑配置図 (1 : 4,000)

調整・協議が始まった当初から当遺跡は協議対象とされていたが、工事施工が概ね既設水路の範囲内で行われること、隣接地が栽培中の民有果樹園・畑地であったこと、水路南側には3 mを超える盛土によって管理用道路が敷設されていたことなどから、事前の範囲確認調査が不可能であったため、工事施工時に立会調査を行うこととした。工事施工は農閑期の秋～冬季間に限定され、かつ工期遅延が許されない性格のものであったため、調査対象となった施工範囲は東西に2分割され、平成18年度に実施された

用水下流側の東半部の工事施工時に立会調査を行った。平成18年度の立会調査では、対象範囲の大半が既設水路建設時に破壊されていることが確認されたが、18年度調査範囲の西端部で遺構・遺物が確認されたこと<sup>⑦</sup>から、20年度に工事が予定されていた西半部に遺跡が残存していることが確実となったため、既設水路の構造物撤去直後に本調査を行うこととした。また、20年度の工事施工時には、水路南側の民有果樹園が工事用の作業ヤードとして整地されるため、果樹抜根時の立会を行うこととした。

## 第2節 調査の経過

### (1) 調査経過の概要

#### ① 長谷町遺跡

現地調査は平成18年11月6日に着手した。調査区は傾斜地であったが、作業効率を上げるため、表土は重機によって除去した。調査区には予め等高線の直交方向に土層観察用のセクションベルトを5本設定した。また、現地調査では、このセクションベルトを基準に、便宜上、調査区を南側からA～C区と呼称した。南斜面であるA区では、平成12年度の範囲確認調査で焼土坑が1基検出されていたため、11月13日にA区から人力掘削を開始した。A区の北端付近で遺構検出作業を行った結果、土色のコントラストは判然としなかったものの、径3 m程の範囲で土師器片や炭化物が散発的に出土したため、SZ1として遺構認定し、十字方向に土層観察用のセクションベルトを設定して掘削を進めることとした。また、早い段階でSZ1の概要を掴むため、セクションベルトに沿って先行トレンチを設定、掘削したところ、中央部付近で平安時代の所産と考えられる合口の土師器皿が4組出土した。また、埋土は2層で遺構底部が平坦であることも確認したため、別遺構の存在の可能性も視野に入れながら、層位毎に掘削を進めることとした。埋土2層目からは奈良時代の所産と考えられる土師器杯・皿や須恵器杯蓋が出土したが、先行トレンチで確認していた合口の土師器皿と時期が合わず、またSZ1の北壁際で倒立状態の土師器甕が焼土を伴って出土したことから、少なくとも2時期の遺構が重複していると想定し、合口の土師器皿を持つ遺構の検出を行った。検出作業の

結果、平面プランは判然としなかったものの、先行トレンチの断面観察等から隅丸方形の土坑と判断し、SK5とした。SK5の掘削を進めた結果、中央部で灰釉陶器碗が倒立状態で出土し、その周囲に木炭が多量に集積しており、これらを取り巻くように4組の合口の土師器皿が配置されていることから、当遺構が火葬墓であると認定し、遺構名をSX5と変更した。また、合口の土師器皿は供献品であると判断し、出土状況を写真・図面で記録後、蓋と考えられる上部の土師器皿を取り上げ、内容物の確認を行った。その結果、肉眼観察では土以外認められなかったが、後の自然科学分析の実施を視野に入れ、残留土をすべて回収し、分析サンプルとして保管した。墓壇の東側と南側に配置された4組の合口の土師器皿を取り上げた後、木炭の検出作業を進めたところ、墓壇の西側でさらにもう1組の合口土師器皿が出土したため、出土状況を記録後、同様の取り上げ作業をおこなったが、内容物に土以外のものは確認できなかったため、この残留土も分析サンプルとしてすべて回収した。蔵骨器を被覆する木炭は、出土状況を写真・図面で記録後、取り上げ番号を付与して取り上げ、樹種同定等の自然科学分析用のサンプルとしてすべて回収した。火葬墓SX5出土蔵骨器は、灰釉陶器の壺の上部に灰釉陶器碗が蓋として据え置かれており、蓋とされた碗は木根の影響で一部破砕していたが、蔵骨器の現地からの取り上げは、この蓋の開封を行わず出土状況のまま行った。従って、蔵骨器内容物の取り上げについても、後の保存処理・調査指導等を念頭に置き、情報の消失・遺物の

毀損を防ぐため、現地での取り上げは行わなかった。

SX5・SZ1以外に検出した主な遺構はSK3・SK7で、SK3は平成12年度の範囲確認調査で検出された焼土坑である。両者はともにSX5との関係が疑われる遺構であったため、埋土をすべて篩いがけし、自然科学分析用のサンプルとして残留物をすべて回収した。時期が特定できた検出遺構はすべて奈良～平安時代のものであったが、縄文時代の所産と考えられる遺物が少量ながら出土していたことから、12月22日に下層確認を行い、下層遺構が確認されなかったため、現地での全調査を終了した。

現地調査終了後、蔵骨器の内容物の取り扱いについて担当課内で検討を行った。残存が予想される人骨をはじめ、金属製品他の副葬品などの納入もしくは残存も予想されたため、出土状況のまま内容物を探査するため、X線透過撮影を行うこととした。なお、三重県埋蔵文化財センターはX線透過撮影装置を所有していないため、奈良大学文学部文化財学科の西山要一教授のご厚意により、同大学のX線透過撮影装置を借用させていただいた。撮影は平成18年12月26日に同大学にて三重県埋蔵文化財センター支援研究課（現活用支援課）大川操が行った。X線透過撮影の結果、金属製品等の無機物は認められなかったが、人骨と考えられる映像が確認できたため、人骨の残存が確認された。蔵骨器内容物のX線透過撮影による探査結果を受け、蔵骨器からの人骨取り上げについて検討を行った結果、人類学専攻で、遺跡出土の人骨の取り扱いや分析・鑑定について知識が豊富かつ人骨調査の実績を多数お持ちの（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団専門員（主幹）の楠崎修一郎氏を招聘し、蔵骨器からの火葬骨取り上げ作業と分析鑑定報告を依頼することとした。火葬骨の取り上げ作業は、平成19年3月15日・16日の2日間に亘って行った。取り上げ作業の方法や作業状況、分析・鑑定結果については、後掲の第七章第2節の分析・鑑定報告及び写真図版7を参照されたい。

今回確認した平安時代の火葬墓は県内で11例目となるが、工事中の不時発見が多く、埋葬状況が詳細に確認できた事例は県内初出である。そのため、古代火葬墓に関する多くの研究業績をお持ちの奈良国立博物館資料室長の吉澤悟氏を平成19年3月12日に

招聘し、現地の遺構及び火葬墓出土遺物を実見しながら多くの有益なご教示をいただいた。また、火葬墓の造墓時期を確定するため、平成19年4月13日に蔵骨器に使用された灰釉陶器について京都国立博物館主任研究官の尾野善裕氏を招聘し、ご指導いただいた。さらに、平成19年4月9日に皇學館大学の岡田登教授、平成19年4月18日に三重大学の山中章教授にもご指導を受け、それぞれ有益なご教示を得た。

自然科学分析の実施については、平成20年度に担当課の調査研究Ⅱ課と支援研究課（現活用支援課）で構成された所内検討委員会で分析対象の選定・分析方法・経費・期間等を検討し、平成20・21年度の2ヶ年に亘り分析委託を行うこととした。分析の委託先は20年度・21年度ともにパリオ・サーヴェイ（株）である。分析の詳細と分析結果については、後掲の第七章第3・4節の分析報告を参照されたい。

その他、調査成果の還元として、平成19年4月28日～5月6日の9日間に亘って、斎宮歴史博物館エントランスホールにて出土品の展覧会を行った結果、321名の見学者を得ることができた。

## ②斎宮池遺跡

池底の工事施工に伴う貯水の完全排水後に調査予定地周辺の踏査を行った結果、水没していた範囲に縄文土器や石器が多量に散布している状況を確認した。平成11・12年度の斎宮調整池池底の分布調査・範囲確認調査の際も同様の状況を確認しており、貯水の増減で包含層が浸食された結果、包含層遺物が地表面に表出したものと判断された。通常の掘削作業では表土を重機、包含層を人力で掘削しているが、調査予定地に包含層が表出している部分が一定範囲認められたことから、先行トレンチを6箇所設定し、調査区と掘削方法の精査・検討を行った。その結果、調査区の北部と南東部の陸地部分以外はすべて人力による掘削とした。なお、調査区は傾斜地であるため、先行トレンチは等高線の直交方向に設定し、土層観察用のセクションベルトを併設した。

表土掘削は平成19年10月22日に調査区南東部の陸地部分の機械掘削から開始した。機械掘削と並行して人力のみで掘削を行う範囲の表土を、予め設定した4m方眼の小地区毎に土嚢に集積し、随時篩いがけ作業を行って微細遺物の回収に努めた。包含層掘

削・遺構検出は11月2日に調査区の北側から開始した。調査区の中央部周辺では縄文土器や石器が包含層から多数出土し、遺構密度も密であったが、調査区の北部と南部ではほとんど遺構が検出されなかった。しかしながら、縄文時代中期末～後期初頭を中心とした遺跡と認知されていた当遺跡の南端部で、奈良時代のカマドと煙道を伴う竪穴住居1棟と焼土坑が1基検出されるという成果も得ることができた。

未確定であった遺跡の西側範囲は、先行トレンチの土層観察や面的な調査の結果、急激に落ち込む谷地形であることが判明したため、西側へ遺跡範囲が広がらないと判断し、遺跡の西限を確定した。12月4日のラジコンヘリコプターによる調査区の全景写真撮影後、遺構図等の実測作業を経て、12月13日に現地調査を終了した。

### ③真木谷遺跡

斎宮調整池の貯水の完全排水後、平成19年10月4日に表土掘削を開始した。調査区の東側は池底に厚く堆積したヘドロと湧水のため掘削作業は難航した。遺構検出を10月15日に開始し、調査区西側の緩斜面で土坑・ピット等を検出した。遺構からの出土遺物は無かったが、表土等から奈良時代～平安時代頃の土師器片を採集した。また、調査区の東側では落ち込みを検出し、石錘が出土した。

未確定であった遺跡の東限はヘドロが厚く堆積し、人力はもとより重機の進入も不可能であったため、重機のアームが届く範囲で調査区北東隅と南東隅に約3×3mの調査坑を設定し、表土掘削と同時に調査を行った。その結果、急激に落ち込む谷地形であることが確認され、遺構・遺物とも認められなかったため、設定した調査区より東側へ遺跡範囲が広がらないと判断し遺跡の東限を確定した。掘削終了後、調査区全景の写真撮影及び平板による遺構実測・地形測量を行い、10月22日に現地調査を終了した。

### ④与五郎谷遺跡

**平成18年度** 10月26日・27日に調査対象範囲の東半部（用水路の下流部に相当）の工事立会調査を行った。調査範囲の大半は既設水路建設時に削平を受けていたが、当該調査範囲の西端部でピットを検出し、奈良～平安時代の土師器・須恵器が出土した。従って、調査対象範囲の西半部（用水路の上流部に相当）

に遺跡が広がることが確実となったため、当該範囲の工事施工時に本調査を実施することとなった。

**平成20年度** 工事施工の仮設工として、既設水路南側の果樹園が作業ヤードとして整地されるため、7月18日～22日に果樹の抜根作業の立会を行った。立会時には出土遺物の回収と抜根地点の土層観察を行った。本調査は既設水路の構造物が撤去された後の9月17日から表土掘削を開始した。調査区中央部は既設水路建設時に破壊されていたものの、東半部は遺構が残存しており、時期は判然としないが、奈良～平安時代と推定される溝やピットが検出された。調査期間中は天候不順で現場作業を休止することが度々あったが、10月17日に現地調査を終了した。

## (2)調査日誌 (抄)

### ①長谷町遺跡

平成18年

- 11月6日 A区から表土掘削開始。
- 11月10日 表土掘削終了。
- 11月13日 A区から包含層掘削・遺構検出開始。SZ1・SZ2検出。
- 11月14日 包含層掘削・遺構検出。SZ1は径3m程度の範囲で遺物が疎らに出土。埋土に炭含む。
- 11月15日 包含層掘削を東側へ順次進める。南端部の落ち込みにトレンチ設定。地山の確定しづらい。
- 11月16日 SZ1に設定した十字先行トレンチで合口土師器皿が4組出土。新たな遺構か。
- 11月20日 SZ1の埋土1層目（黒色土）除去。B区包含層掘削。
- 11月21日 SZ1埋土第1層除去後写真撮影・平面実測。B区盛土から現代の廃棄物出土。
- 11月24日 SZ1埋土第2層黄色土掘削。残りの良い土師器皿や須恵器蓋が出土。包含層掘削C区へ。
- 11月29日 SZ1埋土第2層出土遺物写真撮影。
- 11月30日 SZ1掘削。SK3検出・掘削。SZ1の北端でSK6検出。倒立した土師器甕が出土。
- 12月1日 SZ1・SZ2・SK3掘削。SK3は輪郭が焼け締まり、断面形は下ぶくれ状

となる。

12月4日 SK7検出、半裁して掘削。SZ1セクションベルト除去。SX5検出。SK6はカマド痕跡の可能性大。SZ1・SK6は奈良時代の竪穴住居か。

12月5日 SK6・SX5遺構掘削。SX5の4組の合口土師器皿を取り上げ。内部には土以外の遺物無し。内部の土は自然科学分析のサンプル用に採取。

12月6日 SX5遺構掘削。木炭が多量に出土。5組目の合口土師器皿が出土、取り上げ。内部に土以外の遺物無し、自然科学分析のサンプル用に採取。SK3・SK7埋土篩いがけ。調査区全景写真用清掃作業。

12月7日 ラジコンヘリコプターによる調査区全景空中写真撮影。SX5遺構掘削。木炭の検出。

12月8日 SX5遺構掘削。木炭の検出。平面実測。調査区地形測量図作成。

12月11日 SX5木炭の半裁及び取り上げ開始。蔵骨器の検出。

12月13日 SZ1上に雨天作業用のテント設営。SX5木炭の取り上げ。

12月14日 SX5木炭の取り上げ。半裁状態で写真撮影。蔵骨器の底部にも炭が敷かれている模様。

12月15日 SX5残りの木炭取り上げ。蔵骨器のみの状態で、出土状況の写真撮影。蔵骨器取り上げ。

12月18日 SX5完掘状況写真撮影。下部構造の検討。墓壇掘削後に若干埋め戻して底部を整形したか。

12月19日 SZ1他、A区の完掘状況写真撮影。

12月20日 SZ1平面実測。その他の図面修正作業。

12月21日 クローラー型高所作業車でSZ1他の写真撮影。下層確認調査。

12月22日 下層確認調査。現地調査終了。

## ②齋宮池遺跡

平成19年

9月20日 調査前写真撮影。

10月5日 調査前の調査区周辺の踏査。貯水による

遺物包含層の浸食のためか、縄文土器や石器が多数地表面に散布していたため、遺物の採集を実施。

10月10日 調査区と調査方法の再検討のため、先行トレンチを5箇所設定し、掘削を行う。

10月11日 先行トレンチの掘削。掘削結果から調査区を確定。

10月22日 調査区南東部の陸地部分の機械掘削開始。

10月23日 調査区南東部の機械掘削中に石皿出土。

10月24日 調査区北部の機械による表土掘削。教職員研修で池敷き部分の遺物表面採集作業を実施。

10月25日 調査区北部の機械による表土掘削。調査区南端部の先行トレンチ掘削中に土師器甕が出土。

10月29日 機械による表土掘削終了。オール人力掘削範囲の表土を4mグリッド毎に土囊へ集積。

10月30日 排水用の側溝掘削。集積した表土の篩いがけ作業開始。石鏃・剥片等の石器採集。

11月2日 調査区北側から人力掘削開始。明確な遺構は検出されず。

11月7日 7～9グリッドラインの包含層で土器・石器が出土。土器集中地点あり。

11月9日 9～11グリッドラインの包含層掘削。土器集中地点あり。調査区南端部の古代遺構の検討。

11月13日 9～11グリッドラインの遺構検出。土色コントラスト不明瞭のため、再検出予定。

7～9グリッドラインの遺構掘削。出土遺物のごく少量。調査区南端部の古代遺構の検討。

11月15日 9～10グリッドラインの遺構掘削。11～14グリッドラインの包含層掘削。東西方向に谷状の落ち込みあり。調査区南端部の古代遺構をSK3とする。

11月19日 11～14グリッドラインの包含層掘削。SK3の掘削。カマドと煙道を検出。

11月20日 11～14グリッドラインの包含層掘削。SK3の掘削。壁周溝を検出。

11月27日 15～16グリッドラインの包含層掘削・遺

- 構検出。焼土坑・土坑・ピットを検出。
- 11月29日 焼土坑 S F 10の遺物出土状況写真撮影。
- 11月30日 S F 10遺物出土状況図作成。S K 3・S F 10の西側が急激に落ち込む谷地形であることを確認。
- 12月3日 調査区全景写真撮影前の清掃作業。
- 12月4日 ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影。S K 3・S K 7個別写真撮影。
- 12月5日 遺構平面図・地形測量図作成開始。S K 3カマド再検討、遺物出土状況図作成。
- 12月12日 遺構平面図・地形測量図確認作業。S K 3カマド遺物出土状況図作成、遺物取り上げ、完掘。
- 12月13日 S K 3完掘状況写真撮影。現地調査終了。

### ③真木谷遺跡

平成19年

- 10月4日 調査区北側より表土掘削開始。地表下0.2mで地山検出。遺跡東限確認のため、調査区北東隅を東側に延長して掘削。地表下約0.5mで地山に達するが、厚く堆積したヘドロと湧水のため、これ以上の延長掘削は不可能と判断、掘削を中止。延長部分に遺構・遺物なし。調査区内で土坑1基、ピット1基検出。土師器碗底部、敲石、サヌカイト・チャート剥片、礫器などを表採。
- 10月5日 表土掘削続き。調査区東側は湧水し、堆積したヘドロが崩れ危険なため地山を確認できず。地表下約0.6mで掘削中止。
- 10月9日 表土掘削終了。東限確認のため調査区南東隅を東側に延長して掘削。地表下約2mまで掘削するが地山確認できず。湧水し堆積したヘドロが崩壊して危険なため埋め戻す。延長部分に遺構・遺物なし。
- 10月15日 調査区北側より遺構検出開始。土坑2基、ピット1基検出。調査区東端で落ち込み検出。調査区北壁土層分層・作図・写真撮影。
- 10月16日 ピット1基検出。遺構検出終了。遺構掘削開始。落ち込みから石錘1個体出土。その他の遺構からの出土遺物なし。調査

区西壁土層分層・作図・写真撮影。遺構掘削終了。

- 10月17日 調査区全景撮影（北・南・東から）。
- 10月22日 遺構が少ないため遺構実測は地形測量と同時に、1/100平板実測で実施。現地調査終了。

### ④与五郎谷遺跡

平成20年

- 9月17日 山側の法面から表土掘削開始。壁際で土坑検出。
- 9月24日 調査区東側でピット4基、溝1条検出。黒色土より土師器片出土。北壁東端の黒色土より須恵器片出土。調査区壁面清掃。
- 9月25日 表土掘削終了。調査区壁面清掃。
- 9月26日 調査区北壁土層写真撮影。調査区西壁土層断面実測。
- 10月2日 調査区西壁・北壁土層断面実測。
- 10月3日 調査区西側より遺構検出開始。
- 10月7日 E～Gグリッドラインの検出作業。
- 10月8日 G～Lグリッドラインの検出作業。I 4グリッドでピット1基、J～Lグリッドラインで溝1条、ピット数基検出。
- 10月9日 L～Oグリッドラインの検出作業。I 4グリッドのピットより遺構掘削開始。各遺構の出土遺物は小片かつ少量。
- 10月10日 M～Oグリッドラインの遺構掘削。調査区全景写真撮影用清掃作業。調査区全景及び遺構検出の調査区東半部写真撮影。
- 10月15日 調査区地形測量（調査区西半部）。
- 10月16日 調査区地形測量（調査区東半部）。
- 10月17日 調査区東半部遺構実測。土層断面図土色等注記作業。現地調査終了。

### (3)文化財保護法等による諸通知

文化財保護法等にかかる諸通知は、以下によって行っている。

#### ①長谷町遺跡

- ・文化財保護法第99条第1項にかかる発掘調査実施報告（県教育長宛埋蔵文化財センター所長通知）  
平成18年9月4日付教理第254号
- ・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（松阪警察署長宛県教育長通知）

平成19年1月23日付教委第12-4-20号

## ②齋宮池遺跡

・文化財保護法第99条第1項にかかる発掘調査実施報告（県教育長宛埋蔵文化財センター所長通知）

平成19年10月1日付教理第223号

・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（松阪警察署長宛県教育長通知）

平成20年2月15日付教委第12-4-21号

## ③真木谷遺跡

・文化財保護法第99条第1項にかかる発掘調査実施報告（県教育長宛埋蔵文化財センター所長通知）

平成19年10月1日付教理第223号

・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（松阪警察署長宛県教育長通知）

平成20年2月15日付教委第12-4-22号

## ④与五郎谷遺跡

・文化財保護法第99条第1項にかかる発掘調査実施報告（県教育長宛埋蔵文化財センター所長通知）

平成20年6月20日付教理第119号

・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（松阪警察署長宛県教育長通知）

平成21年1月13日付教委第12-4423号

## 第3節 調査の方法

### （1）遺構番号について

#### ①長谷町遺跡

現地調査の段階で、検出順に1から順次遺構番号を付与した。報告書作成時の番号変更はないが、遺構表示略記号は一部変更されたものがあるため、詳細は第2表の遺構一覧表を参照されたい。

#### ②齋宮池遺跡

現地調査の段階で、検出順に1から順次遺構番号を付与した。報告書作成時の番号変更はないが、遺構表示略記号は一部変更されたものがあるため、詳細は第8表の遺構一覧表を参照されたい。

#### ③真木谷遺跡

現地調査の段階で、検出順に1から順次遺構番号を付与した。報告書作成時の番号及び遺構表示略記号の変更はない。

#### ④与五郎谷遺跡

溝SD1のみである。

### （2）地区割と調査区の設定について

#### ①長谷町遺跡

遺構実測や出土遺物の取り上げ時の基準とする4m方眼の小地区は国土座標（日本測地系）を基に設定し、北～南に算用数字を、西～東にアルファベットを配置して小地区名とした（第4図参照）。

#### ②齋宮池遺跡

遺構実測や出土遺物の取り上げ時の基準とする4m方眼の小地区は国土座標（日本測地系）を基に設定し、北～南に算用数字を、西～東にアルファベットを配置して小地区名とした（第19・20図参照）。

#### ③真木谷遺跡

遺構実測や出土遺物の取り上げ時の基準とする4m方眼の小地区は国土座標（日本測地系）を基に設定し、北～南に算用数字を、西～東にアルファベットを配置して小地区名とした（第19・57図参照）。

#### ④与五郎谷遺跡

遺構実測や出土遺物の取り上げ時の基準とする4m方眼の小地区は国土座標（世界測地系）を基に設定し、北～南に算用数字を、西～東にアルファベットを配置して小地区名とした（第60図参照）。

### （3）掘削の方法

#### ①長谷町遺跡

掘削は、表土を重機で行い、包含層及び遺構を人力で行った。

#### ②齋宮池遺跡

掘削は、基本的に表土を重機で行い、包含層及び遺構を人力で行ったが、包含層が地表面に表出していた範囲については、すべて人力により掘削した。

#### ③真木谷遺跡

掘削は、表土を重機で行い、包含層及び遺構を人力で行った。

#### ④与五郎谷遺跡

掘削は、表土を重機で行い、包含層及び遺構を人力で行った。

### （4）遺構図面の作成について

#### ①長谷町遺跡

遺構図面の作成は、すべて手書きによる。各図の作成時の縮尺は以下の通りである。

- ・遺構平面図（全図）… 1 : 100
- ・遺構平面図（個別）… 1 : 10・ 1 : 20
- ・遺物出土状況図… 1 : 10
- ・土層断面図… 1 : 20
- ・地形測量図… 1 : 100

## ②齋宮池遺跡

遺構図面の作成は、すべて手書きによる。各図の作成時の縮尺は以下の通りである。

- ・遺構平面図（全図）… 1 : 20
- ・遺物出土状況図… 1 : 10
- ・土層断面図… 1 : 20
- ・地形測量図… 1 : 100

## ③真木谷遺跡

遺構図面の作成は、すべて手書きによる。各図の作成時の縮尺は以下の通りである。

- ・遺構平面図（全図）… 1 : 100
- ・土層断面図… 1 : 20
- ・地形測量図… 1 : 100

## ④与五郎谷遺跡

遺構図面の作成は、すべて手書きによる。各図の作成時の縮尺は以下の通りである。

- ・遺構平面図（全図）  
平成18年度工事立会調査… 1 : 100
- 平成20年度本調査… 1 : 20・ 1 : 100
- ・土層断面図… 1 : 20
- ・地形測量図… 1 : 100

## (5)遺構写真について

### ①長谷町遺跡

調査区全景写真はラジコンヘリコプターを使用して空中撮影を行った。フィルムは6×6cm判（モノクロ・カラーポジ）を使用した。個別の遺構写真は、傾斜地である現場の状況から撮影台の設置が困難であったため、基本的に地上で撮影したが、一部クローラー型高所作業車を使用して撮影した。フィルムは4×5インチ判（モノクロ・カラーポジ）に加え、35mm判（モノクロ・カラーポジ）を使用した。

### ②齋宮池遺跡

調査区全景写真はラジコンヘリコプターを使用して空中撮影を行った。フィルムは6×6cm判（モノクロ・カラーポジ）を使用した。個別の遺構写真は一部ローリングタワーを設置して撮影した。フィル

ムは4×5インチ判（モノクロ・カラーポジ）に加え、6×9cm判（モノクロ・カラーポジ）、35mm判（モノクロ・カラーポジ）を使用した。

### ③真木谷遺跡

調査区全景写真はローリングタワーを設置して撮影した。フィルムは4×5インチ判（モノクロ・カラーポジ）に加え、6×9cm判（モノクロ・カラーポジ）、35mm判（モノクロ・カラーポジ）を使用した。

### ④与五郎谷遺跡

調査区全景写真はローリングタワーを設置して撮影した。フィルムは6×7cm判（モノクロ・カラーポジ）に加え、35mm判（モノクロ・カラーポジ）を使用した。（小山憲一・西口剛司・山口田美）

### 【註】

①『宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ 外山遺跡・片落C遺跡』（三重県埋蔵文化財センター 2000年）

『宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ 発シB遺跡―第3次調査―』（三重県埋蔵文化財センター 2001年）

『宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ 発シA遺跡』（三重県埋蔵文化財センター 2002年）

『宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅳ 野田塚・野田遺跡』（三重県埋蔵文化財センター 2003年）

『宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅴ 発シA遺跡―第2次調査―』（三重県埋蔵文化財センター 2002年）

②『宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅵ 丁長遺跡（第1次）・大谷遺跡（第1・2次）発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター 2009年）

③『明和町史』（明和町 1972年）

④『宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査概報Ⅰ』（三重県埋蔵文化財センター 2000年）

『宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』（三重県埋蔵文化財センター 2001年）

⑤前掲註④

⑥前掲註④

⑦『宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査だより』第5号（三重県埋蔵文化財センター 2007年）

## 第Ⅱ章 位置と環境

### 第1節 位置と地理的環境

齋宮池遺跡（1）、真木谷遺跡（2）、長谷町遺跡（3）は三重県多気郡明和町池村に、与五郎谷遺跡（4）は三重県多気郡多気町土羽に所在する。

明和町は伊勢平野の南部にあり、櫛田川と宮川の間位置している。町の中央部から北部にかけては平坦地が開けているが、この平坦地は、かつては櫛田川の本流であったとされる祓川によって堆積した砂礫層からなる台地と、町内中央部と東部を流れる笹笛川や大堀川の浸食による谷底平野、祓川流域の氾濫原などの低地からなる。一方、町南部は多気山

地の東端にあたる玉城丘陵と通称される丘陵地で、北へ標高を下げながら里山を形成している。多気町から明和町、玉城町へと続くこの丘陵地は、標高40～100mの低丘陵で、起伏は比較的小さく、尾根は複雑に分かれる。また、細長い谷がいくつも形成されており、そこには齋宮池はじめ灌漑の溜池が多数築かれている。今回調査を行った長谷町遺跡、齋宮池遺跡、真木谷遺跡は、齋宮池とそれに接する周辺部に位置し、与五郎谷遺跡は玉城丘陵南端の緩斜面、JR参宮線外城田駅のすぐ北側に位置している。

### 第2節 歴史的環境

ここでは、今回調査を行った遺跡に関連する周辺の歴史的環境について、旧石器時代から平安時代を中心に概述する。

当遺跡の近隣に所在する旧石器時代の遺跡としては、拠点集落跡と考えられるカリコ遺跡（5）があり、300点を超えるナイフ形石器が出土している<sup>②</sup>。同時代の遺跡には、当遺跡のある玉城丘陵の緩斜面に、上村池A遺跡（6）・上村池B遺跡（7）、カゴ山遺跡（8）、祓川右岸にコドノA遺跡（9）・コドノB遺跡（10）、大仏山丘陵とその周辺部にシング池遺跡（11）、北野遺跡（12）などがあり、やはりナイフ形石器などが出土している<sup>③</sup>。

縄文時代の遺跡としては、神子柴型石斧や早期の特徴をもった土器が出土している上村池A遺跡<sup>④</sup>（6）があり、また石川遺跡（13）でも早期の押型文土器が多数出土している<sup>⑤</sup>。その後、中期から晩期の縄文土器が出土した金剛坂遺跡<sup>⑥</sup>（14）などが続く。後期から晩期になると、人面土版や縄文土器が出土した西出遺跡<sup>⑦</sup>（15）、コドノA遺跡（9）、上村池B遺跡（7）など確認される遺跡数は増加する。

弥生時代の遺跡としては、前期から後期にいたる大規模集落である金剛坂遺跡<sup>⑧</sup>（14）があり、前期の亜流遠賀川式土器の出土した遺跡として注目された。また、コドノB遺跡<sup>⑨</sup>（10）では前期の方形周溝墓が、粟垣内遺跡<sup>⑩</sup>（16）や大道A遺跡<sup>⑪</sup>（17）でも前期の遺

構が検出されている。後期になると集落の規模が大きくなり、北野遺跡<sup>⑫</sup>（12）では100棟以上の竪穴住居が検出されている。その他中期から古墳時代初頭の寺垣内遺跡<sup>⑬</sup>（18）からも竪穴住居や方形周溝墓が多数確認されている。

古墳時代には、当遺跡の位置する玉城丘陵やその周辺に500基を超える古墳が造営されている。滑石製埴、円筒埴輪などが出土した5世紀前半の権現山2号墳（19）はこの地域の最古のものと考えられている<sup>⑭</sup>。5世紀中頃から後半にかけては、画文帯神獸鏡の出土した神前山1号墳<sup>⑮</sup>（20）や、高塚1号墳（21）、大塚1号墳（22）など帆立貝式前方後円墳が築造されている<sup>⑯</sup>。6世紀前半頃には、かも塚古墳（23）や稲生1号墳（24）、宮西古墳（25）といった直径30mほどの首長墓相当の大型の円墳が玉城丘陵以外にも築かれるようになる<sup>⑰</sup>。その後7世紀にかけて古墳は小規模かつ群集化し、玉城丘陵を中心に多くの古墳群が造営されている。丘陵北部には、天王山古墳群（26）、神前山古墳群（20）、大塚古墳群（22）、河田古墳群（27）、垣場古墳群（28）、戸峯古墳群（29）、世古古墳群（30）などが、丘陵中央部には、齋宮池古墳群（31）、小金古墳群（32）、上村池古墳群（33）、ユブミ古墳群（34）、一長A古墳群（35）、一長B古墳群（36）など、丘陵南部には朝久田古墳群（37）、師子焼A古墳群（38）、師子焼



第3図 遺跡位置図 (1 : 50,000) [国土地理院「松阪」「明野」「国東山」「伊勢」1 : 25,000より]

B古墳群(39)、辻ノ長古墳群(40)などがある。一方で同時代の集落跡は少なく、古墳を造営した人々の暮らしについて多くの資料は得られていないが、前期の琵琶垣内遺跡<sup>⑤</sup>(41)、中期の中の坊遺跡<sup>⑥</sup>(42)、後期の堀田遺跡<sup>⑦</sup>(43)から竪穴住居などが見つかっている。

古代から中世にかけてのこの地域で特筆すべきは、「斎宮跡」(44)の存在である。斎宮とは、天皇に代わり伊勢神宮に仕えるため、天皇の代替わりごとに都から派遣された未婚の皇族女性である斎王の宮殿とその役所である。また、この地域では、伊勢神宮や斎宮などで使用する土師器が作られたとされる土師器焼成坑が検出された遺跡が多数確認されている。水池土器製作遺跡(45)をはじめ、北野遺跡<sup>⑧</sup>(12)、垣場遺跡(46)、戸峯A遺跡(47)、戸峯B遺跡(48)、発シA遺跡<sup>⑨</sup>(49)、発シB遺跡<sup>⑩</sup>(50)、堀田遺跡<sup>⑪</sup>(43)などがそうである。北野遺跡は、6世紀中頃より約250年にわたって土師器を生産したとされ、平成2年度から平成7年度の5回の発掘調査で225基に及ぶ土師器焼成坑が確認された。戸峯A遺跡、戸峯B遺跡でも奈良時代の竪穴住居とともに合計100基の土師器焼成坑が検出されており、これらは飛鳥時代から奈良時代の時期を中心に土師器を生産した代表的な遺跡といえる。同時代の集落跡が確認された櫛田川左岸の琵琶垣内遺跡(41)からは「厨」の文字の見える墨書土器が多数出土した。それらの土器はかつて「有爾郷」とよばれた前述の土師器生産遺跡で生産されたものと見られ、神宮や斎宮寮に貢納する供物の供給地であった可能性も指摘されている<sup>⑫</sup>。

この他の集落としては、平安時代中期の掘立柱建物が検出された上山遺跡<sup>⑬</sup>(51)、平安時代後期の掘立柱建物や井戸が確認された堀田遺跡<sup>⑭</sup>(43)、仲垣内遺跡(52)、赤垣内遺跡(53)などがある。また、師子焼遺跡<sup>⑮</sup>(54)からも平安時代後期の遺物が出土しており、楠ノ木遺跡(55)、蚊山遺跡(56)は平安時代末期から室町時代にかけての大規模な集落遺跡である<sup>⑯</sup>。

以上のように、当遺跡周辺の歴史的環境について概述してきたが、当地域では先史の時代より連続と続く人々の生活の痕跡が窺われる。(林 義男)

## 【註】

- ①『明和町史 史料編 第一巻 自然・考古』(明和町 2004年)以下、地形に関する記述は同書を参考にした。
- ②『玉城町史 上巻』(玉城町 1995年)
- ③ a 『明和町遺跡地図』(明和町 1988年)  
b 森田幸伸「大仏山丘陵とその周辺のナイフ形石器について」(『研究紀要』第1号 三重県埋蔵文化財センター 1992年)
- ④前掲註③ a
- ⑤『小俣町史 通史編』(小俣町 1988年)
- ⑥『金剛坂遺跡発掘調査報告』(明和町教育委員会 1971年)
- ⑦『三重県埋蔵文化財年報9』(三重県教育委員会 1979年)
- ⑧前掲註⑥
- ⑨『コドノA遺跡・コドノB遺跡(第1次)発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター 1998年)
- ⑩前掲註⑦
- ⑪『三重県埋蔵文化財年報16』(三重県教育委員会 1986年)
- ⑫ a 「多気郡明和町養村 北野遺跡」(『平成2年度農業基盤整備事業地域 埋蔵文化財発掘調査報告—第2分冊—』三重県教育委員会 三重県埋蔵文化財センター 1991年)  
b 『北野遺跡(第2・3・4次)』(三重県埋蔵文化財センター 1995年)  
c 『北野遺跡(第5次)発掘調査概報』(三重県埋蔵文化財センター 1996年)
- ⑬前掲註①
- ⑭『河田古墳群発掘調査報告Ⅲ』(多気町教育委員会 1986年)
- ⑮『神前山1号墳発掘調査報告』(明和町教育委員会 1973年)
- ⑯前掲註①
- ⑰前掲註②
- ⑱『琵琶垣内遺跡(第1・4次)発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター 2006年)
- ⑲『中の坊遺跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター 1997年)
- ⑳「X 多気郡明和町堀田遺跡」(『昭和55年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員

会 1981年)

㉑前掲註⑫

㉒ a 『宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ 発  
シA遺跡』(三重県埋蔵文化財センター 2002年)

b 『宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅴ 発  
シA遺跡-第2次調査-』(三重県埋蔵文化財セン  
ター 2003年)

㉓ 『宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ 発シ  
B遺跡-第3次調査-』(三重県埋蔵文化財センター  
2001年)

㉔前掲註⑳

㉕前掲註①

㉖前掲註⑱

㉗ 『上ノ山遺跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター  
1992年)

㉘前掲註㉑

㉙ 「度会郡玉城町仲垣内遺跡」・「度会郡玉城町赤垣内遺  
跡」(『昭和48年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発  
掘調査報告』三重県教育委員会・三重県文化財連盟  
1979年)

㉚ 『師子焼遺跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター  
2009年)

㉛ a 『近畿自動車道(勢和～伊勢)埋蔵文化財発掘調査報  
告-第3分冊-楠ノ木遺跡』(三重県教育委員会 三  
重県埋蔵文化財センター 1991年)

b 『近畿自動車道(勢和～伊勢)埋蔵文化財発掘調査報  
告-第6分冊-蚊山遺跡左郡地区』(三重県教育委員  
会 三重県埋蔵文化財センター 1993年)

c 前掲註②

**【参考文献】**

- ・『明和町史 史料編 第一巻 自然・考古』(明和町  
2004年)
- ・『多気町史』(多気町 1992年)
- ・『玉城町史 上巻』(玉城町 1995年)
- ・『小俣町史 通史編』(小俣町 1988年)
- ・西村美幸「玉城丘陵と周辺の群集墳」(『Mie history  
～特集 三重の群集墳を考える～』vol.10 三重歴史文  
化研究会 1999年)

# 第三章 長谷町遺跡

## 第1節 遺構

### (1) 遺跡の位置・地形と基本層序

#### ① 遺跡の位置・地形

遺跡は明和町南部に広がる通称玉城丘陵の丘陵内に所在する齋宮池の南側に位置し、東方へ派生する低位丘陵尾根の緩斜面上に立地する。行政上の所在地は多気郡明和町池村字長谷町であるが、明和町の南限に当たり、度会郡玉城町上田辺（かみたぬい）に隣接する。

#### ② 基本層序

当遺跡は後述の通り、調査区の西側隣接地が削平されていることから、調査区内も少なからず影響を受けており、地点によって基本層序が異なる。調査区の北部（a～b間・c～d間付近）は自然地形が遺存し、明褐色土の表土下にやや粘性の黄褐色～明褐色土を介在してやや粘性の橙色土の地山となる。調査区中央部（e～f間・g～h間付近）は時期不明の落ち込み（SZ4）があり、後述の通り二時期に渡る相当量の盛土が認められ、旧表土下でやや粘性の明赤褐色土もしくは明褐色～浅黄橙色砂質土の地山となる。g～h間付近では地山上に若干の包含層が認められるが、遺物の出土量はごく僅かである。調査区南部（i～j間）では表土下に薄い盛土が認められるが、基本的に旧表土直下で橙色粘質土の地山となる。また、地形的に低い調査区南東部については調整池の導水路に位置するため、水流による浸食や土砂の堆積が土層観察から窺える。以上のように、地形改変や水流の影響等でやや不規則な層序となっているが、基本的には（旧）表土直下で地山となっており、遺構は橙色～褐色系粘質土の地山面で検出した。

### (2) 検出遺構

#### ① 検出遺構の概要

調査は東方へ派生する低位丘陵尾根の北・東・南緩斜面を対象に行った。調査区西側の平坦面は、範囲確認調査の結果、開発行為による削平地であることが確認されたため、調査対象外とした。調査の結果、奈良～平安時代の竪穴住居、火葬墓、土坑等を

確認したが、確認した遺構のほとんどが南斜面で検出されている。なお、確認した遺構の検出地点の標高は約31～34mである。

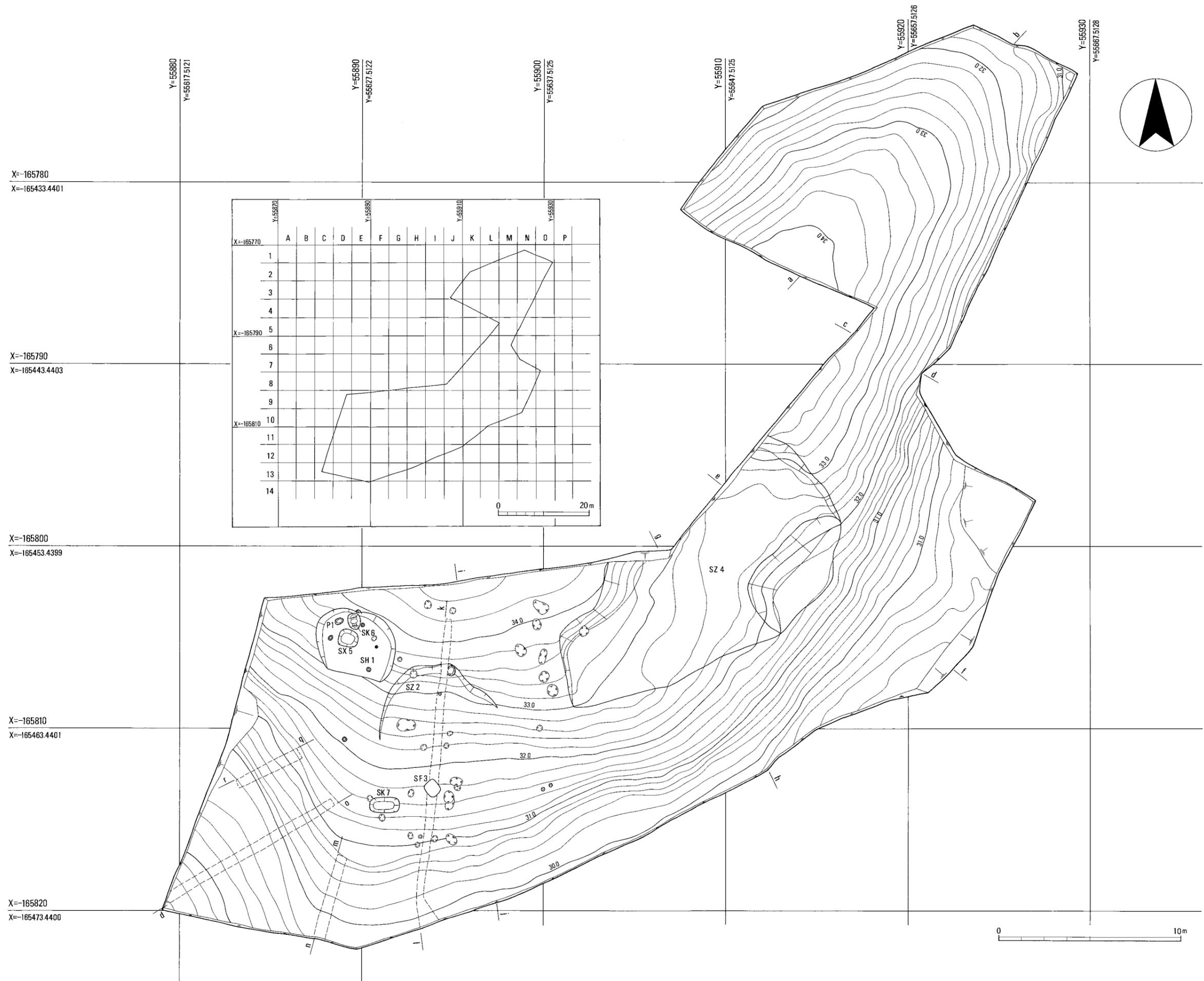
#### ② 奈良時代の遺構

**SH1**（第7図） 調査区南側の緩斜面を削平して床面を形成した竪穴住居である。平面形態は一辺が約4mの不整形で、壁周溝や支柱穴は確認できなかった。埋土は2層で、遺構北半部の掘り込みの深い範囲を締めりのある黄色土が埋め、その上層のやや粘性の灰黄褐色土が遺構全面を覆っていた。遺構北壁際にはカマドの痕跡と考えられるSK6が位置し、その周辺の床面付近の黄色土から8世紀代の所産と考えられる土師器杯皿類（1・2・12・14）や須恵器杯蓋（16）等が出土した。また、8世紀代及び9世紀後半代の土師器杯・皿（3～11・13・15）や灰釉陶器長頸瓶（17）等が上層の灰黄褐色土を中心に出土している。

**SK6**（第8図） SH1の北壁際に位置する長軸約0.9mの不整形円形土坑である。埋土の中央部に焼土層を形成し、完形の土師器甕（27）が倒立状態で出土している。また、その上面でも土師器甕が破砕した状態で出土している。SH1では土師器長胴甕も出土していることから、当遺構は前述の通りSH1のカマド痕跡と考えられる。倒立状態で出土した土師器甕はカマドの支脚に転用されたものと考えられる。

#### ③ 平安時代の遺構

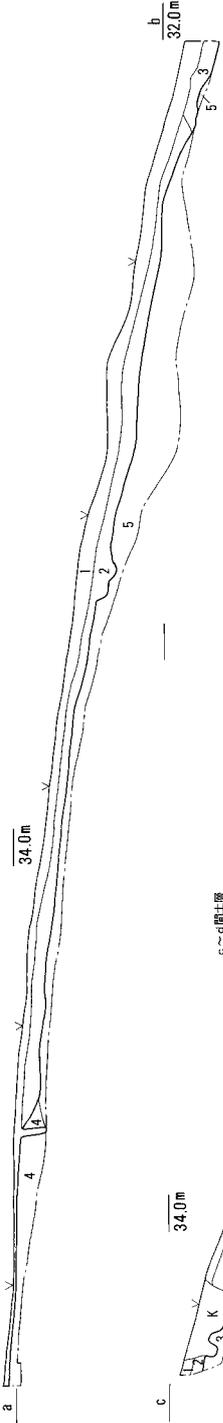
**SX5**（第9図） SH1の中央部付近に位置する。墓壇は一辺約0.8m、深さ約0.35mで、平面形態は隅丸方形を呈する。墓壇の主軸はN12°Eで、墓壇の各辺がほぼ東西南北に沿って構築されている。墓壇の中央部には蔵骨器（39～41）が据えられ、大量の木炭が被覆されていた。この木炭には灰がほとんど混在せず、比較的形状が一定したものが多い。また、蔵骨器を被覆した木炭の上部を褐色系の粘質土で埋め、その上部に供献品と考えられる9世紀後半代の土師器杯皿類（29～38）を合口にしたものが東



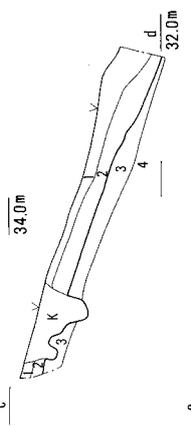
第4図 長谷町遺跡遺構平面図 (1:200)・小地区割図 (1:800) ※座標値上段:日本測地系・座標値下段:世界測地系



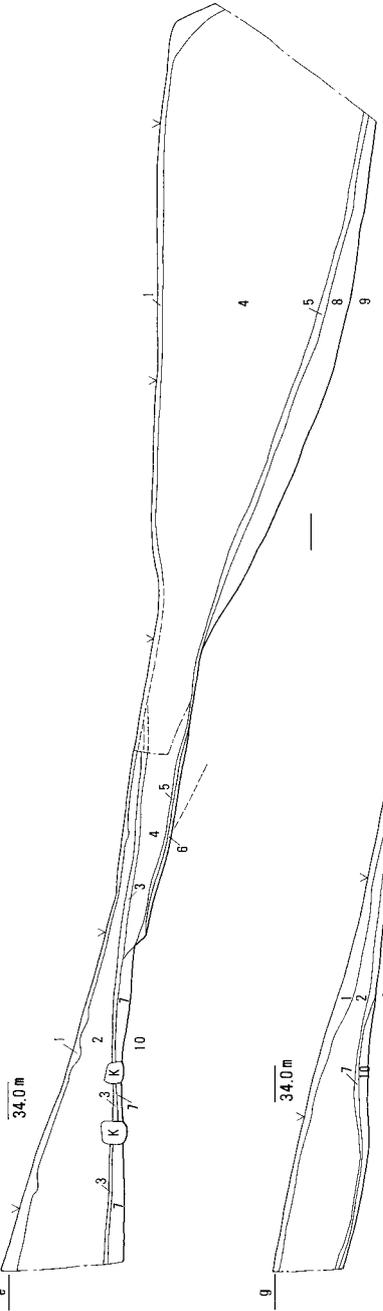
- a~b間土層
- 7.5R5/6 明褐色土 (木の根多く混入) : 礫土
  - 10R5/8 黄褐色土 (やや粘性)
  - 10R5/4 にふい黄褐色土 (やや粘性 木の根混入)
  - 7.5R6/8 褐色土 (やや粘性) : 地山
  - 10R5/6 黄褐色土 (深1cm以下の白色礫多く混入) : 地山



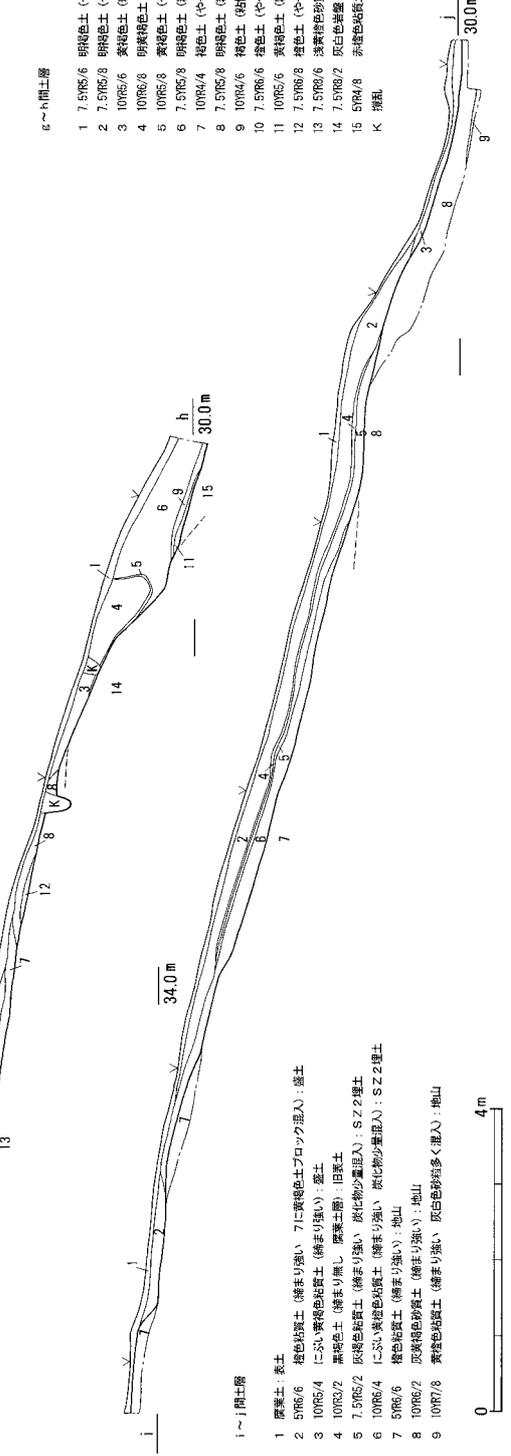
- c~d間土層
- 7.5R7/6 明褐色土 (やや粘性) : 礫土
  - 7.5R5/8 明褐色土 (やや粘性)
  - 7.5R6/8 褐色土 (やや粘性) : 地山
  - 5R5/8 明赤褐色土 (やや粘性) : 地山
- K 攪乱



- e~f間土層
- 7.5R5/6 明褐色土 (やや粘性) : 礫土
  - 7.5R5/8 明褐色土 (やや粘性 木の根多く混入 現代農産物混入) : 礫土
  - 10R4/6 褐色土 (やや粘性) (旧表土①) (旧表土②と対応)
  - 7.5R5/6 明褐色土 (やや粘性 木の根多く混入) : 礫土
  - 10R5/2 灰赤褐色土 (やや粘性) : 旧表土② (旧表土①と対応)
  - 7.5R5/6 明褐色土 (やや粘性・4より強い色調)
  - 10R4/4 褐色土 (やや粘性)
  - 7.5R5/6 明褐色砂質土 (やや粘まり強い 炭化物少量混入)
  - 7.5R5/6 明褐色砂質土 (やや粘まり強い) : 地山
  - 5R5/8 明赤褐色土 (やや粘性) : 地山
- K 攪乱

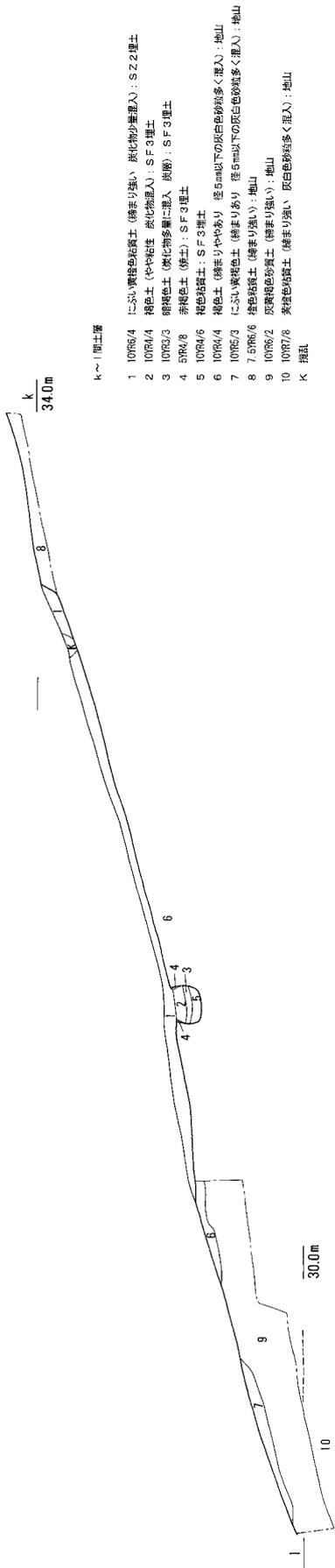


- g~h間土層
- 7.5R5/6 明褐色土 (やや粘性) : 礫土
  - 7.5R5/8 明褐色土 (やや粘性 木の根多く混入) : 礫土
  - 10R5/6 黄褐色土 (粘性强い) : 礫土
  - 10R6/8 明赤褐色土 (粘性强い) : 礫土
  - 10R5/8 黄褐色土 (やや粘性) : 旧表土③ (旧表土①と対応)
  - 7.5R5/8 明褐色土 (粘性强い) : 礫土
  - 10R4/4 褐色土 (やや粘性) : 旧表土④ (旧表土②と対応)
  - 7.5R5/8 明褐色土 (粘性强い 2よりやや強い色調) : 包合層
  - 10R4/6 褐色土 (粘性强い) : 包合層
  - 7.5R6/6 褐色土 (やや粘性) : 包合層
  - 10R5/6 黄褐色土 (粘性强い) : 包合層
  - 7.5R6/8 褐色土 (やや粘性) : 包合層
  - 7.5R6/6 黄褐色砂質土 (粘まりあり) : 地山
  - 7.5R6/2 灰白色土層 : 地山
  - 5R4/8 赤褐色粘土 (粘まり強い) : 地山
- K 攪乱



- i~j間土層
- 原表土 : 礫土
  - 5R6/6 褐色粘質土 (粘まり強い 7に黄褐色土ブロック混入) : 礫土
  - 10R5/4 にふい黄褐色粘質土 (粘まり強い) : 礫土
  - 10R3/2 黒褐色土 (粘まり無し 原表土層) : 旧表土
  - 7.5R5/2 灰赤褐色粘質土 (粘まり強い 炭化物少量混入) : S Z 2層土
  - 10R5/4 にふい黄褐色粘質土 (粘まり強い 炭化物少量混入) : S Z 2層土
  - 5R6/6 褐色粘質土 (粘まり強い) : 地山
  - 10R6/2 灰黄褐色粘質土 (粘まり強い) : 地山
  - 10R7/8 黄褐色粘質土 (粘まり強い 灰白色砂質物多く混入) : 地山

第5図 長谷町遺跡調査区土層断面図 (1:100)



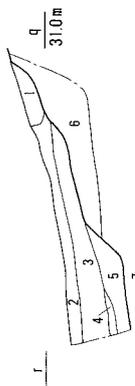
k~j間土層

- 1 10R5/4 にふい黄褐色粘質土 (締まり強い 炭化物少量混入) ; S Z 2 埋土
- 2 10R4/4 褐色土 (やや粘性 炭化物混入) ; S F 3 埋土
- 3 10R3/3 暗褐色土 (炭化物多量に混入 炭層) ; S F 3 埋土
- 4 5R4/8 赤褐色土 (締土) ; S F 3 埋土
- 5 10R4/6 褐色粘質土 ; S F 3 埋土
- 6 10R4/4 褐色土 (締まりややあり 径5mm以下の灰白色砂粒多く混入) ; 地山
- 7 10R5/3 にふい黄褐色土 (締まりあり 径5mm以下の灰白色砂粒多く混入) ; 地山
- 8 7.5R6/6 緑褐色粘質土 (締まり強い) ; 地山
- 9 10R6/2 灰褐色粘質土 (締まり強い) ; 地山
- 10 10R7/8 黄褐色粘質土 (締まり強い 灰白色砂粒多く混入) ; 地山

K 崩乱

q~r間土層

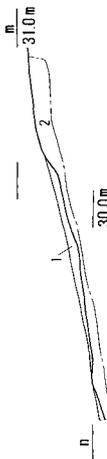
- 1 10R5/6 黄褐色土 (木の根多く混入) ; 谷埋土
- 2 10R5/4 にふい黄褐色土 ; 谷埋土
- 3 10R4/3 にふい黄褐色土 (やや粘性) ; 谷埋土
- 4 10R4/1 褐色土 (やや粘性) ; 谷埋土
- 5 1R/ 灰色粘質土 (やや締まりあり 灰白色砂粒多く混入) ; 谷埋土
- 6 10R4/2 灰黄褐色粘質土 (やや締まりあり) ; 地山
- 7 10R5/1 黄褐色粘質土 (締まり強い) ; 地山



r

m~n間土層

- 1 10R5/4 にふい黄褐色土 ; 谷埋土
- 2 10R4/2 灰黄褐色土 (やや粘性) ; 地山



n

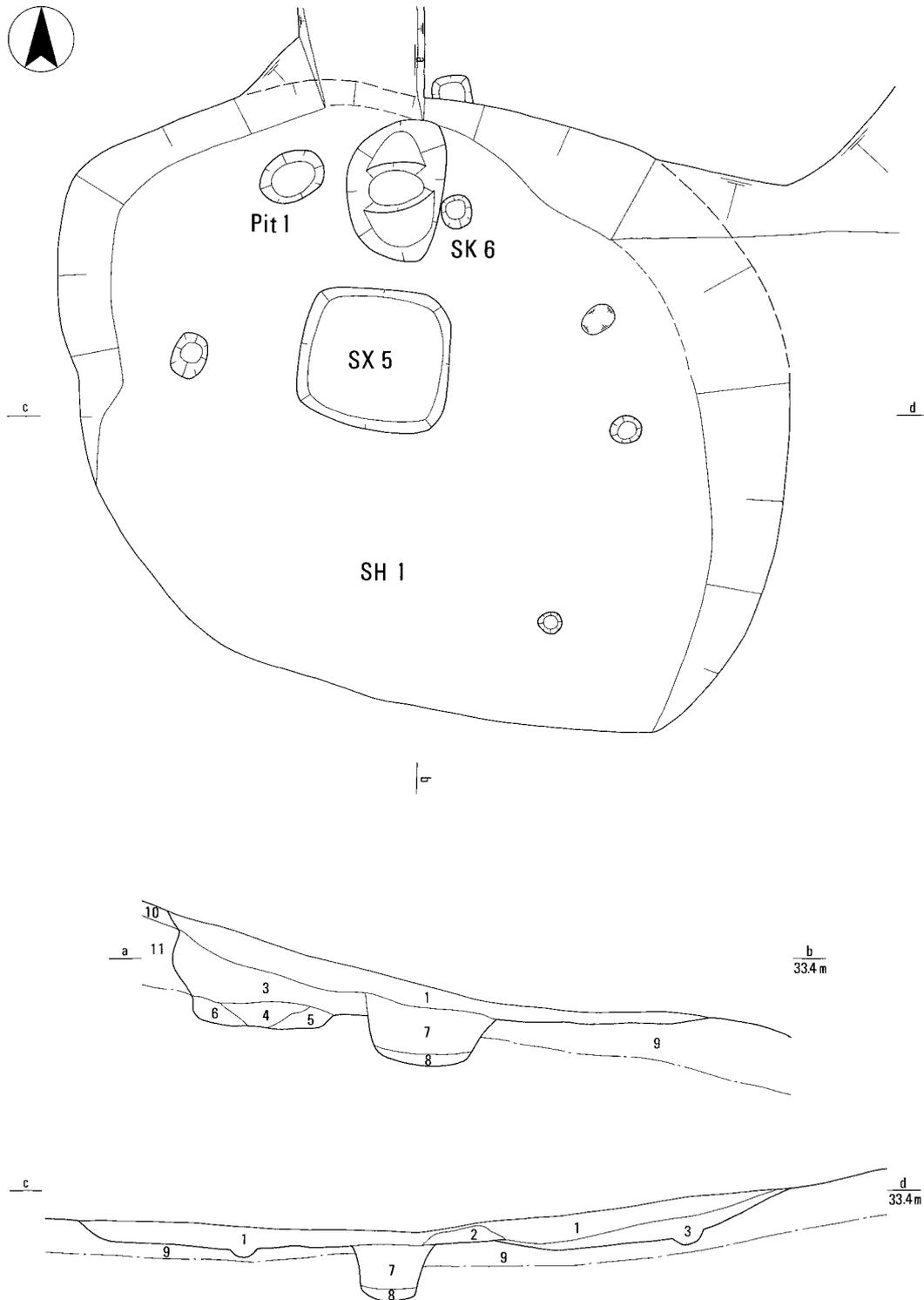
o~p間土層

- 1 10R5/4 にふい黄褐色土 (やや粘質 木の根多く混入) ; 谷埋土
- 2 10R5/2 灰黄褐色土 (やや粘質 木の根多く混入) ; 谷埋土
- 3 10R5/1 褐色土 (やや粘性) ; 谷埋土
- 4 10R5/1 褐色粘質土 ; 谷埋土
- 5 10R4/1 黄褐色粘質土 (締まり強い 灰白色砂粒多く混入) ; 谷埋土
- 6 5R6/6 褐色土 (やや締まりあり) ; 地山
- 7 10R5/1 褐色粘質土 (やや締まりあり 灰白色砂粒多く混入) ; 地山
- 8 10R5/1 黄褐色粘質土 (締まり強い) ; 地山



p

第6図 長谷町遺跡確認トレンチ土層断面図 (1:100)



- |   |  |
|---|--|
| 1 10YR5/2 灰黄褐色土 (やや粘性 締まり弱い 炭化物少量混入 遺物多数包含) : SH1埋土   | 7 7.5YR4/4 褐色粘質土 (炭化物混入 遺物包含) : SX5埋土          |
| 2 7.5YR4/2 灰褐色土 (やや粘性 炭化物混入 遺物包含) : SH1埋土             | 8 5YR4/8 赤褐色粘質土 (締まり強い 炭化物少量混入 遺物少量包含) : SX5埋土 |
| 3 2.5Y7/8 黄色土 (やや締まりあり 炭化物少量混入 焼土少量混入 遺物多数包含) : SH1埋土 | 9 7.5YR5/5 明褐色土 : 地山                           |
| 4 5YR5/8 明赤褐色粘質土 (炭化物多量に混入 焼土層) : SK6埋土               | 10 10YR6/4 にぶい黄褐色土 (やや締まりあり) : 地山              |
| 5 7.5YR5/6 明褐色粘質土 (焼土ブロック多く混入) : SK6埋土                | 11 2.5YR4/6 赤褐色粘質土 (締まり強い) : 地山                |
| 6 7.5YR5/6 明褐色粘質土 : SK6埋土                             |  |



第7図 長谷町遺跡SH1・SX5・SK6平面図、埋土土層断面図(1:40)

側に2組、南側に2組、西側に1組据え置かれていた。なお、墓壇の底部は蔵骨器が据えられた位置よりも若干深く掘り下げられており、墓壇掘削後、若干埋め戻して底部を平坦に整形したと推定される。従って、蔵骨器の安置時の深さは約0.25mである。また、蔵骨器の底部下でも木炭が検出されたことから、墓壇に直接収めたのではなく、蔵骨器納入前に墓壇底部に木炭を敷き詰めたと考えられる。

以上のことから、造墓過程を整理すると以下のよう  
に復元できる。

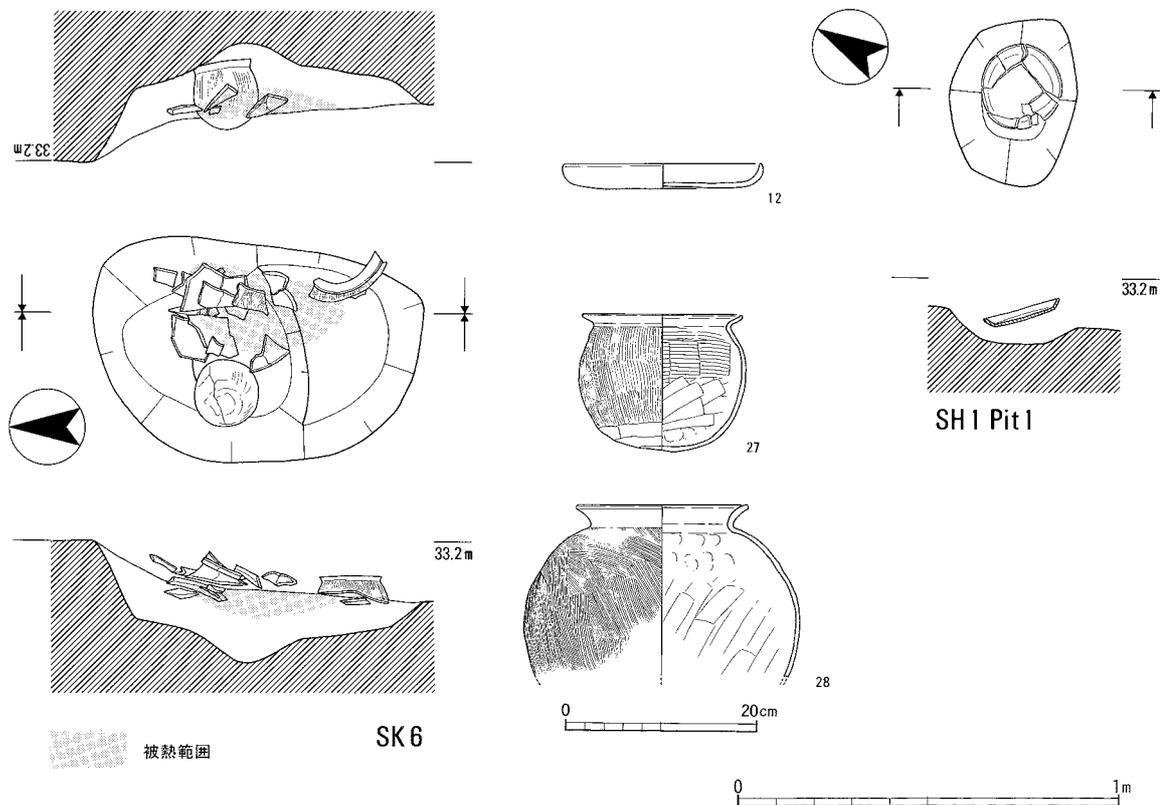
- 1 墓壇の掘削
- 2 墓壇底部を若干埋め戻し平坦に整形
- 3 墓壇底部に木炭を敷き詰める
- 4 墓壇中央に蔵骨器を安置
- 5 蔵骨器を木炭で被覆
- 6 墓壇の八分程度までを埋め戻す
- 7 墓壇上面に合口の土師器杯皿類を蔵骨器の周囲  
(東側・南側・西側)に5組配置
- 8 完全に墓壇を埋め戻す

次に、蔵骨器の構造であるが、蔵骨器の本体は口

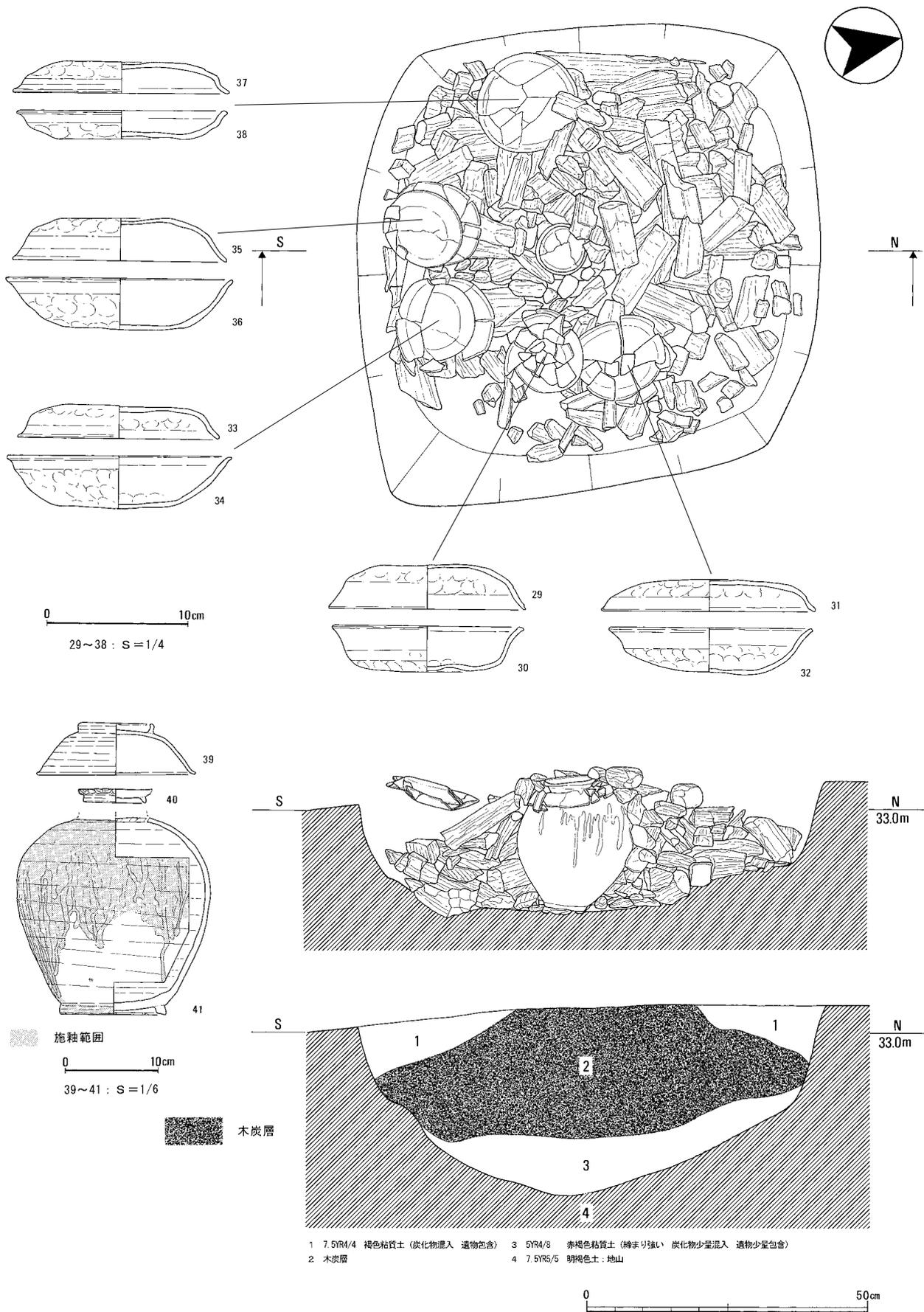
頸部が打ち欠かれた灰釉陶器長頸瓶(41)である。また、灰釉陶器碗の底部(高台部分)を細かく打ち欠き、円形に加工した加工円盤(40)を中蓋として長頸瓶の打ち欠いた部分に装填して密閉し、さらに完形の灰釉陶器碗(39)をその上部に伏せて外蓋としている。これらの蔵骨器は9世紀末頃の所産と考えられる。

なお、蔵骨器内部には火葬人骨が良好な状態で遺存しており、その分析鑑定を行ったところ、人骨は約18歳~30歳の女性1個体との結果が得られている<sup>①</sup>。

供献品と考えられる5組の合口の土師器杯皿類については、検出時に既に土圧により破損していたことから、現地で上部分(蓋)を取り上げ、内部に残存していた土を精査して遺物の有無を確認した。その結果、肉眼ではなんら確認することができなかった。しかしながら、合口であることから、内部に何か収められていた可能性が高いため、自然科学分析の方法を検討し、このセット数が「5組」であることから、内容物が「五穀」との想定をたて、植物珪酸体分析を行った。その結果、35・36の内容物か



第8図 長谷町遺跡SK6・SH1-Pit1遺物出土状況図(1:20)



第9図 長谷町遺跡SX 5遺物出土状況図・断面見通し図・埋土土層断面図 (1:10)

らは種類不明の珪化組織片が検出されたが、その他は全く検出されなかったため、想定を裏付ける結果は得られなかった。

蔵骨器を被覆していた木炭については、出土量が多量であったため、残存状況の良いものを出土位置の偏りが無いようピックアップし、樹種同定を行った。その結果、コナラ属アカガシ亜属・スダジイ・ツブラジイの3種が同定された。また、蔵骨器内に遺存した火葬骨に小片の炭化材が混入していたため、これについても樹種同定を行った結果、ケヤキという結果が得られた。

**S F 3** (第10図) 調査区南斜面に位置する。一辺約0.8m、深さ約0.4mの隅丸方形土坑で、壁面上端15cm程度が帯状に強く被熱し、焼土化している。主軸はN49°Eで、S X 5のように各辺が東西南北に沿って構築されていない。また、壁面の下半は抉られ、オーバーハングしている。埋土は3層で、第2層に大量の炭化材と焼土粒が混入する。前述の壁面被熱範囲と埋土第2層の位置が概ね一致することから、埋土第3層上面に燃料材を置き、燃烧行為が行われたと推定される。これらのことから、土坑の掘削後、何らかの理由で中程まで埋め戻されたと考えられる。従って、燃烧作業時の深さは約0.25mとな

る。埋土第3層の篩いかけ後残留物の微細物分析を行ったが、後代の混入の可能性が高い植物片以外には炭化材・土器片しか検出できなかった。また、同時に炭化材の樹種同定を行った結果、常緑広葉樹のアカガシ亜属、シャシャンボ、スダジイ、針葉樹のイヌガヤの4種類の樹種が同定された。当遺構を検出した平成12年度の範囲確認調査では、遺構埋土上面の南端で9世紀後半代の完形の土師器皿(25)が正立の状態出土していることから、当遺構は意図的に埋め戻され、その上面に土師器皿が据え置かれたと推定される。なお、当該の土師器皿は範囲確認調査時に取り上げたため、第10図の土師器皿出土状況図は当時の出土状況写真を基に復元した図である。

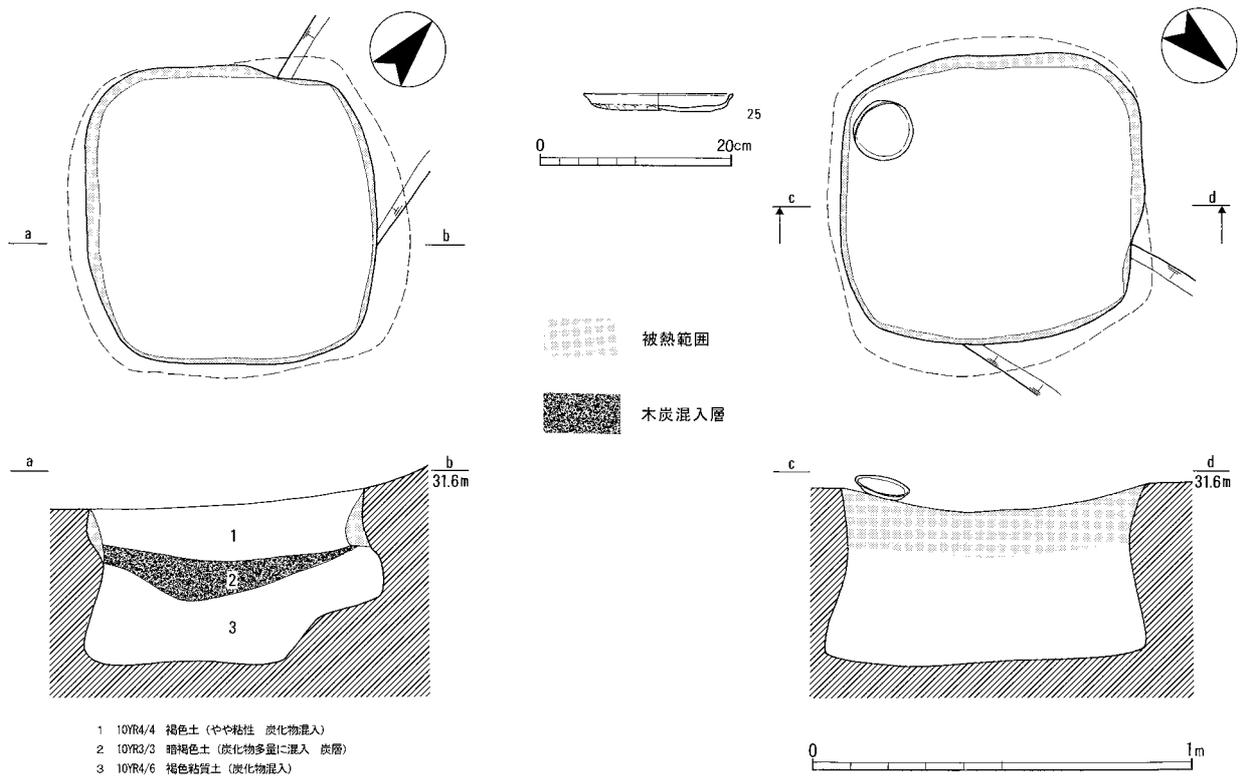
**S Z 2** 調査区南斜面に位置する性格不明の浅い窪地である。北側の斜面上位が弧状に0.2m程落ち込み、黄橙色系の粘質土が堆積する。埋土から9世紀後半代の土師器杯(20~23)や甕(24)が出土している。S X 5・S F 3に関連する遺構の可能性もあるが、判断材料がないため不明である。

#### ④時期不明の遺構

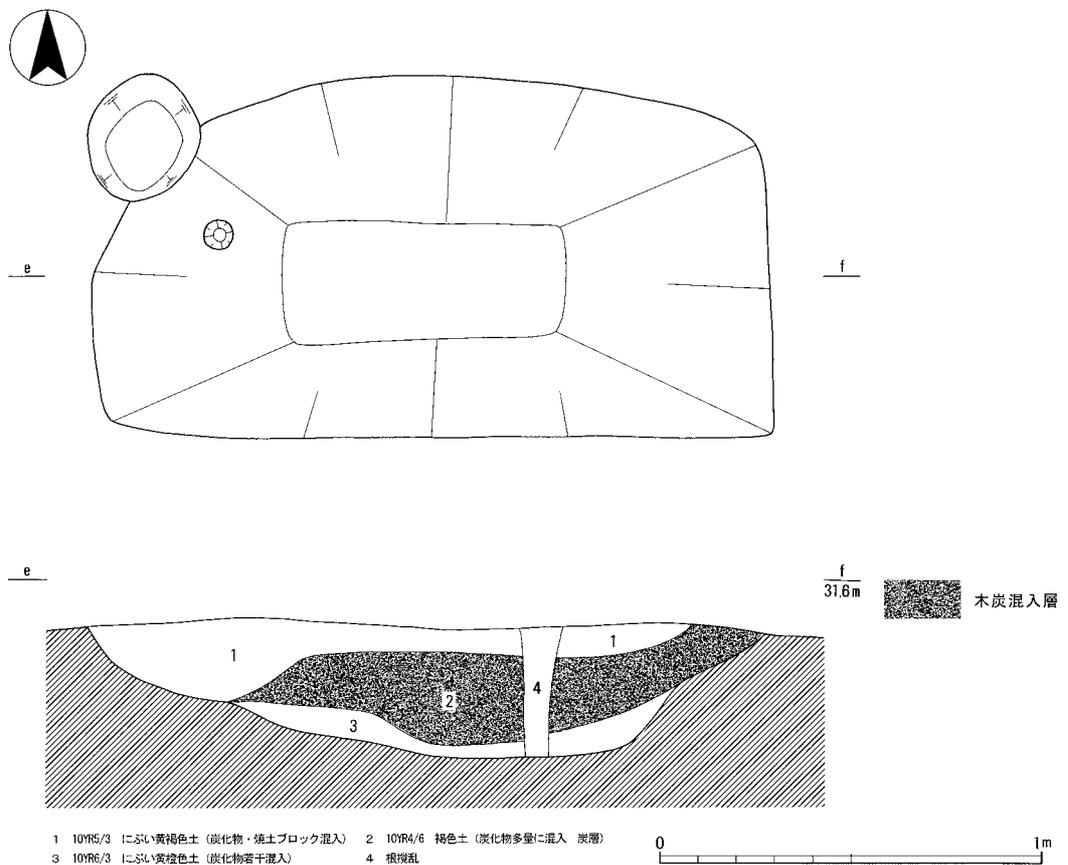
**S K 7** (第11図) 調査区南斜面に位置する。1.8m×1m程の平面形態が隅丸長方形を呈した土坑で、深さは約0.35mである。S H 1の南側約8m、S F

遺構番号		小地区	性格	時期	特徴・形状・計測数値等
報告時	調査時				
S H 1	S Z 1	E 9~10 F 9~10	竪穴住居	奈良	一辺約4mの不整形住居。緩斜面を削平し、床面を形成。北側の奥壁にカマド(S K 6)を構築。カマド周辺で土師器杯・皿類や土師器甕・長胴甕が出土。
S Z 2	S Z 2	F 9~12 G 9~12	不明	平安	S X 5の南東、S F 3の北に位置する性格不明の落ち込み。北側の斜面が弧状に落ち込む。深さ約0.2mでにぶい黄橙色粘質土が堆積。
S F 3	S K 3	F 11・G 11	焼土坑	平安	一辺約0.8m、深さ約0.4mの隅丸方形土坑。壁面上端15cm程度が強く被熱・焼土化する。埋土3層中の第2層が炭化物層。
S Z 4	S Z 4	H 9・I 8~10・ J 8~10・K 6~ 9・L 7~9	不明	不明	緩斜面を削平し、平坦面を形成。時期は不明であるが、近年の削平地の可能性あり。
S X 5	S X 5	E 9	火葬墓	平安	一辺約0.8m、深さ約0.35mの隅丸方形墓壇。灰釉陶器の蔵骨器を大量の木炭で被覆し、埋納する。墓壇上面には供献品と推定される5組の合口土師器杯皿類も埋納される。
S K 6	S K 6	E 9	カマド 痕跡	奈良	S H 1に伴う長軸約0.9m、深さ約0.2mのカマド痕跡。支脚として転用されたと推定される倒立した完形の土師器甕や破碎した土師器甕が出土。
S K 7	S K 7	F 11~12	土坑	不明	約1.8×1.0m、深さ約0.35mの隅丸長方形土坑。埋土3層中の第2層が炭化物層。

第2表 長谷町遺跡遺構一覧表



第10図 長谷町遺跡 S F 3 平面図・埋土土層断面図・遺物出土状況復元図 (1:20)



第11図 長谷町遺跡 SK 7 平面図・埋土土層断面図 (1:20)

3の西約2mに位置し、SH1との比高差は2m程ある。主軸はN90°Eで、東西方向に方位を揃えて構築されている。埋土は3層で、第2層には炭化物が多量に混入していた。所属時期を特定できる遺物は出土しておらず、埋土の状況が前述のSF3と類似していたため、現地調査の段階ではSF3と同様の時期と推定していたが、第2層出土の炭化材を放射性炭素年代測定にかけた結果、7世紀後半～9世紀前半の測定結果が得られたため、SF3よりも若干先行する時期に構築・使用された遺構の可能性<sup>⑤</sup>がある。なお、埋土篩いかけ後残留物の微細物分析を層位毎に行ったが、後代の混入の可能性が高い植物片・種子、木片以外には炭化材・土器片等しか検出できなかった<sup>⑥</sup>。また、同時に炭化材の樹種同定も行ったが、暖温帯常緑広葉樹林に生育するコナラ属アカガシ亜属を主とした構成であるとの結果が得られた<sup>⑦</sup>。SK3のような明確な被熱痕跡は認められなかったが、埋土に多量の炭化材が混入することから、何らかの燃焼作業が行われた可能性もある。

**SZ4** 調査区南東斜面に形成された平坦面である。出土遺物は土師器の細片のみのため、所属時期は不明である。埋土は地山土の盛土と考えられ、土層観察から旧表土と考えられる薄い腐葉土層が2層認められたため、2時期に亘り盛土がなされたと推定される。近年の削平地の可能性もあるが、調査区西側が削平された際に埋め立てられた自然地形の可能性もある。(小山憲一)

#### 【註】

- ①後掲の火葬人骨分析・鑑定報告「長谷町遺跡出土火葬人骨」(第七章 第2節)に拠る。
- ②後掲の自然科学分析報告「長谷町遺跡の自然科学分析」(第七章 第3節)に拠る。
- ③後掲の自然科学分析報告「長谷町遺跡から出土した炭化材の樹種」(第七章 第4節)に拠る。
- ④前掲註②・③に拠る。
- ⑤前掲註②に拠る。
- ⑥前掲註②に拠る。
- ⑦前掲註②に拠る。

## 第2節 遺物

### (1) 出土遺物の概要

今回の調査では、縄文時代の土器・石器、奈良～平安時代の土師器・須恵器・灰釉陶器など整理箱で20箱（総重量22.8kg）の遺物が出土した。以下、出土遺物の概要を記述するが、各遺物の詳細については第3～6表の遺物観察表を参照されたい。なお、縄文時代の石器類については掲載遺物以外に楔形石器3点（チャート製1点・泥岩製2点）、礫器2点（チャート製1点・砂岩製1点）、RF1点（チャート製）、UF1点（チャート製）、チャート剥片10点（197.37g）、サヌカイト剥片15点（213.90g）等が出土している。この他、火葬墓SX5出土の火葬人骨や木炭等があるが、これらについては後掲の「第七章 自然科学分析」を参照されたい。

### (2) 遺構出土の遺物

#### ① SH1 出土遺物（第12図）

1～11は土師器杯である。1～3は、器高が4cm前後のやや深い杯である。口縁部はいずれも直線的に外傾する。胎土はいずれも精良で、橙色もしくはにぶい黄橙色を呈する。2・3は残存部僅少のため詳細は不明であるが、1は底部外面がヘラケズリされる。4～11は1～3に比して器高が浅い杯である。口縁部形態としては、5・6・7・10は内弯気味に、その他は直線的に外上方へ立ち上がり、6は口縁端部が外反する。胎土はいずれも精良で、橙色もしくはにぶい黄橙色を呈する。残存部僅少のものが多く器面調整の詳細は不明であるが、1はヨコナデ・ナデである。これらは概ね斎宮編年第I期第3～4段階<sup>①</sup>（8世紀中葉～後葉）に相当しよう。

12～15は土師器皿である。12は口径21cm超の大形の皿である。胎土は精良で橙色を呈し、口縁部は内弯気味に立ち上がる。器面の調整は内外面ともにヨコナデ・ナデである。斎宮編年第I期第3～4段階に相当するか。13は口径17cm程で口縁部が内弯気味に外上方へ立ち上がる。胎土は精良で橙色を呈し、器面の調整は内外面ともにヨコナデ・ナデである。14は残存部僅少のため口径は不明であるが、口縁部が外反気味に立ち上がる。胎土は精良で明赤褐色を呈し、器面の調整は内外面ともにヨコナデ・ナデで

ある。13・14は斎宮編年第II期第1段階（8世紀末～9世紀初頭）に相当するか。15も残存部僅少のため口径は不明であるが、口縁部は大きく外反し、器面の調整は内外面ともにヨコナデ・ナデである。斎宮編年第II期第3段階（9世紀後半）に相当しよう。

16は須恵器杯蓋である。天井部は平らで、扁平な宝珠形つまみが付加される。口縁端部は下方へ短く屈曲する。MT21型式<sup>②</sup>に相当しよう。

17は灰釉陶器長頸瓶である。体部下半～底部と口縁端部を欠損するが、頸部径が最小となるのは体部との接続部で口縁部が喇叭状に開き、体部の肩の張りは余りない。器面の調整は内外面ともにロクロナデが施され、体部外面上半にはロクロケズリも施される。頸部には自然釉が認められ、判然としないが体部中程には穿孔の可能性がある欠損部が認められる。猿投窯産と推定され、9世紀末頃の所産と考えられる<sup>③</sup>。

18は土師器甕である。体部下半～底部が欠損しているが、口径より体部最大径が大きい球形の体部を呈した甕と推定される。口縁部は「く」の字状に短く屈曲し、器壁は比較的薄い。体部の調整は外面にハケメが僅かに認められるが、内面はナデ・オサエ<sup>④</sup>で仕上げられる。上村安生氏の分類による甕F類に相当しよう。

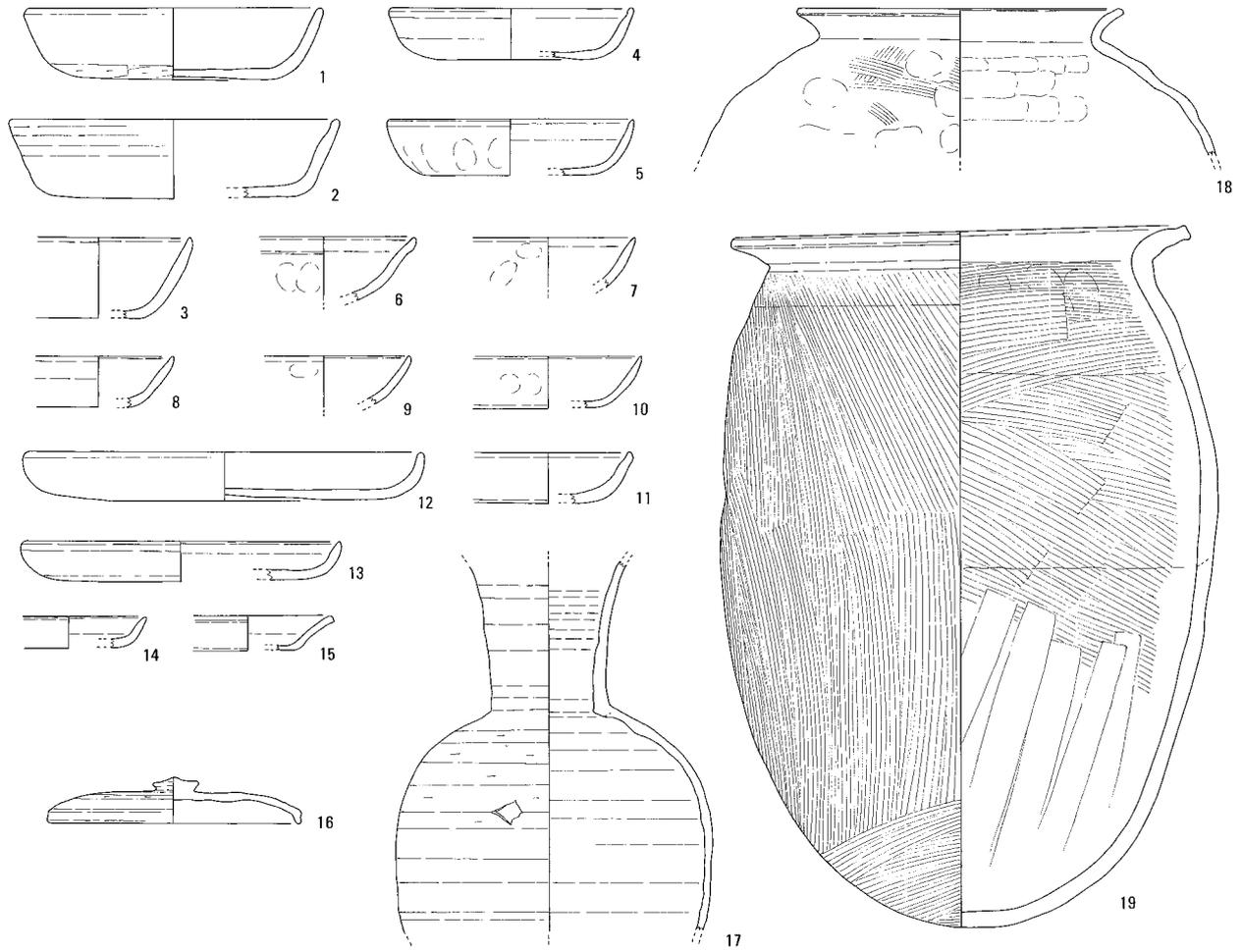
19は土師器長胴甕である。口縁部は「く」の字状に短く屈曲し、端部はヨコナデにより面が形成される。外面は体部が縦方向のハケメ、底部は横方向のハケメが施される。内面は体部上半が横方向のハケメ、底部は縦方向の工具によるナデが施される。上村分類による甕B1類に相当する。

#### ② SZ2 出土遺物（第12図）

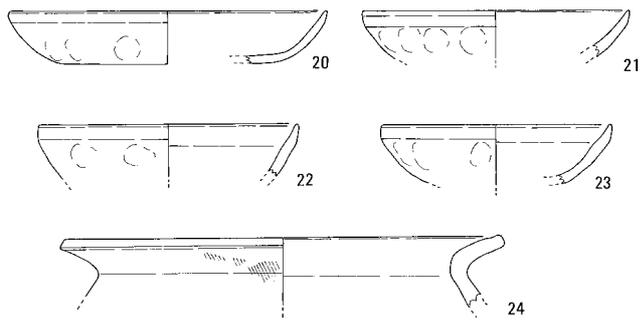
20～23は土師器杯である。口径は12～17cm弱程で、口縁部は直線的に外傾し、端部がヨコナデされる。体部にはユビオサエ痕跡が残存する。いずれも胎土は概ね精良で、にぶい黄橙色を呈する。斎宮編年第II期第3階に相当するか。

24は土師器甕である。口縁部が「く」の字状に屈曲し、端部はヨコナデにより面が形成される。外面には僅かにハケメが認められる。口径が大きく、器

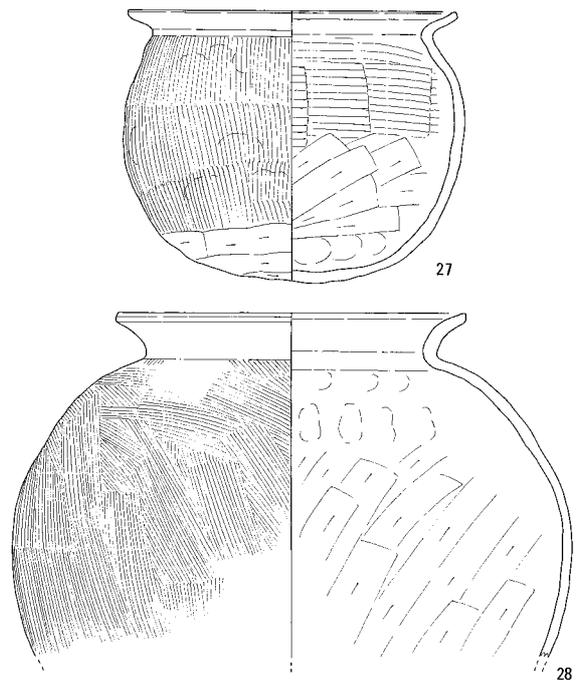
SH1



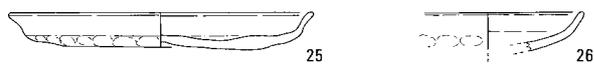
SZ2



SK6



SF3



第12図 長谷町遺跡SH1・SZ2・SF3・SK6出土遺物実測図(1:4)

壁が比較的厚いため、長胴甕の可能性はある。

③ S F 3 出土遺物 (第12図)

25・26は土師器皿である。25は口径16cm、器高2cmで非常に扁平な器形を呈する。底部外面はオサエ・ナデ調整で、口縁部がヨコナデにより外反する。26は残存部僅少のため口径・器高ともに不明であるが、扁平な器形と推定される。底部外面はオサエ・ナデ調整で、口縁部はヨコナデされるが、25ほどは外反せず、直線的に外傾する。これらは斎宮編年第二期第3段階に相当し、9世紀後半代の所産と考えられる。

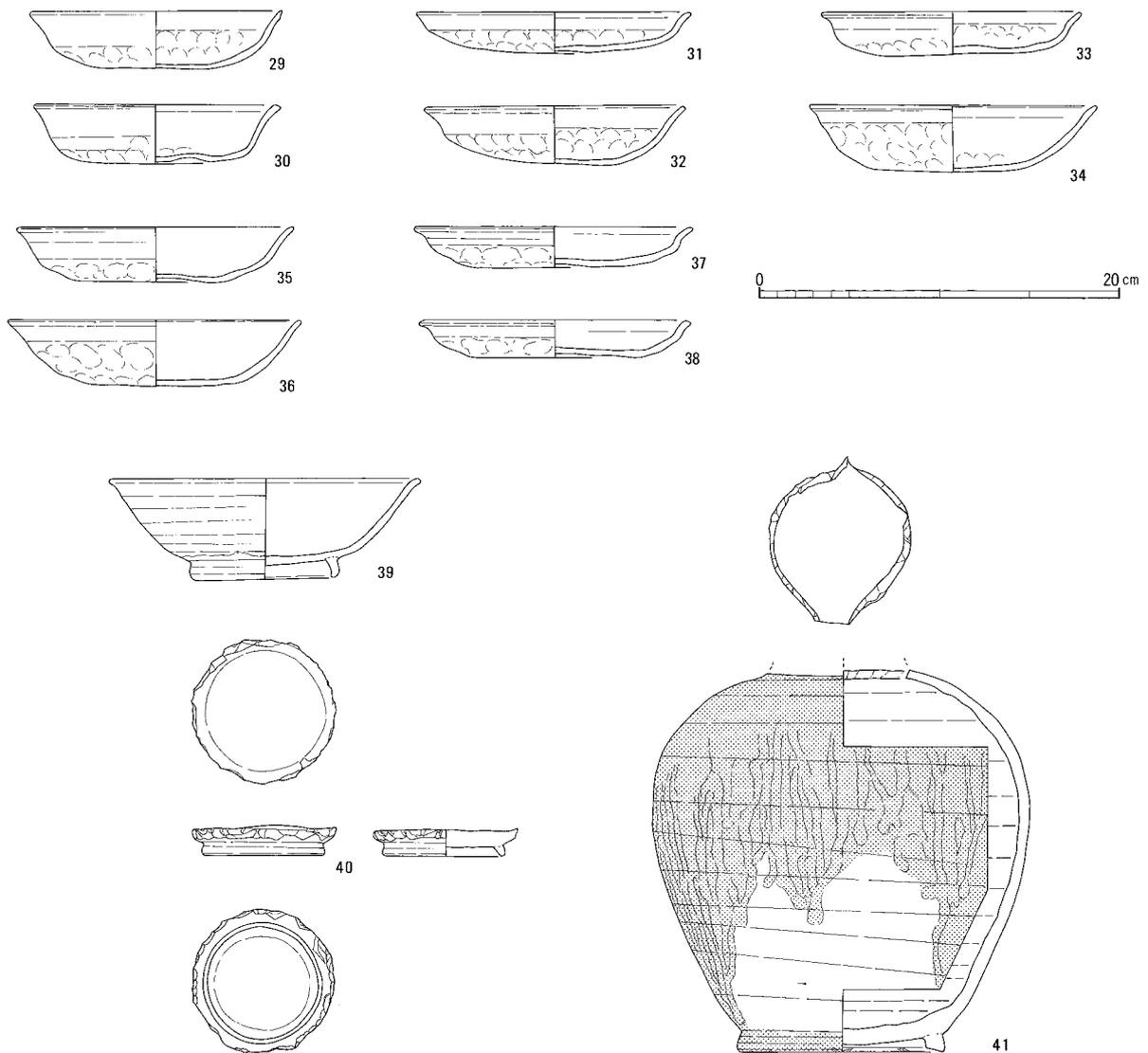
④ S K 6 出土遺物 (第12図)

27・28は土師器甕である。27は口縁部が「く」の字状に短く屈曲し、端部はヨコナデにより面が形成

される。体部は球形を呈し、内外面共に上半がハケメ、下半がヘラケズリで調整される。上村分類による甕A3類に相当する。28は底部が欠損しているが、口径より体部最大径が大きい球形の体部を呈した甕と推定される。口縁部は「く」の字状に短く屈曲し、端部はヨコナデにより面が形成される。体部の調整は外面がハケメ、内面は下半がヘラケズリされる。上村分類による甕F類に相当する。

⑤ S X 5 出土遺物 (第13図)

29・30・32・35は杯、31・33・37・38は皿である。いずれも口縁部の1/2程度までがヨコナデされ、口縁部が大きく外反する。34・36は碗である。いずれも口縁部の1/3程度がヨコナデされ、口縁部は直線的に外傾し、端部がやや外反する。これらは胎土が



第13図 長谷町遺跡 S X 5 出土遺物実測図 (1:4)

精良で橙色もしくははぶい黄橙色の色調を呈する。いずれも概ね斎宮編年第Ⅱ期第3段階に相当し、9世紀後半の所産と考えられる。

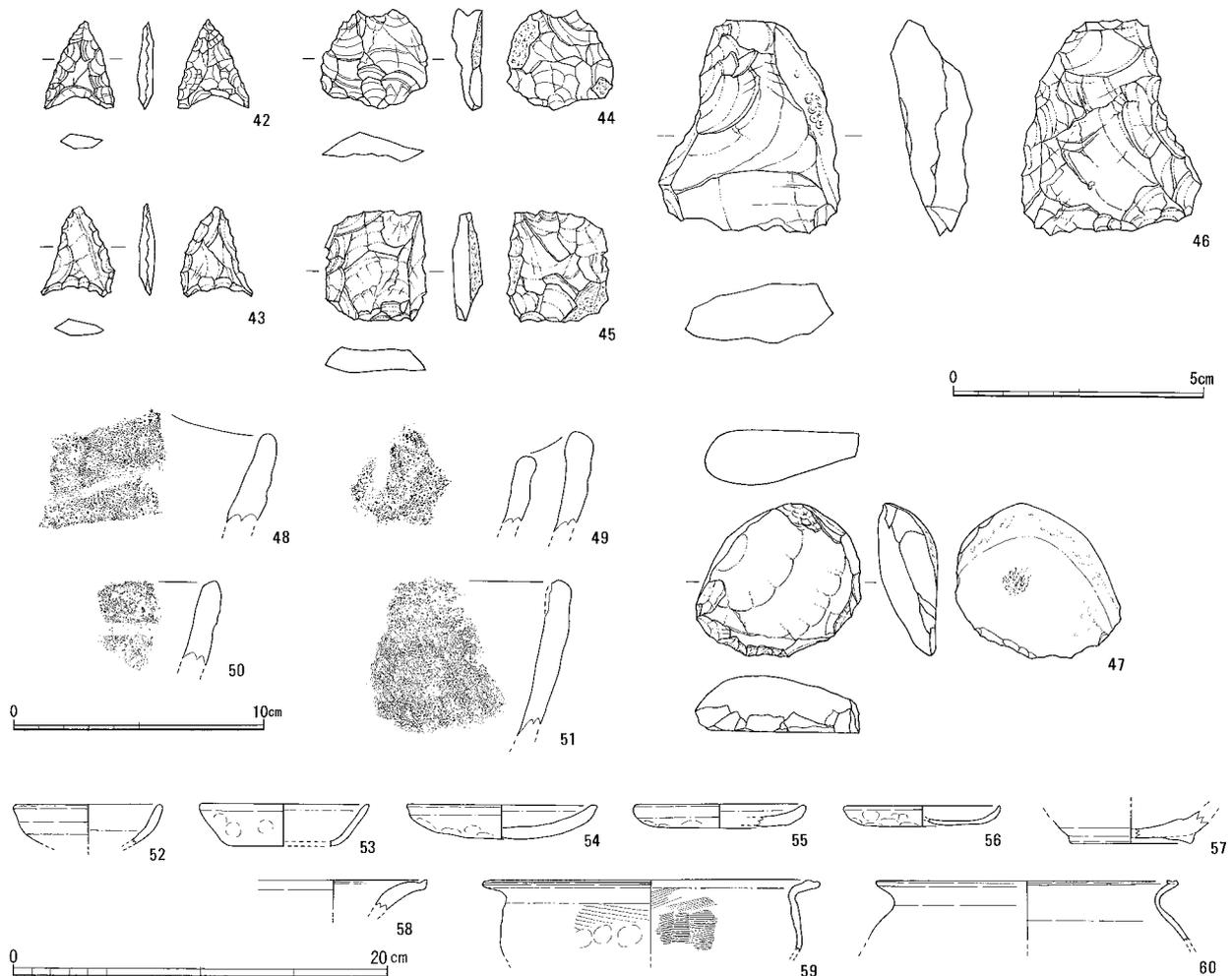
39は灰釉陶器碗である。全体的に器壁は薄く、体部は緩やかに立ち上がり、口縁端部が外反する。口縁部から体部はロクロナデ調整され、八の字形に外へ開き内側下半が内弯して下端が尖り外側下方に稜を作り出す定形化した三日月高台が付加される。灰釉は刷毛塗りにより内外面ともに口縁部から体部にかけて施釉され、底部内面には重ね焼き時の高台接地部を除く範囲にも施釉される。また、口縁部の内外面には部分的に自然釉も認められる。40は加工円盤である。灰釉陶器碗の底部を素材とし、細かく敲打して円形に加工している。高台は断面三日月状を呈すが、やや幅が広く、内側下半の内弯や外側下方の稜は弱い。内面周縁部には灰釉が認められる。これらは、齋藤孝正氏の編年による黒笹90号窯式2～

3型式<sup>⑤</sup>に相当し、9世紀後半～末の所産と考えられる。

41は灰釉陶器長頸瓶である。口頸部は頸部と胴部の接合部付近で打ち欠かれ、40の加工円盤を装填して内部が密閉されるよう打ち欠き部分が細かく敲打・加工される。残存する胴部～底部の器高は21.3cm、胴部最大径は20.8cmである。胴部の調整は内外面ともにロクロナデ、外面はロクロケズリも施される。胴部上半には灰釉が施されるが、上半～底部にかけて釉垂れが顕著である。貼付された径11.4cmの高台は外端部で接地し、接地部には草藁等の植物とみられる圧痕が認められる。猿投窯産と推定され、9世紀末頃の所産<sup>⑥</sup>と考えられる。

### (3) 包含層他出土の遺物(第14図)

42・43は石鏃である。42はチャート製の無茎凹基鏃で、側縁部が直線的に仕上げられる。43はサヌカイト製の無茎凹基鏃で基部の抉りは浅い。側縁部は



第14図 長谷町遺跡包含層他出土遺物実測図 (42～46=2:3、48～51=1:3、47・52～60=1:4)

非対称で仕上がりは粗雑である。

44～46は楔形石器である。44はチャート製、45・46はサヌカイト製で、46の側縁部は敲打によるクラックが認められる。

47は砂岩製の礫器である。礫表の残存する面は平滑で敲打痕が認められる。磨石・敲石からの転用と推定される。

48～51は縄文土器深鉢と考えられる。48・49は波状口縁、50・51は直口縁で、48～50は太めの沈線が施文される。51は無文である。これらは中期末～後期初頭の所産と推定される。

52・53は土師器椀である。52は口縁部の1/2程度がヨコナデされ、内弯気味に立ち上がる。53は平坦な底部から体部～口縁部が直線的に立ち上がり、口縁端部がヨコナデされる。これらは斎宮編年第Ⅱ期第1～2段階（8世紀末～9世紀前半）に相当するか。

54～56は土師器小皿である。54・55の器壁はやや厚く扁平な器形で、口縁端部のみがヨコナデされる。斎宮編年第Ⅲ期第3段階に相当し、11世紀後半の所産と考えられる。

56は器壁が薄く扁平な手捏ねの小皿である。近世の所産か。

57は山茶椀である。底部内面がやや肥厚し、低い高台が付加される。藤澤良祐氏の編年による尾張型第6型式<sup>⑦</sup>に相当し13世紀前半代の所産と考えられる。

58は土師器甕である。口縁部内面がやや肥厚し、端部が摘み上げられ、端部外面に面を持つ。口縁部のみの残存であるが、形態的特徴から飛鳥～奈良時代の所産と推定される。

59は鍋もしくは鉢である。体部下半が欠損しているが、17cm余りの口径に比して器高が低く、扁平な器形と推定される。口縁部は大きく屈曲し、端部内面がやや摘み上げられる。体部は内外面ともにハケメ調整が施される。斎宮編年第Ⅱ期（8世紀末～9世紀後半）の所産か。60は南伊勢系の土師器鍋である。器壁は薄く、口縁端部は折り返され、内面側が尖る。体部の調整は判然としないが、ハケメ調整は認められない。伊藤裕偉氏の編年による第4段階<sup>⑧</sup>に相当し、15世紀後半～16世紀前半の所産と考えられる。  
(小山憲一)

## 【註】

- ①『斎宮跡発掘調査報告Ⅰ 内院地区の調査 本文編』（斎宮歴史博物館 2001年）  
以下、古代の土師器の編年・時期判断等については、上記の文献に拠る。
- ②田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』（平安学園考古学クラブ 1966年）
- ③京都国立博物館・尾野善裕氏のご教示に拠る。
- ④上村安生「伊勢・伊賀における古代土師器煮炊具の様相」（『鍋と甕そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム 1996年）  
以下、古代の土師器甕の分類は上記の文献に拠る。
- ⑤齋藤孝正「猿投窯出土の灰釉・緑釉陶器椀・皿類の変遷」（『日本の美術6 No.409 越州窯青磁と緑釉・灰釉陶器』至文堂 2000年）
- ⑥京都国立博物館・尾野善裕氏のご教示に拠る。
- ⑦藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」（『研究紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター 1994年）
- ⑧伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」（『Mie history』vol. 1 三重歴史文化研究会 1990年）  
伊藤裕偉「伊勢の中世煮沸用土器から東海を見る」（『鍋と甕そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム 1996年）

## 【参考文献】

- ・尾野善裕「猿投窯（系）須恵器編年の再構築」（『須恵器生産の出現から消滅』東海土器研究会 2000年）
- ・植崎彰一『日本の陶磁 古代中世篇2 三彩・緑釉・灰釉』（中央公論社 1976年）

遺物 番号	登録 番号	器 種	出土 地区	出土 遺構	出土 位置	出土 層位	法量 (cm)			調整 (技法) の特徴	胎 土	焼成	色 調	残存度	備 考
							口径	器高	その他						
1	012-02	土師器 杯	E 9	SH 1	S Z 1 sec. I	黄色 土	15.9	3.85	-	外：ヨコナデ・ナデ・ケズリ 内：ヨコナデ・ナデ	やや密 (2mm以 下の砂粒 含む)	並	橙 2.5YR6/8	口縁部 7/12	
2	012-04	土師器 杯	F 9	SH 1	S Z 1 sec. IV	黄色 土	17.6	4.25	-	外：ヨコナデ・ナデ 内：ヨコナデ・ナデ	やや粗 (3mm以 下の砂粒 含む)	並	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部 2/12	
3	007-06	土師器 杯	F 9	SH 1	S Z 1	褐色 土	-	-	-	外：オサエナデ 内：ナデ	やや密	並	橙 7.5YR7/6	口縁部 1/12	
4	012-03	土師器 杯	E 9	SH 1	S Z 1 sec. II畦	-	13.0	2.8	-	外：ヨコナデ・ナデ 内：ヨコナデ・ナデ	やや密 (2mm以 下の砂粒 含む)	並	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部 4/12	
5	006-08	土師器 杯	E 9	SH 1	S Z 1 sec. I	-	13.2	3.0	-	外：オサエナデ 内：オサエナデ	やや密 (2mm以 下の砂粒 含む)	並	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部 2/12	
6	007-10	土師器 杯	F 10	SH 1	S Z 1 sec. III	褐色 土	-	-	-	外：ナデ・オサエナデ 内：ナデ	やや密 (2mm以 下の砂粒 含む)	並	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部 1/12	
7	007-11	土師器 杯	E 9	SH 1	S Z 1 sec. I	黒褐 色土	-	-	-	外：オサエナデ 内：オサエナデ	やや密 (2mm以 下の砂粒 含む)	並	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部 1/12	
8	007-05	土師器 杯	E 9	SH 1	S Z 1 sec. II	褐色 土	-	-	-	外：オサエナデ 内：オサエナデ	やや密 (1mm以 下の砂粒 含む)	並	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部 1/12	
9	007-03	土師器 杯	F 9	SH 1	S Z 1 sec. I畦	褐色 土	-	-	-	外：オサエナデ 内：ナデ	やや密 (2mm以 下の砂粒 含む)	並	外：橙 7.5YR7/6 内：にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部 1/12	
10	007-07	土師器 杯	F 10	SH 1	S Z 1	にぶ い黄 橙 色 土	-	-	-	外：オサエナデ 内：ナデ	やや密 (1mm以 下の砂粒 含む)	並	にぶい黄橙 10YR6/4	口縁部 1/12	
11	007-04	土師器 杯	F 9	SH 1	S Z 1 sec. IV	黄色 土	-	-	-	外：オサエナデ 内：ナデ	やや密	並	橙 5YR6/6	口縁部 1/12	
12	012-01	土師器 皿	E 9	SH 1 Pit 1	S Z 1 Pit 1	黄色 土	21.4	2.65	-	外：ヨコナデ・ナデ 内：ヨコナデ・ナデ	やや密	並	橙 5YR7/8	口縁部 11/12	
13	006-03	土師器 皿	E 9	SH 1	S Z 1	-	17.0	2.1	-	外：ナデ・オサエナデ 内：ナデ・オサエナデ	やや密 (1mm以 下の砂粒 含む)	並	橙 5YR6/6	口縁部 2/12	
14	007-01	土師器 皿	F 9	SH 1	S Z 1 sec. IV	黄色 土	-	-	-	外：オサエナデ 内：オサエナデ	やや密 (1mm以 下の砂粒 含む)	並	明赤褐 5YR5/6	口縁部 1/12	
15	007-02	土師器 皿	E 9	SH 1	S Z 1 sec. I	-	-	-	-	外：オサエナデ 内：オサエナデ	やや密	並	外：にぶい黄橙 10YR7/4 内：橙 7.5YR7/6	口縁部 1/12	
16	012-05	須恵器 杯蓋	F 9	SH 1	S Z 1 sec. IV	黄色 土	13.5	2.5	摘み径 2.4	外：ロクロナデ・ロクロケズリ・ 摘み貼付後ナデ 内：ロクロナデ	やや粗 (2mm以 下の砂粒 含む)	良	灰 N5/0	口縁部 4/12	
17	010-02	灰釉陶器 長頸瓶	E 9	SH 1	S Z 1	にぶ い黄 橙 色 土	-	-	頸部径 6.4	外：ロクロナデ・ロクロケズリ 内：ロクロナデ	密 (1mm 以下の砂 粒含む)	良	にぶい黄橙 10YR7/2・7/3	頸部～ 体部片	・体部穿孔？ ・頸部に自然釉
18	006-02	土師器 甕	E 9	SH 1	S Z 1 sec. I	-	17.4	-	-	外：ヨコナデ・オサエナデ・ハ ケメ 内：ヨコナデ・オサエナデ	やや密 (2mm以 下の砂粒 含む)	並	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部 1/12	

第3表 長谷町遺跡出土遺物観察表①

遺物 番号	登録 番号	器 種	出土 地区	出土 遺構	出土 位置	出土 層位	法量 (cm)			調整 (技法) の特徴	胎 土	焼成	色 調	残存度	備 考
							口径	器高	その他						
19	013-01	土師器 長胴甕	E 9	SH 1	S Z 1 sec. I	黄色土	24.4	37.9	-	外：ヨコナデ・ハケメ (10本/3cm) 内：ヨコナデ・オサエ・ハケメ (10本/3cm)・工具ナデ・ナデ	密	並	橙 7.5YR7/6	口縁部 5/12	・外面煤付着
20	006-04	土師器 杯	F10	S Z 2	S Z 2	にぶい黄 橙色土	16.6	2.8	-	外：ヨコナデ・オサエナデ 内：ヨコナデ・ナデ	やや密 (2mm以下 の砂粒含む)	並	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部 1/12	
21	006-05	土師器 杯	F10	S Z 2	S Z 2	にぶい黄 橙色粘質土	14.0	-	-	外：ナデ・オサエナデ 内：ナデ	やや密 (3mm以下 の砂粒含む)	並	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部 2/12	
22	006-07	土師器 杯	F10	S Z 2	S Z 2	にぶい黄 橙色粘質土	13.6	-	-	外：ヨコナデ・オサエナデ 内：ヨコナデ・ナデ	やや密 (1mm以下 の砂粒含む)	並	にぶい橙 7.5YR6/4	口縁部 1/12	
23	007-09	土師器 杯	F10	S Z 2	S Z 2	にぶい黄 橙色土	12.1	-	-	外：ヨコナデ・オサエナデ 内：ヨコナデ・ナデ	やや密 (2mm以下 の砂粒含む)	並	外：橙 7.5YR6/6 内：にぶい黄橙 10YR6/4	口縁部 2/12	
24	006-01	土師器 甕	F10	S Z 2	S Z 2	にぶい黄 橙色土	23.2	-	-	外：ヨコナデ・ハケメ 内：ヨコナデ・オサエナデ	やや密 (4mm以下 の砂粒含む)	並	外：にぶい黄橙 10YR6/3 内：にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部 1/12	
25	003-03	土師器 皿	G 地区	S F 3	範囲確 認調査 坑No.1 上半部	焼土 坑 上面	16.0	2.0	-	外：ヨコナデ・オサエ 内：ヨコナデ・ナデ	並 (0.5mm 以下の砂 粒含む)	並	橙 7.5YR7/6	口縁部 11/12	
26	008-01	土師器 皿	F11	S F 3	S K 3	第1層	-	-	-	外：ヨコナデ・オサエナデ 内：ヨコナデ・オサエナデ	やや密	並	にぶい橙 5YR7/4	口縁部 1/12	
27	010-01	土師器 甕	E 9	S K 6	S K 6 No.6	-	17.2	14.4	-	外：ヨコナデ・ハケメ (4本/1cm)・ケズリ・オサエ 内：ヨコナデ・ハケメ (10本/3.5cm)・ケズリ・オサエ	やや密 (2mm以下 の砂粒含む)	並	橙 7.5YR6/6	口縁部 12/12	
28	011-01	土師器 甕	E 9	S K 6	S K 6 焼土 No.5	-	18.2	-	-	外：ヨコナデ・ハケメ (6本/1cm)・オサエ 内：ヨコナデ・オサエナデ・ケズリ	やや密 (3mm以下 の砂粒含む)	並	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部 6/12	
29	004-01	土師器 杯	E 9	S X 5	S X 5 No.1 上	-	14.0	3.25	-	外：ヨコナデ・オサエナデ 内：ヨコナデ・オサエナデ	やや密 (0.5mm 以下の砂 粒含む)	並	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁部 8/12	
30	004-02	土師器 杯	E 9	S X 5	S X 5 No.2 下	-	13.6	3.3	-	外：ヨコナデ・オサエナデ 内：ヨコナデ・オサエナデ	やや密 (0.5mm 以下の砂 粒含む)	並	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁部 10/12	・外面底部黒変
31	004-03	土師器 皿	E 9	S X 5	S X 5 No.3 上	-	15.1	2.3	-	外：ヨコナデ・オサエナデ 内：ヨコナデ・オサエナデ	やや密 (0.5mm 以下の砂 粒含む)	並	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁部 11/12	
32	004-04	土師器 杯	E 9	S X 5	S X 5 No.4 下	-	14.5	3.2	-	外：ヨコナデ・オサエナデ 内：ヨコナデ・オサエナデ	やや密 (0.5mm 以下の砂 粒含む)	並	橙 7.5YR7/6	口縁部 11/12	
33	004-05	土師器 皿	E 9	S X 5	S X 5 No.5 上	-	14.3	2.45	-	外：ヨコナデ・オサエナデ 内：ヨコナデ・オサエナデ	やや密 (1mm以下 の砂粒含む)	並	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁部 10/12	
34	004-06	土師器 椀	E 9	S X 5	S X 5 No.6 下	-	15.9	3.8	-	外：ヨコナデ・オサエナデ 内：ヨコナデ・オサエナデ	やや密 (1mm以下 の砂粒含む)	並	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁部 9/12	
35	005-01	土師器 杯	E 9	S X 5	S X 5 No.7 上	-	15.0 ~ 15.4	2.8 ~ 3.75	-	外：ヨコナデ・オサエナデ 内：ヨコナデ・オサエナデ	密 (2mm 以下の砂 粒含む)	並	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部 10/12	・歪み有り
36	005-02	土師器 椀	E 9	S X 5	S X 5 No.8 下	-	16.2	3.7	-	外：ヨコナデ・オサエナデ 内：ヨコナデ・オサエナデ	密 (1.5mm 以下の砂 粒含む)	並	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部 11/12	

第4表 長谷町遺跡出土遺物観察表②

遺物 番号	登録 番号	器 種	出土 地区	出土 遺構	出土 位置	出土 層位	法量 (cm)			調整 (技法) の特徴	胎 土	焼成	色 調	残存度	備 考
							口径	器高	その他						
37	005-03	土師器 皿	E 9	S X 5	S X 5 No. 9 上	-	15.3	2.3	-	外：ヨコナデ・オサエナデ 内：ヨコナデ・ナデ	密 (1mm 以下の砂 粒含む)	並	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁部 10/12	
38	005-04	土師器 皿	E 9	S X 5	S X 5 No. 10 下	-	15.0	2.0	-	外：ヨコナデ・ナデ 内：ヨコナデ・オサエナデ	密 (1.5mm 以下の砂 粒含む)	並	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁部 11/12	
39	014-01	灰釉陶器 椀	E 9	S X 5	S X 5	-	17.3	5.7	高台径 8.3	外：ロクロナデ・高台貼付後ナ デ・施釉 内：ロクロナデ・施釉	密	良	素地：灰白 2.5Y8/1 釉：にぶい黄橙 10YR7/4	完存	・蔵骨器外蓋
40	014-02	加工円盤	E 9	S X 5	S X 5	-	-	-	高台径 6.7	外：ロクロナデ・高台貼付後ナ デ 内：ロクロナデ・施釉	密 (1mm 以下の砂 粒含む)	良	素地：浅黄 2.5Y7/3 釉：暗オリーブ 5Y4/4	高台部 12/12	・蔵骨器内蓋 ・灰釉陶器椀高 台部 ・側面打ち欠き
41	015-01	灰釉陶器 長頸瓶	E 9	S X 5	S X 5	-	-	-	体部径 20.8 高台径 11.4	外：ロクロナデ・ロクロズリ・ 高台貼付後ナデ・施釉 内：ロクロナデ・オサエ	密	良	素地：灰白 N8/0 釉：暗オリーブ 5Y4/4	体部 12/12 高台部 12/12	・蔵骨器 ・口頸部打ち欠 き
42	009-06	石鏡	E 9	S H 1	S Z 1	赤橙 色土	全長 1.8	全幅 1.4	全厚 0.3	-	-	-	-	完存	・重量0.6g ・チャート
43	009-05	石鏡	E 9	S X 5	S X 5	-	全長 1.8	全幅 1.4	全厚 0.3	-	-	-	-	完存	・重量0.7g ・サスカイト
44	009-02	楔形石器	F13	包含 層	黄灰 色砂 質土	包含 層	全長 2.0	全幅 2.1	全厚 0.6	-	-	-	-	完存	・重量2.2g ・チャート
45	009-03	楔形石器	F13	包含 層	黄灰 色砂 質土	包含 層	全長 2.2	全幅 2.0	全厚 0.6	-	-	-	-	ほぼ 完存	・重量3.3g ・サスカイト
46	009-04	楔形石器	F12	包含 層	にぶ い黄 橙色 土	包含 層	全長 4.3	全幅 3.6	全厚 1.6	-	-	-	-	ほぼ 完存	・重量21.8g ・サスカイト
47	009-01	礫器	F11	包含 層	にぶ い黄 橙色 土	包含 層	全長 8.2	全幅 8.7	全厚 3.1	-	-	-	-	ほぼ 完存	・重量228g ・砂岩 ・敲石からの転 用か
48	001-01	縄文土器 深鉢	G 地区	範囲 確認 調査 坑	No.1	-	-	-	-	外：ヨコナデ・ナデ・沈線 内：ヨコナデ・ナデ	やや粗 (3mm以 下の砂粒 含む)	並	外：灰黄 2.5Y6/2 内：灰黄 2.5Y7/2	口縁部 小片	
49	001-02	縄文土器 深鉢	G 地区	範囲 確認 調査 坑	No.1	-	-	-	-	外：ヨコナデ・ナデ・沈線 内：ヨコナデ・ナデ	粗 (2.5mm 以下の砂 粒含む)	並	灰白 2.5Y7/1	口縁部 小片	
50	003-04	縄文土器 深鉢	G 地区	範囲 確認 調査 坑	No.1 下半 部	-	-	-	-	外：ナデ・沈線 内：ナデ	粗 (3mm 以下の砂 粒含む)	並	外：灰 N6/0 内：灰白 2.5Y8/1	口縁部 小片	・風化著しい
51	003-05	縄文土器 深鉢	G 地区	範囲 確認 調査 坑	No.1 上半 部	-	-	-	-	外：ヨコナデ・ミガキ 内：ヨコナデ・ナデ	粗 (3mm 以下の砂 粒含む)	並	にぶい黄橙 10YR7/2	口縁部 小片	
52	001-10	土師器 椀	G 地区	範囲 確認 調査 坑	No.1	-	7.6	-	-	外：ヨコナデ・ナデ 内：ヨコナデ・ナデ	やや密 (1mm以 下の砂粒 含む)	並	外：橙 5YR6/8 内：黄橙 7.5YR7/8	口縁部 3/12	
53	001-06	土師器 椀	G 地区	範囲 確認 調査 坑	No.1	-	8.9	2.2	-	外：ヨコナデ・オサエナデ 内：ヨコナデ・ナデ	やや密 (2mm以 下の砂粒 含む)	並	灰白 5Y7/2	口縁部 1/12	・口縁部に煤付 着
54	001-04	土師器 小皿	G 地区	範囲 確認 調査 坑	No.1	-	8.0	1.8	-	外：ヨコナデ・オサエナデ 内：ヨコナデ・ナデ	やや密 (2mm以 下の砂粒 含む)	並	外：淡黄 2.5Y8/3 内：灰白 5Y8/1	口縁部 3/12	

第5表 長谷町遺跡出土遺物観察表③

遺物 番号	登録 番号	器 種	出土 地区	出土 遺構	出土 位置	出土 層位	法量 (cm)			調整 (技法) の特徴	胎 土	焼成	色 調	残存度	備 考
							口径	器高	その他						
55	001-07	土師器 小皿	G 地区	範囲 確認 調査 坑	No.1	-	8.9	1.2	-	外：ヨコナデ・オサエナデ 内：ヨコナデ・ナデ	やや密 (2mm以 下の砂粒 含む)	並	灰黄 2.5Y6/2	口縁部 3/12	・内外面煤付着
56	001-05	土師器 小皿	G 地区	範囲 確認 調査 坑	No.1	-	8.3	1.1	-	外：オサエナデ 内：ナデ	やや密 (1mm以 下の砂粒 含む)	並	灰白 5Y8/1	口縁部 4/12	
57	008-06	山茶椀	C12	範囲 確認 調査 坑	No.2	-	-	-	高台径 6.6	外：ロクロナデ・高台貼付後ナ デ 内：ロクロナデ	密	良	灰白 N7/0	高台部 3/12	
58	008-04	土師器 甕	F13	範囲 確認 調査 坑	-	埋土	-	-	-	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ・ハケメ?	やや密	並	淡黄 2.5Y8/3	口縁部 1/12	
59	001-03	土師器 鍋か鉢	G 地区	範囲 確認 調査 坑	No.1	-	17.2	-	-	外：ヨコナデ・沈線・ハケメ (4本/1cm)・オサエ 内：ヨコナデ・ハケメ (13本/ 1cm)	密	並	灰黄 2.5Y7/2	口縁部 2/12	
60	008-05	土師器 甕	-	-	調査 区南 西谷	埋土	16.0	-	-	外：ヨコナデ・ナデ 内：ヨコナデ・ナデ	やや密	並	淡赤橙 2.5YR7/4	口縁部 2/12	・口縁部歪みあり

【凡 例】

- ・遺物番号：挿図掲載番号を示す。
- ・登録番号：実測段階の登録番号を示す。
- ・出土地区：4m方眼の小地区または範囲確認調査の調査坑設定地区を示す。
- ・出土遺構：報告書の遺構番号等を示す。
- ・出土位置：現地調査段階の遺構番号・出土位置等を示す。
- ・出土層位：現地調査段階の出土層位等を示す。
- ・色 調：『新版標準土色帖』1998年度版による。複数の色調が存在する場合は併記した。
- ・残 存 度：当該部位を12分割した際の残存度を示し、残存部僅少の場合は「小片」と表記した。

第6表 長谷町遺跡出土遺物観察表④

## 第3節 結語

### (1) 調査成果の概要

今回の調査では、東方へ派生する低位丘陵尾根の標高30～34m程度の緩斜面で奈良時代の竪穴住居1棟、平安時代の火葬墓1基、焼土坑1基、時期不明の土坑等を確認した。調査区西側の平坦面は、開発行為による削平地であり、また、確認した遺構のほとんどは南斜面で検出された。出土遺物としては、検出遺構に伴う奈良～平安時代の遺物の他、包含層等から縄文時代及び中世～近世の遺物が僅かながら出土している。

長谷町遺跡の調査成果としては、平安時代前期に位置付けられる火葬墓S X 5が特筆される。平安時代の火葬墓としては、三重県内では11例目であるが、これまでに確認された当該期火葬墓は、開発工事や開墾作業中の不時発見も多く、詳細不明なものが多い。長谷町遺跡で確認された火葬墓は、発掘調査の過程で発見され、遺存状況が良好な遺構・遺物により埋葬状況が詳細に把握できた稀少な事例である。ここでは調査によって得られた資料を整理し、火葬墓S X 5について以下に考察を行いたい。

### (2) 火葬墓S X 5について

#### ① 遺構・遺物の状況

確認された遺構・遺物については第1節・第2節で詳述したが、ここでは改めて遺構・遺物について以下に整理する。

墓壇の平面形態：隅丸方形

墓壇の規模：一辺約0.8m・深さ約0.25m

墓壇の主軸：N12°E

出土遺物：蔵骨器（火葬人骨）・供献品・木炭

蔵骨器の構造

本体：口頸部を打ち欠いた灰釉陶器長頸瓶

中蓋：灰釉陶器椀の底部（高台部分）を利用した加工円盤

外蓋：完形の灰釉陶器椀

供献品：合口にした土師器杯皿類5組

造墓過程

墓壇の掘削→墓壇底部への木炭充填→蔵骨器の安置→蔵骨器を木炭で被覆→墓壇を八分程度まで埋め戻す→墓壇上面に供献品を配置→墓壇を完全に埋め戻す

番号	遺跡名	所在地	立地	発見の契機	備考
1	椎山中世墓23号	鈴鹿市加佐登町字椎山	台地斜面	発掘調査	中世墓に再利用
2	椎山中世墓34号	鈴鹿市加佐登町字椎山	台地斜面	発掘調査	中世墓に再利用
3	下之庄東方遺跡	松阪市嬉野下之庄町	台地上	発掘調査	註⑳文献では四反畑遺跡
4	上ノ広遺跡	松阪市広瀬町上ノ広	丘陵上	発掘調査	
5	天王山遺跡	松阪市豊原町天王	丘陵	土取り中に発見	
6	長谷町遺跡	多気郡明和町池村	丘陵斜面	発掘調査	
7	和部古墓	志摩市阿児町国府字和部	丘陵斜面	開墾中に発見	
8	珍敷古墓	志摩市阿児町国府字珍敷	丘陵斜面	県道改修中に発見	
9	城山古墓	志摩市大王町波切	不明	不明	
10	白早稲遺跡1号	名張市瀬古口	丘陵上	発掘調査	
11	白早稲遺跡2号	名張市瀬古口	丘陵上	発掘調査	

第7表 三重県内平安時代火葬墓一覧表（註㉑・㉒・㉓文献より抽出して作成）

蔵骨器の埋納を目的とした墓壇は、主軸が東へ12度ほど振っているが、方形の各辺をほぼ東西南北に揃え、方位を意識して構築したと推定される。墓壇上面の様相については、盛土や墓標等の設置も想定できるが、重複したSH1の埋土の土層観察からも判然とせず、確認はできなかった。墓標については木製等の有機質のものが設置されていた可能性も想定される。

墓壇に埋納された蔵骨器は、口頸部を打ち欠いた灰釉陶器長頸瓶に火葬骨を納め、灰釉陶器碗の底部を加工した加工円盤を中蓋として長頸瓶の打ち欠いた部分に装填して密閉し、その上部に完形の灰釉陶器碗を伏せて外蓋としている。古代の火葬墓で使用されている蔵骨器には様々な種類・形態・材質があり多岐に及ぶが、長谷町遺跡で出土した蔵骨器は9世紀末頃の猿投窯産とみられる灰釉陶器が使用されている。蔵骨器の構造についても千差万別であるが、蔵骨器本体に碗を伏せて蓋とする事例はよくあるものの、さらに灰釉陶器碗底部を加工して中蓋としたような事例は管見の限り確認できない。本体である長頸瓶の打ち欠き部分と中蓋とされた灰釉陶器碗はともに非常に細かく丁寧に敲打・加工され、密着するよう調整されており、火葬骨を厳重に封入するよう最大限の配慮がなされていると言えよう。

墓壇内で検出された木炭は、墓壇底部にも敷き詰められており、蔵骨器を完全に被覆している。当該の木炭の樹種同定を行った結果、コナラ属アカガシ亜属・スダジイ・ツブラジイの3種が同定された。これらの樹種は周囲で入手可能な樹種と推定され、また、硬く焼き締まっているものが多く、木炭として製炭している可能性が指摘されている<sup>①</sup>。蔵骨器を被覆する木炭は蔵骨器の保護や除湿・浄化等の配慮と考えられ、同様の事例は少なくないが、灰混じりの粗雑なものを使用している場合も多い。当火葬墓で使用された木炭は灰がほとんど混じらない「切り炭」のような木炭であり、被覆状況も「木炭槨」と呼んでいいような状況である<sup>②</sup>。蔵骨器の保護についても最大限の配慮がなされていると言えよう。

供献品と考えられる5組の合口杯皿類は、蔵骨器とそれを被覆した木炭を土で埋めた後の上部に据え置かれていた。墓壇内に杯皿類を埋納するという行

為については全国的に類例があるが、合口の杯皿類が埋納された類例は管見の限り少なく、鹿児島県吉田町牧遺跡や福岡県大迫遺跡等で確認されている。鹿児島県吉田町牧遺跡では墓壇床面に据えられた須恵器の蔵骨器の周囲で6組の合口の土師器杯が確認されている<sup>③</sup>。福岡県大迫遺跡では火葬墓73基と火葬土壇19基が検出され、その内の23号火葬墓と37号火葬墓で墓壇内から合口の土師器杯が5組出土している。両火葬墓はともに中央部に1組の杯を置き、これを囲むように墓壇の四隅に4組の杯が配置されており、墓壇内の四方を強く意識した儀礼的な色彩が感じられる事例と評価されている<sup>④</sup>。福岡県大迫遺跡のような墓壇内の四隅を意識した杯の配置事例として鹿児島県白樺野火葬墓がある。ここでは墓壇中央部に蔵骨器が納められ、墓壇の四隅に単体の土師器杯が4個体正立の状態に配置されており、祭祀域と他の場所に境域を設け邪の侵入を防ぐことを意図した陰陽道関係の結界の方式を用いた祭祀行為を示していると評価されている<sup>⑤</sup>。長谷町遺跡SX5で出土した5組の土師器杯皿類は、蔵骨器を埋納する最終段階に蔵骨器を中心として東側に2組、南側に2組、西側に1組が配置されており、北側には配置されていない。福岡県大迫遺跡や鹿児島県白樺野火葬墓では墓壇内底部の四隅を意識して配置された儀礼的なものと解釈されているが、長谷町遺跡の杯皿類の配置はこれらとは違い、やはり供献的なものと推定される。なお、杯皿類の配置が空白となっている北側には有機質の供献品が据え置かれていた可能性もあり、蔵骨器の周囲を供献品で囲んでいたとも想定される。次に、この5組の杯皿類の内容物についてであるが、先述のように中からは土しか検出されていない。しかしながら、出土状況から内部に何かが納められていた可能性が高く、出土組数から「五穀」が想定されたため、植物珪酸体分析を行ったが、残念ながら穀物等の痕跡は確認されなかった。従って、内容物については不明と言わざるを得ない。

その他、出土遺物で特筆されるものとして、蔵骨器内部から出土した炭化材が挙げられる。樹種同定の結果、ケヤキと同定されたが、この炭化材は蔵骨器内に遺存していた火葬骨に混入していたものであり、蔵骨器は中蓋によって内部が密閉されていたこ

とから、外部からの混入ではないことは確実である。従って、この炭化材の由来としては、遺体を収めた木棺の一部あるいは遺体火葬時の燃料材が想定される。蔵骨器を被覆した木炭や火葬墓周辺で検出されたSF3・SK7出土の炭化材とは全く異なる樹種であり、これらが周囲から得られる木材であると推定されていることから、蔵骨器内で検出された炭化材は火葬墓が営まれた場所以外で採取された木材である蓋然性が高い。また、ケヤキは家具・建具等の指物や日本家屋の建築用材としても古くから多用され、神社仏閣などにも用いられていたことから、当該の炭化材は遺体火葬時の燃料材よりも遺体を収めた木棺の一部の可能性が高いと思われる。

## ②周辺遺構との関係

**SH1・SK6との関係** SH1は、現地調査の段階ではSZ1（性格不明遺構）としていた。SZ1は緩斜面を削平して平坦面を形成しているが、火葬墓SX5はこのSZ1のほぼ中央部に位置しており、両者の位置関係からSZ1はSX5に付随する遺構の可能性が疑われた。即ち平坦面を造成した後に火葬墓が造墓された事例が確認されている<sup>⑦</sup>ことから、SZ1がSX5に付随するものであるならば、SZ1の作出する平坦面は「墓域」として設定されたものである可能性が認められた<sup>⑧</sup>。また、SZ1内で検出されたSK6では倒立した土師器甕が出土しているが、蔵骨器を倒立させた火葬墓の事例もある<sup>⑨</sup>ことから、複数の火葬墓の存在も想定された。現地調査の段階では前述のような可能性を想定していたが、その後の検討により、SZ1・SK6は火葬墓SX5とは関連しない異時期の竪穴住居跡とこれに伴うカマド痕跡と推定するに至った。このような結論に至った根拠は以下の通りである。

- ・SZ1の床面付近（埋土2層目黄色土層中）で8世紀中葉～後葉の遺物（土師器杯・皿、須恵器杯蓋）が出土しており、火葬墓SX5の造墓時期と時間的な隔りがある。

- ・SZ1の奥壁部に位置するSK6では倒立した土師器甕が出土しているが、付近では焼土とともに破砕した土師器甕や長胴甕が出土していることから、当遺構は崩壊したカマドと想定できる。

- ・蔵骨器の可能性が想定されたSK6の倒立した土

師器甕には骨片や灰・炭・焼土等の内容物が全く無かったため、蔵骨器を想定する根拠に欠ける。

以上のことから、SZ1は平安時代前期に位置付けられる火葬墓SX5に先行する奈良時代の竪穴住居SH1と推定した。両者の出土遺物が示す時期差は概ね1世紀（100年）あるが、おそらくは奈良時代に構築された竪穴住居が廃絶した後、100年程度の時を経た9世紀末頃に竪穴住居が埋没した跡地に火葬墓が造墓されたと想定される。ただし、今回の報告では前述のように結論付けたが、未だ疑問が残る部分もある。それは、SH1とSX5の位置関係が偶然の産物によるものか否か、また、SH1が竪穴住居であるとすれば、丘陵地帯の奥部に住居が単独で営まれた目的やその性格とは如何様のものなのか、等である。前者については遺構の検出段階から両者の関係を強く疑ったものの、先に示した根拠から両者を関連付けるのは困難である。従って、現状では住居と火葬墓の双方の構築に適した南面する緩斜面の同一地点に両者が偶然構築されたと推定せざるを得ない。推測ではあるが、火葬墓の造営地として選地された場所に、竪穴住居の埋没が不完全で窪地状を呈した部分があり、そこが造墓場所として利用されたとも考えられる。後者については、当遺跡の北東約200mに位置する斎宮池遺跡で同時期の単独の可能性のある住居跡が確認されており、良好に遺存していたカマド内で支脚に転用されたと考えられる倒立した土師器甕が出土している<sup>⑩</sup>ことから、当丘陵地帯の奥部に単独の住居若しくは極めて小規模な集落が点在している可能性がある。ただし、このような住居や集落の性格について現状では判断する術がないため、今後類例が蓄積されるのを待ちたい。

最後に、SH1の出土遺物について若干言及したい。SH1出土として取り上げた遺物の中には9世紀後半代のもが含まれているが、これらは取り上げ時に出土層位の峻別を怠ったものの、SH1埋土上層（埋土1層目灰黄褐色土層）出土と考えられ、住居埋没後の火葬墓造墓時に由来するものと考えられる。中でも口縁部と底部が欠損し、体部穿孔の可能性のある灰釉陶器長頸瓶は破砕した状態で出土しており、墓前祭祀的な行為があった可能性が想定される遺物と言えよう。

**SF3・SK7との関係** SF3・SK7は、現地調査の段階から火葬墓SX5との関係が疑われた遺構である。ここではこれらの性格を考察するため、各遺構の概要を以下に改めて整理する。

【SF3】

平面形態：隅丸方形

規模：一辺約0.8m・深さ約0.25m

主軸：N49°E

埋土：3層からなる埋土の第2層に大量の炭化材と焼土粒が混入

出土遺物：土師器皿（完形1個体）・土師器片等

SF3は平面形態や規模が火葬墓SX5の墓壙と酷似しているため、両者の関係が強く疑われる。また、壁面の先端15cm程度が帯状に強く被熱・焼土化し、埋土に大量の炭化材と焼土粒が混入している状況から、何らかの目的で燃焼行為が行われていたことは明らかである。土坑壁面の被熱状況や埋土の堆積状況、埋土上面で完形の土師器皿が出土している状況から、土坑掘削後に底部が埋め戻され、その埋め戻し土の上面で燃焼作業が行われた後、最終的には完全に埋め戻されたと推定される。土坑掘削後に底部を中程まで埋め戻すという行為は、乾燥した土を投入し、燃焼作業に不都合な土坑底部の湿気の除湿を意図したものと想定される。SX5は蔵骨器の埋納を目的としたものであるが、この火葬墓との関係が強く疑われる焼土坑SF3の性格として想定されるものを以下に提示し、可能性を検証していきたい。なお、埋土第2層については分析試料を採取していなかったため、各種分析は行っていない。従って、以下の考察に援用している分析結果は、考察に援用するには不十分な分析結果ではあるが、第3層出土の分析試料は第2層からの貫入と考えられるため、これの分析結果を中心に援用している。

A 遺体の火葬（火化）遺構

火葬墓SX5は蔵骨器の埋納を目的としたものであり、今回の調査では遺体を茶毘に付した火葬跡は確認されていない。従って、確実に燃焼行為が行われていたSF3を火葬跡と想定することは可能である。しかしながら、SF3の規模を考えると遺体の火葬を想定するにはやや無理がある<sup>⑩</sup>。例えば木棺を木組み等の台の上に載せ、火の回りを良くするため

に一段下がったSF3で燃焼したとも考えられなくはないが、これは単なる想像でしかない。仮にそのような火葬方法を採用したならば、SF3の周囲にも何らかの痕跡が残されるはずであるが、全く認められなかった。また、埋土の篩いがけ後残留物の微細物分析の結果、骨片や木棺の残骸等、全く検出できなかったことや、蔵骨器内で検出された遺体を収めた木棺の一部あるいは遺体火葬時の燃料材が想定される炭化材と当遺構出土炭化材の樹種が合わないことから、SF3が遺体を茶毘に付した火葬跡であるとは考えにくい。

B 祭祀遺構

火葬に関わる祭祀遺構という想定である。SF3では埋土の上面で完形の土師器皿が正立の状態出土していることから、燃焼行為を行った後に埋め戻され、土師器皿が上面に据え置かれたと推定される。この土師器皿にはSX5の合口土師器杯皿類で想定されたような有機質等の供献品が入れられていたとも想定されるため、儀礼的な意味合いで据え置かれた可能性もある。ただし、SF3を仮に祭祀遺構と想定しても、祭祀の内容については想定困難であり、燃焼行為そのものに祭祀的な意味があるのか、燃焼させる対象に意味があるのか等、現状では推定するための術がない。調査で得られた資料に、埋土篩いがけ後の残留物として検出された後代の混入の可能性が高い植物片・種子・木片及び炭化材、土器片があるが、この内の炭化材は常緑広葉樹のアカガシ亜属、シャシャンボ、スダジイ、針葉樹のイヌガヤの4種類の樹種と同定され、周囲で入手可能な木材を利用したと推定されている。これらの木材を利用し、SF3の坑内で燃焼行為が行われたことは事実であるが、祭祀行為を裏付ける根拠に欠けるため、祭祀遺構と推定するのは困難である。また、坑内から出土した土器片はいずれも小片で、意図的に埋納されたものとは考えられず、埋土上面で出土した土師器皿以外に祭祀に関連付けられる遺物はない。従って、「火葬に関わる祭祀遺構」は単なる想像の域を超えない。

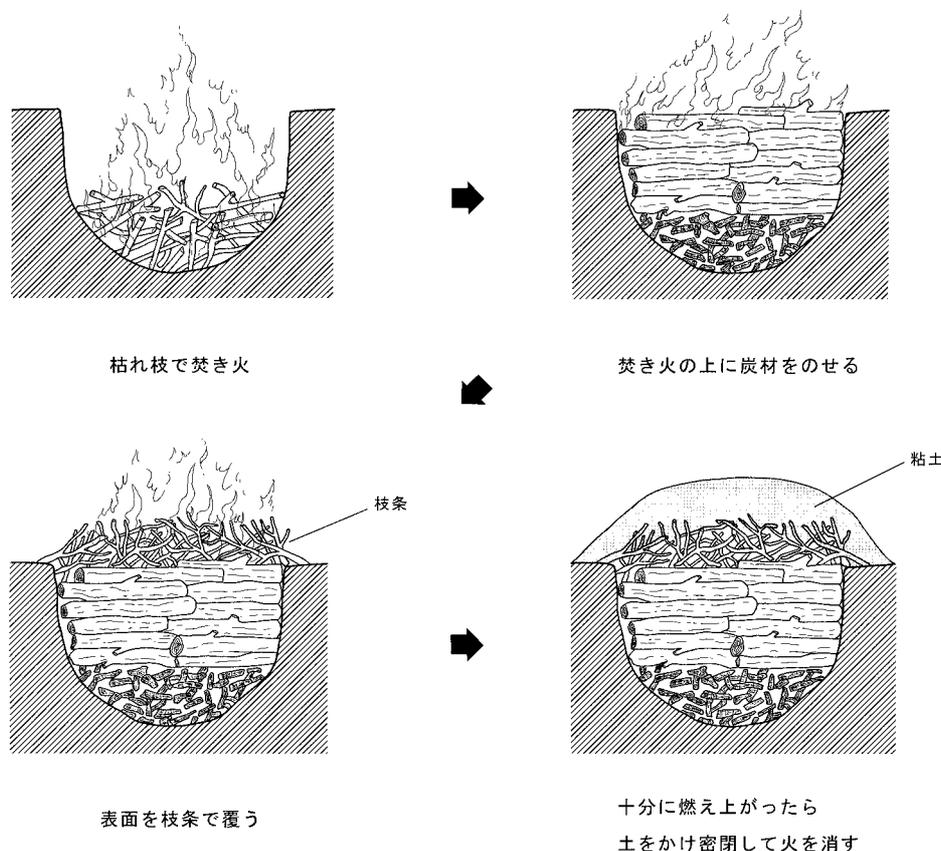
C 蔵骨器を被覆した木炭の製炭土坑

火葬墓SX5の埋葬状況から、蔵骨器を被覆した多量の木炭を製作した製炭土坑の想定が可能である。

この想定を検証に有効なのは蔵骨器を被覆した木炭とSF3出土炭化材の樹種の比較であり、以下に比較・検討を行いたい。当該炭化材の樹種については分析の結果、SX5が常緑広葉樹のシイ属（ツブラジイ・スダジイ）とアカガシ亜属と同定され、一方のSF3については常緑広葉樹のアカガシ亜属、スダジイ、シャシャンボ、針葉樹のイヌガヤと同定されている。分析報告では「種類構成がSX5と異なることを考慮すると、少なくともSX5の蔵骨器周囲の木炭を焼成した際の残渣とは考えにくい」との否定的な見解が示されている。しかしながら、木炭の製炭には「木炭にする材」と製炭作業に必要な「燃料材」が必要と考えられることから、樹種が一致しているアカガシ亜属・スダジイが「木炭にする材」で、シャシャンボ・イヌガヤが「燃料材」と考えることはできないであろうか。SX5出土の蔵骨器被覆炭化材は全点を樹種同定していないが、出土位置に偏りがないようピックアップしており、樹種としてはシイ属（ツブラジイ・スダジイ）とアカガシ亜属とほぼ特定してよいと考える。SF3で検出さ

れたアカガシ亜属・スダジイは本来「木炭にする材」として製炭されたものの、破損等によりSF3の坑内に残されたと考えれば、矛盾はないと思われる。齊藤勝氏は、現在知られている様々な製炭方法を紹介する中で、最も原始的な方法として坑内法と堆積法からなる伏せ焼法を図示されている<sup>⑬</sup>。この内の坑内法はSF3を製炭土坑と想定する際に参考となるものである。齊藤氏は坑内法での製炭の手順を、「土坑底部において枯れ枝で焚き火を行う→その上に炭材をのせる→表面（炭材の上面＝土坑上面）を枝条で覆う→十分に燃え上がったら土をかけ密閉して火を消す」としており、ここに示された焚き火を行う枯れ枝（および表面を覆う枝条）にシャシャンボ・イヌガヤを、炭材にシイ属（ツブラジイ・スダジイ）とアカガシ亜属をそれぞれ当てはめれば、前述の想定は十分成立するのではないだろうか。また、木立雅朗氏は、古代の土師器焼成坑を検討する中で、古代の製炭土坑について以下のように言及されている<sup>⑭</sup>。

・基本的に製炭土坑では床面は赤色焼土化しない。



第15図 坑内法による製炭方法（註⑬文献掲載図を一部改変して作図）

・製炭土坑では低い温度を保ち燃やし尽くさないため、タールや炭素が土坑に吸着する。

・炭窯では多量の木炭や炭層が確認されるが、これは多量に生産された木炭のうち、細かく割れて採集できない破片、もしくは粉状の炭が利用価値のないものとして放置されることが多いからである。

さらに、望月精司氏は同じく古代の土師器焼成坑の検討の中で、製炭土坑について以下のように言及されている<sup>⑮</sup>。

・製炭土坑は、主に壁面の上方に被熱痕跡があるもので、床面は炭化材や炭層が存在するだけで被熱は確認されない。

・燃焼する材は木炭として製品化する木材であり、それが燃焼しきるまえに土とかを被せて、蒸し焼きにするものである。

・製炭土坑において床面が被熱されない理由については、下層に細かな炭化材を敷いたりして木材が燃焼しやすくすることもあがるが、木材に十分な燃焼が及ぶまで開放状態で焼き（覆い天井のあるものは床面も焼ける）、炎や熱は上方へと向かうため、そこに壁面被熱の原因があると考えられる。

・壁面被熱を顕著とした点については、原料木材が土坑上面まで高く積み重ねられていた可能性を考えたく、製炭土坑の土坑形態が壁面直立の竪穴状を呈し、燃焼する木材と壁が直に接することも大きく関連しているものと予想する。

・土坑の壁面形態と比較的開放状態での燃焼が、製炭土坑の壁面被熱を生んだものとする。

これらの両氏の指摘をもとにSF3を検討すると、土坑壁面の被熱状況や炭化材のあり方に一致する点が多い。従って、SF3がSX5の蔵骨器を被覆した木炭の製炭土坑である可能性は否定できず、想定として成立するものと考えられる。SF3が製炭土坑であった場合、ここで製炭されたであろう木炭の体積とSX5出土の木炭の体積は、両遺構の平面形態・規模・深さの比較から推定すると、ほぼ同程度の水準と考えられるため、製炭土坑としての想定を裏付ける傍証になろう。当遺構は燃焼作業の後、完全に埋め戻され、埋土上面に土師器皿が据え置かれている。蔵骨器を被覆する木炭は蔵骨器の保護や除湿・浄化等の配慮と考えられているが、その製作跡

として丁寧に埋め戻し、跡地に儀礼的な意味合いで土師器皿が据え置かれたのではないだろうか。また、納骨を行う墓壇と同様の規格で土坑が掘削された背景には、遺骨の保護・清浄のために墓壇に納めるものを製作するという葬送儀礼上の規制があったのかも知れない。

以上のように、焼土坑SF3の性格として想定される「遺体の火葬（火化）遺構」、「祭祀遺構」、「蔵骨器を被覆した木炭の製炭土坑」について検証を行った。その結果、断定はできないが「蔵骨器を被覆した木炭の製炭土坑」の可能性が最も高いとの結論に達した。SX5出土の木炭は、自然科学分析の所見においても木炭として製炭している可能性が指摘されており、また、当該の樹種も遺跡周辺で得られる樹種であることが推定されていることから、現状では製炭土坑が最も蓋然性が高いと言えよう<sup>⑯</sup>。

#### 【SK7】

平面形態：隅丸長方形

規模：約1.8m×1m・深さ約0.35m

主軸：N90°E

埋土：3層からなる埋土の第2層に炭化材が多量に混入

出土遺物：土師器小片のみ

SK7はSF3とは平面形態や規模が異なり、被熱痕跡も認められなかったが、埋土に多量の炭化材が混入していたため、燃焼行為が行われた可能性がある。なお、当遺構は時期を特定できる遺物が出土していないため、第2層出土炭化材を放射性炭素年代測定にかけた結果、7世紀後半～9世紀前半の測定結果が得られたため、SK3よりも若干先行する時期に構築・使用された遺構の可能性があると推定されているが、ここでは火葬墓SX5と同時期の遺構と仮定し、両者の関係を想定・検証していきたい。

#### A 遺体の火葬（火化）遺構

前述の通り、今回の調査では遺体を茶毘に付した火葬跡は確認されていない。従って、燃焼行為が行われていた可能性のあるSK7を火葬跡と想定することは可能である。遺体を収納した木棺を燃焼させるのに適当な平面形態や規模でもあり、その面では想定は成立するが、埋土の篩いがけ後残留物の微細物分析の結果、骨片や木棺の残骸等、全く検出でき

なかったことや、蔵骨器内で検出された遺体を収めた木棺の一部あるいは遺体火葬時の燃料材が想定される炭化材と当遺構出土炭化材の樹種が合わないことから、SK7が遺体を茶毘に付した火葬跡であるとは評価し難い。

## B 祭祀遺構

火葬に関わる祭祀遺構という想定である。主軸が東西の正方位であるため、方位を意識して構築された可能性は高い。ただし、SK7ではSF3のような意図的に据え置かれた遺物はなく、埋土から土師器の小片が少量出土したに過ぎないため、出土遺物からは祭祀的な性格は読み取れない。その他SF3との比較から、3層からなる埋土の中間層に多量の炭化材が混入することは類似するが、SF3のような明瞭な被熱痕跡は認められないため、当遺構内で燃焼行為が行われていない可能性もある。そうであるならば、埋土に混入した多量の炭化材は他所から意図的に持ち込まれ、埋められた可能性も考えられる。このような火葬墓の周辺で検出される灰や炭が埋土に混入する土坑について、小林義孝氏は「火葬灰埋納土坑」と命名し、以下のような性格を想定している<sup>⑧</sup>。

- ・これ自体が火葬墓ではない。
- ・拾骨に際して残った灰や炭を納めたものである。
- ・葬送の儀礼のある時点で設けられたものである。
- ・火葬墓の周囲に配されて墓域の範囲を限るものもある。
- ・銅銭や土器類が意識的に納められることは、空間的にばかりでなく宗教的にも墓域を設定するものであり、買地券にもつうじるものである。

SK7は骨片が全く出土しておらず、埋土の堆積状況からもこれ自体が火葬墓であるとは考えられない。次に、SK7が拾骨に際して残った灰や炭を納めたものか否かは、火葬遺構との比較で明らかとなるだろうが、今回の調査では火葬遺構は検出されていないため不明である。なお、SK7出土炭化材は暖温帯常緑広葉樹林に生育するコナラ属アカガシ亜属を主とした構成であるとの同定結果が得られ、周囲で入手可能な樹種と推定されていることから、仮にSK7を「火葬灰埋納土坑」とするならば、調査区の付近に火葬遺構が存在し、主にコナラ属アカガシ亜属を

燃料材として遺体を茶毘に付したと想定され、SK7は遺体火葬後に行われた何らかの葬送儀礼の中で構築された想定される。しかしながら、この場合も、拾骨に際して残った灰や炭を納めたものであるならば、骨片や木棺の残骸などが混入していても不思議はなく、ほぼ特定の樹種に限定された炭化材だけが検出されている状況からは、前述の想定も成立し難い面がある。

SK7は時期を特定する遺物が出土していないため、関係が疑われる火葬墓SX5と同時期の遺構と仮定して考察を行った。仮に、出土炭化材の放射性炭素年代測定が正しいとすると、SX5と関連する可能性は極めて低くなるため、その場合は堅穴住居SH1との関係を考える必要があるだろう。ここでの考察では、SK7を火葬遺構もしくは祭祀遺構との想定で検討を行ったが、両者とも根拠に欠け、想定は成立し難い。従って、現状では性格不明土坑と言わざるを得ない。

以上のように、火葬墓SX5との関係が疑われたSF3とSK7について検討を行った。両者は出土炭化材の樹種構成に違いが認められることから、その用途や目的が異なる可能性があるとの指摘がなされているが、遺構の規模や形態も異なるため、用途や構築された目的は自ずと異なると言えよう。今回の調査で得られた資料を基に各遺構の性格を想定・検証したが、確定的な結論はならぬことはできなかった。今後、同様の遺構が検出されることを期して、類例が蓄積された際に再度検討を行いたい。

## ③火葬人骨の分析鑑定から得られた知見

今回の調査では、後世の影響をほぼ受けることなく蔵骨器内に密閉状態で遺存していた火葬骨を確認することができた。これは即ち、当時の収骨状況が保持された資料が得られたことを意味する。また、蔵骨器からの取り上げの段階から専門家の関与を得たことで、人骨の適切な取り扱いや情報亡失のリスク回避ができたと考えられる。火葬人骨の分析鑑定結果については、後掲の報告書<sup>⑨</sup>に詳述されているが、ここではその概略を以下に記すこととする。

- ・火葬人骨の焼成方法：約900度以上の高温で焼成されたが、一部に焼成ムラがある。
- ・火葬人骨の火葬方法：白骨化させたものを焼成し

たのではなく、遺体をそのまま焼成した。

- ・火葬人骨の出土部位：わずかずつであるが、全身に及ぶ。
- ・被火葬者の個体数：1 個体。
- ・被火葬者の性別：女性。
- ・被火葬者の死亡年齢：約18歳以上約30歳以下。
- ・被火葬者の生前の身長：不明。
- ・収（拾）骨方法：部分収骨。
- ・収（拾）骨の順番：規則性は認められない。

三重県内では、古代火葬墓出土人骨の詳細な分析鑑定報告はこれまで例がなく、今回、上記のような多くの貴重な情報が得られた。これらの情報は、単に被葬者にかかる情報のみならず、火葬という葬法の一連の手続きの内、遺体の荼毘と遺骨の収骨にかかる情報をも提供している。長谷町遺跡で確認された火葬墓は「納骨」場所であり、火化遺構が確認されていない現状では、納骨以外の火葬手続きの一端を窺い知る重要な情報と考えられる。特に、収骨に関しては、収骨時の作法や分骨の可能性などが報告者の榑崎氏より指摘されており、古代における葬送儀礼を考察する上で、重要な資料と考えられる。

#### ④まとめ

日本における火葬の始まりは、文献史料上、文武4（700）年に行われた僧道昭の火葬とされている。そのわずか2年後には持統天皇が火葬を遺言、その翌年火葬され、続く奈良時代半ば頃までの歴代天皇も率先して火葬を採用した。これに連なる律令官人も火葬を積極的に採用し、以後、奈良時代から平安時代の前半頃にかけて僧侶や官人、中央氏族、地方豪族たちの間に、一種の流行のように拡散していったと考えられている。このように8世紀初頭に始まった火葬は全国に広まり、遅くとも9世紀までには北は秋田県や岩手県、南は鹿児島県にまで広がっている<sup>⑮</sup>。なお、火葬という葬法が始まった近畿地方では、8・9世紀の同地域の墳墓について研究された黒崎直氏によれば、発見された火葬墓例は8世紀後半の時期に最大数をかぞえるが、以降の9世紀代に至るとその数は減少するという。また、黒崎氏は当該期墳墓の動向として、第Ⅰ段階（8世紀初頭～末）を火葬の開始と火葬墓の盛行期、第Ⅱ段階（8世紀末～9世紀中頃）を本来的葬法たる土葬への回

帰時期、第Ⅲ段階（9世紀中頃～10世紀）を薄葬を基調とする土・火葬混在期の3段階の変遷を示されている。また、当遺跡が所在する三重県の所属する伊勢湾岸地域においては、8世紀前葉に始まった火葬墓の造営が8世紀代に最も増加し、その後9～10世紀代においてもやや減少傾向にありながら継続するとされる<sup>⑯</sup>。三重県内については事例が僅少かつ詳細不明なものが多いが、奈良時代～平安時代初頭までのものが多く、平安時代のものが少ない傾向にある<sup>⑰</sup>。当遺跡で確認した火葬墓SX5は、出土した蔵骨器を根拠として造墓時期を9世紀末頃と推定している。造墓時期は蔵骨器の生産年代から伝世期間を考慮する必要があるが、蔵骨器に使用された灰釉陶器長頸瓶には手擦れ等の顕著な摩耗や傷も見あたらないため、伝世期間はそれほど考慮する必要はないものと思われる<sup>⑱</sup>。従って、当遺跡の火葬墓は隣接の近畿・東海地方や県内の動向から見れば火葬の減少期に営まれたものと言えよう。なお、火葬の導入と展開については従前から仏教思想の浸透と関連付けられてきたが、それとは別に、天皇喪葬を範とした官人層<sup>⑲</sup>の影響や薄葬思想の影響<sup>⑳</sup>など様々な要素があり、火葬の拡散の背景は単純ではない。

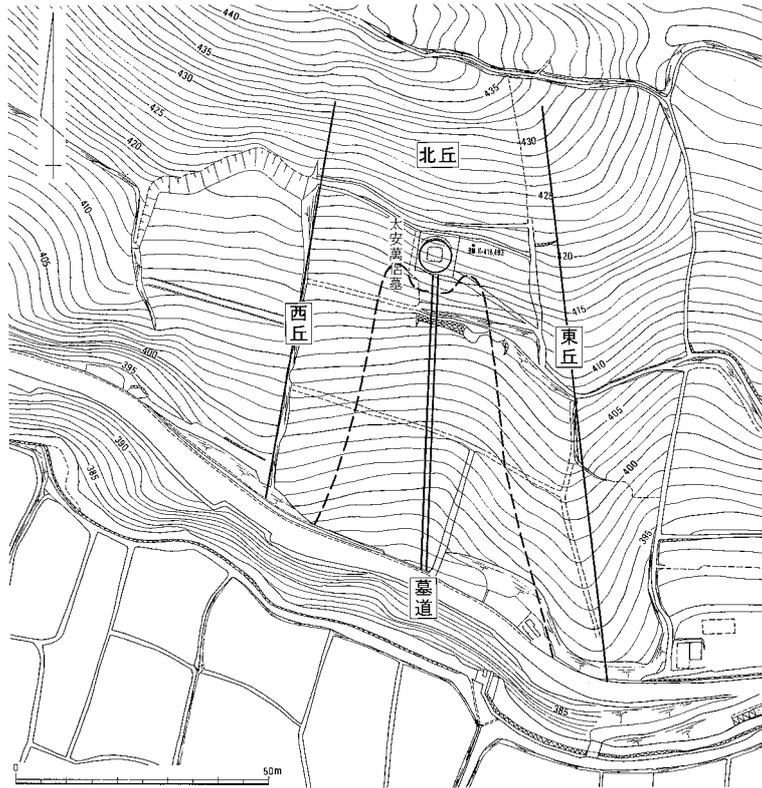
次に火葬墓の立地については、丘陵斜面に単独で発見される場合も少なくないが、地方では卓越した古墳群の近くや官衙、寺院の近辺など、拠点的な場所に群をなして見つかることが多いという<sup>㉑</sup>。県内の確認事例でも寺院遺跡や官衙遺跡等に近接・関連する可能性が指摘されており<sup>㉒</sup>、例えば9世紀初頭と前半に推定されている志摩市の和部古墓、珍敷古墓は志摩国分寺と志摩国府との関連がそれぞれ想定されている<sup>㉓</sup>。当遺跡についても北約4kmにこの地方の当該期の拠点施設の一つである齋宮が所在する。さらに、当遺跡の所在する丘陵地は500基を超える古墳が密集する南勢地域最大の群集墳密集地帯として知られているが、この丘陵地がかつての葬送地であったことを認識した上で、火葬墓の造墓地として選択した可能性がある<sup>㉔</sup>。なお、今回確認した火葬墓は1基であるが、調査区の西側は開発行為による削平地であり、当該範囲に同様の火葬墓が存在した可能性は否定できない。従って当火葬墓が単独で造営されたとは断定できず、複数造営された可能性は残され

る。次に、古代火葬墓は「丘陵東南方の傾斜面上に立地するのが大多数である」という指摘<sup>⑧</sup>があるが、当火葬墓も「丘陵南方の傾斜面上」に立地している。同様の立地環境にある著名な太安萬侶墓の立地について、水野正好氏は「墳墓の前面－南面は浅く凹んだ谷地形となり、左右－東西には僅かに高まりが張り出す尾根があり、東・西の視界を限っている。墳丘の後背は谷地形は消え東西に走る尾根の斜面となり、その丘陵頂が北をかざるものとなっているのである。言葉を換えれば、後背に主丘を負い両脇を小尾根でかざられた空間があり、その中央、谷を登りつめた地に墳墓が築かれているのである。…（中略）…この谷を墓道として、南の川ぞいの道から直折して登ることができるのである。」とし、このような造墓に当たる占地は「風水の思惟に基づいて決定されている」とされている<sup>⑨</sup>。ここで改めて長谷町遺跡火葬墓SX5の立地環境を見てみたい。火葬墓は最高所が標高80m余りの丘陵から東へ派生した尾根の南斜面に位置し、標高33m程の所にある。その東側にはごく狭小な谷を挟んで標高50m余りの小丘陵が所在する。火葬墓の所在する尾根は近年の地形改変により北側が削平されているが、削平以前は標高40m程の尾根であったと考えられる。火葬墓の南側は幅30～40m程の谷が200m程延びた後、平坦地へと開放している。火葬墓の所在する尾根は北側を完全に閉塞してはいないが、南側からこの谷筋に進入すると程なく北を限る小丘陵に対面し、そこを若干登ると火葬墓に辿り着くことになる。従って、長谷町遺跡の火葬墓は水野氏が解釈された太安萬侶墓と同様の立地環境にあると言え、基本的に同じような思想で葬送地を占地していると考えられる（第16・17図）。即ち、当該期に都周辺で行われていた「風水思想」に基づく葬送が長谷町遺跡の火葬墓にも適用されていたと考えられ、そのような知識・情報を心得た者により葬送が執行されたと言えよう。

葬送のあり方は、葬送の執行者の思想や被葬者への想いが反映されると思われる。当火葬墓では蔵骨器内の遺骨を二重蓋で厳重に封入しており、また、大量の木炭で蔵骨器を完全に被覆している。このような埋葬のあり方は遺骨に対する最大限の配慮と考えられ、永い保存の願いが読み取れよう。ところで、

当火葬墓の蔵骨器の本体には典型例である短頸壺ではなく長頸瓶が使用されている。短頸壺は専用の蓋を伴うこともでき、遺骨の封入は容易であったと考えられる。長頸瓶の選択理由については、例えば被葬者の愛用品を使用した可能性や短頸壺自体を持ち合わせていなかった等、様々な理由が想定されるが、全国の灰釉陶器の蔵骨器を集成された吉澤悟氏によれば、「器種を見てみると、短頸壺が全体の6割以上を占めているが、長頸瓶も少なからず使われている。頸部が細長く伸びる長頸瓶は、本来的には骨臓器に適さない形態であるが、実際にはこの頸部を欠き取り、小型壺のようにして使用しているのが大半である。」とし、長頸瓶の蔵骨器への転用例が比較的多い理由として「骨臓器の器種選択性には消費地の流通状況がある程度反映している」としている<sup>⑩</sup>。なお、灰釉陶器は平安時代の高級陶器の一つではあるが、当該期には越州窯系の青磁が流入しており、中央の上位層にとってはこれが最も高級品で、これに比べれば灰釉陶器は普及版の高級陶器という位置付けになる。ただし、青磁の入手が困難であったと考えられる地方では、依然として高級品であったことに変わりはない<sup>⑪</sup>。

最後に、当火葬墓に葬られた被葬者像についてこれまでに判明した調査・分析・鑑定結果を基に若干の考察を行いたい。当該期に火葬墓を営むことができたのは特定階層の人々に限られており、当火葬墓はそのあり方から、火葬の葬法に精通し、灰釉陶器を蔵骨器に使用できるような経済力を持ち、風水や仏教等の知識・思想的背景を持ち合わせたような人物像が想像される。郡司等の官人クラスもしくはそれに連なるような経済力・政治力を持った人物がまず想像されるが、その他、当火葬墓が造墓された9世紀末頃に周辺で前述のような人物像が想定できる対象として斎宮が挙げられる。また、当火葬墓が発見されたのは明和町南部に広がる通称玉城丘陵の南端部付近で、行政上は多気郡明和町池村に属するが、当該地は明和町の南限に当たり、度会郡玉城町上田辺（かみたぬい）に近接している。火葬墓の立地は前述のように南側の度会郡玉城町側に開放されており、当該地は古代から明治維新まで皇大神宮の祢宜職を世襲した荒木田氏の、後に一門・二門に分かれ



第16図 太安萬侶墓の占地



第17図 長谷町遺跡火葬墓の占地

た内の二門の本掘地とされていることから、荒木田氏も想定の対象として挙げられる。さらに、当火葬墓の西方に位置する櫛田川・祓川流域には9世紀前半に東寺領大国荘が成立しており、これに関わった人物も対象として想定されよう。次に被葬者の年齢や性別についてであるが、火葬人骨の鑑定結果から約18歳～30歳の女性と推定されている<sup>34</sup>。被葬者が比較的若い成人女性との鑑定結果が示されているが、これまで鑑定された火葬人骨の統計では、男女比率は3対2程度で女性もかなり多く火葬されており、幼児や小児、熟年、老年層まで幅広い年齢層が確認されているという<sup>35</sup>。従って、女性が火葬墓に埋葬されるのはそれほど特殊な事例ではないようである。なお、被葬者自身が有力者であるとは限らず、有力者の近親女性（妻・母・娘・姉・妹など）である可能性も否定できない。灰釉陶器短頸壺の蔵骨器に女性の火葬骨が検出された事例が少なからず存在し、小児の可能性が高い火葬骨が同じ灰釉陶器短頸壺の蔵骨器から検出されていることから、蔵骨器の質的優劣は被葬者よりもこれを見送る者の立場に関連する可能性も指摘されている<sup>36</sup>。被葬者の出身地については、埋葬地周辺の地元出身者か、この地に赴いた他所出身者かの問題があるが、高屋枚人や威奈大村、小野老などの中央官人が死亡した地方の赴任先から本貫地へ、また逆に、伊福吉部徳足比売のように中央に出仕中に死亡した采女が地方の本貫地へ帰葬されている事例から、この地に赴いた他所出身者が死亡した場合も基本的に本貫地に帰葬されたと考えられる。ただし、他所出身者でもこの地に土着した場合や、本貫地との絆が希薄な場合、あるいは何らかの特別な事情があった場合には帰葬されなかった可能性も考えられ、さらに、分骨の可能性など様々な可能性が想定されるが、現状では埋葬地周辺の地元出身者を想定するのが妥当であろう。

古代の火葬墓には墓誌が埋納され、被葬者が特定されているものもあるが、ほとんどの場合、被葬者は不明で、発見された位置や確認された遺構・遺物から被葬者の推定が試みられている。今回確認した遺構や遺物、立地環境等の考古学的な情報から被葬者像について若干の考察を行ったが、当遺跡で確認した火葬墓も文字資料は出土していないため、具体

的な被葬者は不明と言わざるを得ない。ただし、前述のように灰釉陶器を蔵骨器に使用できるような経済力と、火葬の葬法や風水・仏教等の知識を持ち得た人物もしくはその関係者（あるいは近親者）であることは確かであろう。また、遺存していた火葬人骨の鑑定から性別や概ねの年齢が推定できた点は被葬者の推定に大きく寄与するものである。さらに踏み込んだ被葬者像の追求については、歴史学や文献史学の分野に委ねたい。

今回、古代の火葬墓が非常に良好な遺存状態で発見されたのは、ある意味、幸運であったと言える。古代の火葬墓は丘陵内に単独で営まれる例が多いため、開発行為中に不時発見される場合が多く、その場合は通常、一部が破壊された状態で発見されることになる。今回は火葬墓が発掘調査の過程で発見され、埋葬状況を詳細に把握できたこと、火葬人骨が遺存しておりその分析・鑑定ができたこと、火葬墓に関連する可能性がある遺構が確認されたことなど、古代の葬制を知る上で貴重な成果を得ることができたと言えよう。ただし、三重県内で古代火葬墓がこれほど詳細に把握できた例はこれまで無かったが、それ故に残された課題も少なくない。火葬による葬送について小林義孝氏は「人の死にはじまり、納棺・荼毘・拾骨・納骨などの段階が想定され」、「このうち遺構として確認できるのは荼毘（火化遺構）と納骨（納骨施設＝「火葬墓」）であるが、蔵骨器の中から遺骨とともに出土する遺物の分析により納棺、拾骨のあり方の一部も確認することが可能である」としている。さらに、「火葬の場合、四つの段階に関わる遺構や遺物を総合的に把握することが必要である」としている<sup>37</sup>。今回確認された火葬墓は「納骨」場所であるが、蔵骨器内部で検出された炭化材が遺体を収納した木棺の一部の可能性があり、また、火葬骨の分析・鑑定から遺体の火葬状況や部分拾骨の状況が推定されたことなどから、断片的ながら「納棺」・「荼毘」・「拾骨」の状況が把握できた。ただし、「拾骨」に関しては部分拾骨と推定されているが、その場合、拾骨されなかった火葬骨の行方についての問題が残る。火葬場に留められ、火葬塚が営まれたのか、もしくは分骨されて別の場所に運ばれ埋葬されたのか、あるいは単に火



第18図 長谷町遺跡火葬墓と被葬者想定対象との位置関係図 (1 : 50,000)  
 [国土地理院「松阪」「明野」「国東山」「伊勢」1 : 25,000より]

葬場に残置されたのか、など様々な可能性が想定されるため、今後の課題と言えよう。次に、今回の調査では「茶毘」つまり火葬場が確認されておらず、遺体を茶毘に付した場所は不明である。確証はないが、今回調査区西側の削平地に所在したか、あるいは今回調査区の近隣地、もしくは同一丘陵内に所在する可能性が高いと想定される。一方で、火葬場が付近になく、遠く離れた場所で茶毘に付された可能性も否定できない。その場合はこの地への帰葬を考える必要もあり、被葬者像の想定にも影響が及ぶ問題となろう。なお、火葬による葬送には小林氏が示す四つの段階の各段階で何らかの葬送儀礼があったと想像され、今後同様の火葬墓が発見された場合は、「納骨」場所である墓壇をはじめ、その周囲で検出される遺構についても慎重に検討することが求められよう。

古代の火葬墓はその特性上、一目見てそれと分かる場合の多い古墳に比して、表面観察等による通常の分布調査ではまず発見されない。全国的事例を見ても偶発的な発見例が多く、発掘調査の過程で確認された事例も多くはない。しかしながら、これまでの調査研究から多くの先学が様々な研究成果を提示しており、古代火葬墓の立地・占地の傾向が示されている。今回発見された火葬墓も前述の立地・占地の傾向と一致しており、同一丘陵内に同様の火葬墓が存在する可能性があると言えよう。今後は、これまでの調査研究の成果から古代火葬墓の存在が想定される立地環境に十分注意を払い、発見に努めることが望まれる。(小山憲一)

#### 【註】

- ①後掲の自然科学分析報告「長谷町遺跡の自然科学分析」・「長谷町遺跡から出土した炭化材の樹種」(第Ⅶ章第3節・第4節)に拠る。以下の分析にかかる結果や考察については、上記の分析報告を参照されたい。
- ②奈良国立博物館・吉澤悟氏のご教示による。
- ③「鹿児島県内の蔵骨器について」(『財部城ヶ尾遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター 2005年)
- ④『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告24』(福岡県教育委員会 1992年)
- ⑤宮下貴浩「白檜野古代火葬墓と製鉄遺物」(『鹿児島考古』第34号 鹿児島県考古学会 2007年)

⑥三重大学・山中章教授、奈良国立博物館・吉澤悟氏のご教示による。

⑦福岡県大迫遺跡ではテラス状の平坦面の中央に墓壇が構築されている。前掲註④文献。

⑧皇學館大學・岡田登教授のご教示による。

⑨例えば、茨城県内には蔵骨器を倒立状態で埋納する事例があり、その理由として雨水の浸入を意識したか、あるいは天頂方向を塞ぐ意識の表れと推測され、鉢を被せたり二重に蓋をする行為と通底しているとされている。

(吉澤悟「火葬墓の広がり」と古代の東国社会」(『上高津貝塚ふるさと歴史の広場第11回特別展図録『火葬と古代社会—死をめぐる文化の受容—』上高津貝塚ふるさと歴史の広場 2006年))

⑩本書「第Ⅳ章 斎宮池遺跡」参照。

⑪森本徹氏は近畿地方の群集墳周辺で検出される8世紀代の焼土坑の検討から、焼土坑が火葬に伴う火化遺構の可能性が高いとしながら、焼土坑の規模(事例の検討から長軸0.7~1.2m、短軸0.5~1.0mの範囲にまとまる傾向がある)が木棺を茶毘に付すのに適当な規模かどうか、古墳時代後期末の木棺の法量を参考にする限りでは小規模であり、問題が残される、としている。(森本徹「火葬墓と火葬遺構—群集墳周辺にて確認される「焼土坑」の検討—」(『大阪文化財研究』第2号 財団法人大阪文化財センター 1991年))

⑫後掲の分析報告「長谷町遺跡から出土した炭化材の樹種」に拠る。

⑬斉藤勝「木炭の使い道」(『林産試だより』4号 北海道立林産試験場 1986年)

⑭木立雅朗「第1節 土師器焼成坑を定義するために」(『古代の土師器生産と焼成遺構』窯跡研究会編 真陽社 1997年)

⑮望月精司「第2節 土師器焼成坑の分類」(『古代の土師器生産と焼成遺構』窯跡研究会編 真陽社 1997年)

⑯吉野滋夫氏は飛鳥~平安時代の製鉄関連遺構(製鉄炉・木炭窯・鍛冶炉等)が調査された福島県原町市金沢地区遺跡群で確認された木炭焼成遺構の分類と周辺遺跡の調査例との比較から「壁面もしくは底面に酸化面が認められ、堆積土に木炭層もしくは木炭を多量に含む黒色土が認められるもの」については、類似遺構(墳墓・火葬施設・土師器窯等)の可能性はほとんどなく、坑内製炭法による木炭焼成遺構であるとしている(吉野滋夫「所謂

木炭焼成遺構について」〈『論集しのぶ考古－目黒吉明先生頌寿記念－』しのぶ考古学会 1996年〉)。一方で、香川愼一氏は同じ福島県の浜通り地方で発見された焼土坑の機能として提示されている「木炭焼成土坑」と「火葬所」の2説を、原町市金沢地区・相馬郡新地町武井地区で確認された7世紀後半～10世紀頃の製鉄関連遺跡で検出された焼土坑の分析から、木炭焼成説より火葬所説の方が蓋然性は高いとしている（香川愼一「焼土坑に関する再検証」〈『論集しのぶ考古－目黒吉明先生頌寿記念－』しのぶ考古学会 1996年〉）。焼土坑の機能については、付近で発見された主要遺構に関連付けられることが多い、とも指摘されているが、長谷町遺跡SF3については、三重県内での類例の蓄積を待って再検討が必要である。

- ①小林義孝「灰を納めた土壌」(『究班』埋蔵文化財研究会15周年記念論文集 1992年)
- ②後掲の火葬人骨分析・鑑定報告「長谷町遺跡出土火葬人骨」(第七章 第2節) 参照。
- ③吉澤悟「火葬墓の出現と広がり」(『千葉県の歴史 資料編考古4 (遺跡・遺構・遺物)』千葉県 2004年)
- ④黒崎直「近畿における8・9世紀の墳墓」(『奈良国立文化財研究所学報 第38冊 研究論集VI』奈良国立文化財研究所 1980年)
- ⑤永井邦仁「伊勢湾岸地域における古代の墓」(『墓場の考古学』第13回東海考古学フォーラム実行委員会 2006年)
- ⑥森川幸雄・大川勝宏「三重県の奈良・平安時代の墓制について」(『東日本における奈良・平安時代の墓制』第5回東日本埋蔵文化財研究会 1995年)
- ⑦京都国立博物館・尾野善裕氏のご教示に拠る。蓋に使用された灰釉陶器碗の年代とも齟齬はきたしていない。
- ⑧前掲註⑩文献。
- ⑨前掲註⑪文献・「Ⅲ. 古墳から火葬墓へ」(『大和の考古学』常設展示図録 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1997年)
- ⑩前掲註⑨文献。
- ⑪前掲註⑫文献。
- ⑫故鈴木敏雄・岡田登「皇朝銭出土の志摩郡阿児町の二古墳について」(『皇學館大學史料編纂所報 史料』134号 皇學館大學史料編纂所 1994年)
- ⑬奈良国立博物館・吉澤悟氏のご教示による。

⑭前掲註⑩文献。

⑮水野正好「奈良朝貴紳の墳墓の占地」(『郵政考古紀要』通巻第17冊 大阪郵政考古学会 1984年)。なお、第16図は、下記調査報告書掲載図を基に水野氏論文掲載図を再作成した。

『太安萬侶墓 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第43冊』(奈良県立橿原考古学研究所 1981年)

⑯吉澤悟「茨城県北浦町出土の灰釉短頸壺について」

(『MUSEUM 東京国立博物館研究誌』586号 東京国立博物館 2003年)

⑰京都国立博物館・尾野善裕氏のご教示に拠る。

⑱前掲註⑱。

⑲前掲註⑲文献。

⑳前掲註⑨文献。

㉑小林義孝「古代火葬墓の第一類型(上)－河内田辺古墳の再検討から－」(『大阪文化財研究』第13号 財団法人大阪府文化財調査研究センター 1997年)

#### 【参考文献】

- ・石田茂作監修『新版仏教考古学講座 第7巻 墳墓』(1975年)
- ・西村美幸「玉城丘陵と周辺の群集墳」(『Mie history～特集 三重の群集墳を考える～』vol. 10 三重歴史文化研究会 1999年)
- ・金子延夫『玉城町史 1巻・3巻』(1983年)
- ・『玉城町史 上巻』(玉城町 1995年)
- ・『多気町史 通史』(多気町 1992年)

# 第IV章 齋宮池遺跡

## 第1節 遺構

### (1) 遺跡の位置・地形と基本層序

#### ① 遺跡の位置・地形

齋宮池遺跡は明和町南部に広がる通称玉城丘陵の丘陵内に所在する齋宮池の池敷き東側に位置し、丘陵西側縁辺部の緩斜面上に立地する。行政上の所在地は多気郡明和町池村字真木谷である。

#### ② 基本層序

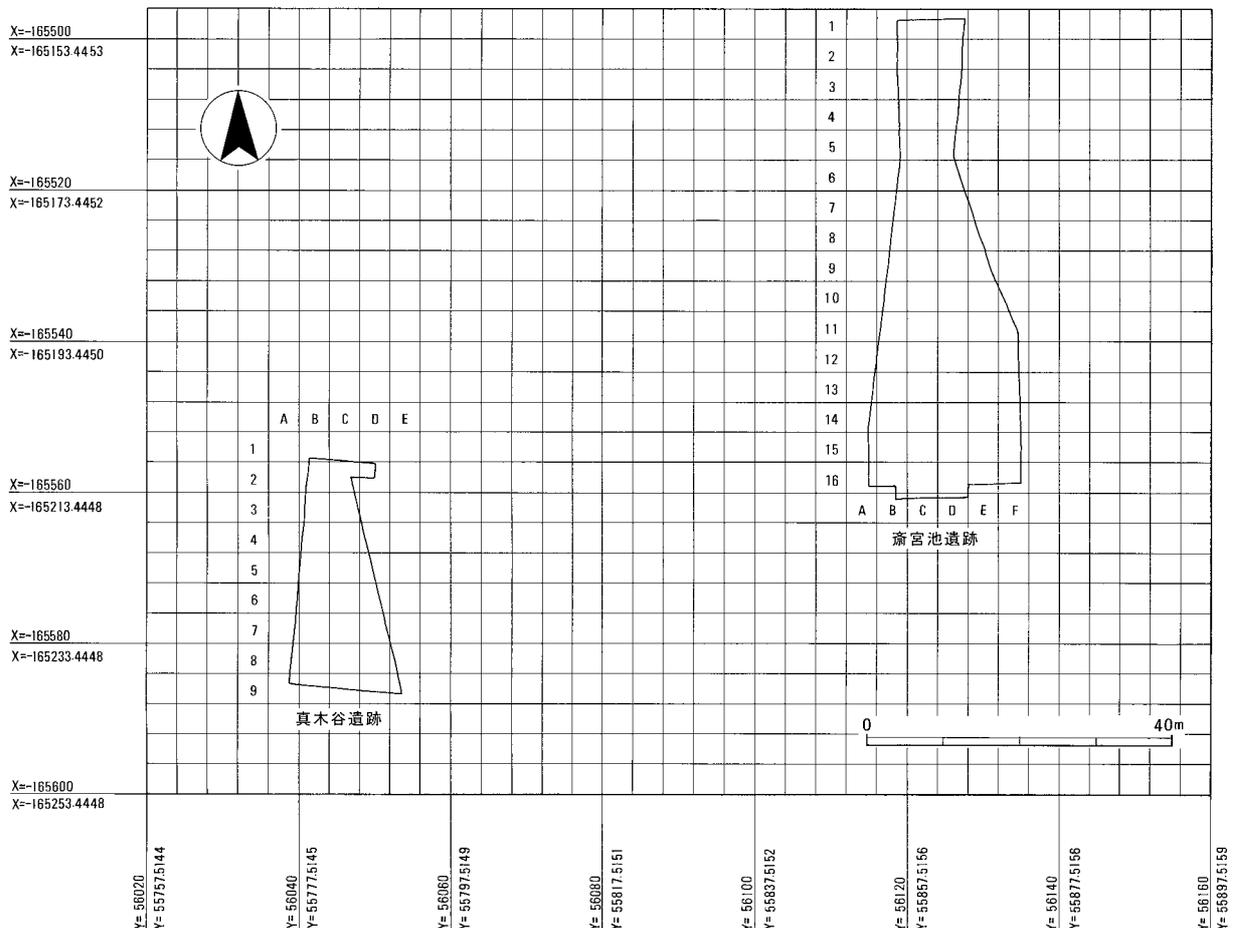
当遺跡は、大半が調整池の池底に常時水没していたことから、貯水の浸食により調査区の北東部や南部は明赤褐色粘質土の地山が表出していた。一方、調査区西端部は急激な落ち込み地形となり、明赤褐色粘質土の地山上に池底に沈殿した土砂が堆積していた。また、調査区南東部の非水没地は、近年の地形改変により丘陵裾部が削平・整地されたため、地表下に1m程度の整地盛土が存在する。調査区の概

ね中央部には黒褐色～暗褐色系粘質土の包含層が地山直上に堆積しており、包含層が地表面に表出している状況であった。従って基本層序としては、整地盛土・包含層・池底堆積土・地山となるが、地形的な条件等により、調査区内の基本層序は位置によってそれぞれ異なる。なお、遺構は地山面で検出した。

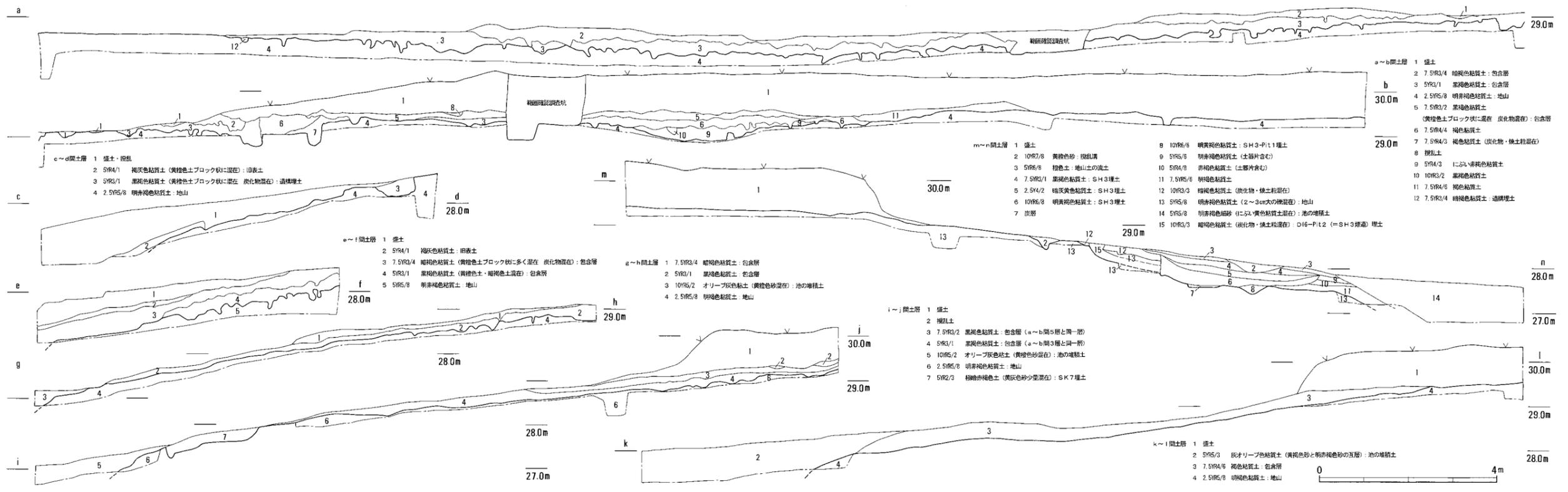
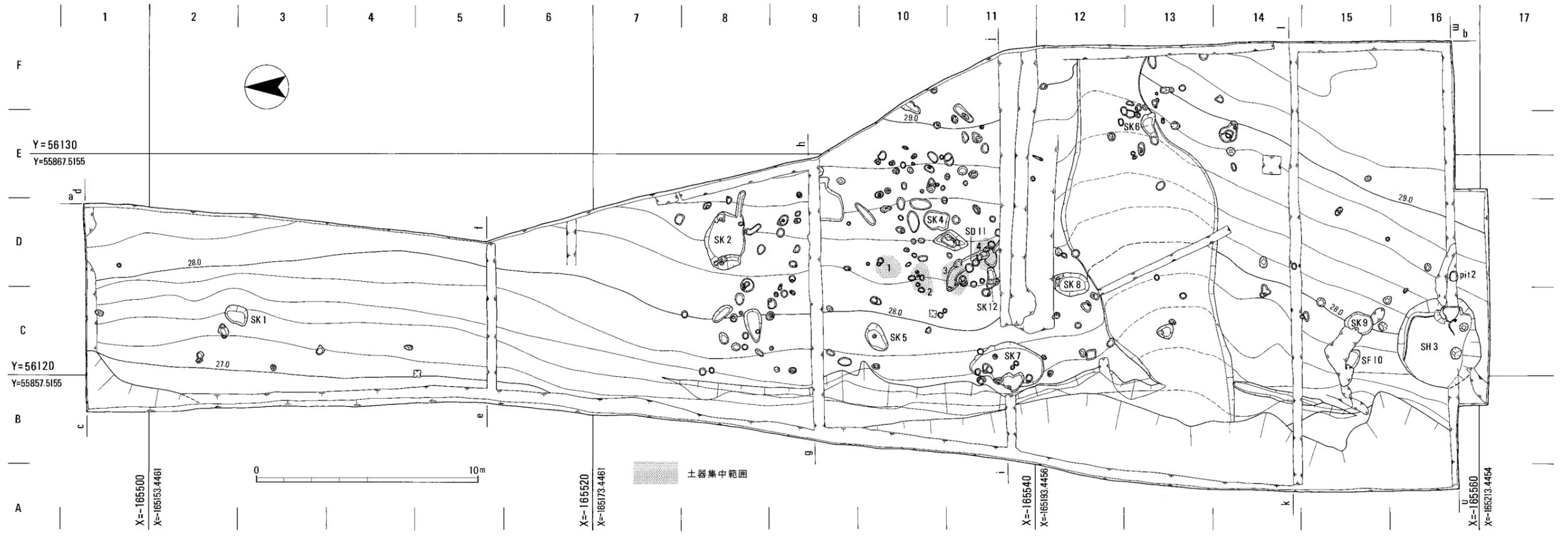
### (2) 検出遺構

#### ① 検出遺構の概要

調査は常時水没していた池敷き範囲と非水没地の一部を対象に行った。調査区東側の平坦面は開発行為による削平地であるが、範囲確認調査の結果、遺跡が一部残存していたため、調査対象とした<sup>①</sup>。調査の結果、縄文時代中期末～後期初頭の土坑等及び奈良時代の竪穴住居・焼土坑を確認したが、調査区の北部ではほとんど遺構が検出されなかった。なお、



第19図 齋宮池遺跡・真木谷遺跡小地区割図 (1:1,000) ※座標値上段: 日本測地系・座標値下段: 世界測地系



第20図 斎宮池遺跡遺構平面図（1：200）・土層断面図（1：100）※座標値上段：日本測地系・座標値下段：世界測地系



確認した遺構の検出地点の標高は約28～29mである。出土遺物の大半は包含層出土のもの、または、貯水の浸食によって表出した包含層由来と考えられる表面採集遺物で、遺構出土のものは少ない。以下、主な遺構について詳述するが、その他の遺構については下記の遺構一覧表を参照されたい。

## ②縄文時代中期末～後期初頭の遺構

**SK 2** 調査区の中央部やや東寄りに位置する。長軸約2.6m、短軸約0.8m、平面形態は不整楕円形を呈するが、東側へ延びる幅約0.3m、長さ約1.3mの溝が付随する。検出面からの深さは約0.16mである。埋土は黒色土1層で、中期末～後期初頭の所産と考えられる縄文土器片（1・2）が出土した。

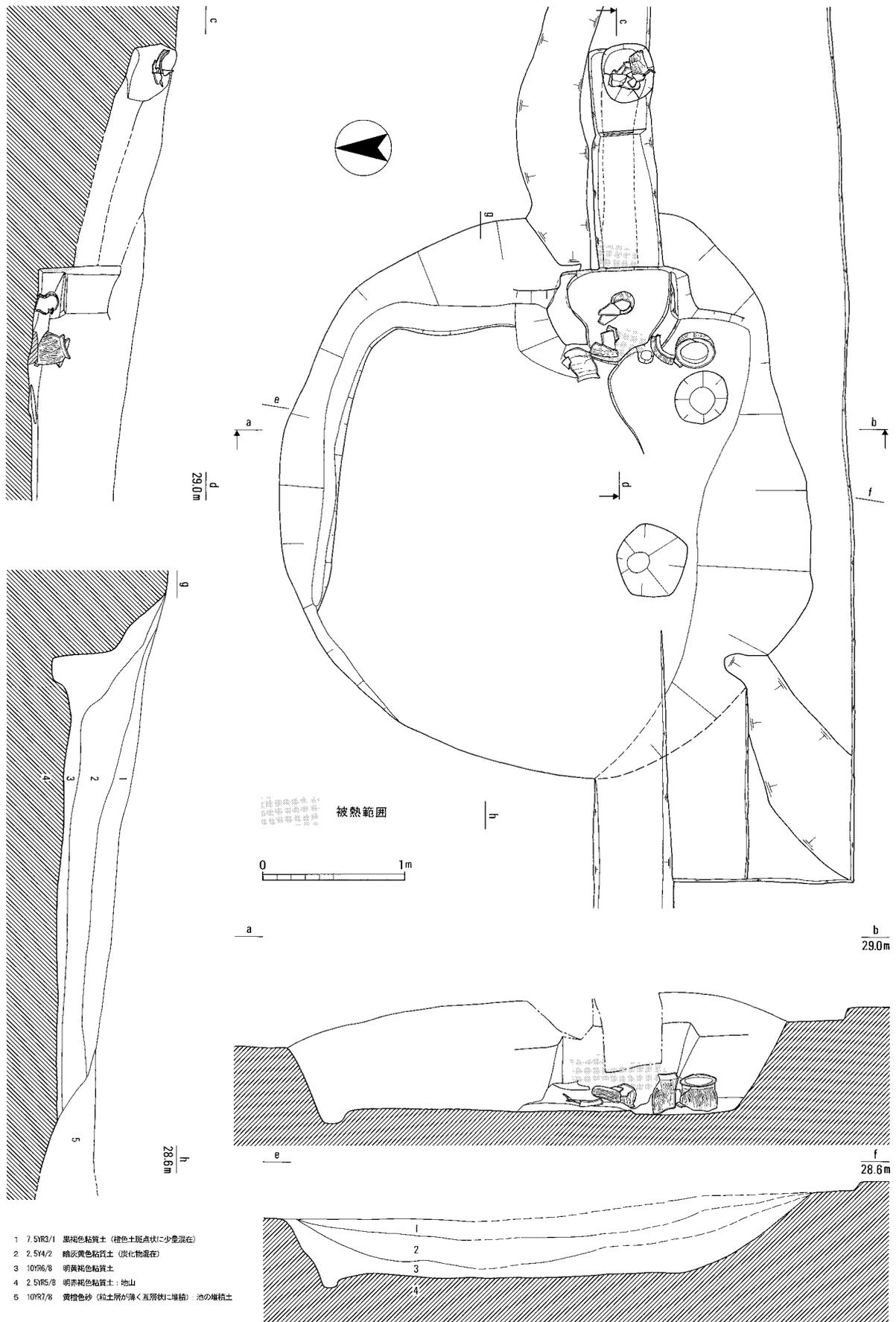
**SK 7** 長軸約3.3m、短軸約2.2m、検出面からの深さが約0.23mの不整楕円形土坑で、埋土は黒色土

1層である。土坑内や周辺には規則性は窺えないものの複数のピットが所在する。当遺構からは中期末の所産と考えられる多数の縄文土器（19～49）や石鏃（406）・楔形石器（508・511）・打欠石錘（427）・敲石（491・492）・磨石（499）の他、チャートやサヌカイトの剥片等が出土したが、大半が埋土の上面付近で出土していることから、埋没時に混入したものと考えられ、遺構機能時のものとは考えにくい。ただし、埋土が1層のため短期間に埋没したと推定されることから、出土遺物の所属時期と遺構の機能時期に大きなずれはないものと思われる。当遺構は性格不明土坑であるが、その規模や平面形態等から竪穴住居の可能性を想定しておきたい。

**SK 8** 調査区の中央部やや南寄りに位置する。長軸約1.6m、短軸約1.0m、平面形態は不整楕円形を

遺構番号		小地区	性格	時期	規模 (m)			備考
報告時	調査時				長さ	幅	深さ	
SK 1	SK 1	C 2～3	土坑	不明	1.1	0.8	0.22	出土遺物無し。
SK 2	SK 2	D～E 8	土坑	縄文中期末～後期初頭	2.6	1.8	0.16	
SH 3	SK 3	B～C 16	竪穴住居	奈良	4.0	3.7	最大 0.75	煙道付カマドを伴う。
SK 4	SK 4	D 10～11	土坑	縄文中期末～後期初頭	1.1	0.8	0.31	
SK 5	SK 5	C 10	土坑	縄文中期末～後期初頭	1.4	0.8	0.38	
SK 6	SK 6	E 13	土坑	縄文中期末～後期初頭	1.4	0.6	0.3	
SK 7	SK 7	B 11～12・C 11～12	土坑	縄文中期末	3.3	2.2	0.23	
SK 8	SK 8	C～D 12	土坑	縄文中期末～後期初頭	1.6	1.0	0.17	
SK 9	SK 9	C 15	土坑	縄文中期末～後期初頭	1.3	推定 1.0	不明	中央部が攪乱される。
SF 10	SF 10	C 15	焼土坑	奈良	残存 0.8	残存 0.5	0.17	北・西端部が攪乱される。
SD 11	SD 11	C～D 11	溝	縄文中期末～後期初頭	2.5	0.5	0.08	
SK 12	SK 12	D 11	土坑	縄文中期末～後期初頭	0.9	0.4	0.15	
土器集中 地点 1	土器集中 地点No.1	D 10	不明	縄文中期末	—	—	—	
土器集中 地点 2	土器集中 地点No.2	D 10	不明	縄文中期末～後期初頭	—	—	—	
土器集中 地点 3	土器集中 地点No.1	D 11	不明	縄文中期末～後期初頭	—	—	—	
土器集中 地点 4	土器集中 地点No.2	D 11	不明	縄文中期末～後期初頭	—	—	—	

第8表 斎宮池遺跡遺構一覧表



第21図 斎宮池遺跡SH 3遺物出土状況平面図・断面見通し図・埋土土層断面図 (1:40)

呈する。検出面からの深さは約0.17mである。埋土は黒色土1層で、中期末～後期初頭の所産と考えられる縄文土器片が出土した。

**土器集中地点1～4** 調査区の中央部に位置する。包含層掘削時に認識した比較的土器が集中した地点で、遺構の存在を想定して検出を試みたが、検出することはできなかった。地点1で中期末の縄文土器(13・17)が、地点3で中期末～後期初頭の縄文土器片(14～16・18)や台石(482)等が出土している。

### ③奈良時代の遺構

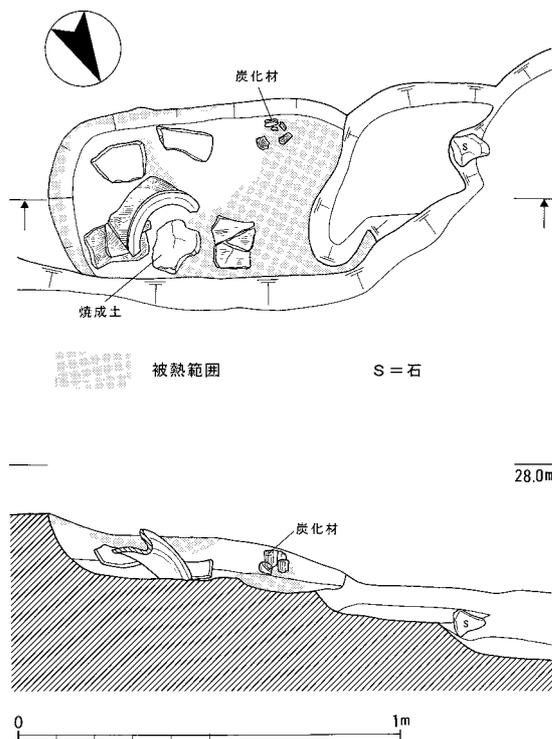
**SH3** (第21図) 調査区の南端部に位置する。緩斜面を削平して平坦な床面を形成した西面する竪穴住居で、西側が住居の出入口と推定される。遺構南半部は崩れた形状を呈しているが、北半部には方形を意識した壁周溝が認められるため、一辺が約4mの方形住居と考えられる。埋土は上層から黒褐色粘質土・暗灰黄色粘質土・明黄褐色粘質土の3層である。深く削平した東側の壁際には遺存状態の良好な造り付けのカマドがあり、カマドの底部中央には倒立したほぼ完形の土師器甕(551)が残存していた。この甕は出土状況から、カマドの支脚に転用さ

れたものと考えられる。また、カマドの両袖で垂直方向に半裁された同一個体の土師器長胴甕片(556)が出土し、南側のものは正立で出土していることから、カマドの構築材に転用され、一種の土留めの役割を持たせていたものと推定される。さらに、底部が水平方向に切断されたような状態で欠損した長胴甕(555)はカマドの芯材に利用されたものと想定され、カマド構築時に接地を安定させるために底部を打ち欠いたものと想定される。また、カマドの奥壁には、住居外に排煙したと考えられる地山を掘り抜いたトンネル状の煙道が構築されている。この煙道は、現地調査着手当初に土層観察用の先行トレンチを掘削した際、その存在が認識できない段階で一部を掘り抜いてしまったが、延長約1.4mに渡り構築されており、排煙口(D16-Pit2)では破砕した2個体の長胴甕片(559・560)が排煙口を塞ぐような状態で出土している。支柱穴は確認できなかったが、カマドの南側で小穴を検出しており、これは貯蔵穴の可能性がある。住居内からは、前述のカマド構成材への転用品以外に土師器の甕(552)や皿(553・554)等が出土している。また、カマド内から炭化材も出土しており、当該炭化材の樹種同定を行った結果、針葉樹のスギと広葉樹のアカガン亜属と同定された<sup>②</sup>。

**SF10** (第22図) SH3の北約2mに位置する焼土坑である。北側と西側が攪乱を受けているため全体の規模・形態は不明であるが、残存長軸約0.8m、残存短軸約0.5mである。検出面からの深さは0.17m程度で、埋土は黄褐色粘質土1層である。遺構の側壁や底部が被熱により赤変・硬化しており、焼土塊や炭化材・炭化種実が出土した他、土師器の甕(557・558)が破砕した状態で出土している。出土炭化材・炭化種実の樹種・種実同定を行った結果、炭化材はコナラ節とアジサイ属の2種類、炭化種実はモモの核と同定された<sup>③</sup>。(小山憲一)

#### 【註】

- ①『宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査概報1』(三重県埋蔵文化財センター 2000年)
- ②後掲の自然科学分析「斎宮池遺跡から出土した炭化材・種実遺体の種類」(第七章 第5節)に拠る。
- ③前掲註②に拠る。



第22図 斎宮池遺跡SF10遺物出土状況平面図・断面見通し図(1:20)

## 第2節 遺物

### (1) 出土遺物の概要

今回の調査では、縄文時代中期・後期を中心として、整理箱79箱分の遺物が出土した。最も古いものでは、旧石器時代のナイフ形石器1点があるほか、古墳時代の須恵器、奈良時代の土師器などが出土した。なかでも縄文時代中期末葉から後期初頭の土器類と石器・石製品が圧倒的に多く、当遺跡出土遺物のほとんどを占める。出土遺物の概要を以下に記述するが、明確な遺構出土遺物が少ないので、ここでは時代別に取り扱うことにし、その中で遺構出土の遺物も順次記述する。なお、各遺物の詳細については遺物観察表を参照されたい。

### (2) 縄文時代の土器・土製品

#### ①はじめに

縄文土器には中期初頭のもの極わずか含まれる以外は、中期末葉から後期初頭に位置づけられるものである。他の時期のものは全く含まれておらず、該期の良好な資料といえよう。

土器の時期区分については、特に破片資料に中期と後期の区分に困難なものがあることから、中期末・中期末～後期初頭・後期初頭と区分したが、

細別土器型式における連続性は見られず、中期末と後期最初頭の間に断絶がある。

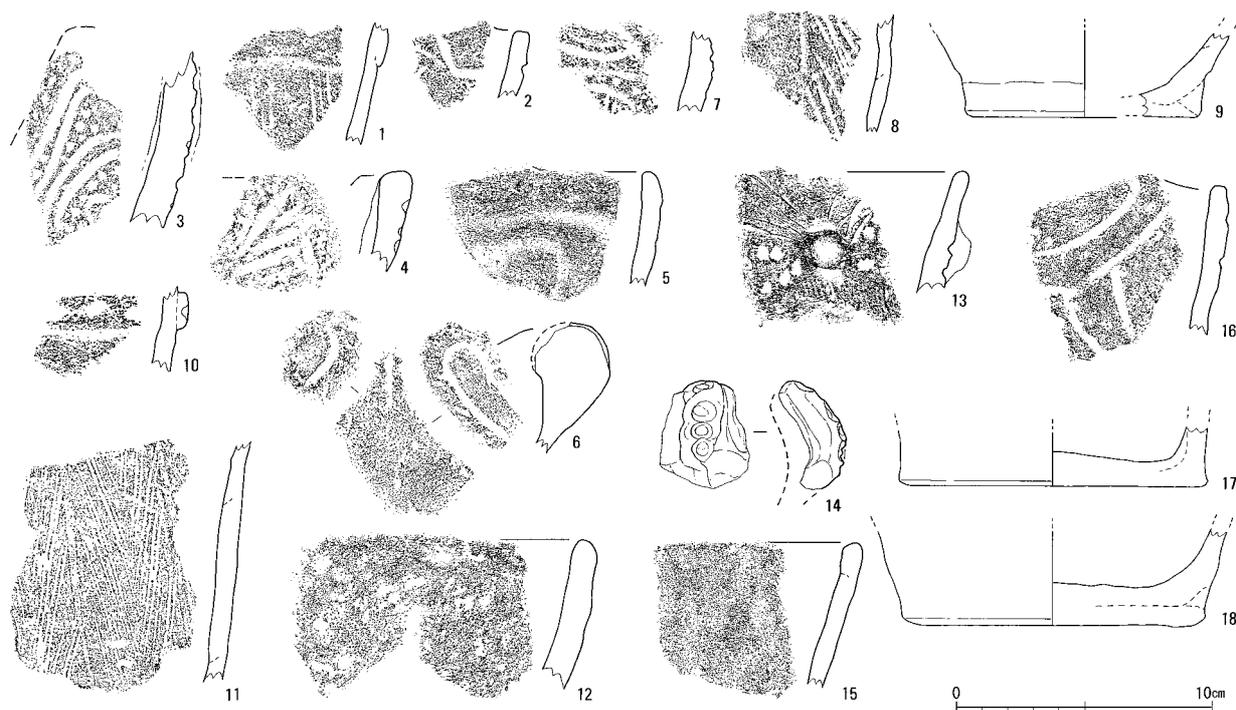
中期末土器の器種分類については、泉拓良氏の北白川C式の分類を参考にして深鉢・浅鉢に大分類し、深鉢はA類・B類・C類に細分した。

深鉢A類は口縁部のすぐ下に口縁部文様帯がくる水平口縁もしくは波状口縁の深鉢。同B類は口縁部からやや下がったところに隆帯で楕円形区画を横に連ねた文様帯をなすもの。C類は4ないし6個の大きな突起状の山形口縁をもつものである。各類はそれぞれ口縁部の文様や表出技法などでさらに細別できるが、今回は量的にさほど多くもないので細別せずにまとめて報告する。

#### ②遺構他出土の土器類 (第23図)

1・2はSK2出土。1は口縁部を欠くが、区画隆帯の一部とその下に垂下する集合沈線(条線)が見える中期末葉の土器、2は緩い波状の口縁部に区画状に沈線が巡る後期初頭のの小片である。

3～6はSH3出土。このSH3は奈良時代の竪穴住居跡であり、出土した縄文土器はすべて混入品である。いずれも口縁部の破片であるが、3・4は



第23図 斎宮池遺跡遺構他出土遺物実測図(1:3)

深鉢C類の山形口縁部片、5は渦巻状の沈線が残る平口縁深鉢の破片。6は波状口縁の波頂部片で拡張した口縁端部に楕円区画沈線と縄文施文が見える。後期初頭に下るものであろう。

7～12はPit出土の遺物。7・10は口縁部区画隆帯部分、8は垂下羽状沈線、11は櫛状工具による矢羽状文様が残る体部片、12は無文の粗製深鉢。いずれも中期末葉に位置づけられる。

13～18は遺構ではないが、土器集中地点出土の土器。中期末土器が多いが16のように明らかに後期に下る土器も含まれ、一括性はない。13は口縁部からやや下がった位置に円形の小突起を付し、両側に棒状具による連続刺突文で楕円区画を描いた深鉢B類の破片である。円形の小突起部分は退化した橋状把手の名残と考えられる。体部には櫛状工具による垂下文様が施されるようである。14は口縁部に付加される縦方向の小隆帯が剥離したもの。16は中津式に相当する沈線のみ施文の土器である。その他、無文の土器(15)や底部(17・18)などがある。

### ③SK7出土土器(第24図)

竪穴住居跡の可能性のある土坑SK7からは、比較的多くの遺物が出土した。後期の土器を含まない単純な時期の土器群である。

19は波頂部口縁下の主文様に、沈線による渦文を描き、両側に楕円形区画文を配置する。区画内は右下がりのヘラ描斜沈線で充填、楕円形区画の下部の沈線に沿って隆帯を貼り付け、棒状具による連続刺突を施す。頸部には四条の連弧状沈線を配し、体部とを画する。体部には櫛状具(?)で羽状に文様を施した逆U字状の垂下沈線らしき文様が見える。20は波状口縁の深鉢波頂部で、隆帯と沈線によって渦文を表出したもの。隆帯は低いが連続刺突文が施される。21は斜め上方へ開きながら口縁部でやや内弯する水平口縁深鉢。主文様を構成する渦文の退化が進み、渦文に続く楕円形区画文とが一体化してしまい水中メガネ状の区画文になったと考えられる。渦文部に相当する右側部分は、楕円区画文部に相当する左側に比べるとやや小さくなっており、このモチーフの由来を示唆している。隆帯上を棒状具で連続的に刺突し、区画内は右下がりの斜沈線で埋める。頸部には四条の弧状沈線がめぐり、体部には内

部に羽状沈線を施した逆U字状沈線および蕨状沈線が垂下するようである。26～31なども19や20と同様の施文手法やモチーフが見られるものである。深鉢B類の26は、横長の楕円形区画横に橋状把手が退化した肥厚部が配される。

32～34は富士山形を呈する口縁部となる深鉢C類である。32や34は小片のため確実ではないが、33では沈線による渦文とその右下には連続刺突された隆帯がわずかに認められ、先に述べた19などと類似した施文手法やモチーフとなっている。

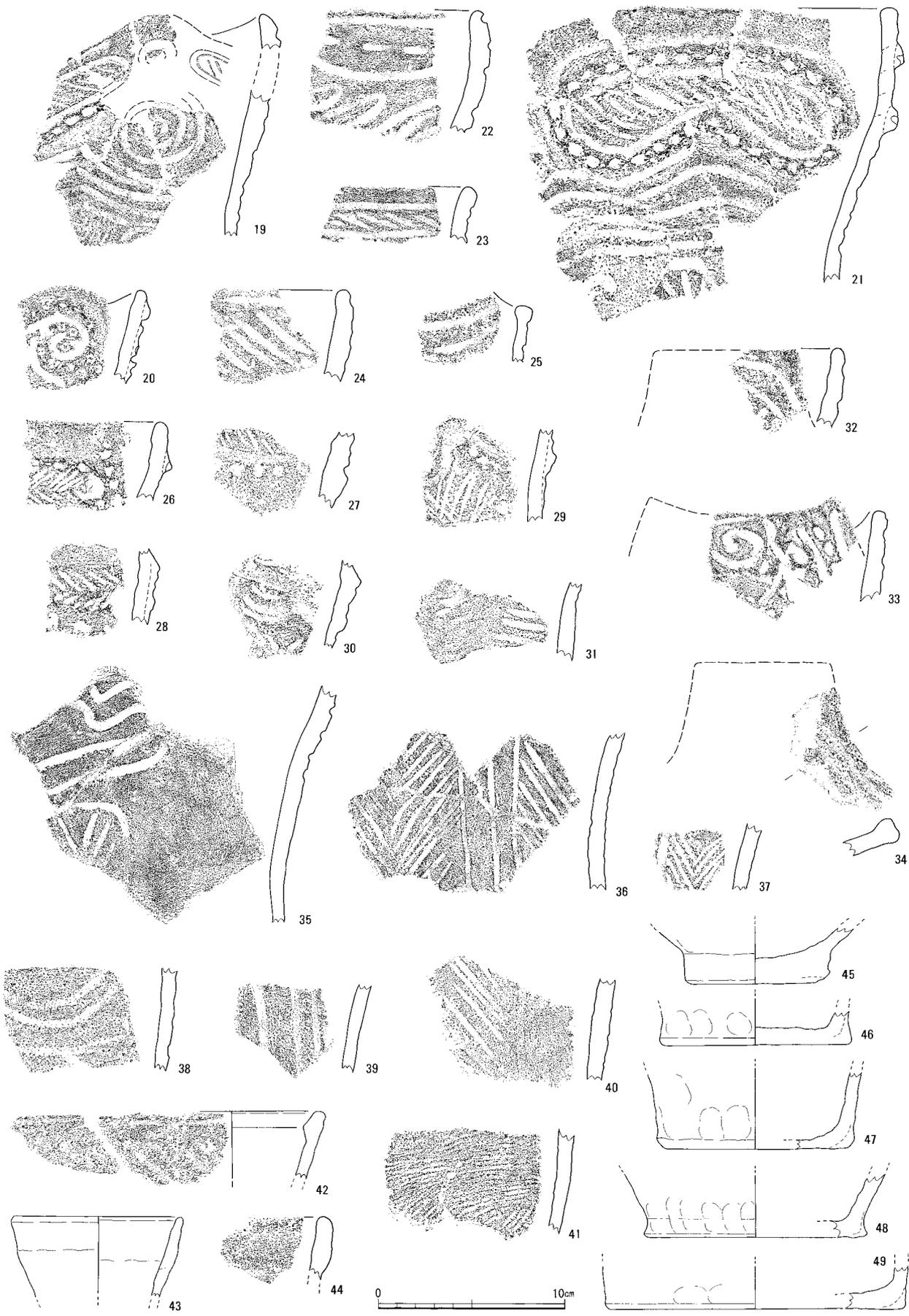
22～25には沈線による口縁部文様帯が見えるが、隆帯は認められない。この破片からは主文様の渦文などは確認できないが、楕円形区画内に斜沈線を充填する手法は先述のものと同様であるが、22のように一列の短沈線だけになってしまったものもある。

35は頸胴部を分ける多重の波状沈線が崩れてしまったような印象をうけるが、どのようなモチーフなのかよくわからない。体部も無文部が広がっており、一層の退化傾向を示すものであろうか。36～41の体部片では、羽状沈線を主とし、垂下沈線文(39)、曲線的な沈線文(38)、縄文施文(41)がある。その他の土器として口縁内面端部が肥厚する無文深鉢ないし鉢(42)や小型の無文鉢(43)などがある。底部はすべて平底であるが、立ち上がり部の外反度に違いが見られる。体部の器形に関連すると思われる、器種の違いを反映するものであろう。

### ④包含層他出土の土器類(第25～35図)

中期末葉から後期初頭の土器をまとめた。第25図50～第26図は深鉢A類。50～54は比較的しっかりした隆帯で渦文を描くもの。渦の中心に円孔を穿つもの(52・54・57)もある。54は円孔を挟んで上下に橋状把手がつけられていたと思われる、円孔の上には剥離痕が残る。隆帯上には円棒上あるいは小竹管の連続刺突文が施されるものが多い。53は高くしっかりした凸帯とも言えるような隆帯がつく。口縁端部を拡張して面を作り、そこに八字状の羽状沈線を施している。52は円孔が波頂部の下に位置せず、C類に似た山形口縁になるのかもしれない。

50・51は同一個体であるが、沈線で縁取られた低い部分に細かな縄文(LR)が充填されている。57にもわずかに縄文が見えるが、これら以外に縄文は



第24図 斎宮池遺跡SK 7出土遺物実測図(1:3)

みられない。

58は隆帯を失い沈線だけで渦文を描くものである。続く59～74は退化傾向がさらに進み、隆帯表出が曖昧かつ低くなったものの類を集めた。主文様は円孔や凹点のような単純なものとなり、隆帯に相当する部分をやや肥厚させて隆帯の効果を表出しようとしている。そのため、59～61・63～65・68～70のように、口縁部が段上に肥厚するものが多い。隆帯によって囲まれた楕円形区画内には59や63のような羽状沈線もあるが、短沈線列となるものが多い。70・71では区画文の幅が狭くなり、短沈線状あるいは刺突状になりつつある。「ハ」もしくは「く」字状沈線が短沈線や刺突列に省略化されていく過程を見ることができる。72は口縁部楕円形区画文の下部、頸胴部界のみに低い連続刺突文隆帯が残るだけとなる。73は細長くなった楕円形区画文の下部の沈線に沿って痕跡的な微隆帯が見られる。75～78は段上に肥厚した口縁部が幅広い無文帯となるもので、深鉢B類とすることができるかもしれない。区画内を埋める短沈線もヘラ状具や櫛状具を用いており、細くなっている。また、79・80などは口縁部の肥厚もなくなり、細い沈線による区画文のみとなっている。

なお、62は波頂部の主文様がどのようになるのかわからないもの。残存する波頂部分からは図のような傾きになるが、そうすると橋状把手やその下にくる隆帯区画文が斜めになってしまう。同様の円文や橋状把手・隆帯区画文がもうひとつ垂直方向軸に対して左右対称となるように右側につくことにより、C類に相当の山形口縁となるのかもしれない。

81～87は体部からやや外反気味に立ち上がる口縁部をなすもので、頸部がくびれない器形をなす。口縁部は橋状把手が退化して本体と橋部が接着してしまった形態をなし、その多くには凹点が施されたりする。楕円形区画文を取り巻く部分には隆帯状に肥厚部が残る。81～83は同一個体の可能性が高いが、橋状把手の名残部分から逆U字状沈線が体部にまで垂下するだけのシンプルな体部文様となる。88・89は同一個体。口縁部を欠くが、深鉢B類としてもよいかもしれない。口縁部下にヘラ状工具による逆「く」字状の羽状沈線、隆帯を挟んでその下に小楕円文と蕨手文が見える。沈線は太く深い。頸部から

体部までの文様がわかる資料は多くはないが、59のような頭部が蕨手状となる蛇行沈線文や垂下沈線、羽状沈線文が描かれるものが主体であるものの73・81・82などのように無文部が大半を占めるようなものもある。

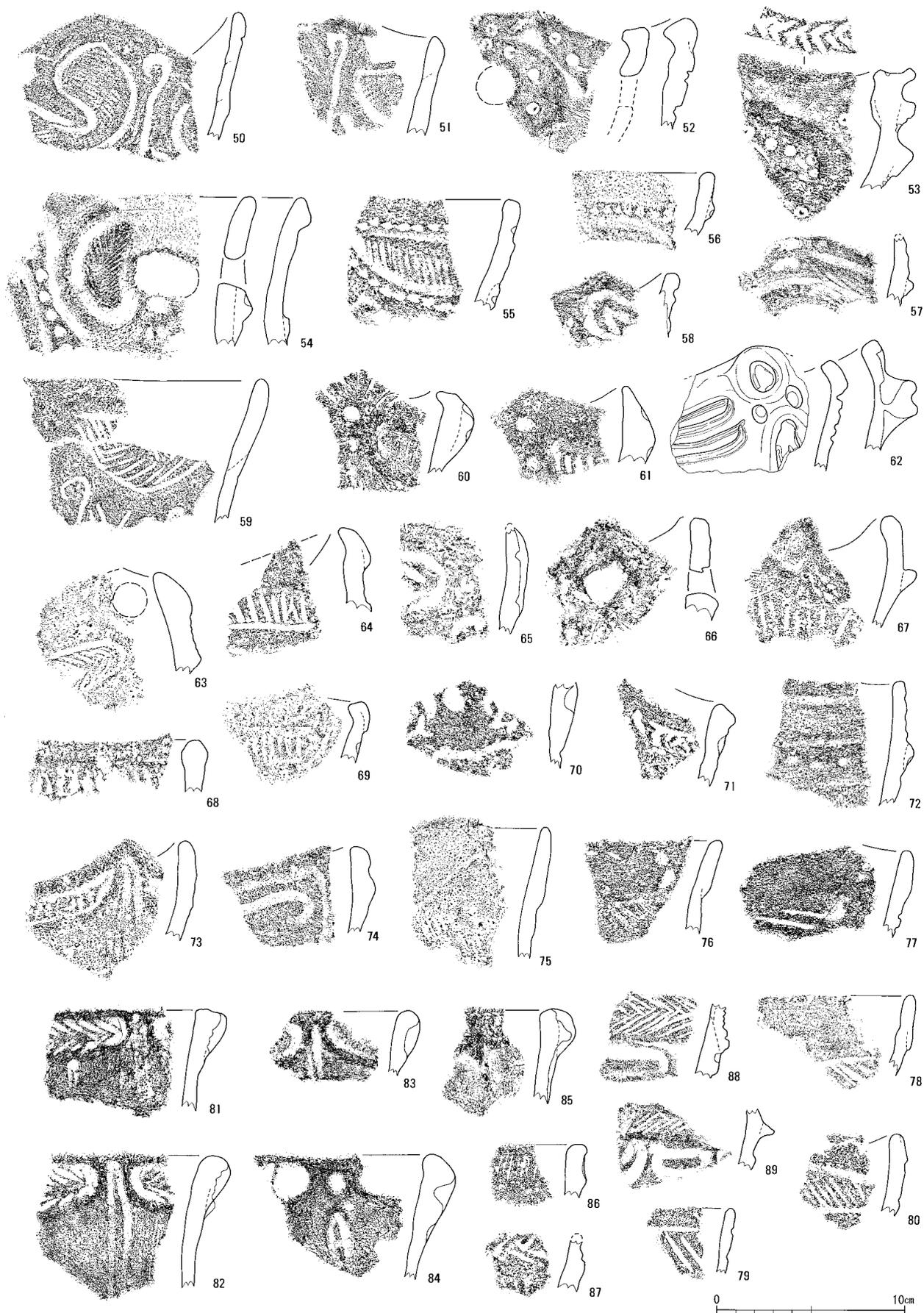
第26図90～97は、口縁部に沈線による渦文もしくは多重円文を施すもの。91は中心部に円孔を穿つ。90には口縁端部と外面の一部にわずかに縄文が見え、92は肥厚する口縁部に配された渦文間にLR縄文が残る。器面の摩滅のために詳しい観察が困難なものもあるが、93と94は沈線のみである。98は口縁部に隆帯や肥厚部分などが認められず、器壁も薄くなっている。口縁に沿って一条の沈線が引かれ、波頂部には小さな逆S字沈線文、その両側に楕円区画文が配される。その下には頸部と体部を区画する多重弧文の名残である沈線が三条は確認できる。

99は「く」字状に内折した口縁部が面をなし、短い羽状沈線を施す。体上部の楕円形区画文以外は無文となる。100は口縁部文様帯が省略され、体部に大きな渦巻き沈線が施されると思われる。101・102は同一個体。平行する2本の沈線帯によって文様を描くもので、波頂部下に小さな鈎状文を描く。体部文様は不明だが、垂下沈線のような文様と思われる。

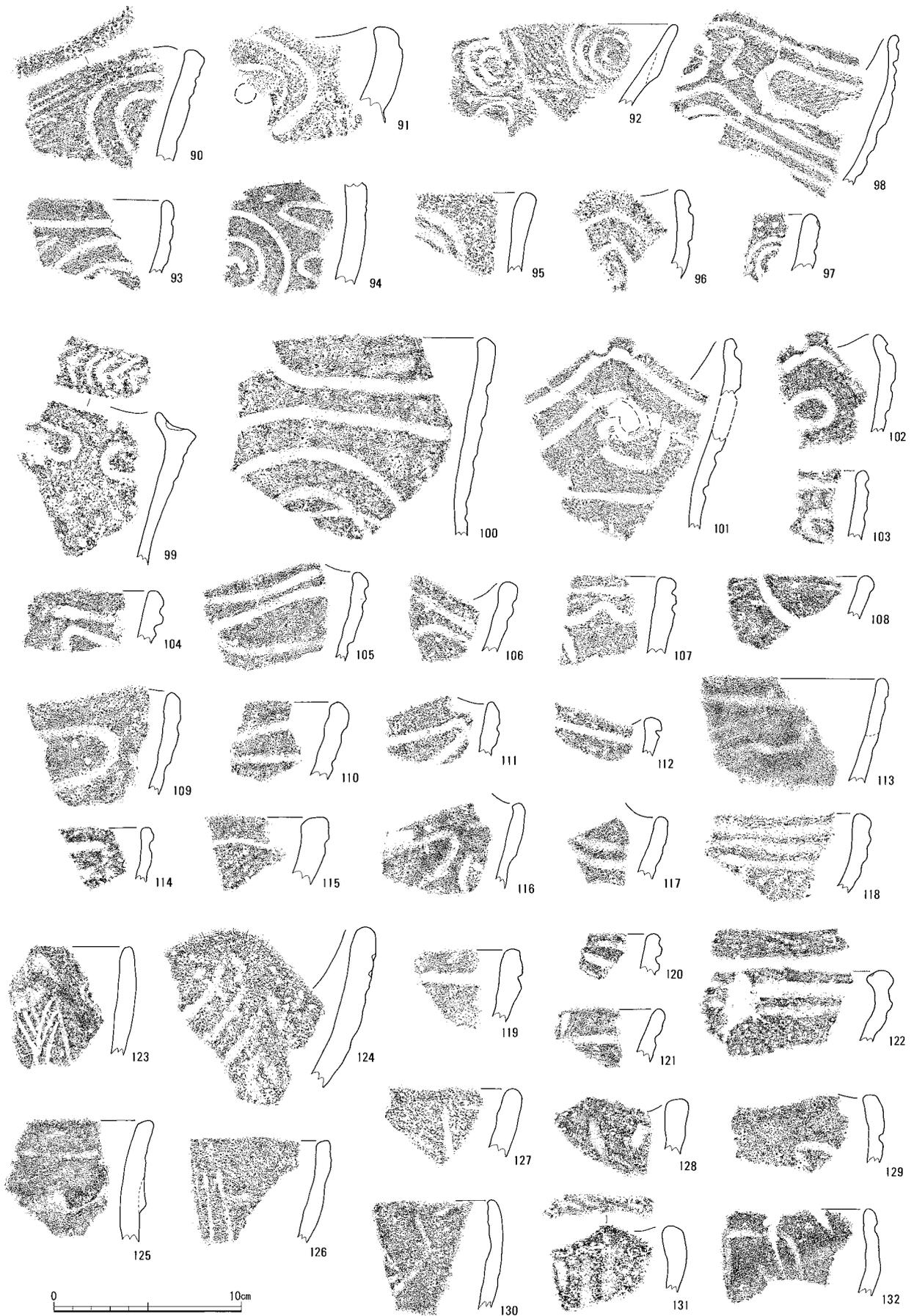
103～122は口縁部に一条の沈線（ないものもある）と、横長の楕円形区画文ないしはJ字状文が配されるもの。小片のため明確ではないが、確実にJ字もしくは鈎状となるものはない。115は器壁が厚く、細い沈線区画内にはLR縄文が充填されるもので、122とともに他の中期末～後期初頭の土器とはやや違和感がある。

123～132は口縁部文様帯が省略されるもので、羽状沈線（123）や多重沈線（124・126）、蛇行沈線（130）等が垂下するもの、意匠不詳の沈線文様が描かれるものなどがある。

第27図134～137は深鉢B類と考えられるものである。135以外は口縁部を欠くので確実なことは言えないが、楕円形区画文のつなぎ部が橋状もしくは突起となっている。136の橋状把手以外はすべてブリッジ形状をなさない突起で、凹点を1ないし2個押圧する。楕円形区画内には133・134のように羽状沈線を充填する。135は楕円区画の幅が低くなり、内



第25図 斎宮池遺跡包含層他出土遺物実測図① (1:3)

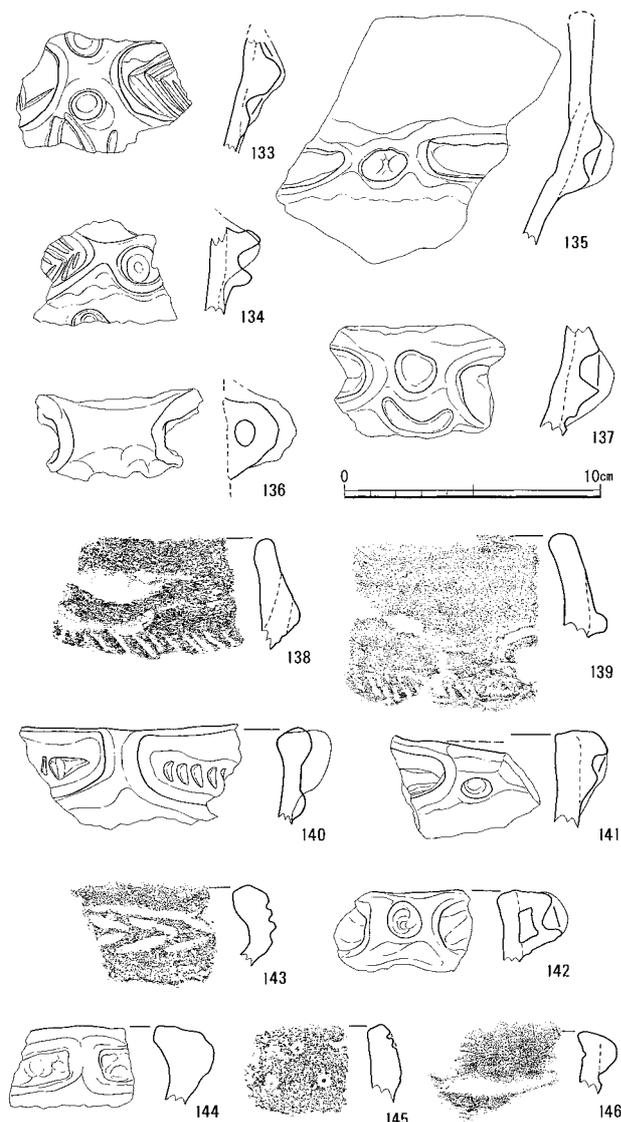


第26図 斎宮池遺跡包含層他出土遺物実測図② (1:3)

側に充填する沈線も羽状にしにくいほど狭くなっている。

なお、第27図138～146は浅鉢としたが、器形全体が確実にわかる個体はない。138・139は口縁部から体部への屈曲部の角度から浅鉢と推定したが、140～142などは体部への屈曲の可能性も考えられるが、前述の深鉢B類の口縁部表出技法および文様構成と共通する。深鉢B類の口縁部無文帯を省略したものとも考えられるが、第25図81～84とも類似する。143・144は口縁部の屈曲から浅鉢としてよいだろう。145のやや肥厚した口縁外面には小竹管の刺突文が見えるが、浅鉢かどうかは不明。146は小片のため不詳。

第28図・第29図は深鉢C類を集めた。頂部に平坦部を有する山形の大きな突起が特徴的な口縁部であ



第27図 斎宮池遺跡包含層他出土遺物実測図③(1:3)

る。平面的には頂部が平坦なもの(147や149など)と、頂部の中央部がやや窪むもの(160や162など)がある。また、側面が途中でくびれ頂部で外へ開く形状のもの(154・155・162など)もある。口縁部を拡張し、そこに面をつくり施文する例(147・162など)もあるが、当遺跡例では比較的面の幅が狭くかつ施文も単純な刺突文や沈線・縄文が多く、省略・退化傾向が目立つ。

147は波頂部中央に主文様となる渦文もしくはそれが変形した円(楕円)文に刺突を加え、その両側に楕円形区画文を配する。また楕円形区画の内部には沈線が充填される。148～151は同一個体であるが、147などと同様に他器種と同様の口縁部文様を山形の突起部に集約している。また凹点を取り巻く蕨状の沈線文や渦文、楕円形区画文も見える。

152～160には羽状沈線もしくは短沈線・刺突文が施文されるが、楕円形区画を意識したこれらの文様施文部を隆帯が取り巻いているが、それは低く痕跡的となっている。162～169などはさらに省略化が進み、文様が簡素となる。167は楕円形区画文に相当する部分は若干肥厚するだけで無文となる。163は短沈線にもならないような刺突文だけが施文される。

170は主文様が失われた口縁部文様帯が波頂部に残されたものであるが、口縁端部を肥厚させていない。171～180は文様が単純化(179は除く)し、沈線のみによって文様を描くものである。突起部左右の斜面口縁部を拡張した180には細かなLR縄文が施されるが、それ以外の地はすべて無文となる。

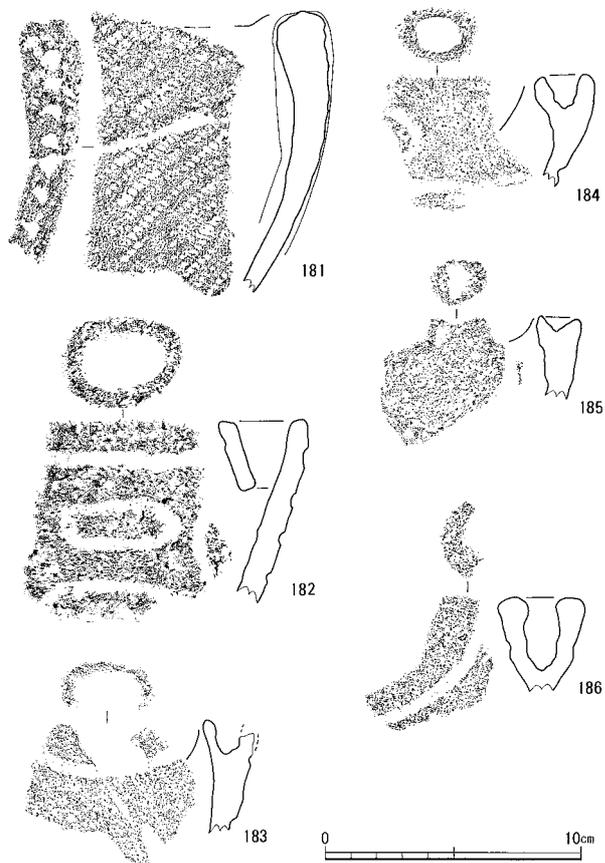
第29図181は突起部外面の全面に縄文(RL)が施され、拡張された口縁部斜面には円棒状工具による連続刺突文が施される。182～186は筒状突起に類するもの。182は楕円形の筒状突起がつくもので、突起部下に楕円文、その両側にも楕円形区画文が配されるようである。器面摩滅のため縄文の施文があるかどうかは不明。183～186は突起部が筒状とはならず、円形もしくは楕円形の孔となるもの。後期に下るものであろう。

第30図・第31図は後期初頭の土器である。187～189は同一個体である。推定口径38cmで4ないし6個の波頂部をもつ深鉢である。この土器は遺存率も高く、全体の文様構成も大体把握できる好資料であ



第28図 斎宮池遺跡包含層他出土遺物実測図④ (1:3)

る。精良な粘土を使い焼成も良好で、橙色を呈する堅緻な土器である。口縁部に沿って引かれる沈線は、波頂部近くで端部に回り込む。これは口縁部に配される横長の窓枠状区画文が上方へせり上がったものと考えられる。口縁部下に横走る無文の帯状文は、波頂部下で縦長の逆J字状文を描く。また、波頂部と波頂部間の波底部下に、広く残される頸～体部の無文帯を埋めるようにつなぎ文が施される。このつなぎ文は、残っている破片からは、単純な垂下沈線帯と錨状文とがある。さらに、一部が残るものでは曲線的な沈線となっており、紡錘状となる可能性もあるなど、文様の単純な繰り返しにはならないようである。このJ字状文やつなぎ文の下端部の処理がどのようになっているかが、残された破片からはわからないが、他の類例から推定すると下端部でそれぞれが連結し、下端区画をなしていると考えられる。この深鉢の頸部はさほど括れないが、体部文様のあり方から考えると、体部最大径付近に下端区画が配置されるところと思われるので、体部下半部へは小さなJ字状文のようなものがぶらさがる可能性もある。



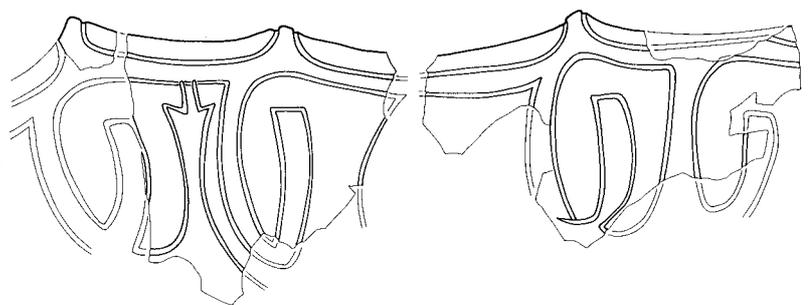
第29図 斎宮池遺跡包含層他出土遺物実測図⑤ (1:3)

なお、189は体部最大径付近の破片と考えられるが、逆J字状文下端部の処理がはっきりしない。したがって、この破片からは上記のような下端文様は得られないので、可能性を指摘するにとどめたい。

第31図190～241は後期初頭の土器の主なものを集めた。ため池の水面下に没したり、干上がって地表に露出したり、波浪により洗われたりするなど、長期間の環境変化によって器表の摩滅が進行したため、文様の有無について判然としないものが多く含まれている。

190～197は帯状部分に縄文を充填する波状口縁深鉢、198～207は帯状部が無文の波状口縁深鉢、208～213は帯状部分に縄文を充填する平口縁深鉢、214～226は帯状部が無文の平口縁深鉢である。また227～240は体部片で、227～236までが縄文を充填するもの、237～240が無文である。なお、当遺跡出土資料中には、三重県地方に通有の櫛状工具による条線を充填したものは全く認められない。241はボウル形を呈する鉢の破片で、口縁部を横走る縄文(RL)帯から体部に向かってT字状に縄文帯が垂下する。

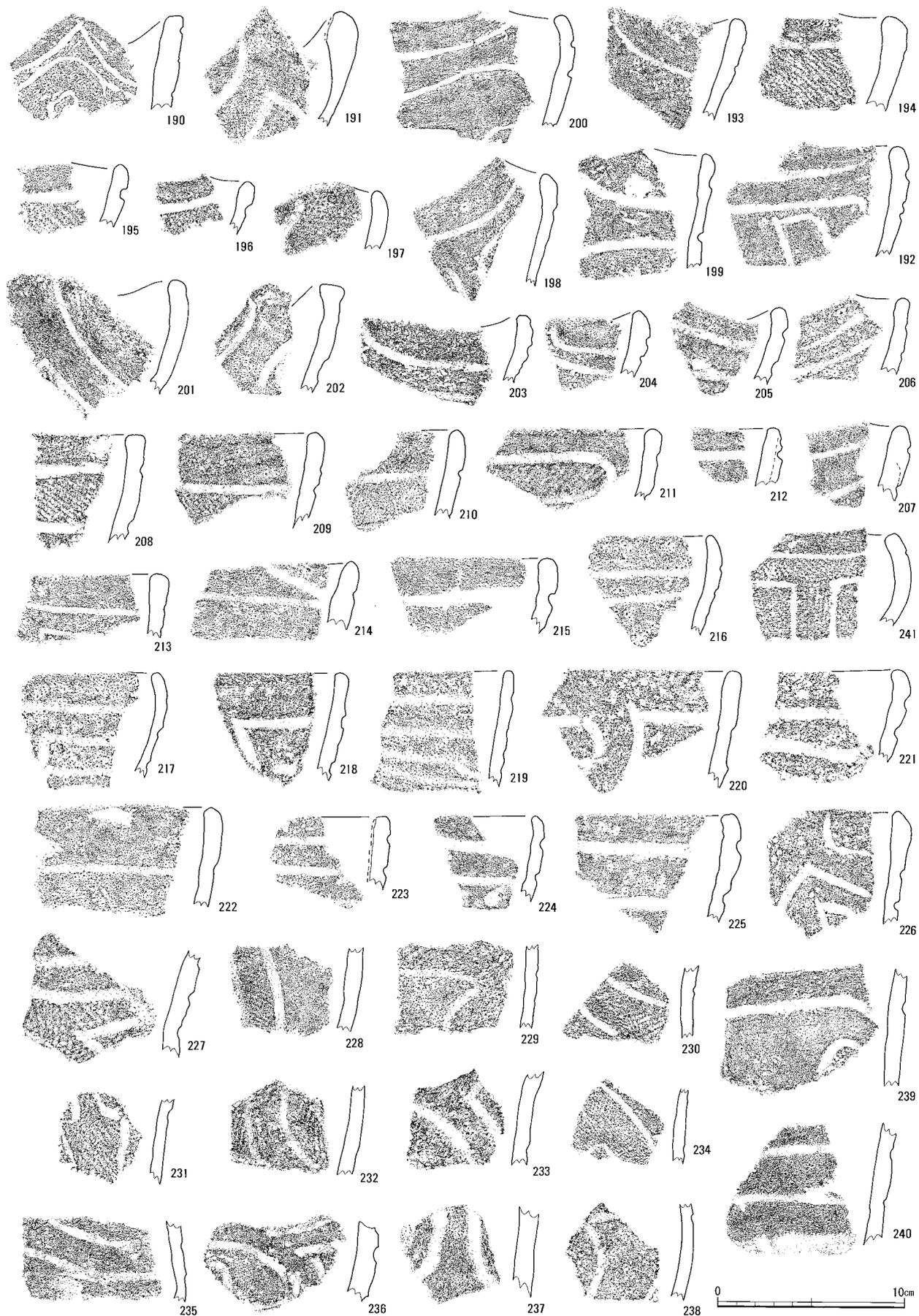
第32図および第33図291～315は中期末葉土器の頸～体部片を集めた。一部は中期終末から後期初頭にかかるものも含まれると思われる。243や249・250は口縁部文様帯と体部文様帯とを連続刺突を施すなどした隆帯で区分し、251や252・254は素文の隆帯で分ける。多重の弧状沈線を用いるのは248くらいしかなく、より痕跡的な弧線や短沈線列となるものが若干認められる(247・253)。体部文様は頭部が蕨手状となる沈線や、2ないし3本の沈線束を垂下させ、逆U字状沈線内にヘラ状工具による羽状沈線を描くものが主体となる。その中でも、249・253・255・258・264～266などのように沈線が幅広で深く、かつ羽状沈線も整然としているものと、261・262・269・275・276・283などのように沈線幅も狭く浅く、かつ羽状沈線が雑なものがある。282や290は羽状沈線の施文具がヘラではなく櫛状工具によって施文されている。また、292は羽状沈線にかえて縄文RLが施文されている。297～299は垂下沈線のみ破片。300～315は曲線的な文様が沈線帯によって描かれるもの。多重沈線による渦文と考えられる300・301に



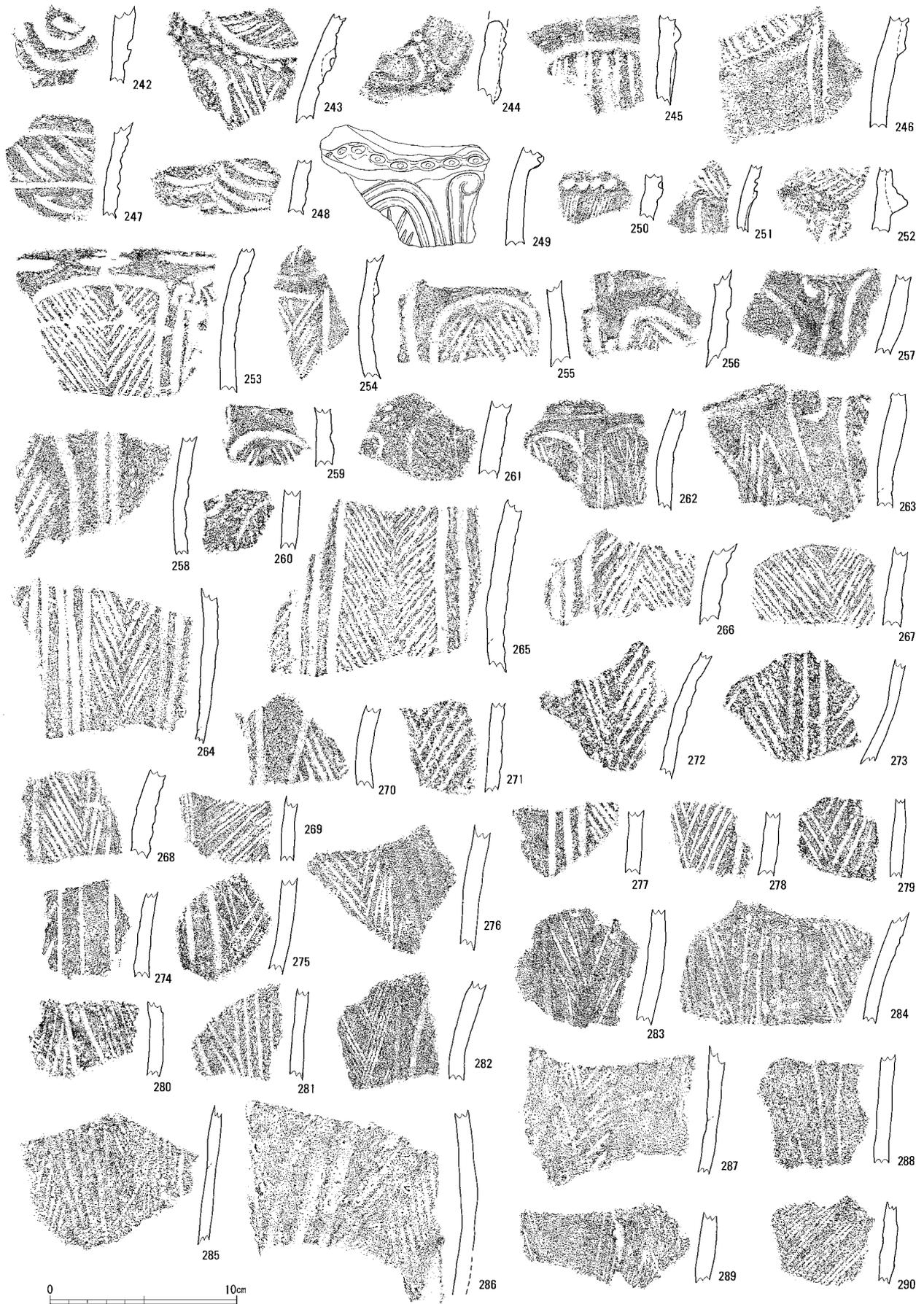
0 10cm

文様構成模式図

第30図 斎宮池遺跡包含層他出土遺物実測図⑥ (1:3)



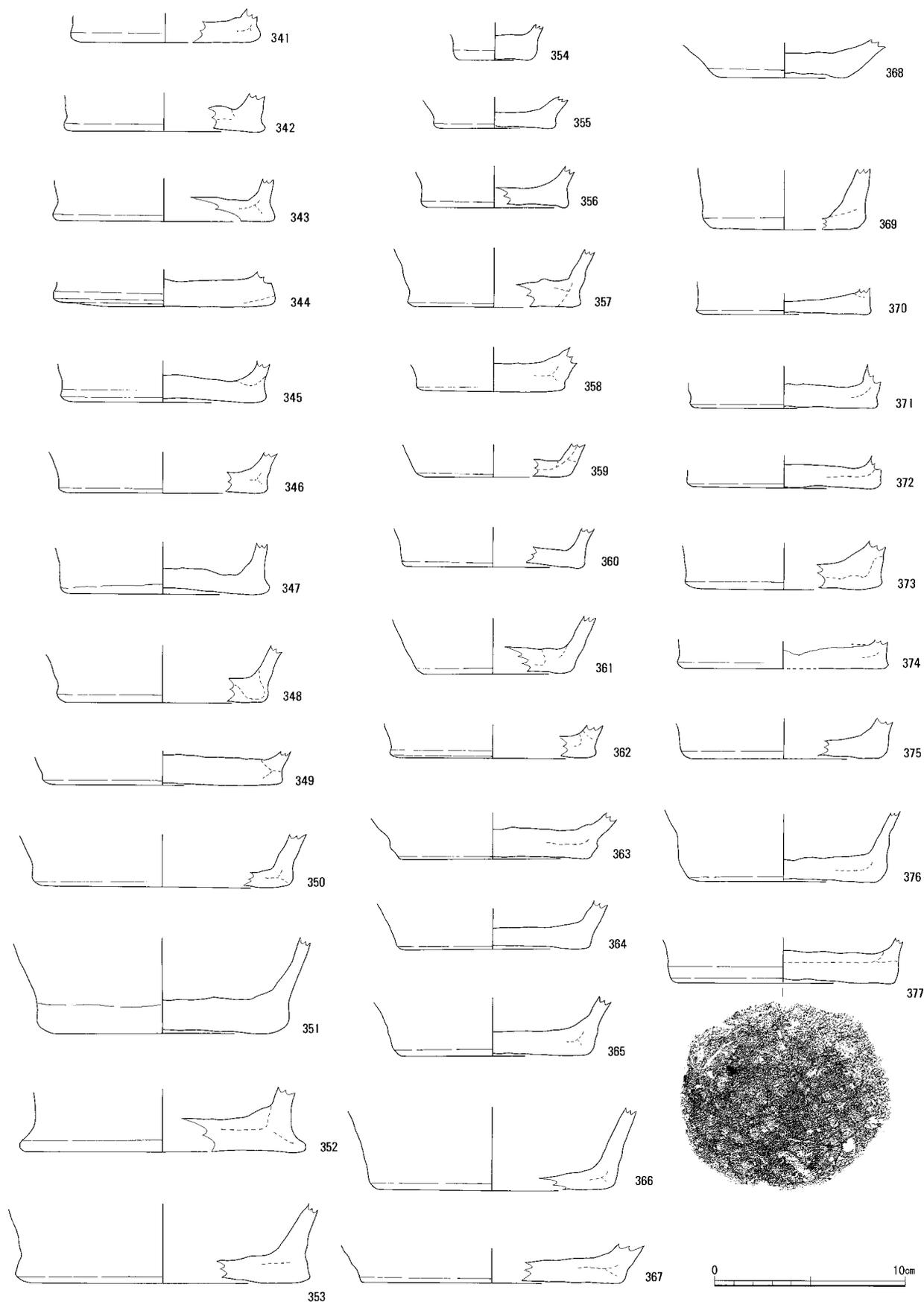
第31図 斎宮池遺跡包含層他出土遺物実測図⑦ (1:3)



第32図 斎宮池遺跡包含層他出土遺物実測図⑧ (1:3)



第33図 斎宮池遺跡包含層他出土遺物実測図⑨ (1:3)



第34図 斎宮池遺跡包含層他出土遺物実測図⑩ (1:3)

は細かな縄文（いずれもRL）が沈線帯に充填され、いわゆる磨消縄文となっている。303～306なども同様の文様になるのかもしれない。305は半裁竹管による施文。310・311はより複雑な文様になるようである。

深鉢D類は半粗製土器で3個体ある。316・317は同一個体であるが、櫛状工具による羽状沈線様の文様が施される半粗製の波状口縁深鉢である。また、318は器面に縄文（RL）のみが施文される。

319～340の無文深鉢を深鉢E類とする。器面の摩滅が著しいものが多く、器面調整などはよくわからない。口縁部は弱く内弯する例とほぼ直線的に開くものがある。口縁端部は丸みをもって収められる例が多く、口縁部がやや肥厚するものもある。

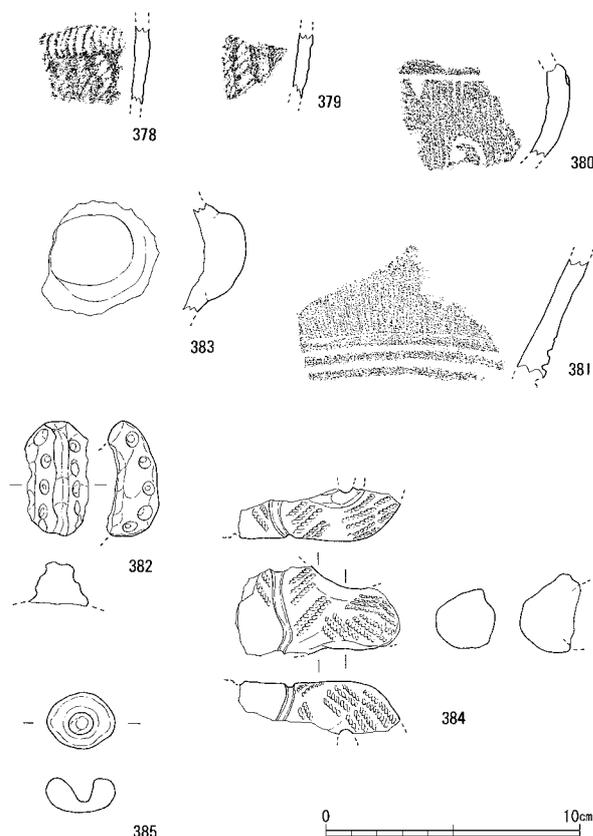
第34図341～377は底部片。器面の摩滅により底部外面の調整なども不詳のものが多い。377には網代痕がわずかに認められる。252は底部の円盤がかなり外へ張り出した形状を有する深鉢底部として図化した。高さ3.5cmのところでは口縁部のように丸みをもってきれいに残っている。おそらくは擬口縁と考

えられるが、底部外面の調整が極めて平滑で、しかも丁寧につくられているので、可能性は低いが、平坦な盤状台のような器種の可能性もないわけではない。ほとんどが深鉢の底部と考えられるが、体部の立ち上がりが外面へ大きく張り出す368などは浅鉢のような器種になろう。

第35図378～385にその他の時期に属する土器および土製品を集めた。378～381は中期初頭の土器である。378は硬い繊維で擦った縄文を地文に連続C字状文を施文した瀬戸内地方の船元I式、379も同一個体であろうか。380および381は同一個体である。土器胎土が他の中・後期土器と全く異なり、表面がザラついた粗い粘土を使用している。焼成についても赤褐色の独特の色合いを呈している。口縁部に近い380には細い沈線による平行の区画帯を設け、内部に細い条線を縦位に施文する。そして、上下の沈線に接して三角形の袂りや頭部を丸くした蕨状沈線を描く。381は口縁部から直線的に頸部にいたる部分と思われ、半裁竹管による平行沈線の上部にはハケ目のような細線文が縦位に施されている。関東地方の五領ケ台I b式に相当しよう。

382は本遺跡の中心となる中期末葉の時期のものだが、口縁部に添付された突起部分が剥離したものである。細い棒状の刺突文が施されている。383はやはり口縁部付近に付けられた摘み状の突起と考えられる。双耳壺の把手部とも考えられる。

384は器種不明。どのような部位のものかわからない。ここでは一応、深鉢もしくは鉢・浅鉢に付く把手を想定した実測をしているが、ねじれた形状や穿孔・沈線・縄文施文のありかた等、把手するには違和感がある。不明土製品としておく。385も不明土製品。楕円形の粘土塊を丁寧に丸め、その一方に何かで穴をあけたものと思われる。あるいは人の手によらないものかもしれない。類例を知らないので、参考としてあげておく。（田村陽一）



第35図 斎宮池遺跡包含層他出土遺物実測図⑪（1：3）

### (3)旧石器・縄文時代の石器・石製品

#### ①はじめに

今回の調査で出土した石器は、総数375点である。その器種別内訳は、石鏃27点、打欠き石錘62点、切目石錘4点、粗製剥片石器1点、石皿・台石8点、敲石13点、磨石19点、砥石1点、石錐2点、削器2点、楔形石器7点、礫器2点、磨製石斧6点、二次加工痕有剥片(RF)4点、使用痕有剥片(UF)1点、剥片・碎片132点、石核4点、素材石材80点(石英を除く)である。他に、チャート製ナイフ形石器1点が出土していることから、チャート製石器の一部には旧石器時代の資料が含まれている可能性が想定されるが、他の剥片等に対する技術形態学的な検討を為し得なかった。そのため、ナイフ形石器一点のみの出土であり、また池敷表土からの出土であることも勘案し、ナイフ形石器以外の資料を縄文時代の所産と理解して分析を進めたい。定型的器種に関しては、法量や石質などを第23～27表に、その他の石器と未加工の石材を含めた石質別・出土区・層位別の点数は、第28～32表にそれぞれ示した。石製品は、垂飾と推定される有孔品が1点出土している。

資料の出土位置に関しては、定型的器種は器種別一覧表に、その他は出土区別一覧表に示した。包含層が浅いため、表面採集品が多数含まれている。

剥片石器の石材は、定型的器種以外を集計した第28～32表を見ると、剥片・石核・石材の総計83点、4989.9gを測る在地石材のチャートを主体として、搬入石材であるサヌカイトが剥片68点・113gでそれに次ぎ、他には黒曜石が剥片5点・10.5g、頁岩は石材2点・36.1gとそれぞれごく少数が出土している。他に、石英製資料644点がある。

石材産地に関する理化学的な同定は行われていないが、肉眼観察ではサヌカイトは二上山産であると理解される。黒曜石は、信州産の可能性が高いと推定されるが、断定はできない。

石錘や植物質食料の調理加工に関わる石器などの自然石をそのまま素材とする石器の石材には、砂岩を主体として、他に石英斑岩・花崗閃緑岩・花崗岩・斑礫岩などの深成火山岩がみられ、また結晶片岩類が石皿・台石や石錘に使用されている。

(大下 明)

#### ②石鏃 (第36図)

未成品1点を含む27点(サヌカイト19点、チャート8点)出土した。凹基無茎鏃21点、平基無茎鏃3点、凸基有茎鏃1点、不明2点である。凹基無茎鏃には側縁が緩やかに外に張る(膨らむ)もの(386～391・393・394・396)、側縁が直線的なもの(392・395・397・401～406)、側縁が緩やかに内に張る(膨らむ)もの(398・400)、側縁が屈曲するもの(399)が、平基無茎鏃では側縁が直線的なもの(409)、側縁が屈曲するもの(407・408)がある。多くは挟りが明瞭で、長幅が2cm未満、その比も1:1～3:2ほどの小型品で、大型長身細身のものは405・406に限られる。側縁の加工では386・391・402が鋸歯状となっている。凸基有茎鏃の410は側縁を鋸歯状に加工するもので表裏ともに一次面を残す。先端・基部とも古くに折損している。(久保勝正)

#### ③打欠き石錘 (第37～43図)

本器種は、62点と今回の調査で最も多く出土しており、石器群を特徴付ける器種となっている。未成品1点を除く全点を図示した。その法量から概ね小型品と大型品に二分される。完形品の平均重量は92.61gである。紐掛け部の形成は、428と457を除いて、長軸の両面に形成されている。石材の選択は、砂岩が47点で77%を占め、圧倒的に多い。次いで特徴的なものとして黒色片岩・緑色片岩が各5点と4点ある。

小型品としたのは、重量が40～50g前後を測るものを中心とする一群である。切目石錘の重量に近似する一群である。413は、今回出土した最小品で、重量も17.44gと最軽量である。416は、半欠品である。凹部は浅い複数の剥離によって形成され、縁辺は直線的である。420は約4分の1を欠く。凹部の縁辺は直線的だが、剥離の形成は深い。428は一方が打欠きではなく、つぶれ状となっている。429・430は、共に凹部縁辺が直線的である。431以降は、概ね90gまでの一群である。

大型品とした一群も、比較的斉一性が高い。まず平面形は、小判形よりもやや幅広のものが主体を為し、長さが幅の2倍を越えるような極端に縦長のものは僅かである。重量も100g前後に集中している。438以降がほぼこれに相当する。なお、平面形はほ

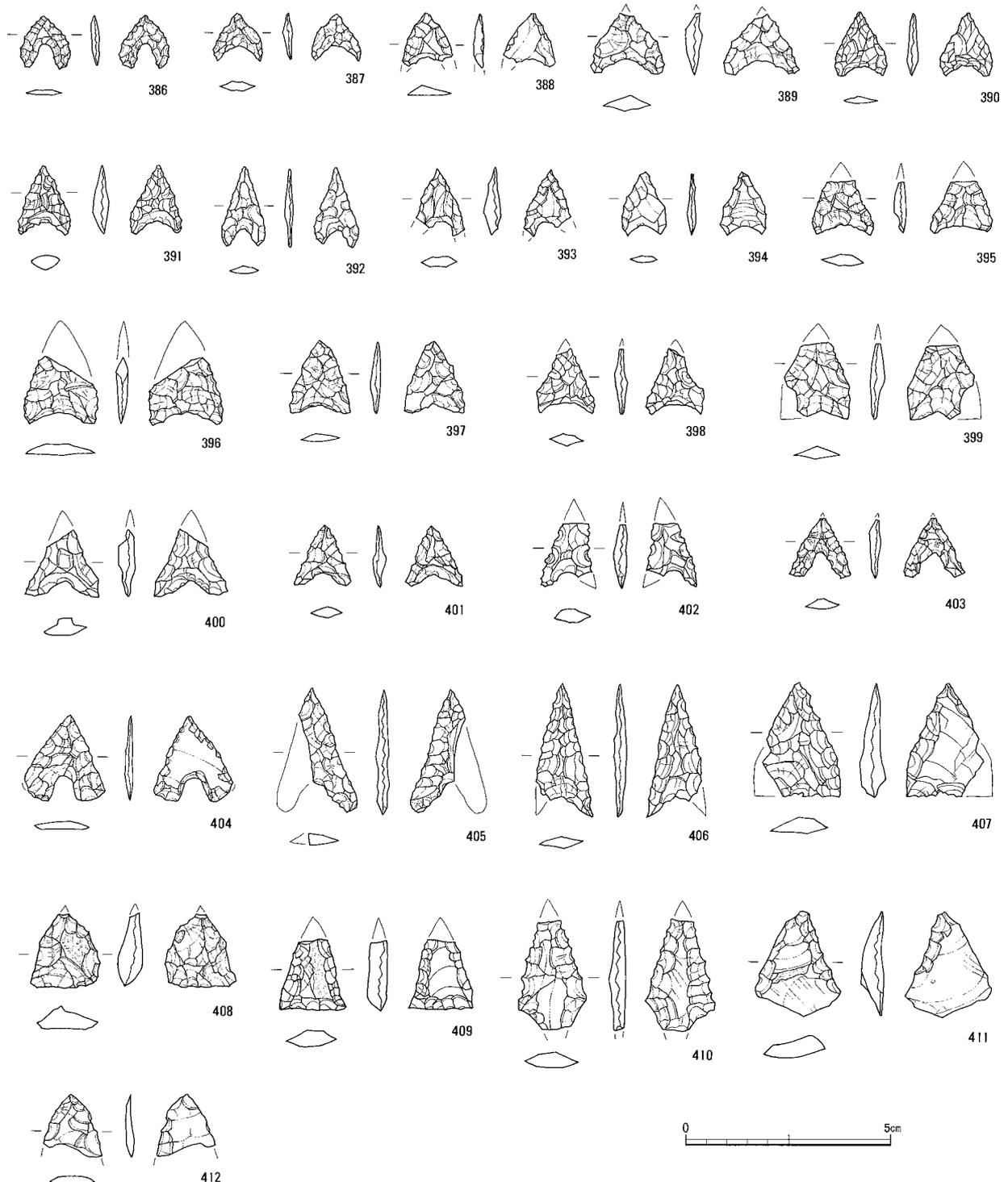
ほぼ同様だが、やや厚手で重さがほぼ150gを越えるものとして457・465・466・468・471・473の6点がみられる。これらは誤差の範囲として捉えるか、あるいは意図的にいくつかの一つの割合で重いものを網に装着していた可能性のいずれかが考えられる。しかし、この程度の差をわざわざ設けても、網全体の重量から考えると大きな影響はないと考えられる

ことから、誤差の範囲と考えておきたい。

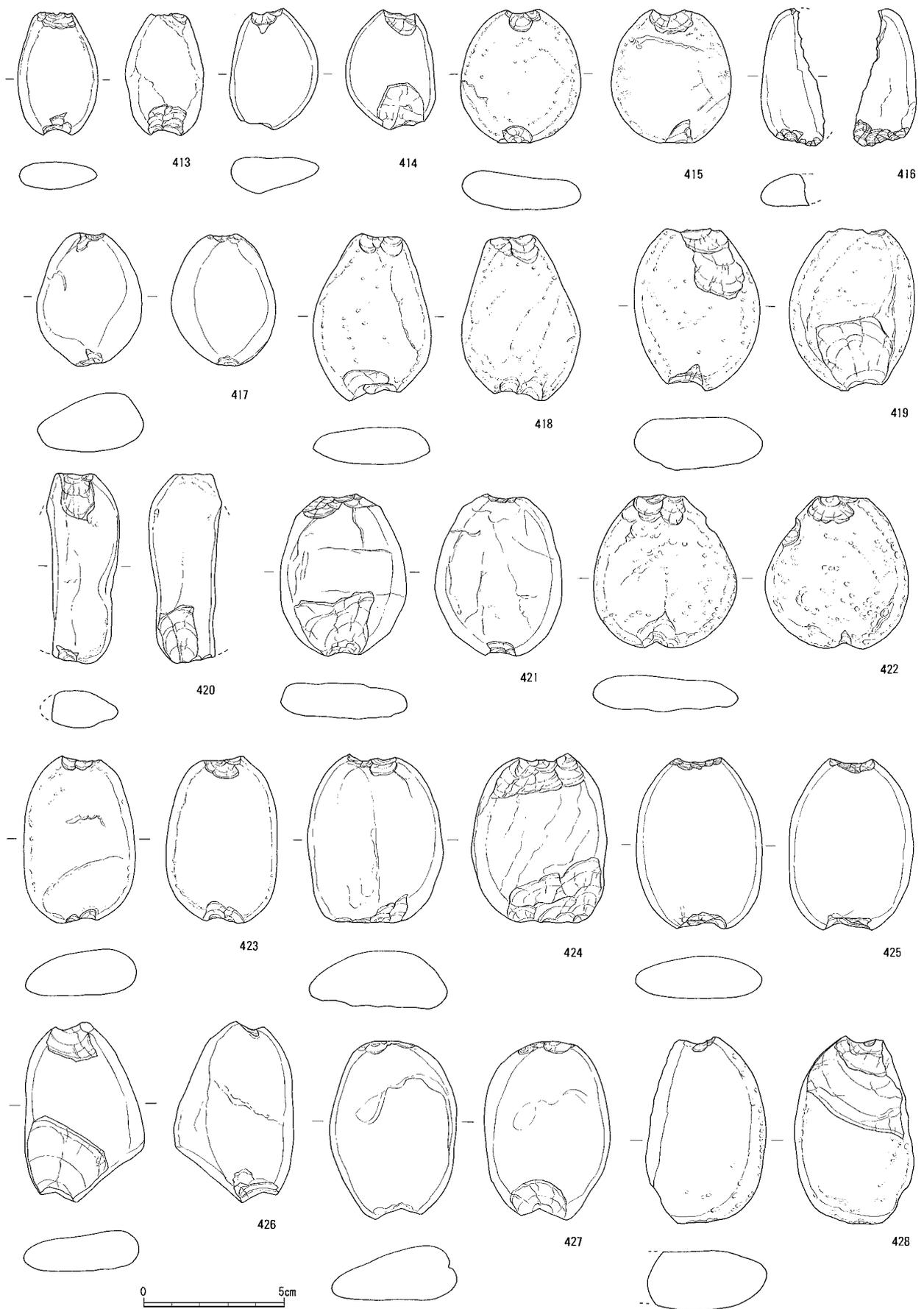
#### ④切目石錘（第43図）

4点が出土した。打欠き石錘に対して、大幅に少ない出土数である。本器種も平面形・重量ともに斉一性が高い。いずれも擦切りによる切目を長軸両端の両面に形成する。

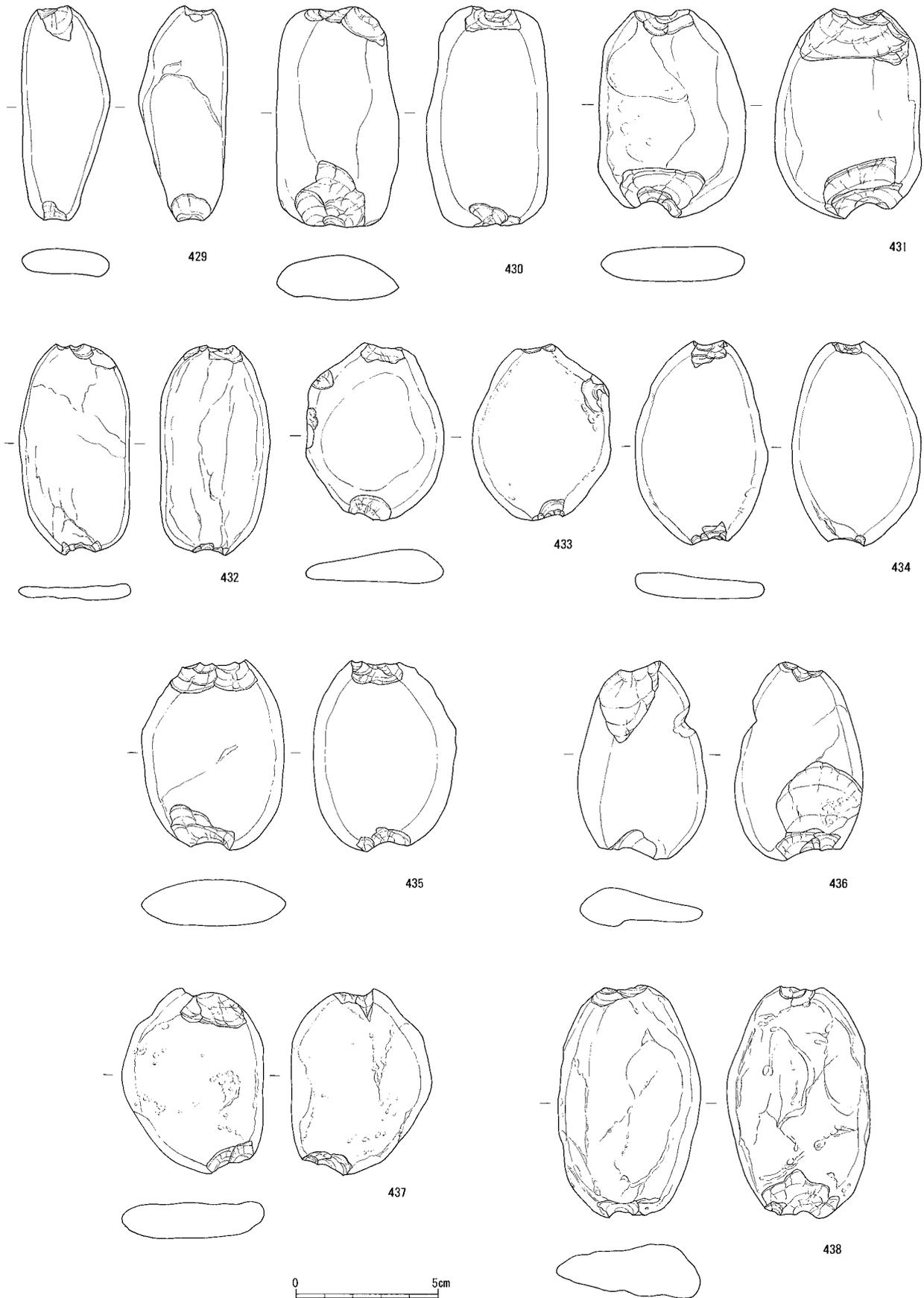
474は、両端とも縁辺が潰れ状を為す剥離面が形



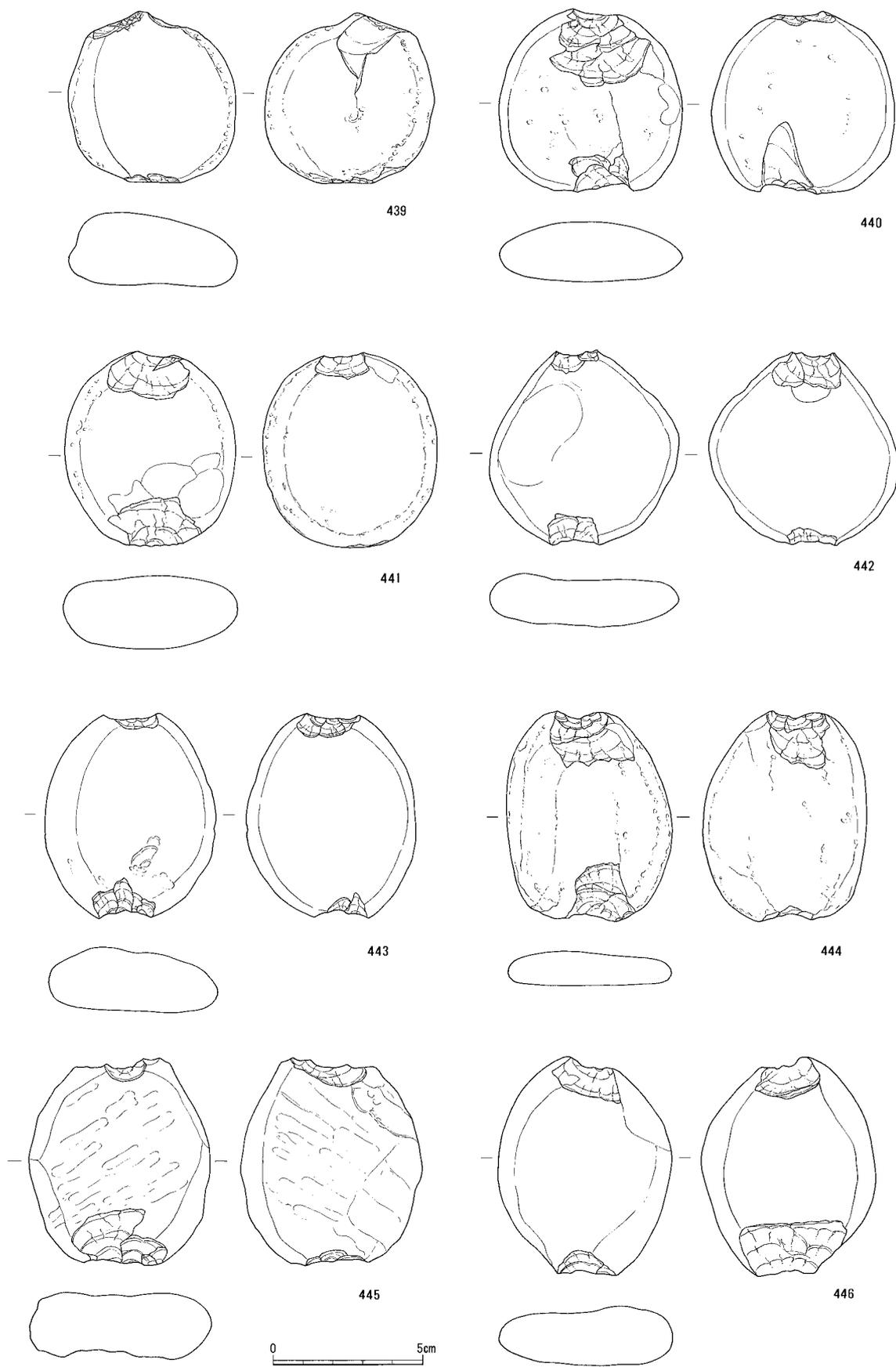
第36図 斎宮池遺跡出土石鏃実測図（2：3）



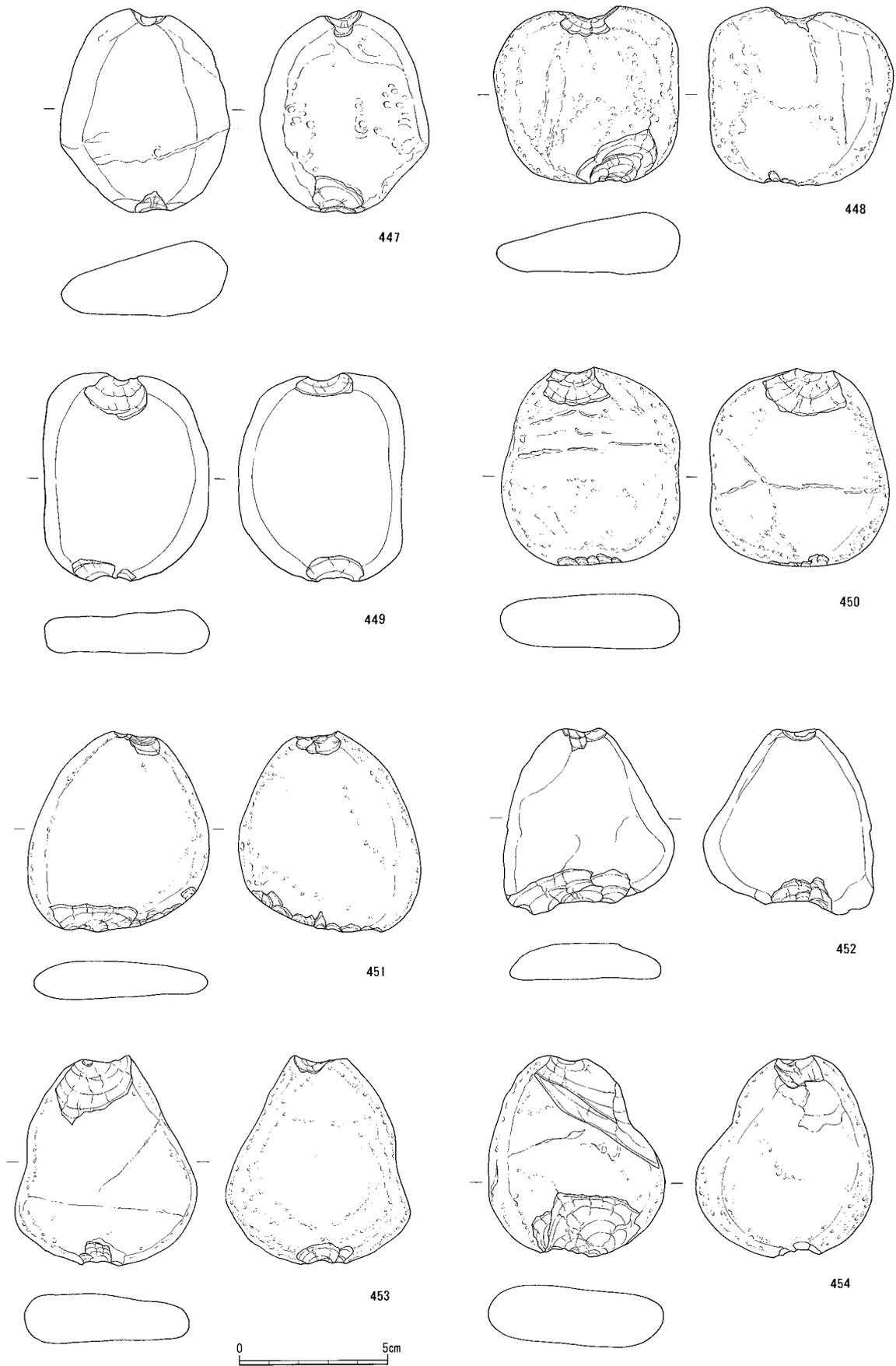
第37図 斎宮池遺跡出土石錘実測図① (1:2)



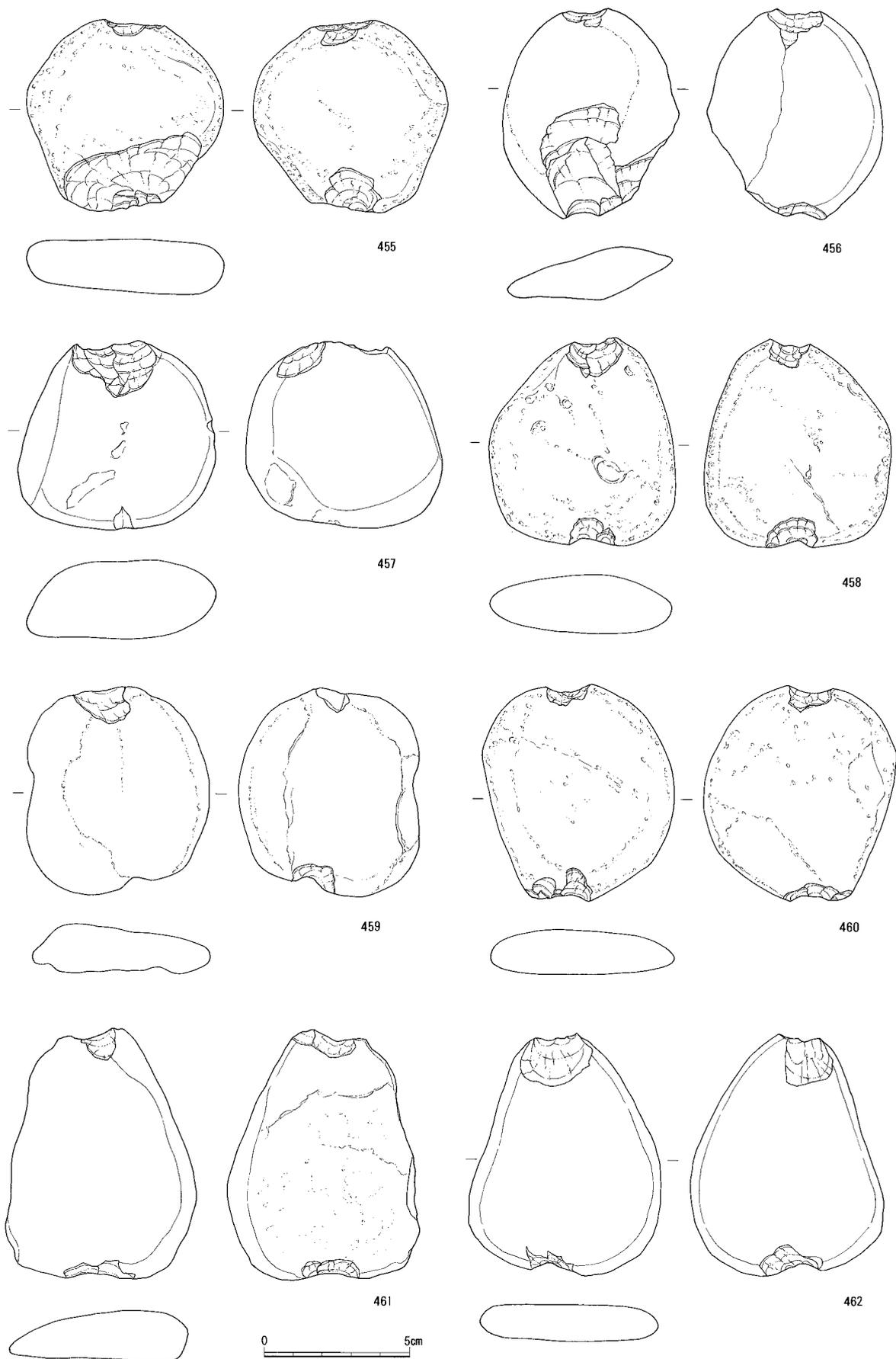
第38図 斎宮池遺跡出土石錘実測図② (1:2)



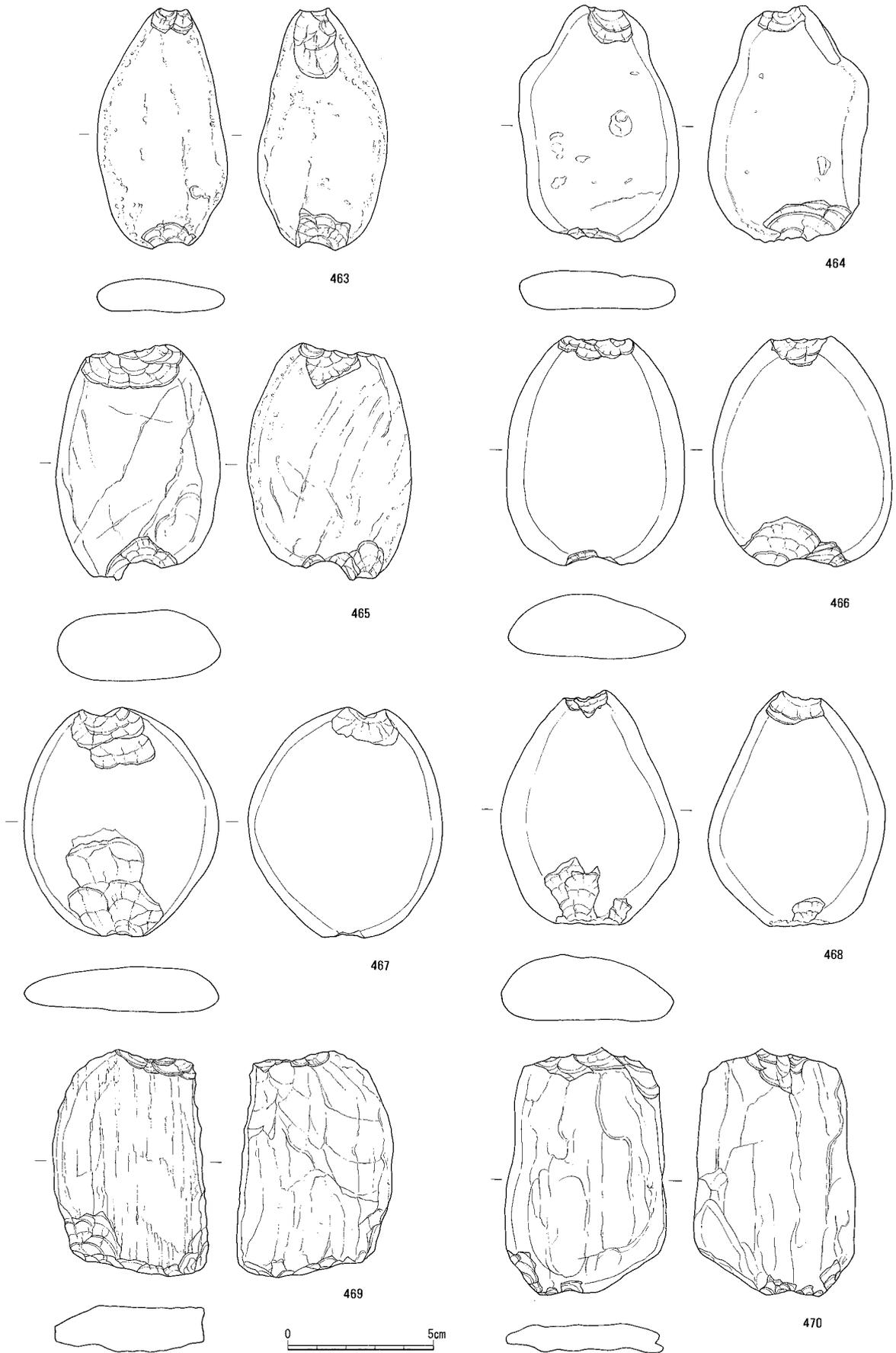
第39図 斎宮池遺跡出土石錘実測図③ (1:2)



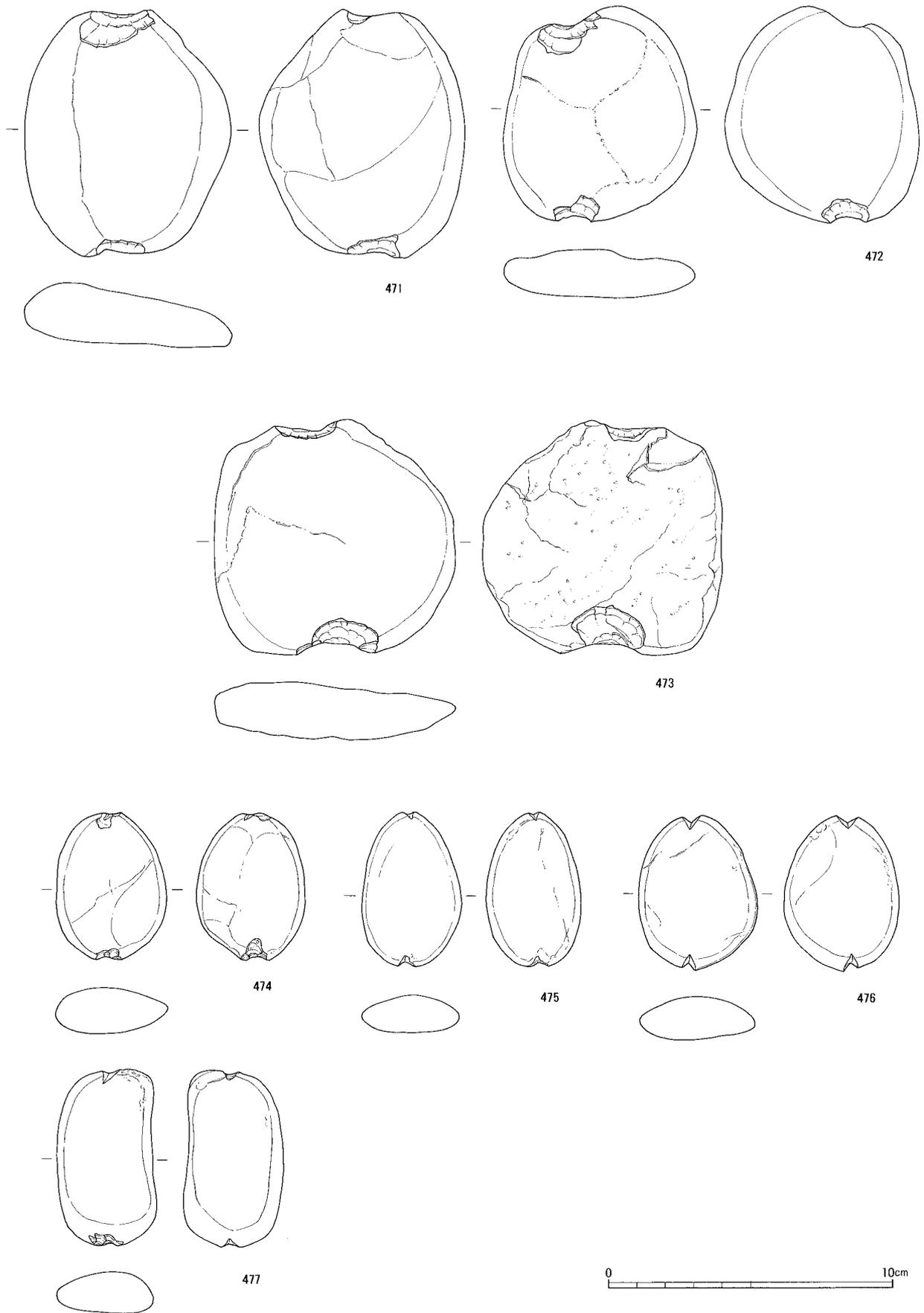
第40図 斎宮池遺跡出土石錘実測図④ (1:2)



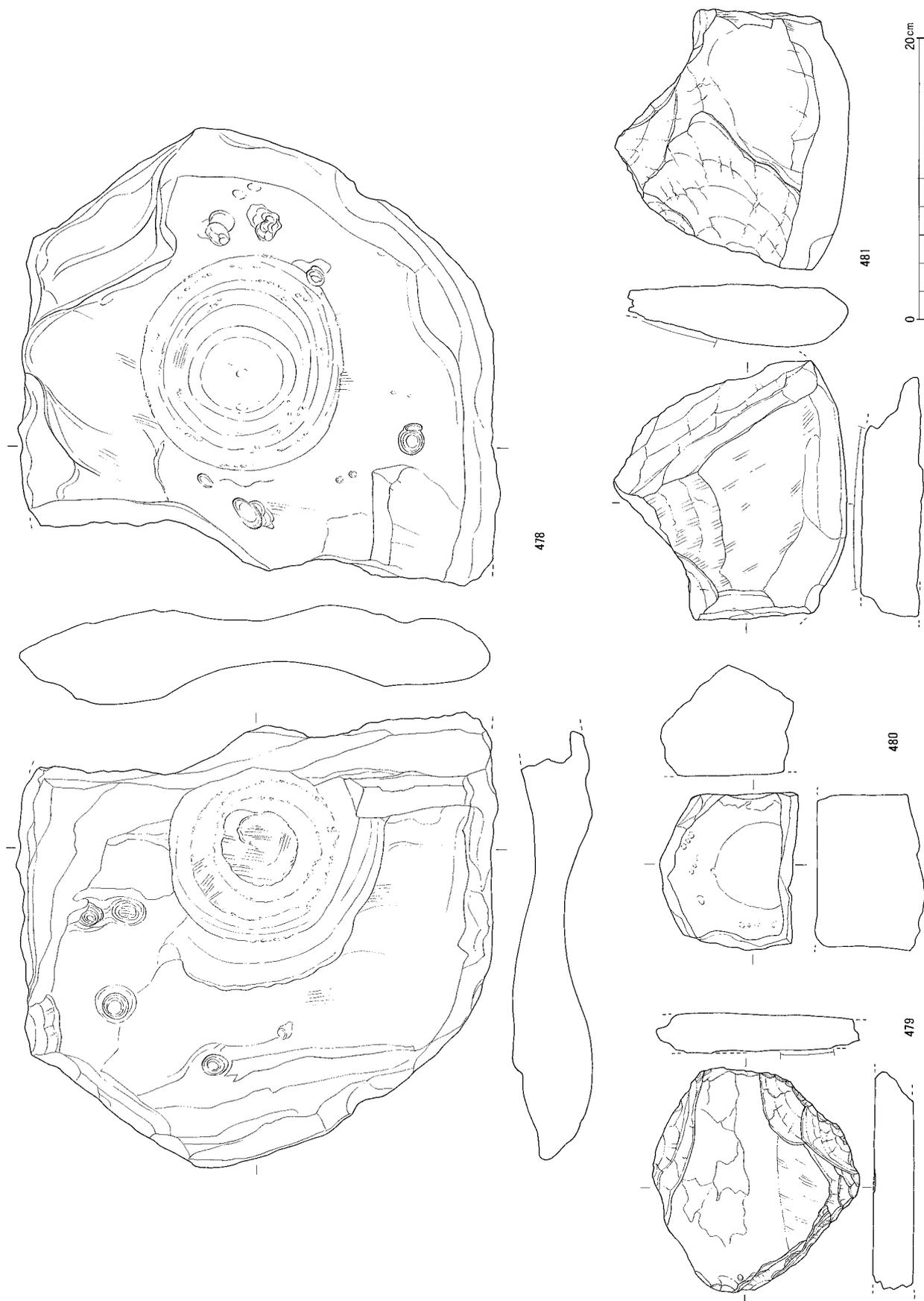
第41図 斎宮池遺跡出土石錘実測図⑤ (1:2)



第42図 斎宮池遺跡出土石錘実測図⑥ (1:2)



第43図 斎宮池遺跡出土石錘実測図⑦ (1:2)



第44図 斎宮池遺跡出土石皿・台石実測図①(1:4)

成された後に、切目を施している。475・476は、いずれも安定した切目が形成されている。476は、整った形態をもち、切目の形成も明瞭である。477は474と同様に潰れ状の弱い剥離痕が形成された後に切目を施している。他の3点に比べるとわずかながら大きく、重量は58.57gを測り、打欠き石錘の小型品とした一群と同様の重量である。

### ⑤石皿・台石（第44・45図）

8点中、7点を図示した。478は、片岩の板状礫を素材とする大型の完形品である。最初は図左面を使用面とし、約3分の1が折損した後に右面を使用したと考えられる。両面共にほぼ正円形を為す明瞭な凹みが形成されている。さらに、その周囲には複数の凹みが見られる。平坦面には全体に弱い磨耗が観察される。使用時の裏面に形成されるいわゆる“床擦れ”に相当するものとも考えられる。479は、周縁の一部が加工され、礫器状になっているが、片面の一部に磨面が見られることから本器種に含めた。480は厚手の石材の破片であり、やはり一部に磨面が形成される。481も破片である。片面に広く磨面が形成され、断面では凹みとなっていることが分かる。482も片面に磨耗痕が残る破片である。483・484は、石皿・台石の破片としてここに含めたが、器体中央に主要な敲打痕が形成されることから、手持ちの敲打石として理解したほうが適切かもしれない。

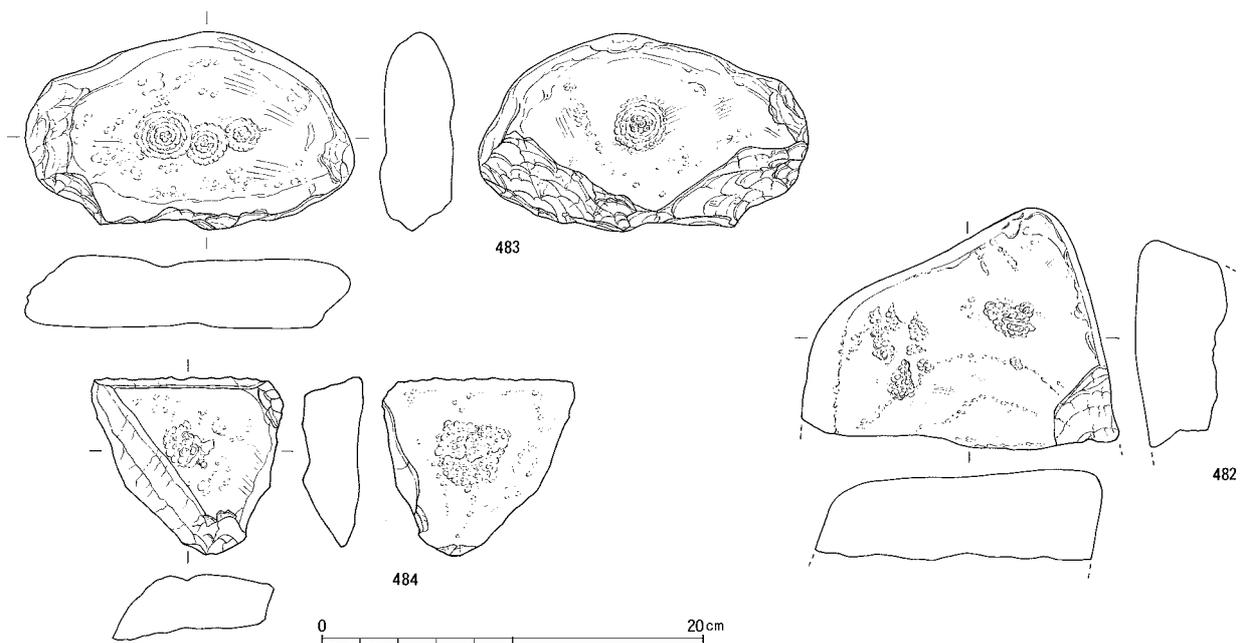
### ⑥敲打石（第46図）

11点を本器種として図示した。器体表裏の平坦面に凹みを形成するものと、周縁部のみに敲打痕が形成されるもの、その両方に敲打痕が残るものがある。

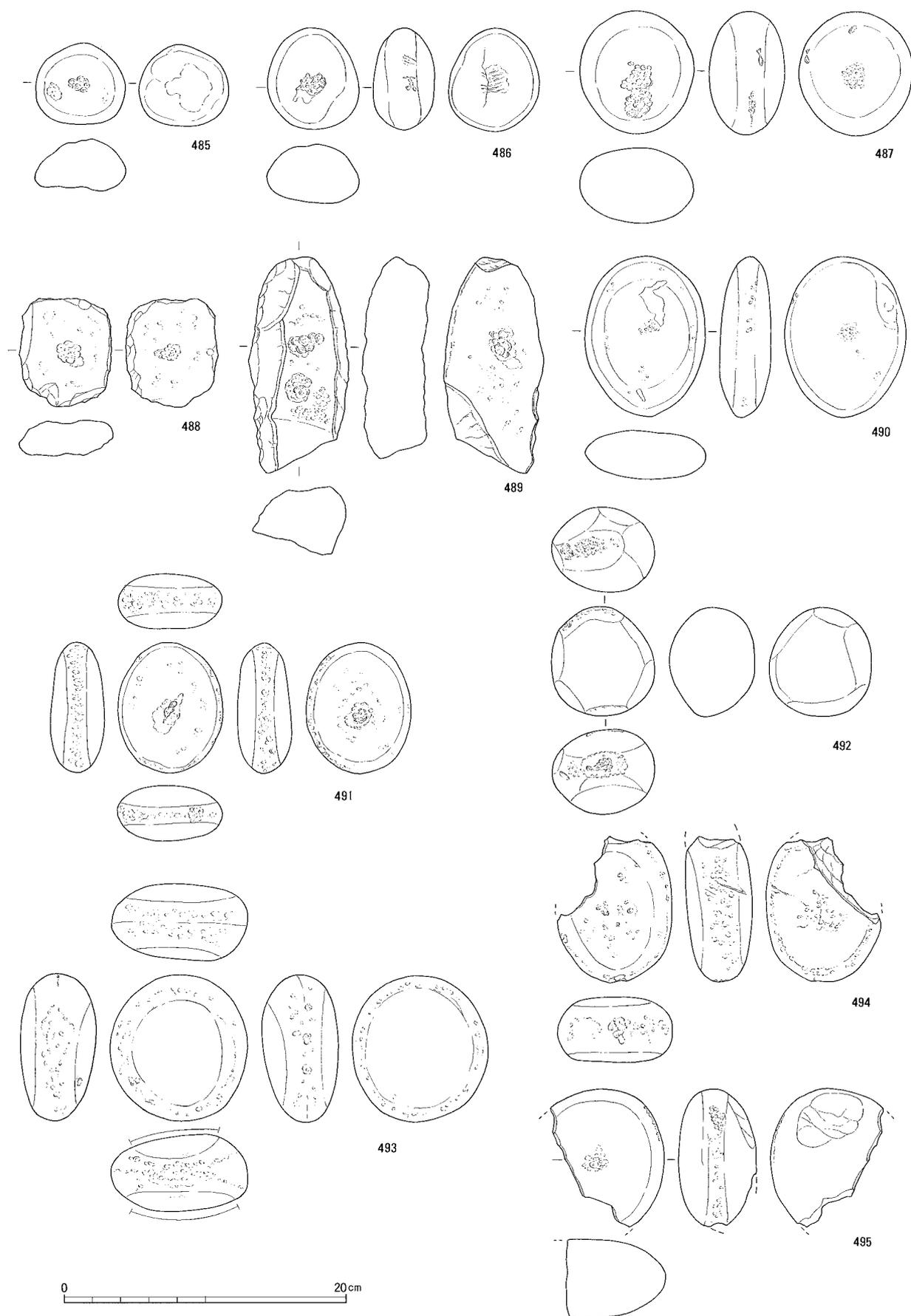
485～489は、表裏のほぼ中心のみに敲打痕の集中を残すものである。485・486は、断面が不整形の自然石を用いる。488は周縁が剥離面となるもので、器形作出のための剥離か、使用による剥離かは判断できない。後者の場合、石器加工用の槌石である可能性も考えられる。489は、大型礫片を敲打石としたもので、483・484もこれと同類に扱うべきか。490・491は、平坦面と共に周縁にも軽微な敲打痕が見られるものである。495は、同様のものの破損品である。492は、ほぼ球形の自然礫を用い、長軸の両端に敲打痕の集中部が形成されている。493は、両面が広く磨面となり、特に図左面では磨面の周囲に稜が形成される。周縁の敲打痕は一部を除いて軽微である。494は、器体の全体に散漫に敲打痕が形成される。495は、全体に桃灰色に変色し、受熱したことがわかる。図右面の表面剥落は「火はね」によるものである。

### ⑦磨石（第47図）

自然楕円礫の表面に、使用によると推定される磨耗面が主に形成されるものを本器種とした。堅果類などの磨り潰し＝粉化に用いられたと推定される石



第45図 斎宮池遺跡出土石皿・台石実測図②（1：4）



第46図 斎宮池遺跡出土石敲石実測図 (1:4)

器である。19点中、10点を図示した。

496・497は完形の小型品である。496は、わずかに敲打痕が観察されるが、磨面を主要使用部位と理解して本器種とした。500は大型の完形品、498・499は同様のものの破片である。501～503は一部に磨面をもつ破片である。503はE 14区とF 12区出土のものが接合している。504・505は、共に縦長の礫を素材とし、504は側縁の一部を欠く。505は完形で、両面に磨面が形成される。

(大下 明)

⑧楔形石器 (第48図)

7点 (サヌカイト5点、チャート2点) 出土した。506は截断面を有する角柱状のもので一部に礫表を

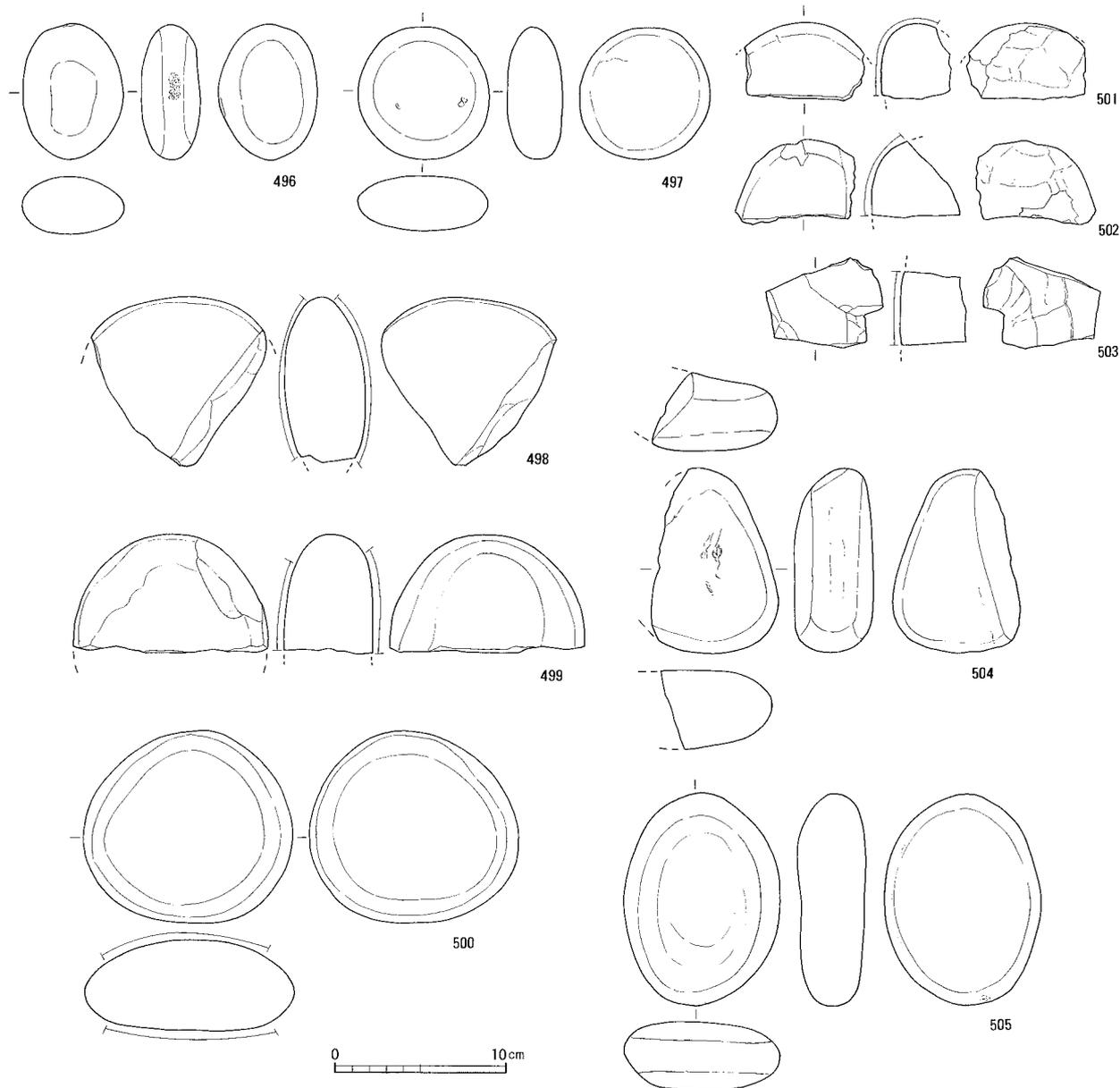
とどめる。507は主として上下端から奥に延びる剥離痕をとどめる厚手のものである。508は各方向からの剥離痕をとどめるもの、509は上下端からの奥に延びる剥離痕並びに截断面をもつもので、共にチャート製である。510は小型薄手のもので上下端から細かな剥離痕をとどめる。511は小型で一部に截断面をもつ。

(久保勝正)

⑨粗製剥片石器 (第48図)

1点 (512) を本器種とした。円礫の礫表の一部を皮をむくように剥ぎ取ったものを素材とし、剥片の末端側を刃部として使用する。打点と対向する縁辺にわずかに小剥離痕が残る。

(大下 明)



第47図 斎宮池遺跡出土磨石実測図 (1:4)

⑩石錐（第49図）

2点出土した。513（チャート）は周縁に加工を施すもので、厚みがあることから、機能部を欠損した石錐と判断した。514（サヌカイト）は中央部が角柱状を呈し、両端を比較的粗い調整で尖らすもので、細身の部分を機能部と考えた。

⑪削器（第49図）

2点（チャート）出土した。515は主として礫面側の長辺に加工を行うもので、片面中央には礫表をとどめる。516は厚みのある縦長状剥片の打面部から右側縁にかけての背腹両面に加工を行うものである。

⑫二次加工痕有剥片（第49図）

二次加工がなされているものの定型的な石器に分類するには躊躇されるものを一括した。4点出土しており、石材はすべてチャートである。517は514同様に石錐あるいは未成品に分類し得るかもしれないが、機能部の作出が不十分と考え本器種に含めた。518は小型剥片の周縁に加工を施し、519は半折した剥片に加工痕をとどめる。520は5cm四方の剥片

の折れ面以外に剥離痕を残すもので、そのあり様から楔形石器の可能性はある。

⑬使用痕有剥片（第49図）

1点（チャート）出土した。521は図の背面上部に礫表をとどめる剥片の一辺に細かな剥離痕がみられる。

⑭石核（第49図）

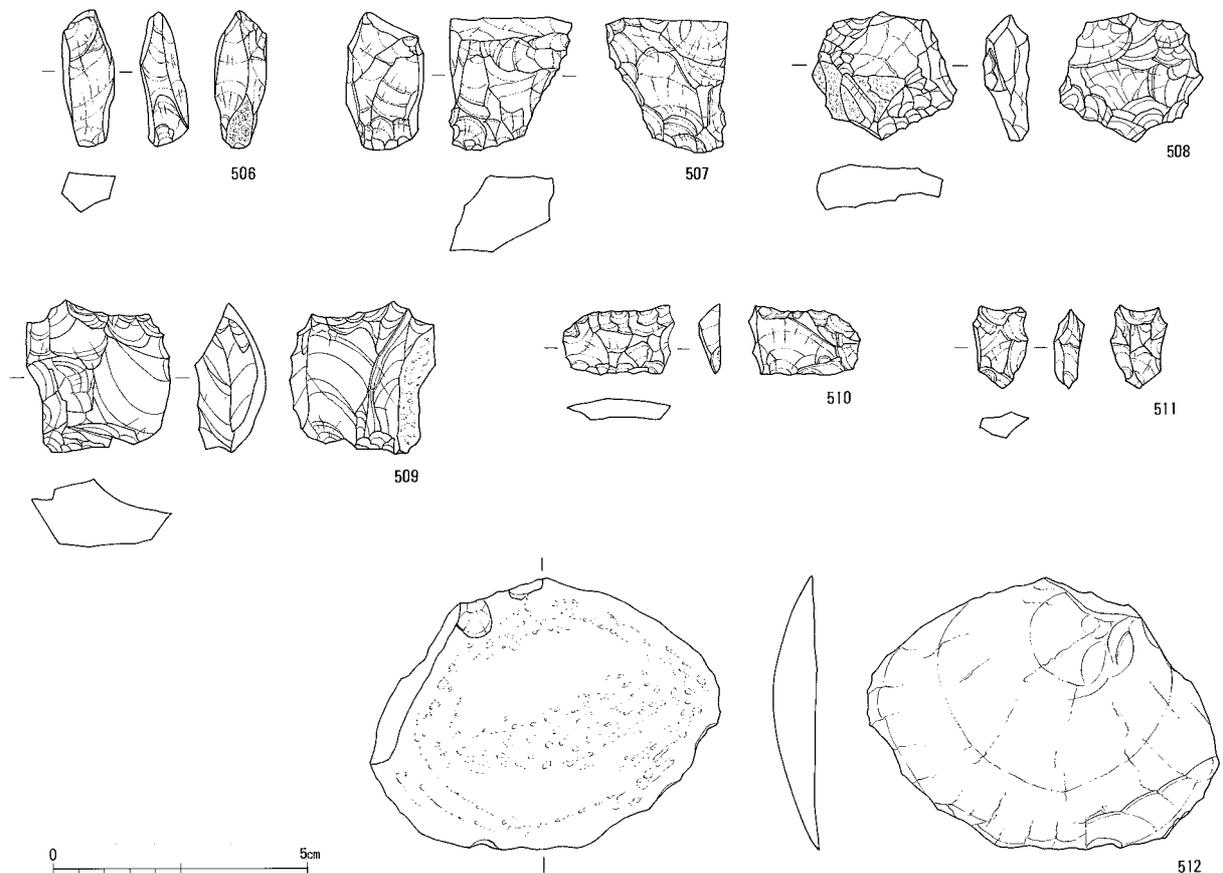
4点（チャート）出土した。522は正面に方向を180度違える剥離痕をとどめる。全体的な剥離痕のあり様から楔形石器の可能性はある。

⑮礫器（第49図）

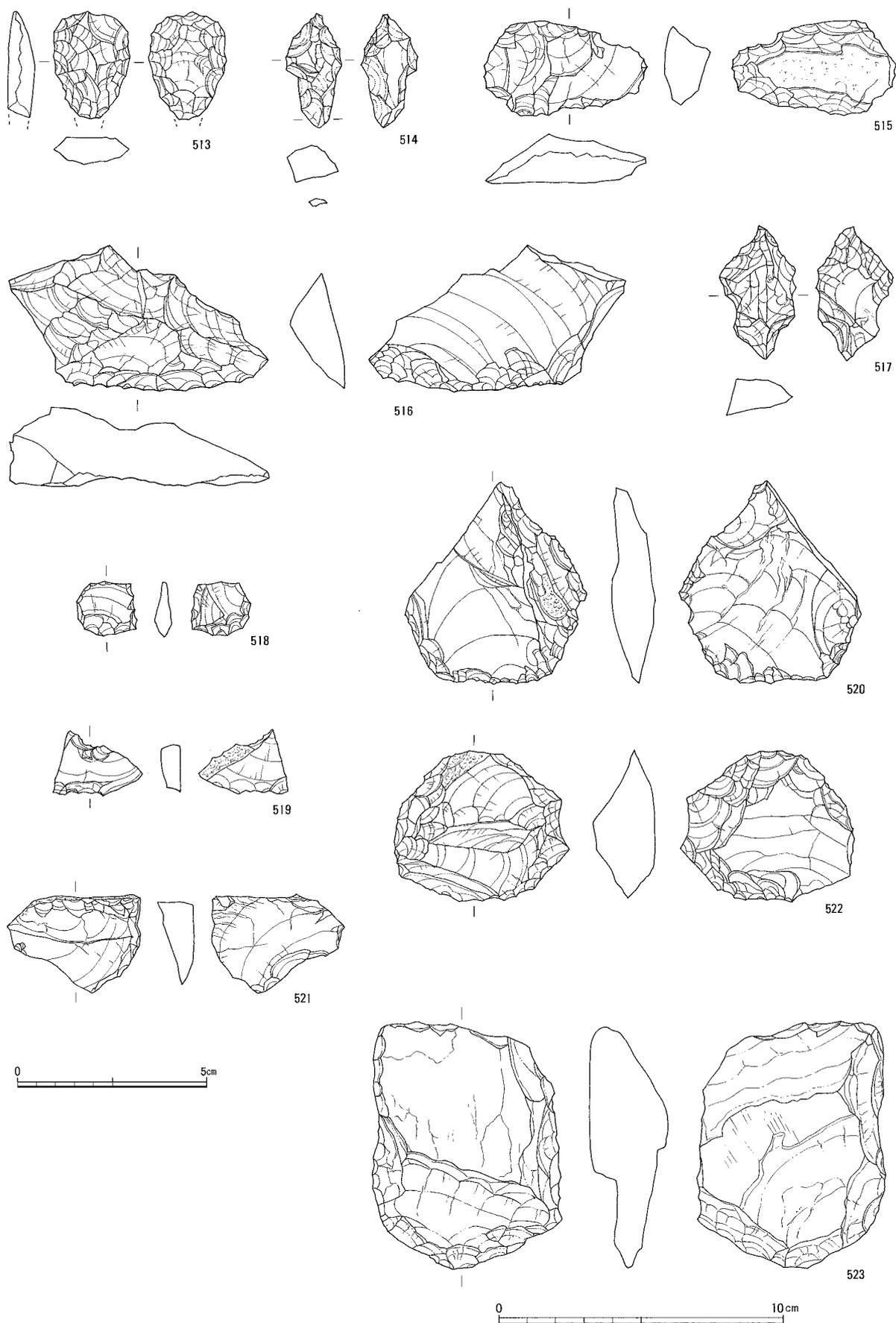
2点出土している。523（緑色片岩）は厚さ3cmほどの板状礫下半の表裏面を大きく剥離し、その縁辺に粗く加工を施すものである。（久保勝正）

⑯磨製石斧（第50図）

6点ある。すべて定角式である。524は、刃部の破片である。全体の約3分の1を残すと考えられる。破損面周囲の剥離は、折損後に形成されている。525も同様の刃部片である。526は、基部の破片である。図左面左側縁からの剥離は、破損後にこちらの側縁



第48図 斎宮池遺跡出土楔形石器・粗製剥片石器実測図（2：3）



第49図 斎宮池遺跡出土石錐・削器・RF・UF・石核・礫器実測図 (513~522=2:3、523=1:2)



第50図 斎宮池遺跡出土磨製石斧実測図 (1:2)

を機能部とする敲打の結果である。他の凹凸は製作、使用時のものと考えられる。527は、片面の全体が凹凸を為し、刃部も現状では丸くなっているが、片面は完成品としての丁寧な研磨面となっている。凹凸を為す面から刃部にかけて淡橙色の変色が観察されることから、受熱によって表面が薄く剥落した結果とも考えられる。528は、大型の完形品である。表面は丁寧に研磨され、光沢をもつ。529は、緑色片岩を素材とし、基部側が欠失した後に、さらに側縁からの破損が見られ、全体に磨耗・風化している。

(大下 明)

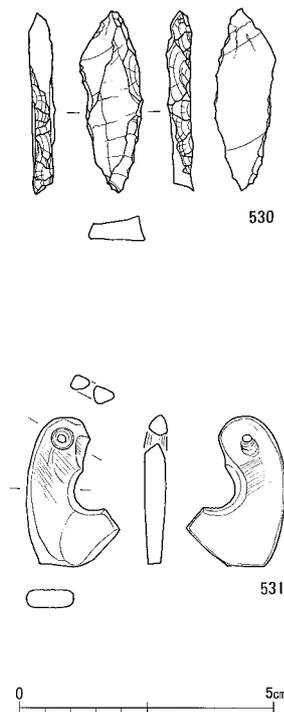
#### ⑰ ナイフ形石器 (第51図)

池敷表土から1点(チャート)が出土した。530は打面部側の一部の縁辺を刃部とし、それ以外の二側縁に背面側から急角度の剥離を施すものである。

(久保勝正)

#### ⑱ 垂飾 (第51図)

531は調査時には「勾玉」とされていたが、縄文時代に通有の勾玉とは形態的に懸隔があるため、より一般的な名称を採用した。



第51図 斎宮池遺跡出土ナイフ形石器・垂飾実測図(2:3)

形態は縦長で、側縁は有孔部から下に向かって弧を描きながら幅を広げ、一方には繰り込みが見られる。孔は両面から穿孔している。繰り込み部は、割れ面ではなく、円弧の一部のようにも見える。下縁は途中で屈曲する二辺によって形成されるが、そのいずれも研磨されており、折損面ではない。図左面の孔右側は折損しているが、その後の使用による摩滅が観察される。断面形は両面が中央に向かってわずかにふくらむ、扁平な形態である。研磨時の線状痕が、両面にわずかに観察される。色調は、やや緑がかかった青白色を呈するが、石材は不明である。

(大下 明)

#### ⑲ 剥片

図示していないが、サヌカイト68点(51.5%)、チャート59点(44.7%)、黒曜石5点(3.8%)の計132点が出土した。重さでみると在地石材のチャートが平均4.6g、遠隔地石材のサヌカイトが平均1.7gとなる。

(久保勝正)

### (4) 古代の土器

#### ① S H 3 出土遺物 (第52図)

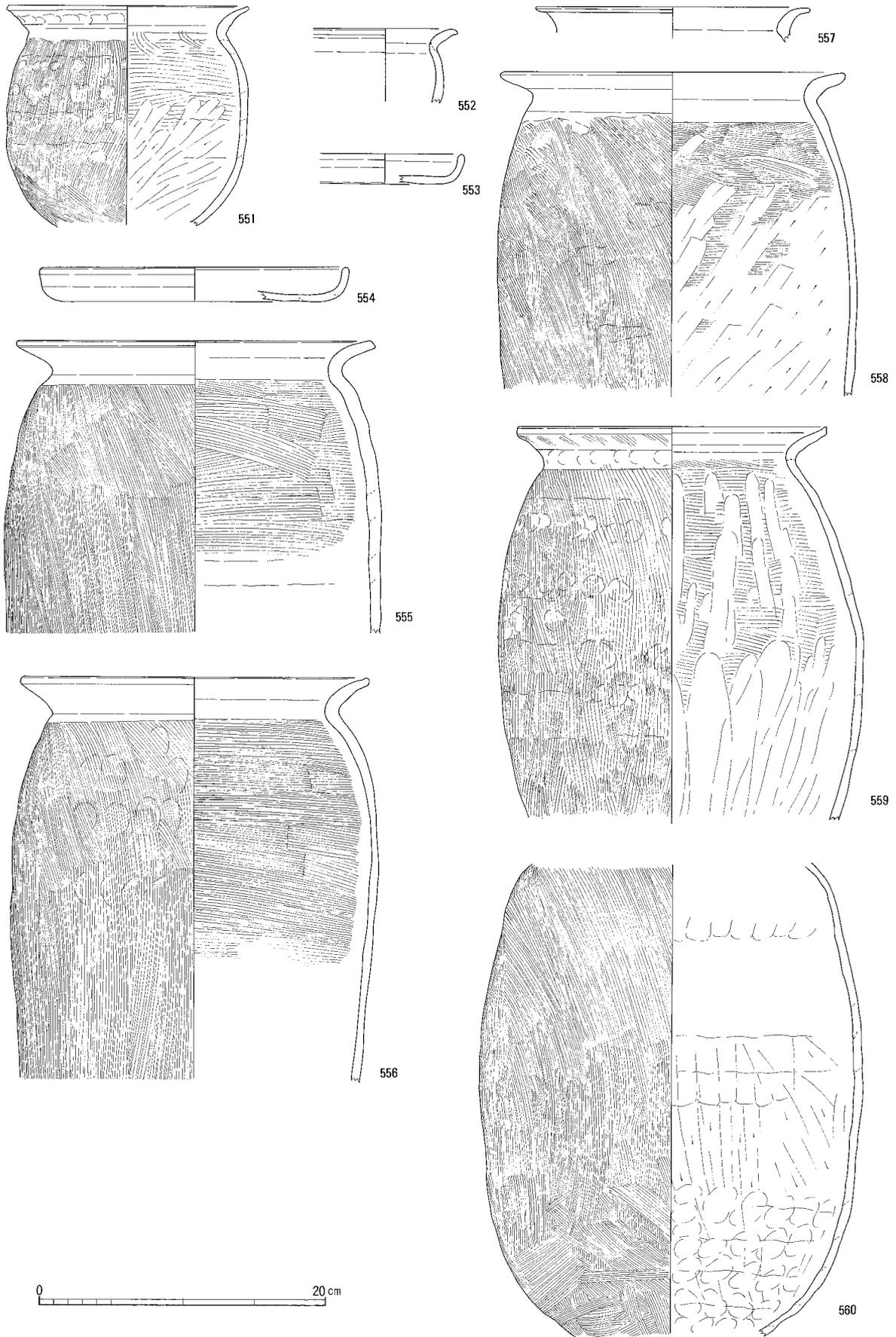
551・552は土師器甕である。551は「く」字状の口縁部に球形の体部を持つ甕で、体部の調整は外面がハケメ、内面は上半がハケメ、下半がヘラケズリされる。上村安生氏の分類でいう甕A1類<sup>①</sup>に相当する。552は小片であるが551と同様の球形の体部を持つ甕であろう。内外面の調整はヨコナデ・ナデによるもので、ハケメ調整は認められない。

553・554は土師器皿である。553は小片のため口径は不明であるが器高は2.1cm、554は口径21.4cmで器高は2.4cmである。両者はともに口縁部と底部の境に丸みがあり、口縁部は内弯気味に立ち上がる。器面の調整は口縁部がヨコナデ、底部外面がヘラケズリである。色調は橙色を呈し、胎土は精良である。これらは斎宮編年第I期第3～4段階<sup>②</sup>に相当しよう。

555・556は土師器長胴甕である。口径はそれぞれ24.9cm・24.2cmで、口縁端部に面を有する。体部の調整はいずれも外面ハケメ、内面は上半ハケメ、下半がナデである。

#### ② S F 10 出土遺物 (第52図)

557は土師器甕である。口径は19cmで口縁部はやや強く屈曲し、端部内面が水平に近い器形となる。



第52図 斎宮池遺跡SH3・SF10・D16-Pit2出土遺物実測図(1:4)

558は土師器長胴甕である。口径24cmで、口縁部内面がやや肥厚する。体部外面と内面上半はハケメ、内面下半がヘラケズリされる。上村分類の甕B 1類に相当する。

### ③D16-Pit 2 出土遺物 (第52図)

559・560は土師器長胴甕である。559は口径を体部最大径が上回り、やや丸みを帯びた器形を呈する。体部は外面と内面上半にハケメが施され、内面下半はヘラケズリではなく、下から指で撫で上げて仕上げられる。560は外面ハケメ、内面はユビオサエ後、下半にヘラケズリが施される。上村分類の甕B 2類に相当する。

### ④包含層他出土遺物 (第53図)

561は土師器甕である。口縁部のみの残存で、器面の剥離・摩滅で調整等、詳細は不明である。

562～564は土師器皿である。口径は18cm～20cm、器高は2cm前後で、口縁部と底部の境に丸みがあり、口縁部は内弯気味に立ち上がる。563・564の器面の調整は口縁部がヨコナデ、底部はヘラケズリである。色調は橙色を呈し、胎土は精良である。これらは斎宮編年第1期第3～4段階に相当しよう。

565は土師器高杯の脚部である。脚部径は4.6cmで、脚柱部は中空である。外面は面取り後、密なハケメが縦方向に施される。奈良時代の所産であろう。

566～570は土師器甕である。566は口径12cm余り

の小型の甕で、口縁部内面がやや肥厚する。568は口縁端部が摘み上げられ、外面端部に面を有する。569・570は口縁部内面がやや肥厚する。571は体部下半が欠損しているため判然としないが口径35cmを超える大型の土師器鍋と考えられる。

572は須恵器甕である。器壁は薄く、口縁部は内弯気味に立ち上がり、頸部との境に僅かに摘み出した突帯がめぐる。

573は山茶椀である。高台径7.8cmで、高台は断面三角形に近い形状を呈す。藤澤良祐氏の編年による第5型式<sup>③</sup>に相当し、12世紀末～13世紀初頭の所産と考えられる。  
(小山憲一)

### 【註】

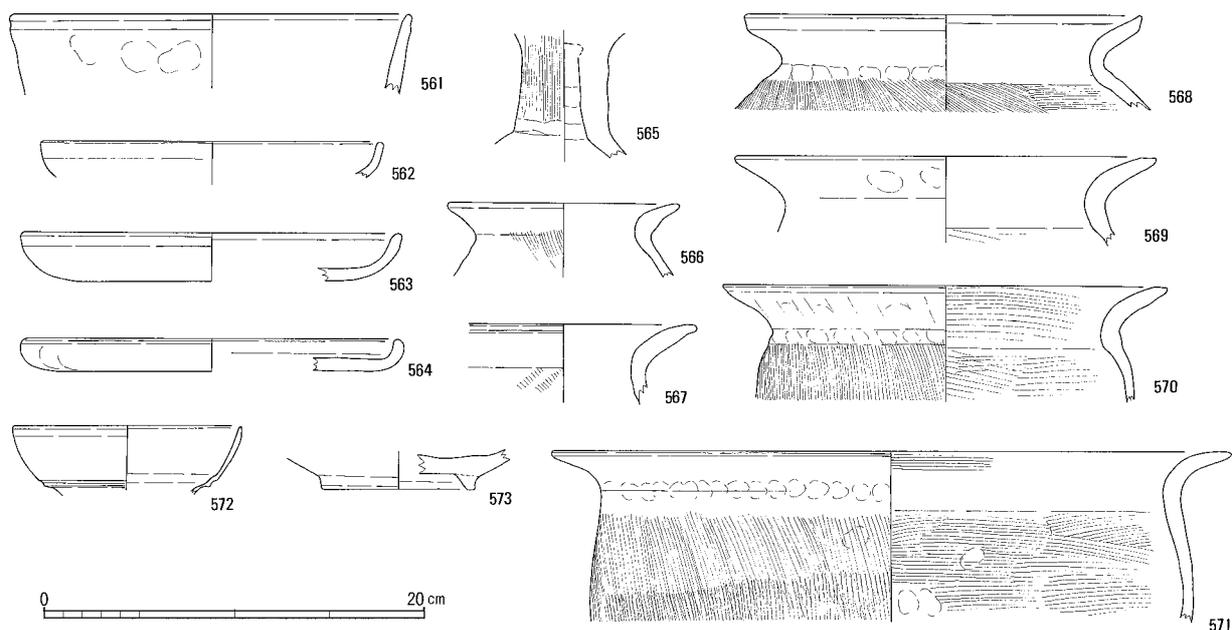
①上村安生「伊勢・伊賀における古代土師器煮炊具の様相」(『鍋と甕そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム 1996年)

以下、古代の土師器甕の分類は上記の分類に拠る。

②『斎宮跡発掘調査報告Ⅰ 内院地区の調査 本文編』(斎宮歴史博物館 2001年)

以下、古代の土師器の編年・時期判断等については、上記の文献に拠る。

③藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」(『研究紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター 1994年)



第53図 斎宮池遺跡包含層他出土遺物実測図 (1:4)

遺物 番号	登録 番号	器 種	出土位置		法量 (cm)			成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色 調	残存	備 考
			小地区等	遺構層位	口径	器高	その他						
1	064-04	縄文土器 深鉢	D 8	SK 2	-	-	-	外：隆帯・条線 内：ナデ	粗	並	橙7.5YR7/6	体部 小片	
2	064-05	縄文土器 深鉢	D 8	SK 2	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	明赤褐2.5YR5/6	口縁部 小片	
3	074-01	縄文土器 深鉢C	C 16	SH 3 黄褐色土	-	-	-	外：沈線・刺突 内：ナデ	粗	並	外：灰黄褐10YR4/2 内：明黄褐10YR6/6	体部 小片	
4	069-01	縄文土器 深鉢C	C 16	SH 3 黒褐色粘 質土	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	やや 密	並	黄褐2.5Y5/3	口縁部 小片	
5	088-11	縄文土器 深鉢A	C 16	SH 3 灰黄褐色 土	-	-	-	外：沈線 内：調整不明	やや 密	並	明褐7.5YR5/6	口縁部 小片	
6	071-01	縄文土器 深鉢	C 16	SH 3	-	-	-	外：沈線・縄文 (L?) 内：ナデ	やや 密	並	にぶい黄褐10YR5/3	口縁部 小片	口縁端面に縄文
7	064-07	縄文土器 深鉢A	D 16	Pit 2	-	-	-	外：沈線・刺突 内：ナデ	粗	並	外：にぶい橙7.5YR6/4 内：橙7.5YR6/6	体部 小片	
8	064-03	縄文土器 深鉢	C 9	Pit 3	-	-	-	外：沈線 内：ナデ・オサエ	粗	並	外：にぶい褐7.5YR5/3 内：にぶい黄褐10YR7/4	体部 小片	
9	064-01	縄文土器 深鉢	D 9	Pit 4	-	-	底径 9.2	外：ナデ・オサエ 内：ナデ・オサエ	粗	並	外：橙7.5YR6/6 内：橙7.5YR6/8	底部 2/12	
10	064-06	縄文土器 深鉢	E 10	Pit 3	-	-	-	外：隆帯・刺突 内：ナデ	粗	並	外：橙5YR6/6 内：明黄褐10YR7/6	体部 小片	
11	064-02	縄文土器 深鉢	E 10	Pit 3	-	-	-	外：条線 内：ナデ・オサエ	粗	並	外：橙5YR6/6 内：にぶい褐7.5YR5/2	体部 小片	
12	087-01	縄文土器 深鉢E	D 11	Pit11	-	-	-	外：ナデ 内：ナデ	やや 密	並	明黄褐10YR6/6	口縁部 小片	
13	073-05	縄文土器 深鉢B	D 10	土器集中 地点 1	-	-	-	外：隆帯・刺突・条線 内：ナデ	やや 密	並	にぶい褐7.5YR5/4	口縁部 小片	
14	096-09	縄文土器 深鉢	D 11	土器集中 地点 3	-	-	-	外：オサエ・ナデ・刺突 内：剥離	やや 粗	並	黄褐10YR5/6	把手 部分	
15	088-08	縄文土器 深鉢E	D 11	土器集中 地点 3	-	-	-	外：ナデ 内：ナデ・オサエ	やや 粗	並	明褐7.5YR5/6	口縁部 小片	
16	078-07	縄文土器 深鉢	D 11	土器集中 地点 3	-	-	-	外：沈線・縄文 (LR) 内：ミガキ	粗	並	外：にぶい黄褐10YR6/4 内：黄灰2.5Y5/1	口縁部 小片	
17	097-05	縄文土器 深鉢	D 10	土器集中 地点 1	-	-	底径 12.0	外：ナデ・オサエ 内：ナデ・オサエ	密	並	にぶい黄褐10YR5/4	底部 4/12	
18	097-04	縄文土器 深鉢	D 11	土器集中 地点 3	-	-	底径 11.7	外：調整不明 内：調整不明	やや 密	並	にぶい黄褐10YR5/4	底部 8/12	
19	059-06	縄文土器 深鉢A	C 11・12	SK 7	-	-	-	外：隆帯・刺突・沈線 内：ナデ	やや 密	並	外：褐灰10YR4/1 内：灰黄褐10YR5/2	口縁部 小片	059-07と接合
19	059-07	縄文土器 深鉢A	C 11・12	SK 7	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	やや 密	並	外：黒褐10YR3/1 内：にぶい黄褐10YR7/4	体部 小片	059-06と接合
20	059-03	縄文土器 深鉢A	C 11	SK 7	-	-	-	外：隆帯・沈線・刺突 (竹管) 内：ナデ・オサエ	粗	並	外：にぶい黄褐10YR7/4～橙 5YR6/6 内：にぶい黄褐10YR5/3	口縁部 小片	
21	060-01	縄文土器 深鉢A	C 11・12	SK 7	-	-	-	外：隆帯・刺突・沈線 内：ナデ	やや 密	並	外：暗灰N3/0 内：にぶい黄褐10YR7/4	口縁部 小片	062-01・062-03 と接合
21	062-01	縄文土器 深鉢A	C 11	SK 7	-	-	-	外：沈線・ナデ 内：ナデ・オサエ	粗	並	外：にぶい黄褐10YR4/3 内：にぶい黄褐10YR6/4	体部 小片	060-01・062-03 と接合
21	062-03	縄文土器 深鉢A	C 11	SK 7	-	-	-	外：沈線・ナデ 内：ナデ	粗	並	外：にぶい黄褐10YR5/4 内：明黄褐10YR6/6	体部 小片	060-01・062-01 と接合
22	060-03	縄文土器 深鉢A	C 11	SK 7	-	-	-	外：沈線・ナデ 内：ナデ	やや 粗	並	明黄褐10YR7/6	口縁部 小片	
23	060-04	縄文土器 深鉢A	C 11・12	SK 7	-	-	-	外：沈線・ナデ 内：ナデ	やや 粗	並	にぶい黄褐10YR6/4	口縁部 小片	
24	060-06	縄文土器 深鉢A	C 11・12	SK 7	-	-	-	外：沈線・ナデ 内：ナデ	やや 粗	並	にぶい黄褐10YR5/3	口縁部 小片	
25	060-07	縄文土器 深鉢A	C 11	SK 7	-	-	-	外：沈線・ナデ 内：ナデ	やや 粗	並	外：にぶい黄褐10YR5/4 内：黒10YR2/1	口縁部 小片	
26	059-01	縄文土器 深鉢B	C 11	SK 7	-	-	-	外：隆帯・刺突・沈線 内：ナデ	やや 粗	並	外：明褐7.5YR5/6 内：黒2.5Y2/1	口縁部 小片	

第9表 斎宮池遺跡出土土器・土製品観察表①

遺物 番号	登録 番号	器 種	出土位置		法量 (cm)			成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色 調	残存	備 考
			小地区等	遺構層位	口径	器高	その他						
27	063-04	縄文土器 深鉢A	C11・12	SK7	-	-	-	外：沈線・刺突 内：ナデ	粗	並	明黄褐10YR6/6	体部 小片	
28	063-07	縄文土器 深鉢B	C11・12	SK7	-	-	-	外：隆帯・沈線・ナデ 内：ナデ・オサエ	粗	並	外：にぶい黄橙10YR6/4 内：灰5Y4/1	口～頸 部付近	
29	063-05	縄文土器 深鉢	C11	SK7	-	-	-	外：隆帯・沈線・ナデ 内：ナデ	粗	並	外：にぶい黄橙10YR6/4 内：にぶい黄橙10YR7/4	口～頸 部付近	
30	063-06	縄文土器 深鉢A	C11・12	SK7	-	-	-	外：隆帯・沈線・ナデ 内：ナデ・オサエ	粗	並	外：にぶい黄橙10YR5/3 内：暗灰黄2.5Y5/2	口～頸 部付近	
31	062-02	縄文土器 深鉢	C11・12	SK7	-	-	-	外：沈線・ナデ 内：ナデ・オサエ	密	並	外：にぶい黄橙10YR6/3 内：にぶい黄2.5Y6/3	頸部 小片	
32	059-05	縄文土器 深鉢C	C11・12	SK7	-	-	-	外：沈線・ナデ 内：ナデ	やや 密	並	黒褐10YR3/2	口縁部 小片	
33	059-08	縄文土器 深鉢C	C11・12	SK7	-	-	-	外：隆帯・沈線・刺突 内：ナデ	やや 粗	並	橙7.5YR6/6	口縁部 小片	
34	059-04	縄文土器 深鉢C	B11・12 C11・12	SK7	-	-	-	外：沈線・ナデ 内：ナデ	やや 粗	並	オリーブ黒7.5Y3/1	口縁部 小片	
35	062-06	縄文土器 深鉢A	C11・12	SK7	-	-	-	外：沈線・ナデ 内：ナデ・オサエ	粗	並	外：にぶい褐7.5YR5/4 内：にぶい黄橙10YR6/4	体部 小片	063-02と接合
35	063-02	縄文土器 深鉢A	C11・12	SK7	-	-	-	外：沈線・ナデ 内：ナデ・オサエ	粗	並	外：褐7.5YR4/3 内：にぶい黄橙10YR7/4	体部 小片	062-06と接合
36	063-01	縄文土器 深鉢	C11・12	SK7	-	-	-	外：沈線・ナデ 内：ナデ・オサエ	粗	並	外：にぶい黄橙10YR5/3 内：橙7.5YR7/6	体部 小片	
37	059-02	縄文土器 深鉢	C11	SK7	-	-	-	外：羽状沈線 内：ナデ	やや 粗	並	外：明褐7.5YR5/6 内：黒2.5Y2/1	体部 小片	
38	060-02	縄文土器 深鉢	C11	SK7	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	やや 粗	並	外：黒褐10YR3/2 内：浅黄2.5Y7/3	体部 小片	
39	063-03	縄文土器 深鉢	B11・12 C11・12	SK7	-	-	-	外：沈線・ナデ 内：ナデ	粗	並	外：明褐7.5YR5/6 内：橙7.5YR6/6	体部 小片	
40	062-04	縄文土器 深鉢	C11・12	SK7	-	-	-	外：沈線・ナデ 内：ナデ	粗	並	にぶい黄橙10YR6/4	体部 小片	
41	062-05	縄文土器 深鉢D	C11	SK7	-	-	-	外：縄文(L) 内：ナデ	粗	並	外：にぶい赤褐5YR5/4 内：明赤褐5YR5/6	体部 小片	
42	060-09	縄文土器 深鉢	C11・12	SK7	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	黄褐10YR5/6	口縁部 小片	沈線下に右下がりの沈線か縄文
43	060-05	縄文土器 深鉢E	C11	SK7	9.2	-	-	外：ナデ 内：ナデ	やや 密	並	外：にぶい黄橙10YR6/4 内：灰黄褐10YR4/2	口縁部 3/12	
44	060-08	縄文土器 深鉢E	B11・12 C11・12	SK7	-	-	-	外：ナデ 内：ナデ	やや 密	並	にぶい黄橙10YR6/4	口縁部 小片	
45	061-04	縄文土器 鉢?	C11	SK7	-	-	底径 7.8	外：ナデ 内：ナデ・オサエ	粗	並	外：にぶい黄橙10YR6/4 内：灰黄褐10YR4/2	底部 10/12	
46	061-01	縄文土器 深鉢	C11・12	SK7	-	-	底径 10.2	外：ナデ・オサエ 内：ナデ・オサエ	粗	並	外：にぶい褐7.5YR5/4 内：橙7.5YR6/6	底部 2/12	
47	061-05	縄文土器 深鉢	C11・12	SK7	-	-	底径 10.6	外：ナデ・オサエ 内：ナデ・オサエ	粗	並	外：橙5YR6/6 内：にぶい黄橙10YR7/3	底部 2/12	
48	061-02	縄文土器 深鉢	C11・12	SK7	-	-	底径 11.9	外：ナデ・オサエ 内：ナデ・オサエ	粗	並	黒褐2.5Y3/2	底部 2/12	
49	061-03	縄文土器 深鉢	B11・12 C11・12	SK7	-	-	底径 16.1	外：ナデ・オサエ 内：ナデ・オサエ	粗	並	にぶい黄橙10YR6/4	底部 2/12	
50	075-06	縄文土器 深鉢A	C13	包含層	-	-	-	外：沈線・縄文(LR) 内：ナデ・オサエ	粗	並	にぶい黄橙10YR6/4	口縁部 小片	51と同一個体
51	073-03	縄文土器 深鉢A	C13	包含層	-	-	-	外：沈線・縄文(LR) 内：ナデ	やや 密	並	外：にぶい黄橙10YR6/4 内：明褐7.5YR5/6	口縁部 小片	50と同一個体
52	072-05	縄文土器 深鉢A	D10	包含層	-	-	-	外：隆帯・刺突(竹管)・円孔 内：ナデ	やや 密	並	褐灰10YR4/1	口縁部 小片	
53	005-03	縄文土器 深鉢A	-	表面採集	-	-	-	外：隆帯・刺突(竹管)・キザミ 内：ヨコナデ・ナデ	やや 粗	並	外：にぶい褐7.5YR5/3 内：にぶい黄橙10YR7/3・橙 7.5YR7/6	口縁部 小片	
54	072-06	縄文土器 深鉢A	C7	包含層	-	-	-	外：隆帯・沈線・刺突・円孔 内：ナデ	やや 密	並	外：にぶい黄橙10YR6/3 内：にぶい黄橙10YR7/2	口縁部 小片	

第10表 斎宮池遺跡出土土器・土製品観察表②

遺物 番号	登録 番号	器 種	出土位置		法量 (cm)			成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色 調	残存	備 考
			小地区等	遺構層位	口径	器高	その他						
55	003-04	縄文土器 深鉢A	範確Aト レンチ付 近	表面採集	-	-	-	外：隆帯・刺突・沈線 内：ヨコナデ・ナデ	粗	やや 不良	外：にぶい黄橙10YR7/4 内：褐灰10YR4/1・灰黄褐 10YR4/2	口縁部 小片	
56	068-01	縄文土器 深鉢B	B13	池敷表土	-	-	-	外：隆帯・刺突 内：ナデ	やや 密	並	にぶい黄2.5Y6/3	口縁部 小片	
57	011-07	縄文土器 深鉢A	範確Aト レンチ	包含層	-	-	-	外：隆帯・沈線 内：ナデ	やや 粗	やや 不良	外：浅黄2.5Y7/3 内：明黄褐10YR7/6	口縁部 小片	
58	084-04	縄文土器 深鉢A	C9	池敷表土	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	外：橙2.5YR6/6 内：橙2.5YR6/8	口縁部 小片	
59	076-02	縄文土器 深鉢A	D・E12	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ・オサエ	粗	並	外：にぶい黄褐10YR5/3 内：にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 小片	
60	065-02	縄文土器 深鉢A	-	表面採集	-	-	-	外：隆帯・沈線・条線・凹点 内：ナデ・オサエ	粗	並	外：にぶい褐7.5YR5/4 内：橙7.5YR7/6	口縁部 小片	
61	009-02	縄文土器 深鉢A	範確Aト レンチ	包含層	-	-	-	外：隆帯・凹点・沈線 内：オサエ	粗	良	橙7.5YR7/6～暗灰黄2.5Y4/2	口縁部 小片	
62	070-07	縄文土器 深鉢A	D12	包含層	-	-	-	外：隆帯・刺突・沈線 内：ナデ	やや 密	並	にぶい黄褐10YR5/4	口縁部 小片	
63	069-04	縄文土器 深鉢A	E12	包含層	-	-	-	外：隆帯・沈線・円孔・ナデ 内：ナデ	やや 密	並	明褐7.5YR5/6	口縁部 小片	
64	003-06	縄文土器 深鉢A	範確Aト レンチ	包含層	-	-	-	外：隆帯・沈線・ヨコナデ 内：ヨコナデ・ナデ	やや 粗	良	橙7.5YR7/6	口縁部 小片	
65	016-08	縄文土器 深鉢A	-	表面採集	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	外：にぶい橙5YR6/4 内：にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 付近	
66	013-03	縄文土器 深鉢A	範確No.2 ～Aトレ ンチ間	表面採集	-	-	-	外：ナデ・オサエ・円孔 内：ナデ・オサエ	やや 粗	並	外：橙7.5YR7/6 内：橙7.5YR6/6	口縁部 小片	
67	067-05	縄文土器 深鉢A	D13	包含層	-	-	-	外：隆帯・沈線・刺突 内：ナデ	粗	並	外：橙5YR6/6 内：橙7.5YR6/6	口縁部 小片	
68	003-05	縄文土器 深鉢A	範確No.2 ～Aトレ ンチ間	表面採集	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	やや 粗	並	外：にぶい黄橙10YR7/4 内：にぶい黄橙10YR7/4・浅 黄橙7.5YR8/6	口縁部 小片	
69	068-03	縄文土器 深鉢A	B～D 6～7	包含層	-	-	-	外：沈線・ナデ 内：ナデ	やや 密	並	にぶい黄橙10YR6/4	口縁部 小片	
70	105-04	縄文土器 深鉢A	-	表面採集	-	-	-	外：沈線・凹点 内：ナデ	やや 粗	並	橙7.5YR6/6	口縁部 小片	
71	105-05	縄文土器 深鉢A	-	表面採集	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	やや 粗	並	にぶい褐7.5YR5/4	口縁部 小片	
72	008-05	縄文土器 深鉢A	範確Aト レンチ	表面採集	-	-	-	外：隆帯・沈線・刺突 内：ナデ	粗	不良	にぶい黄褐10YR5/3	口縁部 小片	
73	066-05	縄文土器 深鉢A	C・D12	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	外：にぶい褐7.5YR5/4 内：にぶい褐7.5YR5/3	口縁部 小片	
74	009-09	縄文土器 深鉢A	範確Aト レンチ	表面採集	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	良	外：灰黄褐10YR4/2 内：にぶい黄褐10YR5/4	口縁部 小片	
75	068-04	縄文土器 深鉢A	D9	包含層	-	-	-	外：沈線・ナデ 内：ナデ	やや 密	並	外：にぶい褐7.5Y5/4 内：にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 小片	内面炭化物付着
76	005-02	縄文土器 深鉢A	範確No.2 ～Aトレ ンチ間	表面採集	-	-	-	外：沈線・ナデ 内：ナデ	やや 粗	やや 不良	外：橙5YR6/6 内：灰黄褐10YR4/2	口縁部 小片	
77	083-04	縄文土器 深鉢A	-	表面採集	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	外：にぶい褐7.5YR5/4 内：橙5YR6/6	口縁部 小片	
78	068-02	縄文土器 深鉢A	-	表面採集	-	-	-	外：沈線・ナデ 内：ナデ	やや 密	並	外：暗灰黄2.5Y5/2 内：にぶい黄2.5Y6/3	口縁部 小片	
79	077-06	縄文土器 深鉢A	E10	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	外：にぶい褐7.5YR5/3 内：にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 小片	
80	105-03	縄文土器 深鉢A	-	表面採集	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	密	並	にぶい黄2.5Y6/4	口縁部 小片	
81	068-06	縄文土器 深鉢	C13	包含層	-	-	-	外：隆帯・沈線 内：ナデ	やや 密	並	明褐7.5YR5/6	口縁部 小片	
82	068-07	縄文土器 深鉢A	C13	包含層	-	-	-	外：隆帯・沈線 内：ナデ	やや 密	並	外：明赤褐5YR5/6 内：にぶい黄橙10YR6/4	口縁部 小片	
83	069-05	縄文土器 深鉢A	-	表面採集	-	-	-	外：隆帯・沈線・ナデ 内：ナデ	やや 密	並	にぶい黄褐10YR5/4	口縁部 小片	

第11表 斎宮池遺跡出土土器・土製品観察表③

遺物 番号	登録 番号	器 種	出土位置		法量 (cm)			成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色 調	残存	備 考
			小地区等	遺構層位	口径	器高	その他						
84	069-02	縄文土器 深鉢A	D12	包含層	-	-	-	外：沈線・刺突 内：ナデ	やや密	並	にぶい黄橙10YR6/4	口縁部 小片	
85	069-03	縄文土器 深鉢	D10	包含層	-	-	-	外：隆帯・ナデ 内：ナデ	やや密	並	外：褐7.5YR4/4 内：褐10YR4/6	口縁部 小片	
86	009-03	縄文土器 深鉢A	範確A トレンチ	表面採集	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	良	明赤褐5YR5/6	口縁部 小片	
87	016-06	縄文土器 深鉢A	範確No.2	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	外：明褐7.5YR5/6 内：明赤褐5YR5/6	体部 小片	
88	072-03	縄文土器 深鉢A	-	表面採集	-	-	-	外：隆帯・沈線 内：ナデ	やや密	並	灰黄褐10YR4/2	口縁部 小片	
89	012-06	縄文土器 深鉢A	-	表面採集	-	-	-	外：隆帯・沈線 内：ナデ	やや密	並	にぶい黄橙10YR5/4	口縁部 小片	
90	009-07	縄文土器 深鉢A	範確Aト レンチ付 近	表面採集	-	-	-	外：沈線 内：ヨコナデ	粗	良	外：にぶい黄橙10YR5/3 内：オリーブ黒5Y3/1	口縁部 小片	
91	072-02	縄文土器 深鉢A	C12	包含層	-	-	-	外：沈線・刺突・円孔 内：ナデ	やや密	並	外：にぶい黄橙10YR5/4 内：橙7.5YR6/6	口縁部 小片	
92	073-02	縄文土器 深鉢A	B11 C11・12	包含層	-	-	-	外：沈線・縄文(RL) 内：ナデ	やや密	並	外：にぶい黄橙10YR5/3 内：灰黄褐10YR5/2	口縁部 小片	084-06と接合
92	084-06	縄文土器 深鉢A	B11 C11・12	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	外：にぶい黄橙10YR6/3 内：浅黄橙10YR8/3	口縁部 小片	073-02と接合
93	077-07	縄文土器 深鉢A	C13	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	外：黄灰2.5Y6/1 内：淡黄2.5Y8/3	口縁部 小片	
94	095-02	縄文土器 深鉢	C5	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	密	並	外：暗灰黄2.5Y5/2 内：浅黄2.5Y7/3	体部 小片	
95	077-02	縄文土器 深鉢A	C13	池敷表土	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	外：にぶい黄橙10YR7/4 内：にぶい黄橙10YR6/4	口縁部 小片	
96	012-01	縄文土器 深鉢A	範確Aト レンチ付 近	表面採集	-	-	-	外：沈線・ナデ 内：ナデ	やや粗	やや不良	外：黄灰2.5Y4/1 内：にぶい黄2.5Y6/3	口縁部 小片	
97	084-05	縄文土器 深鉢A	C14	包含層	-	-	-	外：沈線・刺突 内：ナデ	粗	並	外：灰褐7.5YR5/2 内：橙7.5YR6/6	口縁部 小片	
98	084-02	縄文土器 深鉢A	先行ト レンチ4 (k1間)	-	-	-	-	外：沈線・縄文(L?) 内：ナデ・オサエ	粗	並	外：黄灰2.5Y4/1 内：灰黄2.5Y6/2	口縁部 小片	
99	065-01	縄文土器 深鉢A	-	表面採集	-	-	-	外：沈線・刺突 内：ナデ	粗	並	外：橙5YR6/6 内：灰黄褐10YR6/2	口縁部 小片	
100	002-03	縄文土器 深鉢A	範確No.2	包含層	-	-	-	外：沈線・ヨコナデ 内：ヨコナデ・ナデ・オサエ	密	並	外：橙7.5YR7/6 内：橙7.5YR7/6・灰5Y5/1	口縁部 小片	
101	084-01	縄文土器 深鉢A	先行ト レンチ3 (ij間)	-	-	-	-	外：沈線・キザミ 内：ナデ・オサエ	粗	並	外：橙5YR6/8 内：橙5YR7/8	口縁部 小片	口端部キザミ 102と同一個体
102	012-02	縄文土器 深鉢A	範確A トレンチ	表面採集	-	-	-	外：沈線・キザミ 内：ナデ	やや粗	良	橙5YR6/8	口縁部 小片	口端部キザミ 101と同一個体
103	013-02	縄文土器 深鉢A	範確No.3	表土	-	-	-	外：沈線 内：ナデ・オサエ	粗	並	外：オリーブ黒5Y3/1 内：にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 小片	
104	081-04	縄文土器 深鉢A	-	表面採集	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	やや密	並	にぶい黄橙10YR6/4	口縁部 小片	
105	080-07	縄文土器 深鉢A	C・D14	第4畦 (k1間)	-	-	-	外：沈線・縄文(L) 内：ナデ	やや密	並	外：にぶい黄橙10YR5/3 内：灰黄褐10YR5/2	口縁部 小片	
106	081-07	縄文土器 深鉢A	-	表面採集	-	-	-	外：沈線・縄文? 内：ナデ	密	並	にぶい黄橙10YR5/3	口縁部 小片	
107	074-03	縄文土器 深鉢A	B12	池敷表土	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	外：褐7.5YR4/3 内：にぶい黄橙10YR5/4	口縁部 小片	
108	009-01	縄文土器 深鉢A	範確No.2	包含層	-	-	-	外：沈線・ミガキ 内：ナデ	粗	やや良	外：にぶい黄橙10YR6/3 内：にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 小片	
109	083-06	縄文土器 深鉢A	D13	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	外：橙5YR6/8 内：黄橙7.5YR7/8	口縁部 小片	
110	080-03	縄文土器 深鉢A	D13	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ・オサエ	やや粗	並	外：明赤褐5YR5/6 内：橙7.5YR6/6	口縁部 小片	
111	077-01	縄文土器 深鉢A	-	表面採集	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	外：褐灰10YR4/1 内：灰黄褐10YR5/2	口縁部 小片	

第12表 斎宮池遺跡出土土器・土製品観察表④

遺物 番号	登録 番号	器 種	出土位置		法量 (cm)			成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色 調	残存	備 考
			小地区等	遺構層位	口径	器高	その他						
112	081-02	縄文土器 深鉢A	-	表面採集	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	やや粗	並	灰黄褐10YR6/2	口縁部 小片	
113	080-02	縄文土器 深鉢A	D11	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ・オサエ	やや密	並	にぶい黄褐10YR5/4	口縁部 小片	
114	012-07	縄文土器 深鉢A	-	表面採集	-	-	-	外：沈線・ナデ 内：ナデ	密	良	外：浅黄2.5Y7/4 内：にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 小片	
115	080-05	縄文土器 深鉢A	D・E 8	包含層	-	-	-	外：沈線・縄文(LR)	やや粗	並	にぶい黄褐10YR5/4	口縁部 小片	
116	079-06	縄文土器 深鉢A	C14	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	やや密	並	外：にぶい黄橙10YR6/4 内：浅黄橙10YR8/4	口縁部 小片	
117	081-06	縄文土器 深鉢A	-	表面採集	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	やや密	並	にぶい黄橙10YR6/3	口縁部 小片	
118	078-02	縄文土器 深鉢A	B13	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	外：にぶい黄橙10YR6/3 内：橙7.5YR7/6	口縁部 小片	
119	081-01	縄文土器 深鉢A	-	表面採集	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	やや密	並	にぶい黄橙10YR6/4	口縁部 小片	
120	010-03	縄文土器 深鉢A	範確A トレンチ	包含層	-	-	-	外：沈線・ナデ 内：ナデ	粗	良	明赤褐5YR5/6	口縁部 小片	
121	081-05	縄文土器 深鉢A	-	表面採集	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	やや密	並	外：褐7.5YR4/3 内：にぶい黄橙10YR6/4	口縁部 小片	
122	009-08	縄文土器 深鉢A	範確Aト レンチ付 近	表面採集	-	-	-	外：沈線・縄文(RL) 内：ナデ	粗	良	外：黄灰2.5Y4/1 内：褐7.5YR4/4	口縁部 小片	口縁端部にも縄文
123	010-04	縄文土器 深鉢A	範確No.2 ～Aトレ ンチ間	表面採集	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	灰黄褐10YR6/2	口縁部 小片	
124	076-01	縄文土器 深鉢A	C14	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	外：橙5YR6/6 内：橙7.5YR6/6	口縁部 小片	
125	008-06	縄文土器 深鉢A	範確A トレンチ	包含層	-	-	-	外：隆帯・沈線 内：ナデ	粗	やや良	にぶい黄褐10YR5/4	口縁部 小片	
126	077-08	縄文土器 深鉢A	B 8	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	外：褐灰10YR4/1 内：にぶい黄橙10YR7/2	口縁部 小片	
127	077-05	縄文土器 深鉢A	E11	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	橙5YR6/6	口縁部 小片	
128	009-05	縄文土器 深鉢A	範確A トレンチ	包含層	-	-	-	外：沈線・ナデ 内：ナデ	粗	良	外：橙5YR6/6 内：明赤褐5YR5/8	口縁部 小片	
129	009-04	縄文土器 深鉢A	範確Aト レンチ付 近	表面採集	-	-	-	外：沈線・ナデ 内：ナデ	粗	不良	黒褐2.5Y3/1	口縁部 小片	
130	008-07	縄文土器 深鉢A	範確Aト レンチ付 近	表面採集	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	良	外：にぶい褐7.5YR5/4 内：橙7.5YR6/6	口縁部 小片	
131	013-01	縄文土器 深鉢A	範確A トレンチ	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ・オサエ	やや粗	やや不良	橙2.5YR6/8	口縁部 小片	口縁端部に縄文?
132	010-05	縄文土器 深鉢A	範確A トレンチ	包含層	-	-	-	外：沈線・ナデ 内：ナデ	粗	並	にぶい黄橙10YR6/4～暗黄灰 2.5Y4/2	口縁部 小片	口縁端部にキザ ミ?
133	070-02	縄文土器 深鉢B	E13	包含層	-	-	-	外：突起・隆帯・沈線・凹点 内：ナデ	やや密	並	にぶい黄橙10YR6/4	体部 小片	橋状把手
134	070-01	縄文土器 深鉢B	D13	包含層	-	-	-	外：突起・隆帯・沈線・凹点 内：ナデ	密	並	にぶい黄橙10YR6/4	体部 小片	
135	069-06	縄文土器 深鉢B	C・D12	包含層	-	-	-	外：突起・隆帯・凹点・ナデ 内：ナデ	やや密	並	外：にぶい黄橙10YR6/3 内：灰黄2.5Y7/2	体部 小片	
136	013-05	縄文土器 深鉢B	範確Aト レンチ付 近	表面採集	-	-	-	外：把手・ナデ・オサエ 内：剥離面	やや密	やや不良	外：黄灰2.5Y4/1・浅黄 2.5Y7/3 内：浅黄2.5Y7/3	体部 小片	橋状把手
137	073-06	縄文土器 深鉢B	C13	包含層	-	-	-	外：突起・隆帯・凹点・沈線 内：ナデ	やや密	並	外：暗灰黄2.5Y4/2 内：灰黄2.5Y6/2	体部 小片	
138	105-02	縄文土器 浅鉢	-	表面採集	-	-	-	外：隆帯・沈線 内：ナデ	密	並	外：灰黄褐10YR4/2 内：にぶい黄橙10YR6/4	口縁部 小片	
139	068-05	縄文土器 浅鉢	D 8	包含層	-	-	-	外：隆帯・沈線・凹点 内：ナデ	やや密	並	にぶい黄橙10YR6/4	口縁部 小片	
140	070-03	縄文土器 浅鉢	B～D 6～7	包含層	-	-	-	外：突起・隆帯・刺突 内：ナデ	やや密	並	にぶい黄橙10YR6/3	口縁部 小片	

第13表 斎宮池遺跡出土土器・土製品観察表⑤

遺物 番号	登録 番号	器 種	出土位置		法量 (cm)			成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色 調	残存	備 考
			小地区等	遺構層位	口径	器高	その他						
141	070-06	縄文土器 浅鉢	D12	包含層	-	-	-	外：突起・隆帯・凹点 内：ナデ	やや密	並	にぶい褐7.5YR5/4	口縁部 小片	
142	096-07	縄文土器 浅鉢	先行トレンチ2 (g h間)	排土	-	-	-	外：突起・隆帯・凹点 内：剥離	密	並	にぶい褐7.5YR5/3	口縁部 小片	橋状把手
143	076-05	縄文土器 浅鉢	D 9	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	外：にぶい褐7.5YR5/3 内：黄褐10YR5/6	口縁部 小片	
144	070-04	縄文土器 浅鉢	E 13	包含層	-	-	-	外：突起・隆帯 内：ナデ	やや密	並	にぶい黄褐10YR5/4	口縁部 小片	
145	077-03	縄文土器 浅鉢?	-	表面採集	-	-	-	外：刺突(竹管) 内：ナデ	粗	並	外：灰黄褐10YR4/2 内：にぶい橙7.5YR6/4	口縁部 小片	口縁部肥厚
146	079-05	縄文土器 浅鉢?	C 13	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	やや粗	並	明赤褐2.5YR5/6	口縁部 小片	
147	065-04	縄文土器 深鉢C	先行トレンチ	-	-	-	-	外：沈線・刺突 内：ナデ	粗	並	外：灰黄褐10YR5/2 内：にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 小片	
148	066-01	縄文土器 深鉢C	C 14	包含層	-	-	-	外：沈線・刺突・凹点 内：ナデ・オサエ	粗	並	にぶい黄褐10YR5/4	口縁部 小片	149~151と同一 個体
149	066-03	縄文土器 深鉢C	C 14	包含層	-	-	-	外：沈線・刺突・凹点 内：ナデ	粗	並	外：明褐7.5YR5/6・暗灰N3/0 内：明褐7.5YR5/6	口縁部 小片	148~151と同一 個体
150	091-09	縄文土器 深鉢C	C 15	包含層	-	-	-	外：沈線・刺突・凹点 内：ナデ	やや密	並	外：灰黄褐10YR5/2 内：にぶい黄2.5Y6/3	体部 小片	148~151と同一 個体
151	066-02	縄文土器 深鉢C	C 14	包含層	-	-	-	外：沈線・刺突 内：ナデ	粗	並	にぶい褐7.5YR5/4	体部 小片	148~150と同一 個体
152	084-03	縄文土器 深鉢C	-	表面採集	-	-	-	外：隆帯・沈線 内：ナデ	粗	並	灰褐7.5YR5/2	口縁部 小片	
153	076-04	縄文土器 深鉢C	C 9	包含層	-	-	-	外：隆帯・条線 内：ナデ	粗	並	外：明赤褐5YR5/6 内：にぶい黄褐10YR5/4	口縁部 小片	
154	067-03	縄文土器 深鉢C	D10	包含層	-	-	-	外：隆帯・刺突(竹管)・沈線 内：ナデ	粗	並	外：にぶい赤褐5YR5/4 内：明赤褐5YR5/6	口縁部 小片	156と同一個体か
155	067-02	縄文土器 深鉢C	E 13	包含層	-	-	-	外：刺突(竹管)・ナデ 内：ナデ	粗	並	外：にぶい赤褐5YR4/3 内：にぶい赤褐5YR5/4	口縁部 小片	
156	067-04	縄文土器 深鉢C	C 10	包含層	-	-	-	外：隆帯・刺突(竹管)・沈線 内：ナデ	粗	並	外：褐7.5YR4/4 内：明赤褐5YR5/6	口縁部 小片	154と同一個体か
157	067-06	縄文土器 深鉢C	D 13	包含層	-	-	-	外：隆帯・沈線・円孔 内：ナデ	粗	並	橙5YR6/6	口縁部 小片	
158	072-01	縄文土器 深鉢C	C~F 15	畦 4 (k l間)	-	-	-	外：隆帯・沈線 内：ナデ	やや密	並	外：にぶい黄褐10YR5/4 内：明褐7.5YR5/6	口縁部 小片	
159	073-01	縄文土器 深鉢C	D 14	包含層	-	-	-	外：隆帯・沈線 内：ナデ	やや密	並	外：黄灰2.5Y4/1 内：暗灰黄2.5Y5/2	口縁部 小片	
160	004-01	縄文土器 深鉢C	範確A トレンチ	表面採集	-	-	-	外：隆帯・沈線・円孔 内：ヨコナデ・ナデ	やや粗	やや不良	外：にぶい黄褐10YR7/4 内：浅黄橙10YR8/4	口縁部 小片	
161	004-02	縄文土器 深鉢C	範確A トレンチ	包含層	-	-	-	外：沈線・刺突・円孔 内：ナデ	やや粗	やや不良	外：にぶい橙7.5YR7/4 内：にぶい橙7.5YR6/4	口縁部 小片	口縁端面刺突
162	074-06	縄文土器 深鉢C	C 15	攪乱溝	-	-	-	外：沈線・刺突・円孔 内：ナデ	粗	並	橙7.5YR6/6	口縁部 小片	口縁端面刺突
163	065-03	縄文土器 深鉢C	-	表面採集	-	-	-	外：沈線・刺突 内：ナデ	粗	並	外：橙5YR6/6 内：灰黄褐10YR5/2	口縁部 小片	
164	071-07	縄文土器 深鉢C	F 13	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	やや密	並	にぶい黄2.5Y6/3	口縁部 小片	
165	071-02	縄文土器 深鉢C	D 9	池敷表土	-	-	-	外：沈線・刺突 内：ナデ	やや密	並	にぶい黄2.5Y6/3	口縁部 小片	
166	075-02	縄文土器 深鉢C	E 12	包含層	-	-	-	外：縄文もしくは条線地に沈線 内：ナデ	粗	並	外：にぶい褐7.5YR5/4 内：明褐7.5YR5/6	口縁部 小片	
167	011-06	縄文土器 深鉢C	範確Aト レンチ付 近	表面採集	-	-	-	外：隆帯・沈線 内：ナデ	粗	不良	外：橙7.5YR6/6・黒5Y2/1 内：明褐7.5YR5/6	口縁部 小片	
168	072-04	縄文土器 深鉢C	C・D12	包含層	-	-	-	外：刺突 内：ナデ	やや密	並	外：オリーブ褐2.5Y4/3 内：橙7.5YR6/6	口縁部 小片	
169	012-05	縄文土器 深鉢C	分布調査	表面採集	-	-	-	外：隆帯・沈線 内：ナデ・オサエ	粗	並	橙7.5YR6/6	口縁部 小片	

第14表 斎宮池遺跡出土土器・土製品観察表⑥

遺物 番号	登録 番号	器 種	出土位置		法量 (cm)			成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色 調	残存	備 考
			小地区等	遺構層位	口径	器高	その他						
170	074-04	縄文土器 深鉢C	-	表面採集	-	-	-	外：沈線 内：ナデ・オサエ	粗	並	外：にぶい黄橙10YR6/3 内：浅黄2.5Y7/3	口縁部 小片	
171	012-03	縄文土器 深鉢C	範確Aト レンチ付 近	表面採集	-	-	-	外：沈線・ナデ 内：ナデ	やや 粗	並	外：にぶい黄橙10YR7/4 内：にぶい黄橙10YR6/4	口縁部 小片	口縁端面刺突
172	071-04	縄文土器 深鉢C	C 8	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	やや 密	並	外：灰黄褐10YR4/2 内：にぶい黄褐10YR5/4	口縁部 小片	口縁端面刺突
173	010-02	縄文土器 深鉢C	範確No.2	包含層	-	-	-	外：沈線・円孔	粗	並	にぶい黄橙10YR6/4～灰黄 2.5Y4/1	口縁部 小片	
174	071-06	縄文土器 深鉢C	先行トレ ンチ4 (k1間)	排土	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	やや 密	並	灰黄2.5Y7/2	口縁部 付近	
175	071-03	縄文土器 深鉢C	C12	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	やや 密	並	黄褐2.5Y5/3	口縁部 小片	口縁端面上端部 拡張・刺突
176	071-05	縄文土器 深鉢C	F14	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	やや 密	並	にぶい黄2.5Y6/3	口縁部 付近	
177	079-04	縄文土器 深鉢C	C12	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	やや 密	並	外：にぶい橙5YR6/4 内：灰黄褐10YR5/2	口縁部 小片	口縁端部内面肥 厚
178	071-08	縄文土器 深鉢C	B～D 6～7	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	やや 密	並	外：にぶい黄褐10YR5/4 内：明黄褐10YR6/6	口縁部 小片	
179	012-04	縄文土器 深鉢C	範確A トレンチ	表面採集	-	-	-	外：沈線 内：ナデ・オサエ	やや 密	やや 不良	外：にぶい黄橙10YR7/4 内：にぶい黄橙10YR6/4	口縁部 小片	
180	067-01	縄文土器 深鉢C	C・D6 (ef間) 3層目		-	-	-	外：沈線・縄文(LR) 内：ナデ	粗	並	外：褐灰7.5YR5/1 内：灰褐7.5YR5/2	口縁部 小片	口縁端部拡張
181	066-04	縄文土器 深鉢C	C13	包含層	-	-	-	外：縄文(RL)・口縁端面刺突 内：ナデ	粗	並	浅黄2.5Y7/4	口縁部 小片	
182	005-04	縄文土器 深鉢C	範確A トレンチ	表土	-	-	-	外：沈線・縄文? 内：沈線・ナデ	粗	不良	外：にぶい黄橙10YR7/2・橙 7.5YR7/6 内：灰黄褐10YR4/2	口縁部 小片	筒状突起
183	075-05	縄文土器 深鉢C	D12	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	外：にぶい黄褐10YR5/3 内：橙7.5YR6/6	口縁部 小片	筒状突起
184	075-04	縄文土器 深鉢C	E13	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	外：明褐7.5YR5/6 内：橙7.5YR6/6	口縁部 小片	筒状突起
185	075-03	縄文土器 深鉢C	F12	包含層	-	-	-	外：沈線・ナデ 内：ナデ	粗	並	外：暗灰N3/0 内：浅黄2.5Y8/3	口縁部 小片	筒状突起
186	074-05	縄文土器 深鉢C	-	表面採集	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	外：暗灰黄2.5Y5/2 内：浅黄2.5Y7/3	口縁部 小片	筒状突起
187	085-01	縄文土器 深鉢	C 8	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	橙7.5YR6/6	口縁～ 体部片	094-08と接合 188・189と同一 個体
187	094-08	縄文土器 深鉢	C 8	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	外：にぶい赤褐5YR5/4 内：にぶい黄橙10YR6/4	口縁部 小片	085-01と接合
188	086-01	縄文土器 深鉢	C 8	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	外：橙7.5YR6/6・灰黄褐 10YR4/2 内：橙7.5YR6/6	口縁～ 体部片	187・189と同一 個体
189	085-02	縄文土器 深鉢	C 8	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	橙7.5YR6/6	体部片	187・188と同一 個体
190	074-02	縄文土器 深鉢	F13	盛土	-	-	-	外：沈線・縄文(L) 内：条痕?	粗	並	外：にぶい橙7.5YR7/4 内：灰褐7.5YR4/2	口縁部 小片	
191	083-05	縄文土器 深鉢	E10	包含層	-	-	-	外：沈線・縄文(LR) 内：ナデ・オサエ	粗	並	外：明黄褐10YR6/6 内：明黄褐10YR7/6	口縁部 小片	
192	078-05	縄文土器 深鉢	D13	包含層	-	-	-	外：沈線・縄文(R?) 内：ナデ	粗	並	橙7.5YR6/6	口縁部 小片	
193	080-01	縄文土器 深鉢	D10	包含層	-	-	-	外：沈線・縄文(LR) 内：ナデ	やや 密	並	灰褐7.5YR4/2	口縁部 小片	
194	004-04	縄文土器 深鉢	範確A トレンチ	表面採集	-	-	-	外：沈線・縄文(RL) 内：ナデ	粗	やや 不良	外：浅黄橙10YR8/4 内：にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 小片	
195	082-01	縄文土器 深鉢	D14	包含層	-	-	-	外：沈線・縄文(RL) 内：ナデ	粗	並	橙5YR6/6	口縁部 小片	
196	081-03	縄文土器 深鉢	-	表面採集	-	-	-	外：沈線・縄文? 内：ナデ	やや 密	並	外：灰黄褐10YR4/2 内：にぶい黄橙10YR6/3	口縁部 小片	
197	080-08	縄文土器 深鉢	C12	池敷表土	-	-	-	外：縄文? 内：ナデ	やや 密	並	外：灰黄褐10YR4/2 内：橙7.5YR7/6	口縁部 小片	

第15表 斎宮池遺跡出土土器・土製品観察表⑦

遺物 番号	登録 番号	器 種	出土位置		法量 (cm)			成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色 調	残存	備 考
			小地区等	遺構層位	口径	器高	その他						
198	082-06	縄文土器 深鉢	D10	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ・オサエ	粗	並	外：にぶい黄褐10YR5/4 内：にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 小片	
199	078-03	縄文土器 深鉢	E13	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	外：灰黄褐10YR5/2 内：にぶい黄橙10YR6/4	口縁部 小片	
200	083-03	縄文土器 深鉢	B~D 6~7	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ・オサエ	粗	並	外：にぶい黄橙10YR6/4 内：褐灰10YR4/1	口縁部 小片	
201	083-07	縄文土器 深鉢	D11	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ・オサエ	粗	並	外：灰褐7.5YR5/2 内：にぶい黄褐10YR5/3	口縁部 小片	
202	076-03	縄文土器 深鉢	E13	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	外：にぶい褐7.5YR5/3 内：橙5YR7/6	口縁部 小片	
203	010-01	縄文土器 深鉢	範確A トレンチ	表面採集	-	-	-	外：沈線・縄文？ 内：ナデ	粗	良	橙7.5YR6/6~黒褐10YR3/1	口縁部 小片	摩滅著しい
204	079-08	縄文土器 深鉢	D10	包含層	-	-	-	外：沈線・縄文？ 内：ナデ	やや 粗	並	外：褐7.5YR4/3 内：明褐7.5YR5/6	口縁部 小片	摩滅著しい
205	081-08	縄文土器 深鉢	-	表面採集	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	やや 密	並	外：灰褐7.5YR4/2 内：にぶい橙7.5YR6/4	口縁部 小片	
206	082-02	縄文土器 深鉢	先行ト レンチ2 (g h間)	排土	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	外：暗灰黄2.5Y5/2 内：橙7.5YR7/6	口縁部 小片	
207	080-06	縄文土器 深鉢	E10	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	やや 密	並	外：褐10YR4/4 内：黒褐2.5Y3/1	口縁部 小片	
208	004-06	縄文土器 深鉢	範確A トレンチ	包含層	-	-	-	外：沈線・縄文 (R L) 内：ナデ	やや 粗	やや 不良	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 小片	
209	009-06	縄文土器 深鉢	分布調査	表面採集	-	-	-	外：沈線・縄文 (R L) 内：ナデ	粗	良	黄灰2.5Y4/1	口縁部 小片	
210	079-01	縄文土器 深鉢	C 5	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	外：橙5YR6/6 内：褐灰10YR4/1	口縁部 小片	
211	079-02	縄文土器 深鉢	C13	包含層	-	-	-	外：沈線・縄文 (L R) 内：ナデ	粗	並	明赤褐5YR5/6	口縁部 小片	
212	079-07	縄文土器 深鉢	D 8	包含層	-	-	-	外：沈線・縄文 (L R) 内：ナデ	やや 密	並	赤褐5YR4/6	口縁部 小片	
213	082-04	縄文土器 深鉢	E12	包含層	-	-	-	外：沈線・縄文 (L R) 内：ナデ	粗	並	にぶい黄橙10YR6/4	口縁部 小片	
214	079-03	縄文土器 深鉢	C11	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	やや 密	並	灰黄2.5Y7/2	口縁部 小片	
215	082-05	縄文土器 深鉢	C・D12	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ・オサエ	粗	並	橙7.5YR7/6	口縁部 小片	
216	082-03	縄文土器 深鉢	C10	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	外：褐7.5YR4/3 内：明黄褐10YR6/6	口縁部 小片	
217	078-04	縄文土器 深鉢	B 8	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	外：にぶい黄橙10YR7/3 内：浅黄橙10YR8/3	口縁部 小片	
218	004-05	縄文土器 深鉢	範確No.2	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	やや 粗	やや 不良	外：灰黄褐10YR6/2 内：にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 小片	
219	077-04	縄文土器 深鉢	-	表面採集	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	外：にぶい黄褐10YR5/3 内：浅黄2.5Y7/4	口縁部 小片	
220	078-01	縄文土器 深鉢	C13	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	外：にぶい黄褐10YR5/3 内：にぶい黄橙10YR6/4	口縁部 小片	
221	005-01	縄文土器 深鉢	-	表面採集	-	-	-	外：沈線・縄文？・ナデ 内：ヨコナデ・ナデ	やや 粗	やや 不良	外：にぶい黄橙10YR6/4 内：にぶい橙7.5YR6/4	口縁部 小片	摩滅著しい
222	082-07	縄文土器 深鉢	C・D14	第4畦 (k l間)	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	外：褐灰10YR4/1 内：橙7.5YR6/6	口縁部 小片	
223	080-04	縄文土器 深鉢	F13	包含層	-	-	-	外：沈線 内：剥離	やや 密	並	外：褐7.5YR4/4 内：黒10YR2/1	口縁部 小片	
224	083-01	縄文土器 深鉢	先行ト レンチ3 (i j間)	排土	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	外：橙7.5YR6/6 内：橙7.5YR7/6	口縁部 小片	
225	083-02	縄文土器 深鉢	D13	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	外：橙5YR6/6 内：明黄褐10YR7/6	口縁部 小片	
226	078-06	縄文土器 深鉢	C10	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	明黄褐10YR6/6	口縁部 小片	

第16表 斎宮池遺跡出土土器・土製品観察表⑧

遺物 番号	登録 番号	器 種	出土位置		法量 (cm)			成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色 調	残存	備 考
			小地区等	遺構層位	口径	器高	その他						
227	096-06	縄文土器 深鉢	-	表面採集	-	-	-	外：沈線・縄文 (R L) 内：ナデ	密	並	外：黒褐10YR3/2 内：黄褐2.5Y5/3	体部 小片	
228	096-03	縄文土器 深鉢	先行トレンチ	-	-	-	-	外：沈線・縄文 (L R) 内：ナデ	密	並	外：灰黄褐10YR4/2 内：にぶい橙7.5YR6/4	体部 小片	
229	093-07	縄文土器 深鉢	-	表面採集	-	-	-	外：沈線・縄文 (L R) 内：ナデ	粗	並	外：灰黄褐10YR4/2 内：にぶい黄橙10YR6/4	体部 小片	
230	093-08	縄文土器 深鉢	E 12	包含層	-	-	-	外：沈線・縄文 (L R) 内：ナデ・オサエ	粗	並	外：にぶい黄橙10YR6/4 内：にぶい黄橙10YR6/3	体部 小片	付加縄か
231	093-09	縄文土器 深鉢	D 14	包含層	-	-	-	外：沈線・縄文 (R L) 内：ナデ	粗	並	外：橙2.5YR6/6 内：橙5YR6/6	体部 小片	
232	015-05	縄文土器 深鉢	範確A トレンチ	表面採集	-	-	-	外：沈線・縄文 (R L) 内：ナデ	粗	並	外：灰黄褐10YR6/2 内：にぶい黄橙10YR7/4	体部 小片	
233	016-07	縄文土器 深鉢	-	表面採集	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	外：にぶい黄橙10YR6/3 内：灰黄2.5Y6/2	体部 小片	摩滅著しい
234	094-10	縄文土器 深鉢	E 14	包含層	-	-	-	外：沈線・縄文 (L R ?) 内：ナデ	粗	並	にぶい黄橙10YR6/4	体部 小片	
235	095-10	縄文土器 深鉢	E 13	包含層	-	-	-	外：沈線・縄文 (L R) 内：ナデ・オサエ	やや密	並	にぶい黄褐10YR5/4	体部 小片	
236	010-07	縄文土器 深鉢	範確No.2	包含層	-	-	-	外：沈線・縄文 ? 内：ナデ	粗	良	外：にぶい黄褐10YR5/3 内：橙7.5YR7/6・黄灰 2.5Y4/1	体部 小片	
237	095-05	縄文土器 深鉢	C・D 14	第4畦 (k 1間)	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	やや密	並	にぶい黄褐10YR4/3	体部 小片	
238	014-06	縄文土器 深鉢	範確Aト レンチ付 近	表面採集	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	外：灰黄褐10YR5/2 内：にぶい黄橙10YR5/3	体部 小片	
239	096-01	縄文土器 深鉢	F 12	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	密	並	外：にぶい黄褐10YR5/3 内：浅黄2.5Y7/4	体部 小片	外面煤付着
240	095-09	縄文土器 深鉢	E 13	包含層	-	-	-	外：沈線 内：条痕・ナデ	密	並	外：にぶい褐7.5YR5/3 内：にぶい黄橙10YR7/3	体部 小片	外面煤付着
241	004-03	縄文土器 浅鉢	範確No.2	包含層	-	-	-	外：沈線・縄文 (R L) 内：ヨコナデ・ナデ	やや粗	やや不良	外：にぶい黄橙10YR7/3 内：褐灰10YR6/1・灰黄褐 10YR6/2	口縁部 小片	
242	096-02	縄文土器 深鉢A	B 12	池敷表土	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	やや密	並	外：灰黄褐10YR5/2 内：浅黄2.5Y7/3	口縁部 小片	渦文部
243	003-03	縄文土器 深鉢A	範確No.2	包含層	-	-	-	外：隆帯・刺突・沈線 内：ナデ	やや粗	やや不良	外：浅黄橙7.5YR8/4 内：浅黄橙10YR8/4	口縁部 小片	
244	091-01	縄文土器 深鉢A	C 12	包含層	-	-	-	外：沈線・刺突 (竹管) 内：ナデ	やや密	並	明赤褐5YR5/6	口縁部 小片	
245	092-05	縄文土器 深鉢A	D 4	包含層	-	-	-	外：隆帯・沈線 内：ナデ・オサエ	密	並	外：にぶい黄橙10YR6/3 内：灰黄2.5Y7/2	口縁部 小片	
246	073-04	縄文土器 深鉢A	C 12	包含層	-	-	-	外：隆帯・沈線 内：ナデ	やや密	並	にぶい褐7.5YR5/4	口頭部 小片	
247	092-09	縄文土器 深鉢A	-	表面採集	-	-	-	外：沈線 内：オサエ	やや粗	並	外：暗褐7.5YR3/3 内：橙7.5YR6/6	口頭部 小片	
248	014-04	縄文土器 深鉢A	範確Aト レンチ付 近	表面採集	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	外：にぶい黄橙10YR7/3 内：にぶい黄橙10YR6/4	頸部 小片	
249	070-05	縄文土器 深鉢A	C 13	包含層	-	-	-	外：隆帯・刺突・沈線 内：ナデ	やや密	並	外：灰黄褐10YR4/2 内：にぶい黄2.5Y6/3	頸部 小片	
250	092-02	縄文土器 深鉢A	D 9	包含層	-	-	-	外：隆帯・刺突・条線 内：ナデ	やや密	並	にぶい褐7.5YR5/4	頸部 小片	
251	092-06	縄文土器 深鉢A	E 11	包含層	-	-	-	外：隆帯・沈線 内：ナデ	密	並	にぶい橙7.5YR6/4	口頭部 小片	
252	065-05	縄文土器 深鉢A	B 11	包含層	-	-	-	外：隆帯・沈線 内：ナデ	粗	並	外：にぶい黄褐10YR5/3 内：浅黄2.5Y7/4	口頭部 小片	
253	089-01	縄文土器 深鉢A	D 8	包含層	-	-	-	外：沈線 内：条痕 (巻貝?)	粗	並	外：にぶい黄橙10YR6/4 内：明黄褐10YR7/6	体部 小片	
254	092-01	縄文土器 深鉢A	D 7	包含層	-	-	-	外：隆帯・沈線 内：ナデ	密	並	外：にぶい黄褐10YR5/3 内：にぶい黄橙10YR7/3	頸部 小片	
255	090-05	縄文土器 深鉢	C 13	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	外：にぶい褐7.5YR5/3 内：にぶい黄橙10YR7/4	体部 小片	

第17表 斎宮池遺跡出土土器・土製品観察表⑨

遺物 番号	登録 番号	器 種	出土位置		法量 (cm)			成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色 調	残存	備 考
			小地区等	遺構層位	口径	器高	その他						
256	091-03	縄文土器 深鉢	C13	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	やや 密	並	外：にぶい黄褐10YR4/3 内：にぶい黄橙10YR7/4	体部 小片	
257	091-04	縄文土器 深鉢	C13	包含層	-	-	-	外：沈線・縄文(L.R) 内：ナデ	やや 密	並	外：にぶい黄橙10YR6/4 内：明赤褐5YR5/6	体部 小片	50・51と同一個 体か
258	093-06	縄文土器 深鉢	B11 C11・12	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	外：浅黄2.5Y7/4 内：浅黄2.5Y7/3	体部 小片	
259	091-11	縄文土器 深鉢	D9	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	やや 密	並	外：黒褐7.5YR3/2 内：にぶい黄橙10YR7/4	体部 小片	
260	015-03	縄文土器 深鉢	範確A トレンチ	表面採集	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	やや 粗	並	外：にぶい黄橙10YR7/4 内：褐灰10YR4/1	体部 小片	
261	092-08	縄文土器 深鉢	E11	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	密	並	にぶい黄褐10YR5/4	体部 小片	
262	091-08	縄文土器 深鉢	C14	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	密	並	外：灰黄褐10YR5/2 内：灰黄2.5Y7/2	体部 小片	
263	090-03	縄文土器 深鉢	-	表面採集	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	外：にぶい黄2.5Y6/3 内：にぶい黄2.5Y6/4	体部 小片	
264	089-04	縄文土器 深鉢	C13	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	外：にぶい赤褐5YR5/4 内：にぶい褐7.5YR5/3	体部 小片	
265	089-02	縄文土器 深鉢	C13	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ・オサエ	粗	並	外：にぶい黄褐10YR5/3 内：にぶい黄橙10YR7/4	体部 小片	
266	090-04	縄文土器 深鉢	C13	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	外：にぶい黄橙10YR6/4 内：浅黄2.5Y7/3	体部 小片	
267	090-07	縄文土器 深鉢	B11	池敷表土	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	外：にぶい黄褐10YR5/3 内：浅黄2.5Y7/3・黄灰 2.5Y4/1	体部 小片	
268	092-10	縄文土器 深鉢	-	表面採集	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	密	並	外：にぶい黄褐10YR4/3 内：にぶい黄橙10YR7/4	体部 小片	
269	094-04	縄文土器 深鉢	C14	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ・オサエ	粗	並	にぶい黄褐10YR5/3	体部 小片	
270	093-02	縄文土器 深鉢	C12	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	外：にぶい褐7.5YR5/4 内：橙7.5YR7/6	体部 小片	
271	014-03	縄文土器 深鉢	範確Aト レンチ付 近	表面採集	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	にぶい黄褐10YR5/3・5/4	体部 小片	
272	003-01	縄文土器 深鉢	範確No.2	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	不良	黄橙10YR8/6	体部 小片	
273	003-02	縄文土器 深鉢	範確No.2 ～Aトレ ンチ間	表面採集	-	-	-	外：沈線 内：ヨコナデ	やや 粗	やや 不良	外：淡黄2.5Y8/3・黄灰 2.5Y4/1 内：にぶい黄橙10YR7/4	体部 小片	
274	093-05	縄文土器 深鉢	B12	池敷表土	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	外：にぶい黄橙10YR6/4 内：浅黄2.5Y7/3	体部 小片	
275	014-02	縄文土器 深鉢	範確A トレンチ	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	外：黄灰2.5Y4/1 内：にぶい橙7.5YR6/4	体部 小片	
276	091-02	縄文土器 深鉢	C12	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	やや 粗	並	にぶい黄褐10YR5/4	体部 小片	
277	093-01	縄文土器 深鉢	C8	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	にぶい黄橙10YR7/4	体部 小片	
278	094-06	縄文土器 深鉢	-	表面採集	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	外：褐灰7.5YR4/1 内：浅黄橙10YR8/4	体部 小片	
279	014-05	縄文土器 深鉢	範確Aト レンチ付 近	表面採集	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	外：灰黄褐10YR4/2 内：褐灰10YR5/1	体部 小片	
280	014-01	縄文土器 深鉢	範確Aト レンチ付 近	表面採集	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	外：褐灰10YR4/1 内：にぶい褐7.5YR6/3	体部 小片	
281	094-05	縄文土器 深鉢	D9	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	外：にぶい褐7.5YR5/4 内：橙7.5YR6/6	体部 小片	
282	091-10	縄文土器 深鉢	D8	包含層	-	-	-	外：沈線・条線(櫛状具) 内：ナデ	密	並	橙5YR6/8	体部 小片	
283	091-07	縄文土器 深鉢	C13	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ・オサエ	やや 密	並	外：灰黄褐10YR4/2 内：にぶい橙7.5YR6/4	体部 小片	
284	092-04	縄文土器 深鉢	D13	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	やや 密	並	外：にぶい黄褐10YR5/4 内：橙5YR6/6	体部 小片	

第18表 斎宮池遺跡出土土器・土製品観察表⑩

遺物 番号	登録 番号	器 種	出土位置		法量 (cm)			成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色 調	残存	備 考
			小地区等	遺構層位	口径	器高	その他						
285	090-02	縄文土器 深鉢	C13	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ・オサエ	粗	並	外：橙2.5YR6/6 内：浅黄2.5Y7/3	体部 小片	
286	089-03	縄文土器 深鉢	C13	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	外：にぶい黄橙10YR6/3 内：にぶい黄橙10YR7/4	体部 小片	
287	090-01	縄文土器 深鉢	C13	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	外：にぶい黄褐10YR5/4 内：灰黄2.5Y7/2	体部 小片	
288	094-02	縄文土器 深鉢	C5	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	外：にぶい黄橙10YR6/4 内：にぶい黄橙10YR7/3	体部 小片	
289	094-01	縄文土器 深鉢	E10	包含層	-	-	-	外：条線（櫛状具） 内：ナデ	粗	並	外：褐7.5YR4/3 内：明黄褐10YR7/6	体部 小片	
290	094-03	縄文土器 深鉢	C14	包含層	-	-	-	外：条線（櫛状具） 内：ナデ	粗	並	外：にぶい黄橙10YR6/3 内：浅黄2.5Y7/3	体部 小片	
291	093-03	縄文土器 深鉢	D10	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	外：にぶい褐7.5YR5/3 内：にぶい黄橙10YR7/4	体部 小片	
292	092-07	縄文土器 深鉢	E10	包含層	-	-	-	外：縄文（LR） 内：ナデ	やや密	並	赤褐5YR4/6	体部 小片	
293	091-05	縄文土器 深鉢	C13	包含層	-	-	-	外：沈線 内：調整不明	やや密	並	外：にぶい黄褐10YR5/4 内：にぶい黄橙10YR7/2	体部 小片	
294	090-06	縄文土器 深鉢	C14	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	外：にぶい黄橙10YR6/4 内：明黄褐10YR6/6	体部 小片	
295	016-01	縄文土器 深鉢	範確No.2 ～Aトレン チ間	表面採集	-	-	-	外：沈線・縄文（LR） 内：ナデ	やや密	並	にぶい黄橙10YR7/4	体部 小片	
296	015-04	縄文土器 深鉢	範確Aト レンチ付 近	表面採集	-	-	-	外：縄文（RL） 内：ナデ	粗	並	橙5YR6/6	体部 小片	
297	092-03	縄文土器 深鉢	C・D12	包含層	-	-	-	外：沈線・縄文（RL） 内：ナデ	密	並	外：灰黄2.5Y6/2 内：にぶい黄橙10YR6/3	体部 小片	
298	015-01	縄文土器 深鉢	範確A トレンチ	表面採集	-	-	-	外：沈線・ナデ 内：ナデ	やや粗	並	外：にぶい黄橙10YR7/4 内：にぶい黄褐10YR5/3	体部 小片	
299	094-07	縄文土器 深鉢	C13	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	外：橙7.5YR6/6 内：にぶい黄橙10YR7/4・黄 灰2.5Y4/1	体部 小片	
300	095-08	縄文土器 深鉢	E12	包含層	-	-	-	外：沈線・縄文（RL） 内：ナデ	密	並	にぶい黄褐10YR5/3	体部 小片	
301	002-04	縄文土器 深鉢	範確No.2	包含層	-	-	-	外：沈線・縄文（RL） 内：ナデ	粗	やや不良	外：橙7.5YR6/6 内：にぶい黄褐10YR5/4	体部 小片	
302	093-04	縄文土器 深鉢	C14	包含層	-	-	-	外：沈線・縄文（RL） 内：ナデ	粗	並	外：にぶい褐7.5YR5/3 内：褐灰7.5YR5/1	体部 小片	
303	095-03	縄文土器 深鉢	C8	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	密	並	灰黄2.5Y6/2	体部 小片	
304	015-02	縄文土器 深鉢	範確A トレンチ	包含層	-	-	-	外：沈線・ナデ 内：ナデ	粗	並	にぶい黄橙10YR7/4・6/3	体部 小片	
305	093-10	縄文土器 深鉢	B8	包含層	-	-	-	外：沈線（半裁竹管） 内：ナデ	粗	並	外：明赤褐5YR5/6 内：にぶい黄橙10YR7/4	体部 小片	
306	095-01	縄文土器 深鉢	C10	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ・オサエ	密	並	外：明褐7.5YR5/6 内：橙7.5YR6/6	体部 小片	
307	016-03	縄文土器 深鉢	範確No.2	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	外：灰黄2.5Y7/2 内：浅黄橙10YR8/3	体部 小片	
308	015-08	縄文土器 深鉢	範確No.2 ～Aトレン チ間	表面採集	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	にぶい黄橙10YR7/3・7/4	体部 小片	
309	095-06	縄文土器 深鉢	D11	包含層	-	-	-	外：沈線・縄文？ 内：ナデ	やや密	並	にぶい黄橙10YR6/4	体部 小片	
310	015-06	縄文土器 深鉢	範確A トレンチ	表面採集	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	外：黄灰2.5Y4/1 内：灰黄褐10YR6/2	体部 小片	
311	095-04	縄文土器 深鉢	C13	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	やや密	並	外：にぶい黄橙10YR4/3 内：にぶい黄橙10YR6/3	体部 小片	
312	094-09	縄文土器 深鉢	D9	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	外：にぶい黄橙10YR7/4・暗 灰N3/0 内：明黄褐10YR7/6	体部 小片	
313	015-07	縄文土器 深鉢	範確Aト レンチ付 近	表面採集	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	外：灰黄褐10YR6/2 内：浅黄2.5Y7/3	体部 小片	

第19表 斎宮池遺跡出土土器・土製品観察表⑩

遺物 番号	登録 番号	器 種	出土位置		法量 (cm)			成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色 調	残存	備 考
			小地区等	遺構層位	口径	器高	その他						
314	016-05	縄文土器 深鉢	範確No.2	包含層	-	-	-	外：沈線 内：ナデ	粗	並	にぶい黄橙10YR7/4	体部 小片	
315	014-07	縄文土器 深鉢	範確A トレンチ	包含層	-	-	-	外：沈線・条線？縄文？ 内：ナデ	粗	並	にぶい橙5YR6/6	体部 小片	
316	013-04	縄文土器 深鉢D	範確No.2	包含層	-	-	-	外：条線（櫛状具） 内：ナデ・オサエ	やや 密	並	外：灰5Y4/1・灰白2.5Y8/2 内：浅黄橙10YR8/3	口縁部 小片	波状口縁 317と同一個体
317	016-02	縄文土器 深鉢D	範確No.2	包含層	-	-	-	外：条線（櫛状具） 内：ナデ	粗	並	外：にぶい黄橙10YR7/3 内：灰白10YR8/2	体部 小片	316と同一個体
318	008-01	縄文土器 深鉢D	範確A トレンチ	包含層	-	-	-	外：縄文（RL）・ナデ 内：ナデ	粗	不良	外：灰黄2.5Y6/2 内：黄灰2.5Y6/1	口縁部 小片	外面全面縄文
319	087-02	縄文土器 深鉢E	C 5	包含層	-	-	-	外：ナデ 内：ナデ	やや 密	並	にぶい黄橙10YR7/3～黒褐 10YR3/1	口縁部 小片	
320	087-05	縄文土器 深鉢E	C 13	包含層	-	-	-	外：ナデ 内：ナデ	やや 粗	並	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 小片	
321	087-08	縄文土器 深鉢E	D 11	包含層	-	-	-	外：ナデ 内：調整不明	やや 密	並	にぶい黄褐10YR5/4	口縁部 小片	
322	087-04	縄文土器 深鉢E	C 13	包含層	-	-	-	外：ナデ 内：ナデ	やや 密	並	にぶい黄橙10YR7/3～黒 10YR2/1	口縁部 小片	
323	008-02	縄文土器 深鉢E	範確A トレンチ	包含層	-	-	-	外：ナデ・オサエ 内：ナデ・オサエ	粗	やや 不良	にぶい黄橙10YR6/4	口縁部 小片	
324	087-03	縄文土器 深鉢E	C 13	包含層	-	-	-	外：ナデ 内：ナデ	やや 粗	並	外：灰黄褐10YR5/2 内：浅黄2.5Y7/3	口縁部 小片	
325	088-04	縄文土器 深鉢E	E 13	包含層	-	-	-	外：ナデ・オサエ 内：ナデ	やや 密	並	にぶい黄橙10YR6/4	口縁部 小片	
326	088-01	縄文土器 深鉢E	D 11	包含層	-	-	-	外：ナデ 内：ナデ・オサエ	やや 密	並	にぶい黄褐10YR5/4	口縁部 小片	
327	087-10	縄文土器 深鉢E	D 11	包含層	-	-	-	外：ナデ 内：ナデ・オサエ	やや 密	並	にぶい黄褐10YR5/4	口縁部 小片	
328	088-05	縄文土器 深鉢E	F 12	包含層	-	-	-	外：ナデ 内：ナデ	やや 粗	並	にぶい黄褐10YR5/4	口縁部 小片	
329	087-07	縄文土器 深鉢E	D 11	包含層	-	-	-	外：ナデ 内：ナデ	密	並	にぶい黄褐10YR5/4	口縁部 小片	
330	087-09	縄文土器 深鉢E	D 11	包含層	-	-	-	外：ナデ 内：ナデ	やや 粗	並	明黄褐10YR6/6	口縁部 小片	
331	088-10	縄文土器 深鉢E	-	表面採集	-	-	-	外：ナデ 内：ナデ	やや 密	並	外：黄灰2.5Y4/1 内：橙7.5YR7/6	口縁部 小片	
332	088-03	縄文土器 深鉢E	E 8	包含層	-	-	-	外：ナデ 内：ナデ・オサエ	やや 密	並	にぶい黄褐10YR5/3	口縁部 小片	
333	087-06	縄文土器 深鉢E	D 9	包含層	-	-	-	外：ナデ 内：ナデ	やや 密	並	にぶい褐7.5YR5/4	口縁部 小片	
334	010-06	縄文土器 深鉢E	範確Aト レンチ付 近	表面採集	-	-	-	外：ナデ 内：ヨコナデ・ナデ	粗	並	にぶい黄橙10YR6/4～褐 7.5YR4/4	口縁部 小片	
335	088-06	縄文土器 深鉢E	B 11	池敷表土	-	-	-	外：ナデ 内：ナデ・オサエ	やや 密	並	にぶい黄2.5Y6/3	口縁部 小片	
336	088-07	縄文土器 深鉢E	B 13	池敷表土	-	-	-	外：オサエ 内：ナデ	やや 密	並	外：黒褐10YR3/2 内：にぶい黄橙10YR6/4	口縁部 小片	
337	088-09	縄文土器 深鉢E	-	表面採集	-	-	-	外：ナデ 内：ナデ	やや 密	並	橙7.5YR6/6	口縁部 小片	
338	008-04	縄文土器 深鉢E	範確A トレンチ	包含層	-	-	-	外：風化の為不明 内：ナデ	粗	良	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 小片	
339	088-02	縄文土器 深鉢E	C・D12	包含層	-	-	-	外：ナデ 内：ナデ	やや 密	並	外：にぶい褐7.5YR5/4 内：灰黄2.5Y6/2	口縁部 小片	
340	008-03	縄文土器 深鉢E	範確Aト レンチ付 近	表面採集	-	-	-	外：ナデ 内：ナデ	粗	不良	外：にぶい黄橙10YR7/4 内：灰黄2.5Y6/2	口縁部 小片	波状口縁
341	098-07	縄文土器 深鉢E	C 11	包含層	-	-	底径 9.8	外：ナデ 内：調整不明	密	並	外：灰黄褐10YR6/3 内：灰黄褐10YR5/2	底部 3/12	
342	100-09	縄文土器 深鉢	-	表面採集	-	-	底径 10.5	外：オサエ 内：調整不明	密	並	外：にぶい黄橙10YR7/3 内：黄褐2.5Y7/3	底部 3/12	

第20表 斎宮池遺跡出土土器・土製品観察表⑫

遺物 番号	登録 番号	器 種	出土位置		法量 (cm)			成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色 調	残存	備 考
			小地区等	遺構層位	口径	器高	その他						
343	098-02	縄文土器 深鉢	C14	包含層	-	-	底径 11.6	外：ナデ 内：ナデ・オサエ	密	並	外：橙7.5YR6/6 内：にぶい橙7.5YR6/4	底部 4/12	
344	097-03	縄文土器 深鉢	D9	包含層	-	-	底径 11.6	外：調整不明 内：調整不明	密	並	橙5YR6/6	底部 完存	
345	011-05	縄文土器 深鉢	範確Aト レンチ付 近	表面採集	-	-	底径 10.8	外：ナデ・オサエ 内：ナデ・オサエ	やや 粗	良	にぶい黄橙10YR7/4・灰 5Y4/1・灰5Y5/1	底部 3/12	
346	098-08	縄文土器 深鉢	F14	包含層	-	-	底径 11.0	外：ナデ 内：調整不明	密	並	外：にぶい橙7.5YR6/4 内：調整5YR6/6	底部 3/12	
347	002-02	縄文土器 深鉢	範確No.2	包含層	-	-	底径 10.3	外：ナデ 内：ナデ	粗	不良	外：橙7.5YR7/6 内：橙5YR7/6	底部 9/12	
348	100-04	縄文土器 深鉢	C11	包含層	-	-	底径 11.0	外：調整不明 内：ヨコナデ	密	並	外：にぶい黄褐10YR5/4 内：にぶい黄橙10YR6/4	底部 2/12	
349	011-01	縄文土器 深鉢	範確No.2	包含層	-	-	底径 12.4	外：ナデ・オサエ・工具痕 内：ナデ・オサエ	粗	やや 不良	外：橙7.5YR6/6 内：灰10YR5/1・にぶい黄橙 10YR7/4	底部 9/12	
350	099-03	縄文土器 深鉢	D12	包含層	-	-	底径 13.4	外：調整不明 内：ナデ・オサエ	密	並	外：橙7.5YR6/6 内：にぶい黄橙10YR7/4	底部 1/12	
351	002-01	縄文土器 深鉢	範確No.3 付近	表面採集	-	-	底径 11.6	外：ナデ 内：ナデ・オサエ	粗	並	外：浅黄2.5Y7/4 内：にぶい黄橙10YR7/3・灰 黄褐10YR6/2	底部 6/12	
352	097-01	縄文土器 深鉢	C13・14	包含層	-	-	底径 15.0	外：ナデ・オサエ 内：ナデ・オサエ	密	並	橙5YR6/6	底部 8/12	
353	098-05	縄文土器 深鉢	C8	包含層	-	-	底径 15.4	外：ナデ 内：ナデ・オサエ	密	並	浅黄橙10YR8/4	底部 3/12	
354	011-04	縄文土器 深鉢	範確Aト レンチ付 近	表面採集	-	-	底径 4.0	外：ナデ・オサエ 内：ナデ・オサエ	やや 密	良	にぶい黄橙10YR7/4	底部 完存	
355	098-06	縄文土器 深鉢	C9	包含層	-	-	底径 6.4	外：ナデ・オサエ 内：調整不明	密	並	外：明黄褐10YR6/6 内：黄橙10YR8/6	底部 5/12	
356	100-05	縄文土器 深鉢	B11・12 C11・12	包含層	-	-	底径 7.7	外：調整不明 内：調整不明	密	並	灰黄褐10YR4/2	底部 3/12	
357	099-02	縄文土器 深鉢	F12	包含層	-	-	底径 9.0	外：ナデ 内：調整不明	密	並	外：橙5YR7/8 内：にぶい橙5YR6/4	底部 4/12	
358	098-03	縄文土器 深鉢	E14	包含層	-	-	底径 7.6	外：ナデ・オサエ 内：ナデ	密	並	橙7.5YR6/6	底部 3/12	
359	100-07	縄文土器 深鉢	D10	包含層	-	-	底径 8.2	外：ナデ・オサエ 内：ナデ・オサエ	密	並	明褐7.5YR5/6	底部 3/12	
360	100-08	縄文土器 深鉢	B15	包含層	-	-	底径 9.6	外：調整不明 内：調整不明	密	並	にぶい黄橙10YR7/3	底部 3/12	
361	100-06	縄文土器 深鉢	C16	包含層	-	-	底径 8.3	外：調整不明 内：オサエ	密	並	外：にぶい橙5YR6/6 内：にぶい黄橙10YR7/4	底部 3/12	
362	100-02	縄文土器 深鉢	E13	包含層	-	-	底径 10.8	外：調整不明 内：調整不明	密	並	外：にぶい黄褐10YR5/4 内：橙7.5Y6/6	底部 4/12	
363	099-05	縄文土器 深鉢	F15	盛土	-	-	底径 10.1	外：ナデ 内：ナデ・オサエ	密	並	外：灰黄2.5Y7/2 内：浅黄橙10YR8/4	底部 1/12	
364	098-01	縄文土器 深鉢	C14	包含層	-	-	底径 10.0	外：ナデ 内：ナデ・オサエ	密	並	にぶい黄橙10YR7/4	底部 5/12	
365	098-04	縄文土器 深鉢	C14	包含層	-	-	底径 10.0	外：ナデ・オサエ 内：ナデ・オサエ	密	並	にぶい黄橙10YR7/4	底部 3/12	
366	099-04	縄文土器 深鉢	B11	池敷表土	-	-	底径 12.8	外：調整不明 内：ナデ	密	並	外：にぶい黄橙10YR6/3 内：淡黄2.5Y8/4	底部 3/12	
367	099-01	縄文土器 深鉢	C13	包含層	-	-	底径 13.6	外：ナデ 内：ナデ・オサエ	密	並	外：にぶい黄橙10YR7/4 内：にぶい黄橙10YR6/3	底部 3/12	
368	097-02	縄文土器 浅鉢	D13	包含層	-	-	底径 6.6	外：調整不明 内：調整不明	密	並	外：にぶい黄橙10YR6/4 内：にぶい黄橙10YR6/3	底部 完存	
369	011-03	縄文土器 深鉢	範確Aト レンチ付 近	表面採集	-	-	底径 7.6	外：ナデ・オサエ 内：ナデ・オサエ	粗	並	外：橙5YR6/6 内：橙7.5YR6/6	底部 3/12	
370	011-02	縄文土器 深鉢	範確Aト レンチ付 近	表面採集	-	-	底径 8.5	外：ナデ・オサエ 内：ナデ・オサエ	粗	並	外：明褐7.5YR5/6 内：明赤褐5YR5/6	底部 6/12	
371	099-06	縄文土器 深鉢	-	表面採集	-	-	底径 9.8	外：ナデ 内：ナデ	密	並	外：淡黄2.5Y8/3 内：灰黄2.5Y7/2	底部 4/12	

第21表 斎宮池遺跡出土土器・土製品観察表⑬

遺物番号	登録番号	器種	出土位置		法量 (cm)			成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存	備考
			小地区等	遺構層位	口径	器高	その他						
372	100-01	縄文土器 深鉢	D13	包含層	-	-	底径 10.1	外：ナデ 内：調整不明	密	並	明赤褐5YR5/8	底部 2/12	
373	100-03	縄文土器 深鉢	B~D 6~7	包含層	-	-	底径 10.2	外：調整不明 内：調整不明	密	並	にぶい黄橙10YR7/4	底部 3/12	
374	098-09	縄文土器 深鉢	C14	包含層	-	-	底径 11.0	外：ナデ 内：調整不明	密	並	橙5YR6/6	底部 3/12	
375	099-07	縄文土器 深鉢	-	表面採集	-	-	底径 10.0	外：ナデ 内：ナデ	密	並	外：にぶい黄橙10YR6/4 内：にぶい褐7.5YR5/3	底部 3/12	
376	099-08	縄文土器 深鉢	A13	表面採集	-	-	底径 10.2	外：ナデ 内：ナデ・オサエ	密	並	外：浅黄2.5Y7/3・橙5YR7/6 内：暗灰黄2.5Y5/2・暗灰 N3/0	底部 6/12	
377	097-06	縄文土器 深鉢	C13	包含層	-	-	底径 11.9	外：ナデ・オサエ・網代痕 内：オサエ	密	並	にぶい黄褐10YR5/4	底部 完存	底部網代痕
378	096-04	縄文土器 深鉢	C13	包含層	-	-	-	外：爪形文・縄文 (R L) 内：ナデ	密	並	浅黄橙10YR8/4	体部 小片	
379	096-05	縄文土器 深鉢	D14	包含層	-	-	-	外：縄文 (R L) 内：ナデ	密	並	灰褐7.5YR4/2	体部 小片	
380	076-06	縄文土器 深鉢	C13	包含層	-	-	-	外：三角形挟り・蕨状沈線・細線文 内：ナデ	粗	並	外：灰褐7.5YR4/2 内：褐7.5YR4/4	体部 小片	381と同一個体
381	075-01	縄文土器 深鉢	C・D12	包含層	-	-	-	外：沈線 (半裁竹管)・細線文 内：ナデ	粗	並	外：灰褐5YR4/2 内：にぶい黄褐10YR4/3	体部 小片	380と同一個体
382	096-08	縄文土器 深鉢	先行トレンチ4 (k1間)	排土	-	-	-	外：沈線・刺突 内：剥離	密	並	にぶい黄橙10YR7/3	突起部	
383	105-01	縄文土器 壺?	-	表面採集	-	-	-	外：ナデ 内：剥離	密	並	外：浅黄橙10YR8/4 内：にぶい黄橙10YR7/4	把手部	
384	013-06	土製品	範囲No.2 ~Aトレンチ間	表面採集	-	-	-	外：沈線・縄文 (R L)・小孔 内：剥離	やや密	並	外：褐灰10YR4/1・橙 7.5YR6/6 内：にぶい褐7.5YR5/4		器種・部位不明
385	096-10	土製品	B11	包含層	-	-	-	外：ナデ・刺突 内：オサエ	密	並	にぶい黄橙10YR6/3	完存	

【凡例】

- ・遺物番号：挿図掲載番号を示す。
- ・登録番号：実測段階の登録番号を示す。
- ・小地区等：4m方眼の小地区または範囲確認調査の調査坑No等を示す (範囲=範囲確認調査坑)。
- ・遺構層位：報告の出土遺構もしくは出土層位等を示す。
- ・色調：【新版標準土色帖】1998年度版による。複数の色調が存在する場合は併記した。
- ・残存：残存の部位を示す。残存部僅少の場合は「小片」と表記した。分数表記は、当該部位を12分割した際の残存度を示す。

第22表 斎宮池遺跡出土土器・土製品観察表⑭

遺物番号	登録番号	小地区等	遺構層位	器種	残存度	全長(cm)	全幅(cm)	全厚(cm)	重量(g)	石材	備考
386	017-02	C12	池敷表土	石鏃	完存	1.25	1.20	0.20	0.20	サヌカイト	風化?
387	017-01	C11	池敷表土	石鏃	ほぼ完存	1.15	1.20	0.20	0.22	サヌカイト	
388	017-13	先行トレンチ4 (k1間)	排土	石鏃	先端のみ残存	(1.30)	(1.20)	(0.25)	(0.34)	サヌカイト	
389	017-04	-	表面採集	石鏃	先端部若干欠損	(1.50)	1.80	0.45	(0.70)	サヌカイト	
390	017-06	C11	池敷表土	石鏃	完存	1.60	1.25	0.27	0.43	チャート	
391	017-07	C12	池敷表土	石鏃	完存	1.65	1.30	0.40	0.63	チャート	
392	017-15	C12	池敷表土	石鏃	ほぼ完存	1.95	1.10	0.20	0.37	サヌカイト	風化
393	017-05	D11	Pt 1	石鏃	両脚部欠損	(1.65)	(1.20)	(0.40)	(0.58)	サヌカイト	
394	017-08	D11	池敷表土	石鏃	ほぼ完存	1.50	1.10	0.20	0.29	サヌカイト	風化
395	019-01	C11・12	S H 3	石鏃	先端部欠損	(1.30)	(1.50)	(0.30)	(0.49)	サヌカイト	
396	018-06	D13	池敷表土	石鏃	完存	2.00	1.90	0.30	0.78	サヌカイト	
397	017-09	-	表面採集	石鏃	完存	1.80	1.45	0.25	0.54	サヌカイト	
398	018-02	C12	池敷表土	石鏃	先端部欠損	(1.60)	1.40	0.30	(0.46)	チャート	
399	018-08	C12	池敷表土	石鏃	先端部・脚部一方欠損	(1.90)	(1.60)	(0.35)	(0.90)	サヌカイト	
400	017-14	E10	包含層	石鏃	先端部・脚部一方欠損	(1.70)	(1.75)	(0.40)	(0.69)	チャート	
401	017-10	C11	池敷表土	石鏃	完存	1.50	1.35	0.30	0.35	サヌカイト	
402	018-01	C13	池敷表土	石鏃	先端部・脚部一方欠損	(1.60)	(1.30)	(0.30)	(0.58)	チャート	
403	017-03	C12	池敷表土	石鏃	先端部若干欠損	(1.50)	(1.40)	(0.25)	(0.29)	サヌカイト	
404	017-11	C11	池敷表土	石鏃	脚部一方若干欠損	(2.10)	(1.90)	(0.20)	(0.64)	サヌカイト	
405	018-03	F15	包含層	石鏃	1/2残存	(3.10)	(1.40)	(0.30)	(0.76)	サヌカイト	
406	018-04	C11	S K 7	石鏃	脚部一方欠損	3.25	(1.40)	0.30	(1.05)	チャート	
407	018-05	-	表面採集	石鏃	脚部一方欠損	(2.85)	(1.90)	0.60	(2.29)	チャート	
408	101-08	C12	池敷表土	石鏃	未成品完存	1.80	1.70	0.60	1.66	サヌカイト	未成品
409	017-16	C16	包含層	石鏃	先端部欠損	(1.75)	(1.60)	(0.45)	(1.48)	チャート	
410	018-07	C14	池敷表土	石鏃	先端部・基部欠損	(2.70)	1.70	0.40	(1.96)	サヌカイト	
411	019-02	C10	包含層	石鏃	完存	2.55	2.10	0.60	2.00	サヌカイト	未成品
412	017-12	C12	池敷表土	石鏃	基部欠損	(1.50)	(1.40)	(0.20)	(0.39)	サヌカイト	
413	020-06	-	表面採集	打欠き石鏃	完存	4.40	2.75	1.00	17.44	砂岩	
414	007-05	龍確No.2~Aトレンチ間	表面採集	打欠き石鏃	完存	4.40	3.20	1.30	22.20	砂岩	
415	020-01	-	表面採集	打欠き石鏃	完存	4.90	4.30	1.40	38.91	砂岩	
416	020-07	C16	池敷表土	打欠き石鏃	1/2残存	4.90	(2.25)	(1.20)	(15.48)	砂岩	
417	020-05	-	表面採集	打欠き石鏃	完存	4.80	3.75	2.10	50.41	砂岩	
418	020-03	C14	包含層	打欠き石鏃	完存	6.00	4.30	1.35	46.58	砂岩	
419	024-03	E12	包含層	打欠き石鏃	完存	5.80	4.50	1.90	65.91	砂岩	
420	020-02	C15	包含層	打欠き石鏃	3/4残存	6.80	(2.60)	(1.30)	(32.90)	緑色片岩	
421	023-04	F12	包含層	打欠き石鏃	完存	5.80	4.50	1.40	47.30	黒色片岩	
422	020-04	F12	包含層	打欠き石鏃	ほぼ完存	5.50	5.10	1.30	48.89	砂岩	

第23表 斎宮池遺跡出土石器・石製品観察表①

遺物番号	登録番号	小地区等	遺構層位	器種	残存度	全長(cm)	全幅(cm)	全厚(cm)	重量(g)	石材	備考
423	023-03	F13	包含層	打欠き石鏝	完存	6.00	3.95	1.70	56.60	砂岩	
424	021-08	C3	包含層	打欠き石鏝	完存	6.10	4.80	2.10	86.75	砂岩	
425	022-04	D14	包含層	打欠き石鏝	完存	8.20	4.40	1.55	68.08	緑色片岩	
426	021-01	B9	包含層	打欠き石鏝	完存	6.50	4.30	1.50	48.60	砂岩	
427	022-02	C11・12	SK7	打欠き石鏝	完存	6.40	4.50	1.95	64.02	砂岩	
428	023-06	E11	包含層	打欠き石鏝	一部欠損	(6.70)	(4.20)	(2.30)	(87.00)	砂岩	
429	007-04	範確Aトレンチ	表面採集	打欠き石鏝	一部欠損	(7.60)	(3.10)	(1.00)	(34.20)	砂岩	被熱?
430	024-01	E13	包含層	打欠き石鏝	完存	7.80	4.25	1.70	81.69	砂岩	
431	022-03	C・D6第1畦(e f間)	3層目	打欠き石鏝	完存	7.40	5.20	1.25	77.09	黒色片岩	
432	022-06	D8	包含層	打欠き石鏝	完存	7.50	3.90	0.60	26.18	緑色片岩	
433	022-01	C11・12	包含層	打欠き石鏝	完存	6.30	4.90	1.20	48.45	砂岩	
434	021-07	C14	包含層	打欠き石鏝	完存	7.20	4.50	0.90	44.41	砂岩	
435	021-05	C7	包含層	打欠き石鏝	完存	6.80	5.00	1.60	90.71	砂岩	
436	021-02	B11	包含層	打欠き石鏝	完存	7.00	4.50	1.50	51.55	砂岩	
437	021-03	C9	包含層	打欠き石鏝	完存	6.60	5.00	1.30	58.57	砂岩	
438	030-03	C・D14第4畦(k l間)	-	打欠き石鏝	完存	8.15	5.00	1.90	105.49	黒色片岩	
439	023-02	D13	包含層	打欠き石鏝	完存	5.70	4.60	2.70	114.93	砂岩	
440	021-06	C14	包含層	打欠き石鏝	完存	6.20	6.10	2.00	109.73	斑瀾岩	
441	023-05	E10	包含層	打欠き石鏝	ほぼ完存	6.55	5.70	2.60	108.14	石英斑岩	風化・被熱?
442	007-03	範確No.2～Aトレンチ間	表面採集	打欠き石鏝	完存	6.60	6.30	1.80	98.11	砂岩	
443	021-04	C12	包含層	打欠き石鏝	完存	6.90	5.70	2.20	119.74	砂岩	
444	027-03	先行トレンチ2(g h間)	排土	打欠き石鏝	完存	7.10	5.50	1.20	72.01	砂岩	
445	023-01	D11	包含層	打欠き石鏝	完存	7.00	6.00	2.30	123.52	花崗岩	風化顯著
446	029-03	E13	包含層	打欠き石鏝	完存	7.40	5.80	2.10	109.79	砂岩	
447	022-05	B～D15	池敷表土	打欠き石鏝	完存	6.90	5.70	2.55	117.25	砂岩	風化顯著
448	030-01	E13	包含層	打欠き石鏝	完存	6.00	6.15	2.10	108.32	砂岩	
449	029-04	E13	包含層	打欠き石鏝	完存	7.10	5.60	1.60	96.94	石英斑岩	
450	027-02	C8	包含層	打欠き石鏝	完存	6.70	6.00	2.00	128.06	砂岩	
451	030-04	C・D14第4畦(k l間)	-	打欠き石鏝	完存	6.80	6.10	1.30	71.78	砂岩	
452	024-02	E13	包含層	打欠き石鏝	完存	6.30	5.70	1.70	74.63	黒色片岩	
453	027-04	先行トレンチ2(g h間)	排土	打欠き石鏝	完存	7.10	6.10	1.60	99.76	砂岩	
454	028-01	D9	包含層	打欠き石鏝	一部欠損	6.80	5.90	2.20	109.84	砂岩	被熱
455	028-03	C9	池敷表土	打欠き石鏝	完存	6.60	6.70	1.90	124.65	砂岩	
456	029-02	C8	包含層	打欠き石鏝	一部欠損	7.30	6.00	1.90	86.99	砂岩	
457	026-03	D14	包含層	打欠き石鏝	完存	6.60	6.90	3.00	174.03	砂岩	被熱
458	028-04	D10	包含層	打欠き石鏝	完存	7.20	6.40	2.10	136.20	砂岩	
459	026-01	D14	包含層	打欠き石鏝	完存	7.20	6.20	1.80	98.76	緑色片岩	風化

第24表 斎宮池遺跡出土石器・石製品観察表②

遺物番号	登録番号	小地区等	遺構層位	器種	残存度	全長(cm)	全幅(cm)	全厚(cm)	重量(g)	石材	備考
460	027-01	D 9	包含層	打欠き石鍾	完存	7.50	6.60	1.60	105.47	砂岩	
461	026-02	C 13	包含層	打欠き石鍾	完存	8.70	6.60	1.80	125.73	砂岩	
462	007-01	範確No.2	包含層	打欠き石鍾	完存	8.40	6.60	1.30	107.03	砂岩	
463	024-04	先行トレンチ3 (i j 間)	排土	打欠き石鍾	完存	8.40	4.45	1.30	64.54	砂岩	被熱
464	029-01	-	表面採集	打欠き石鍾	完存	8.20	5.50	1.35	92.01	砂岩	
465	028-02	C 9	包含層	打欠き石鍾	完存	8.20	5.60	2.50	151.01	砂岩	
466	025-03	D 13	包含層	打欠き石鍾	完存	7.90	6.10	2.30	148.83	石英斑岩	
467	007-02	範確No.2～Aトレンチ間	表面採集	打欠き石鍾	完存	8.00	6.70	1.60	115.16	砂岩	被熱?
468	026-04	E 13	包含層	打欠き石鍾	完存	8.20	6.10	2.50	162.87	砂岩	
469	030-02	C・D15・16	池敷表土	打欠き石鍾	完存	7.85	5.30	1.70	98.88	砂岩	
470	102-09	B 9	包含層	打欠き石鍾	完存	8.60	5.55	1.20	87.14	黒色片岩	
471	025-02	先行トレンチ2 (g h 間)	排土	打欠き石鍾	完存	8.70	7.20	2.30	188.04	砂岩	
472	025-04	D 14	包含層	打欠き石鍾	完存	7.70	6.80	1.80	123.21	砂岩	
473	025-01	C・D12	包含層	打欠き石鍾	完存	8.30	8.40	2.00	179.85	砂岩?	
474	020-10	D 13	包含層	切目石鍾	完存	5.20	3.90	1.65	51.47	砂岩	
475	020-09	-	表面採集	切目石鍾	完存	5.50	3.35	1.35	37.83	砂岩	
476	020-08	D 12	包含層	切目石鍾	完存	5.50	4.10	1.50	48.97	泥岩	
477	020-11	E 14	包含層	切目石鍾	完存	6.20	3.50	1.45	56.20	砂岩	
478	049-01	E15・16・F15・16	包含層	石皿	一部欠損	(33.80)	(31.40)	(7.10)	(9500.00)	緑色片岩	風化
479	104-02	F 13	包含層	石皿	完存	14.50	16.00	2.90	1025.00	緑色片岩	
480	044-01	C 14	包含層	石皿	一部残存	(9.70)	(11.00)	(7.80)	(1250.00)	安山岩	
481	050-01	C 8	包含層	石皿	小片	(16.40)	(18.40)	(4.50)	(1700.00)	緑色片岩	
482	040-01	D11 土器集中地点3	-	台石	一部残存	(12.70)	(16.60)	(4.70)	(1500.00)	緑色片岩	
483	041-01	D 11	包含層	台石	一部残存	(10.40)	(17.20)	(3.80)	(1050.00)	緑色片岩	
484	103-03	7～9ライン	包含層	台石	完存	9.50	10.00	3.50	375.00	花崗閃緑岩	
485	033-02	C 13	包含層	敲石	完存	5.90	6.30	3.90	210.00	花崗閃緑岩	
486	036-01	E 13	包含層	敲石	完存	7.30	6.40	4.30	275.00	砂岩	
487	006-02	範確Aトレンチ	表面採集	敲石	完存	8.80	8.10	5.40	545.00	砂岩	
488	032-03	B・D6・7	包含層	敲石	ほぼ完存	7.70	6.50	2.60	170.00	花崗岩	風化顕著・被熱
489	104-01	-	表面採集	敲石	完存	15.40	7.05	5.50	625.00	花崗岩	
490	035-01	E 14	包含層	敲石	完存	11.55	8.55	3.60	450.00	石英斑岩	
491	038-01	C 11	S K 7	敲石	完存	9.30	7.40	3.90	350.00	石英斑岩	
492	039-01	C 11・12	S K 7	敲石	完存	7.80	7.30	6.10	450.00	砂岩	
493	031-01	-	表面採集	敲石	完存	10.50	9.70	5.40	750.00	石英斑岩	風化
494	032-01	B 12	池敷表土	敲石	3/4残存	(10.40)	(8.10)	4.70	475.00	花崗岩	風化
495	033-01	D 13	包含層	敲石	2/3残存	(9.80)	(8.00)	(5.50)	(490.00)	石英斑岩	被熱
496	006-01	範確No.2～Aトレンチ間	表面採集	磨石	完存	8.00	5.90	3.50	225.69	砂岩	

第25表 斎宮池遺跡出土石器・石製品観察表③

遺物番号	登録番号	小地区等	遺構層位	器種	残存度	全長(cm)	全幅(cm)	全厚(cm)	重量(g)	石材	備考
497	103-02	先行トレンチ2 (g h間)	排土	磨石	完存	7.80	7.65	3.30	290.00	砂岩	
498	045-01	C14	包含層	磨石	一部残存	(10.00)	(10.20)	(4.70)	(550.00)	砂岩	
499	043-01	C11	S K 7	磨石	一部残存	(7.10)	(11.40)	(5.20)	(550.00)	砂岩	
500	042-01	F 13	包含層	磨石	完存	11.40	12.20	5.40	1050.00	砂岩	
501	032-02	B 9	包含層	磨石	小片	(4.55)	(7.00)	(4.10)	(175.00)	砂岩	
502	036-02	C13	包含層	磨石	小片	5.00	7.00	5.10	200.00	砂岩	
503	037-02	E14・F12	包含層	磨石	小片	(5.40)	(6.80)	(4.50)	(180.00)	砂岩	
504	037-01	C16	S H 3	磨石	完存	(11.00)	(7.40)	(4.75)	(490.00)	砂岩	
505	034-01	E14	包含層	磨石	完存	12.50	9.20	4.00	690.00	砂岩	
506	102-06	C11	包含層	楔形石器	完存	2.70	1.00	1.00	2.89	サズカイト	
507	102-07	C12	池敷表土	楔形石器	完存	2.65	2.40	1.00	10.00	サズカイト	
508	102-03	C11	S K 7	楔形石器	完存	2.55	2.80	0.90	7.04	チャート	
509	102-02	C11	包含層	楔形石器	完存	3.00	2.80	1.40	10.68	チャート	
510	102-05	B13	池敷表土	楔形石器	完存	1.35	2.15	0.40	1.47	サズカイト	
511	102-04	C11	S K 7	楔形石器	完存	1.60	1.10	0.60	1.11	サズカイト	
512	019-07	C16	橙色崩落土	粗製剥片石器	完存	5.40	6.90	0.85	34.08	砂岩	
513	101-06	E13	包含層	石錐	先端部欠損	(2.85)	2.00	0.70	(5.03)	チャート	
514	101-07	B10	池敷表土	石錐	完存	3.00	1.50	0.95	3.04	サズカイト	
515	102-01	D・E12	包含層	削器	完存	2.50	4.30	1.25	12.74	チャート	
516	019-05	B 9	包含層	削器	完存	3.90	6.90	2.10	37.64	チャート	
517	101-02	B12	池敷表土	R F	完存	3.60	2.00	1.10	6.59	チャート	
518	101-03	C12	池敷表土	R F	完存	1.45	1.60	0.40	1.06	チャート	
519	101-04	D10	包含層	R F	完存	1.70	2.45	0.60	2.43	チャート	
520	101-01	先行トレンチ3 (i j間)	-	R F	完存	5.35	4.80	1.20	29.57	チャート	
521	101-05	B 9	包含層	U F	完存	2.60	3.50	0.90	7.41	チャート	
522	102-08	D13	包含層	石核	完存	4.00	4.60	1.70	34.14	チャート	
523	103-01	E13	包含層	礫器	完存	8.70	6.60	2.90	235.00	緑色片岩	
524	046-02	D 9	包含層	磨製石斧	一部残存	(7.80)	(5.10)	(2.00)	(150.00)	砂岩	
525	046-01	E11	包含層	磨製石斧	一部残存	(5.60)	(4.80)	(2.50)	(100.00)	石英斑岩	風化
526	047-01	D12	包含層	磨製石斧	一部残存	(8.20)	(5.90)	(2.20)	(200.00)	安山岩	風化
527	047-02	C10	包含層	磨製石斧	未成品完存	9.80	4.90	2.50	180.00	石英斑岩	未成品
528	048-01	D14	包含層	磨製石斧	完存	14.20	5.80	2.60	400.00	砂岩	
529	006-03	範圍Aトレンチ	包含層	磨製石斧	2/3残存	(7.20)	(4.30)	(1.90)	(90.31)	緑色片岩	風化
530	019-03	C10	池敷表土	ナイフ形石器	完存	2.60	1.20	0.50	2.61	チャート	
531	019-04	B 9	池敷表土	垂飾	完存	2.95	1.80	0.40	2.86	不明	
532		C・D12	包含層	打欠き石錐	一部欠損	9.30	3.75	2.30	247.74	砂岩	未成品
533		B 8	包含層	石皿	一部残存	(9.40)	(7.10)	(3.90)	(271.00)	砂岩	

第26表 斎宮池遺跡出土石器・石製品観察表④

遺物番号	登録番号	小地区等	遺構層位	器種	残存度	全長(cm)	全幅(cm)	全厚(cm)	重量(g)	石材	備考
534		C・D12	包含層	敲石	完存	11.10	3.80	2.10	136.29	砂岩	
535		-	表面採集	敲石	完存	6.90	5.40	3.80	183.37	チャート	
536		B12	池敷表土	磨石	一部残存	(4.80)	(3.80)	(2.90)	(57.48)	砂岩	
537		先行トレンチ3(i,j間)	排土	磨石	一部残存	(6.10)	(3.80)	(2.50)	(98.49)	砂岩	
538		E12	包含層	磨石	一部残存	(5.10)	(3.70)	(2.30)	(50.54)	砂岩	
539		-	表面採集	磨石	一部残存	(9.10)	(3.30)	(3.10)	(107.22)	砂岩	
540		-	表面採集	磨石	一部残存	(6.40)	(4.40)	(1.40)	(40.79)	砂岩	
541		-	表面採集	磨石	一部残存	(4.80)	(4.70)	(2.00)	(47.32)	砂岩	
542		C7	池敷表土	磨石	一部残存	(4.70)	(4.20)	(2.40)	(38.97)	砂岩	
543		C9	包含層	磨石	一部残存	(5.50)	(4.40)	(3.90)	(109.78)	砂岩	
544		-	表面採集	磨石	一部残存	(4.70)	(4.60)	(3.60)	(116.10)	砂岩	
545		C8	包含層	砥石	一部残存	(7.90)	(3.30)	(4.00)	(93.55)	砂岩	
546		C16	包含層	楔形石器	一部残存	(1.70)	(0.90)	(0.70)	(1.22)	サスカイト	
547		B15	包含層	礫器	完存	11.30	7.70	3.20	384.00	砂岩	
548		B10	池敷表土	石核	完存	6.70	4.80	2.30	96.04	チャート	549と接合
549		B10	池敷表土	石核	完存	6.30	6.20	3.30	138.10	チャート	548と接合
550		D・E8	包含層	石核	完存	11.80	6.50	4.90	423.00	チャート	

計測数値の( )の表記は残存長・幅・厚・重を示す。

第27表 斎宮池遺跡出土石器・石製品観察表⑤

小地区等	遺構層位	チャート			サヌカ イト	黒曜石	石英(巨晶 花崗岩)	花崗岩	黒色片岩	緑色片岩	砂岩	斑瀾岩	泥岩	頁岩	合計	備考
		剥片	石核	石材	剥片	剥片	石材	石材	石材	石材	石材	石材	石材	石材		
B16 C16	SH 3	2		2	5	2	71							82		
		5.72		467.31	3.95	6.16	2240.01							2723.15		
	Pit 1						2							2		
	Pit 2						38.07							38.07		
							3							3		
							32.02							32.02		
C10	SK 5						2							2		
							4.58							4.58		
B11・12 C11・12	SK 7	6		1	4						1			12		
		5.91		57.9	8.26						18.76			90.83		
C15	SK 9						2							2		
							1000.01							1000.01		
C 9	Pit 2	1												1		
		1.96												1.96		
C 9	Pit 5						1							1		
							4.35							4.35		
C15	Pit 1						2							2		
							42.52							42.52		
D 8	Pit 1				1									1		
					0.23									0.23		
D11	Pit 4				1									1		
					0.91									0.91		
D11	Pit 8						2							2		
							21.23							21.23		
D15	Pit 1						2							2		
							38.28							38.28		
E 9	Pit 1						1							1		
							6.88							6.88		
E10	Pit 1						1							1		
							3.3							3.3		
E11	Pit 1								1					1		
									3.8					3.8		
F13	Pit 1				2									2		
					2.85									2.85		
F14	Pit 1						1							1		
							4.44							4.44		
A12	池敷表土													0		
	包含層													0		
A13	池敷表土						3							3		
	包含層						1.20							1.2		
														0		
														0		
A14	池敷表土	1					3							4		
	包含層	0.25					3.47							3.72		
														0		
														0		
A15	池敷表土				1		7							8		
	包含層				0.59		4.4							4.99		
														0		
														0		
A16	池敷表土						2							2		
	包含層						1.76							1.76		
														0		
	黄橙色砂 (池埋土)						4							4		
							54.6							54.6		
B 1	池敷表土													0		
	包含層													0		
														0		
														0		
B 2	池敷表土													0		
	包含層													0		
														0		
														0		
B 3	池敷表土													0		
	包含層													0		
														0		
														0		
B 4	池敷表土													0		
	包含層													0		
														0		
														0		
B 5	池敷表土													0		
	包含層						1							1		
							20.4							20.4		

第28表 斎宮池遺跡出土剥片・石材集計表①

小地区等	遺構層位	チャート			サヌカイト	黒曜石	石英(巨晶花崗岩)	花崗岩	黒色片岩	緑色片岩	砂岩	斑瀾岩	泥岩	頁岩	合計	備考
		剥片	石核	石材	剥片	剥片	石材	石材	石材	石材	石材	石材	石材	石材		
B 6	池敷表土														0	
	包含層						1	501							1	
B 7	池敷表土						5								5	
	包含層						2.38								2.38	
B 8	池敷表土						14								14	
	包含層						11.34								11.34	
B 9	池敷表土	1			1										2	
	包含層	0.46			3.50										3.96	
B 10	池敷表土		2												3	
	包含層	1	234.49								1				369.86	
B 11	池敷表土						1								1	
	包含層			1	1		108.45								108.45	
B 12	池敷表土	3			3		8								14	
	包含層	2.63			0.88		325.68								329.19	
B 13	池敷表土	1					4								5	
	包含層	3.58					382.41								385.99	
B 14	池敷表土						7								7	
	包含層						5.41								5.41	
B 15	池敷表土			1	1		24								26	
	包含層			22.19	0.43		518.55								541.17	
B 16	池敷表土						52								52	
	包含層						4296.37								4296.37	
C 1	池敷表土						3								3	
	包含層						188.99								188.99	
C 2	池敷表土						4								4	
	包含層						177.76								177.76	
C 3	池敷表土						3								3	
	包含層						66.8								66.8	
C 4	池敷表土														0	
	包含層														0	
C 5	池敷表土														0	
	包含層			1											1	
C 6	池敷表土														182.1	
	包含層														0	
C 7	池敷表土				2										2	
	包含層				0.91										0.91	
C 7	池敷表土														1	
	包含層										1				211.99	

第29表 斎宮池遺跡出土剥片・石材集計表②

小地区等	遺構層位	チャート			サヌカイト	黒曜石	石英(巨晶花崗岩)	花崗岩	黒色片岩	緑色片岩	砂岩	斑瀾岩	泥岩	頁岩	合計	備考
		剥片	石核	石材	剥片	剥片	石材	石材	石材	石材	石材	石材	石材	石材		
C 8	池敷表土														0	
	包含層						1						1		0	
C 9	池敷表土	1		1	1		2								5	
	包含層	0.3		153.31	3.75		1.86								159.22	
C10	池敷表土	2			1										3	
	包含層	9.19			1.04										10.23	
C11	池敷表土	2			2										4	
	包含層	12.29			0.42										12.71	
C12	池敷表土	2			2										6	
	包含層	5.43		380	0.9		1017.31								1403.64	
C13	池敷表土	1													1	
	包含層	3.42													3.42	
C14	池敷表土	8			13		4								25	
	包含層	16.17			10.24		217.08								243.49	
C15	池敷表土	2			3	1	17								23	
	包含層	1.48			2.01	2.71	84.78								90.98	
C16	池敷表土	2					2			2					7	
	包含層	470					887.3			927.66	587				2871.96	
C17	池敷表土	1													1	
	包含層	1.23					5			1					1.23	
C18	池敷表土	2													8	
	包含層	50.26					173.94			395					619.2	
C19	池敷表土						6								6	
	包含層						133.76								133.76	
C20	池敷表土						21								21	
	包含層						588.04								588.04	
C21	池敷表土						11					1			12	
	攪乱溝						236.85					108			344.85	
C22	池敷表土	1			1		2								4	
	包含層	2.47			0.74		8.79								12	
C23	池敷表土						36								38	
	包含層				1		1788.09								2088.55	
C24	池敷表土						34								36	
	攪乱溝						705.59			18.73					752.41	
C25	池敷表土						10								10	
	攪乱溝						519.44								519.44	
D 1	池敷表土														0	
	包含層														0	
D 2	池敷表土														0	
	包含層														0	
D 3	池敷表土														0	
	包含層														0	
D 4	池敷表土														0	
	包含層														0	
D 5	池敷表土														0	
	包含層														0	
D 6	池敷表土														0	
	包含層						1								1	
D 7	池敷表土						81.9								81.9	
	包含層									1					1	
D 8	池敷表土														0	
	包含層									109.39					109.39	
D 9	池敷表土														0	
	包含層									1					3	
D 10	池敷表土														0	
	包含層									27.47					453.19	
D 11	池敷表土						2								2	
	包含層						1.26								1.26	

第30表 斎宮池遺跡出土剥片・石材集計表③

小地区等	遺構層位	チャート			サヌカイト	黒曜石	石英(巨晶花崗岩)	花崗岩	黒色片岩	緑色片岩	砂岩	斑瀾岩	泥岩	頁岩	合計	備考
		剥片	石核	石材	剥片	剥片	石材	石材	石材	石材	石材	石材	石材	石材		
D 9	包含層						1 130.6		1 131						2 261.6	
D10	池敷表土	1 0.37					2 1.35								3 1.72	
	包含層	2 36.84			1 1.9					1 29.06		1 0.31			5 68.11	
D11	池敷表土						2 4.19								2 4.19	
	包含層				4 4.12		2 66.38	1 193.4							7 263.9	
	土器集中No.1	1 36.51													1 36.51	
D11	土器集中No.2	1 2.21								1 248.18					2 250.39	
D12	池敷表土				1 0.43										1 0.43	
	包含層						3 361.08			2 208.67					5 569.75	
D13	池敷表土														0 0	
	包含層		1 34.13	1 30.65	1 4.34		9 692.01	2 794							14 1555.13	
	落ち込みトレンチ				1 7.29										1 7.29	
D14	池敷表土														0 0	
	包含層				1 0.88		4 256.38		2 537.21						7 794.47	
D15	池敷表土						17 236.89								17 236.89	
	包含層						17 499.8								17 499.8	
D16	池敷表土			1 201.99			62 3072.27								63 3274.26	
	包含層						25 1505.1								25 1505.1	
	攪乱溝						14 1611.48								14 1611.48	
E 7	池敷表土														0 0	
	包含層														0 0	
E 8	池敷表土														0 0	
	包含層														0 0	
E 9	池敷表土														0 0	
	包含層														0 0	
E10	池敷表土														0 0	
	包含層	2 20.07			2 14.23		1 9.07								5 43.37	
E11	池敷表土														0 0	
	包含層				1 2.55		2 95.1								3 97.65	
E12	池敷表土														0 0	
	包含層	2 1.68		2 98.81	1 0.51										5 101	
E13	池敷表土														0 0	
	包含層	2 8.36					5 1165.99	1 2042	2 251.36	1 123.28			1 10.92		11 3590.99	
E14	池敷表土														0 0	
	包含層						3 32.82								3 32.82	
E15	池敷表土														0 0	
	包含層				1 0.76		10 174.68								11 175.44	
E16	池敷表土														0 0	
	包含層						28 1424.18								28 1424.18	

第31表 斎宮池遺跡出土剥片・石材集計表④

小地区等	遺構層位	チャート			サヌカ イト	黒曜石	石英(巨晶 花崗岩)	花崗岩	黒色片岩	緑色片岩	砂岩	斑瀾岩	泥岩	頁岩	合計	備考
		剥片	石核	石材	剥片	剥片	石材	石材	石材	石材	石材	石材	石材	石材		
F10	池敷表土														0	
	包含層														0	
F11	池敷表土														0	
	包含層							1							1	
F12	池敷表土							176.56							176.56	
	包含層					1	1			1					3	
F13	池敷表土					1.3	82.33			161.55					245.18	
	包含層									1					1	
F14	池敷表土									190.72					190.72	
	包含層	1					1								2	
F15	池敷表土	6.2					42.27								48.47	
	包含層						5								5	
F16	池敷表土														0	
	包含層														0	
	表採	5		1	5		19	1	2	2					35	
		16.34		220.76	18.1		228.09	74.48	437.73	393.56					1389.06	
	畦1 (e f 間)						6								6	
							160.05								160.05	
	畦4 (k l 間)						2	1							3	
							38.31	720							758.31	
	先行トレンチ1 (e f 間)									2					2	
									158.81						158.81	
	先行トレンチ2 (g h 間)	1									2				3	
		6.03								469.81					475.84	
	先行トレンチ3 (i j 間)														0	
															0	
	先行トレンチ4 (k l 間)						5								5	
							127.95								127.95	
	個体数	59	4	20	68	5	644	5	4	26	17	2	4	2	858	
	重量 (g)	271.68	691.92	4026.32	113.01	10.46	29921.26	4067.4	1045.04	4120.48	2810.64	2188	118.47	36.14	49384.68	

第32表 斎宮池遺跡出土剥片・石材集計表⑤

遺物番号	登録番号	器種	出土位置		法量 (cm)			成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存	備考
			小地区等	遺構層位	口径	器高	その他						
551	054-01	土師器 甕	C16	SH3 カマド	16.8	-	-	外：ヨコナデ・ハケメ (23本/3cm)・オサエ 内：ヨコナデ・ハケメ (5本/1.5cm)・ケズリ	密	並	明黄褐10YR6/6	口縁部 完存	外面煤付着
552	054-04	土師器 甕	C16	SH3 灰黄褐色 土	-	-	-	外：ヨコナデ・ナデ 内：ヨコナデ・ナデ	密	並	明黄褐10YR6/6	口縁部 小片	
553	054-03	土師器 皿	C16	SH3 灰黄褐色 土	-	2.1	-	外：ヨコナデ・ケズリ 内：ヨコナデ・ナデ	密	並	橙5YR6/6	口縁部 小片	
554	054-02	土師器 皿	C16	SH3	21.4	2.4	-	外：ヨコナデ・ケズリ 内：ヨコナデ・ナデ	密	並	橙5YR6/6	口縁部 3/12	
555	052-01	土師器 長胴甕	C16	SH3 カマド	24.9	-	-	外：ヨコナデ・ハケメ (11本/1.5cm)・オサエ 内：ヨコナデ・ハケメ (12本/2.5cm)・ナデ	密	並	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 11/12	
556	051-01	土師器 長胴甕	C16	SH3 カマド	24.2	-	-	外：ヨコナデ・ハケメ (15本/2.2cm)・オサエ 内：ヨコナデ・ハケメ (12本/1.8cm)・ナデ	密	並	にぶい黄橙10YR6/4	口縁部 6/12	外面煤付着
557	055-01	土師器 甕	C15	S F10	19.0	-	-	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密	並	浅黄橙10YR8/3	口縁部 2/12	
558	055-02	土師器 長胴甕	C15	S F10	24.0	-	-	外：ヨコナデ・ハケメ (5本/0.8cm)・オサエ 内：ヨコナデ・ハケメ (10本/cm)・ケズリ	密	並	浅黄橙10YR8/3	口縁部 8/12	外面一部黒斑
559	053-01	土師器 長胴甕	D16	Pit 2	21.6	-	-	外：ヨコナデ・ハケメ (9本/2.2cm)・ナデ・オサエ 内：ヨコナデ・ハケメ (9本/2.2cm)・ナデ	密	並	にぶい黄橙10YR6/4	口縁部 6/12	
560	056-01	土師器 長胴甕	D16	Pit 2	-	-	体部径 26.6	外：ハケメ (5本/0.5cm) 内：オサエ・ケズリ	密	並	外：にぶい黄橙10YR6/3 内：にぶい黄褐10YR5/4	体部片	
561	058-03	土師器 甕	D14	包含層	21.0	-	-	外：ヨコナデ・ナデ・オサエ 内：ヨコナデ・ナデ	密	並	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 1/12	
562	057-03	土師器 皿	C16	灰黄褐色 土	18.0	-	-	外：ナデ・オサエ 内：ナデ・オサエ	密	並	橙7.5YR7/6	口縁部 小片	
563	058-02	土師器 皿	D14	包含層	19.8	2.5	-	外：ヨコナデ・ケズリ 内：ヨコナデ・ナデ	密	並	外：にぶい黄橙10YR6/4 内：橙5YR6/6	口縁部 2/12	
564	058-01	土師器 皿	D14	包含層	20.0	1.7	-	外：ヨコナデ・ケズリ 内：ヨコナデ・ナデ・オサエ	密	並	橙5YR6/8	口縁部 2/12	
565	058-07	土師器 高杯	B~D 6~7	包含層	-	-	脚部径 4.6	外：ナデ・オサエ・ハケメ (10本/1cm) 内：ナデ	密	並	外：橙5YR6/8 内：にぶい黄橙10YR7/4	頸部 完存	
566	057-04	土師器 甕	D14	包含層	12.2	-	-	外：ヨコナデ・ハケメ 内：ヨコナデ・ナデ	密	並	外：にぶい褐7.5YR5/4 内：にぶい黄橙10YR6/4	口縁部 3/12	
567	058-06	土師器 甕	-	表面採集	-	-	-	外：ヨコナデ・ナデ・ハケメ 内：ヨコナデ・ナデ	密	並	淡黄2.5Y8/3	口縁部 小片	
568	057-01	土師器 甕	D14	包含層	20.8	-	-	外：ヨコナデ・ナデ・オサエ・ハケメ (10本/1cm) 内：ヨコナデ・ナデ・ハケメ (10本/1cm)	密	並	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 2/12	
569	058-05	土師器 甕	D14	包含層	24.0	-	-	外：ヨコナデ・ナデ・オサエ 内：ヨコナデ・ナデ・オサエ・ハケメ?	密	並	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 小片	
570	058-04	土師器 甕	D14	包含層	23.2	-	-	外：ヨコナデ・ナデ・ハケメ (7本/1cm) 内：ヨコナデ・ハケメ (4本/1cm)	密	並	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 1/12	
571	057-02	土師器 鍋	D14	包含層	35.5	-	-	外：ヨコナデ・オサエ・ハケメ (6本/1cm) 内：ヨコナデ・ナデ・ハケメ (7本/1cm)	密	並	にぶい黄橙10YR6/4	口縁部 3/12	
572	001-01	須恵器 甕	範確No.2	包含層	12.0	-	-	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	並	外：褐灰10YR4/1・にぶい黄橙10YR7/4 内：褐灰10YR4/1	口縁部 3/12	
573	001-02	山茶碗	分布調査	表面採集	-	-	高台径 7.8	外：ロクロナデ・糸切痕 内：ロクロナデ	密	並	外：灰白2.5Y8/1 内：淡黄5Y8/3・橙7.5YR6/6	底部 3/12	

【凡例】

- ・遺物番号：挿図掲載番号を示す。
- ・登録番号：実測段階の登録番号を示す。
- ・小地区等：4m方眼の小地区または範囲確認調査の調査坑No等を示す (範確=範囲確認調査坑)。
- ・遺構層位：報告の出土遺構もしくは出土層位等を示す。
- ・色調：『新版標準土色帖』1998年度版による。複数の色調が存在する場合は併記した。
- ・残存：当該部位を12分割した際の残存度を示し、残存部僅少の場合は「小片」と表記した。

第33表 斎宮池遺跡出土土器観察表

### 第3節 結語

#### (1)遺構について

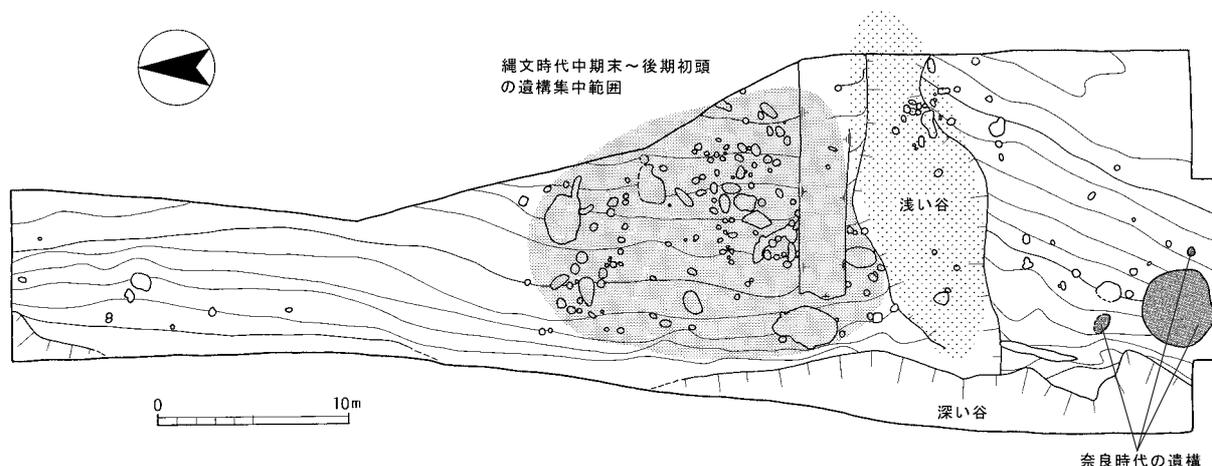
##### ①検出遺構と遺構の分布について

今回の調査は、遺跡東側の一部を除く遺跡範囲のほぼ全面を対象に行った。調査の結果、縄文時代中期末～後期初頭の土坑8基・溝1条及び奈良時代の竪穴住居1棟・焼土坑1基の他、多数のピットを確認した。SK7は中期末葉と考えられる性格不明土坑であるが、前述の通り遺構の規模・形態等から竪穴住居の可能性がある。平面形態はややいびつで、炉跡や柱穴等は確認されなかったが、周辺部を含めた遺物の出土状況からも住居跡の存在が想定されるため、当遺構が竪穴住居である可能性を想定しておきたい。遺物については、検出遺構の所属時期のもの以外に旧石器時代や縄文時代中期初頭、古墳時代、平安時代～鎌倉時代の遺物が僅かながら出土している。検出遺構の遺跡内での分布状況としては、調査区中央部の比較的平坦な範囲に縄文時代の遺構が集中する傾向があり、浅い谷を挟んだ調査区南端部の緩斜面に奈良時代の遺構2基が所在する。包含層出土遺物についても前述の傾向と同様で、各時期の遺構周辺に当該期遺物が偏在する。調査区北部の比較的傾斜のきつい範囲は遺構・遺物ともに希薄で、調査区西側はヘドロ状の土砂が分厚く堆積していたため自然地形は判然としないものの、調査区西端部が大きく落ち込むことが確認されたことから、深い谷地形であると推定される。一方、調査区東側の平坦地は近年の開発行為による削平地で、範囲確認調査

の結果、遺跡が僅かに残存していたが、範囲確認調査の結果や周囲の自然地形から勘案すると、東側への遺跡の広がりはおく僅かであると推定される。また、調査区南側は範囲確認調査の結果から遺跡は広がらないことが確認されている。従って、斎宮池遺跡は縄文時代中期末～後期初頭及び奈良時代の二時期に、丘陵地内の僅かな平坦地もしくは緩斜面を選地して営まれた極めて小規模な集落跡と言えよう。

##### ②竪穴住居SH3について

今回の調査では、奈良時代の竪穴住居が1棟確認された。本竪穴住居は緩斜面を削平し、住居西側を出入口としている。住居東奥壁には造り付けのカマドが備えられ、土師器甕や長胴甕がカマドの支脚や袖の構築材に転用されている。また、カマドの奥壁から住居外へトンネル状の煙道が構築され、排煙口では2個体分の土師器長胴甕の破片がまとまって出土している。これらの土器片は、出土状況から排煙口を閉塞するように意図的に据え置かれたと考えられるが、その目的としては、排煙口からカマド内部への雨水や土砂の流入防止等が考えられよう。本遺跡周辺で造り付けカマドと煙道が確認された竪穴住居の事例として、松阪市天王山遺跡で7世紀後葉～8世紀初頭頃の住居が6棟ほど確認されており、その中の2棟(SH321・335)では本遺跡SH3と同様に煙道の排煙口を塞ぐような状態で破碎した土師器甕が出土している<sup>①</sup>。また、土器がカマド構築材に転用された事例として、明和町曾祢崎遺跡では7世



第54図 斎宮池遺跡遺構分布図(1:400)

紀代の竪穴住居のカマド床面で二次焼成を受けた甕の口縁部が伏せた状態で出土し、カマド支脚と推定されている<sup>②</sup>。明和町長谷町遺跡でも8世紀代の竪穴住居のカマド痕跡において倒立した土師器甕が出土しており<sup>③</sup>、これらは本遺跡SH3と同様のあり方と言えよう。三重県内で造り付けカマドを備えた竪穴住居の事例は既に数多く報告されており、煙道に土師器甕を用いる例やカマドを石材で補強する例も確認されているが、遺存状況が良好な事例は少なく、今回確認された事例は当該期住居のカマド構造を知る上での好例と言えよう。

### ③焼土坑SF10について

竪穴住居SH3の北約2mに位置する焼土坑で、出土遺物からSH3と同時期の遺構と考えられる。本遺構は攪乱を受けており、全体の規模・形態は不明であるが、遺構の側壁や底部が被熱により赤変・硬化し、破碎した土師器甕の他、焼土塊や炭化材等が出土していることから、繰り返し燃焼行為が行われたことは確実である。至近に位置する竪穴住居には造り付けのカマドがあるため、当地での日常的な炊事等はこのカマドで十分用が足せるはずであり、屋外に土坑を設け、繰り返し燃焼行為が行われたその目的は炊事作業以外であることに疑いはない。調査結果からはSF10の性格を断定しがたいが、可能性の一つとして土師器焼成坑を想定し、以下に検討したい。

土師器焼成坑認定の必要条件として、全国各地で確認されている土師器焼成坑の集成と分析から木立雅朗氏は下記の3点を提示している<sup>④</sup>。

①掘り込んだだけの単純な土坑であること（それ以外の固定的な施設を持たない）。

②土坑床面が赤色に焼けていること（壁面のみが赤色に焼けたものは除外する）。

③炭・灰・赤色焼土の塊～粒が原位置で確認され、その土坑で直接火を使ったことが明確であること（2次堆積のものは除外する）。

SF10は地山を掘り込んだ土坑で、床面・壁面ともに赤色に焼け、炭化材や焼土塊が原位置で確認されており、土坑内で直接火を使用したことは明らかである。従って、木立氏の提示する認定要件は満たしていると言える。

次に、三重県内で確認されている土師器焼成坑について、上村安生氏は以下のように分析・整理している<sup>⑤</sup>。

・時期

6世紀第2四半期前後～8世紀

・形態

円形や楕円形、方形のものはみられず、逆長台形あるいは逆三角形を呈する。

・規模

横軸は1.5m～2.0mの間、縦軸は古い時期のものは3.0m～4.0mのものが多く、新しい時期のものは3.0m以下のものが多い。

・構造

①規模に差はあるものの、地山に掘り込まれており、壁の構築はみられない。

②床、奥壁、側壁は火熱を受けており、一様に赤く固く焼けている。ただし、前部は火熱を受けた痕跡がなく高まりを持つ例が多い。焼けている部分は、全体の7～8割である。焼土となっている厚さは5cm前後であり、壁は検出面の高さまで焼けている。

③焚口、煙道を持たず、天井の痕跡も見られないもので構造的な窯ではない。

・土師器焼成坑内出土の焼成関連遺物

土器の他に炭化材や焼土塊が出土する。

・立地と場所

基本的には丘陵縁辺部や段丘上に位置する。

・遺跡内での分布

単独である場合と重複する場合があるが、基本的に頂点部分が等高線に対して低い方を向き、重複する場合も古い土師器焼成坑が等高線に対して頂点を下にする。

このような三重県内の状況とSF10を比較した場合、時期や立地、焼成関連遺物の出土及び構造の一部が一致する。その他についてはSF10の北側と西側が攪乱溝によって破壊されているため検証できないものの、遺構の規模については攪乱溝の北側・西側にSF10は広がらないため、遺構の東辺と南辺はともに約1.5m以内の規模であったと推定される。規模を最大と想定しても県内の傾向から見れば小さいが、縦軸・横軸ともに1～2mのものも県内では複数確

認められていることから、土師器焼成坑の可能性が全く無いとは言えない。また、残存部分の観察から、東辺・南辺をそれぞれ奥壁・側壁の一部と想定すれば、逆三角形もしくは台形基調の平面形態で、等高線に対して遺構の頂点部分を下にしていると想定できなくはないと考える。

以上のように遺構全体が残存していないため断定的な遺構認定はできないが、土師器焼成坑の可能性は十分認められよう。なお、SF10から出土した炭化材の樹種はコナラ節とアジサイ属と同定され、少なくとも2種類が利用されていることが判明している。また、これらの樹種の特徴として、コナラ節は重硬で強度が高く、薪炭材としては特に優良な部類に入り、熱量が高い一方で、アジサイ属は比較的強度が高いが大径木は少なく、今回同定されたアジサイ属は、いずれも直径約5mmの芯持丸木であり、小径の枝あるいは樹木自体が小径のアジサイ属（コアジサイ等）が利用されたと推定されている。以上のことから、SF10ではコナラ節が燃料材の主体であり、火付け剤や補助的な燃料材としてアジサイ属が利用された可能性が指摘されている<sup>⑥</sup>。

#### ④まとめ

斎宮池遺跡は調査の結果、縄文時代中期末～後期初頭及び奈良時代の二時期に、丘陵地内の僅かな平坦地もしくは緩斜面を選地して営まれた極めて小規模な集落跡であることが判明した。本遺跡周辺の丘陵内では、旧石器時代、縄文時代草創期・早期・晩期の遺物が採集されている上村池A遺跡・B遺跡が本遺跡の西約1.5kmの位置で確認されているが、本遺跡同様、地表面が池の貯水の浸食を受け、遺物が表出したことで認識できた遺跡と言える。また、西約80mに位置する真木谷遺跡や南西約200mに位置する長谷町遺跡<sup>⑦</sup>、北西約200mに位置する斎宮池19号墳<sup>⑧</sup>でも発掘調査によって縄文期の遺物が採集されていることから、旧石器～縄文時代には当丘陵地帯で人々が活発に活動していたことが窺われる。

本遺跡周辺で確認されている飛鳥～奈良時代（7～8世紀代）の集落跡としては、松阪市丸野遺跡・中谷遺跡・天王山遺跡・琵琶垣内遺跡・横地高畑遺跡、明和町城堀遺跡・織糸遺跡・コドノA遺跡・コドノB遺跡・戸峯A遺跡・戸峯B遺跡・堀田遺跡・

発シA遺跡・発シB遺跡・垣場遺跡・北野遺跡・本郷遺跡・黒土遺跡・安養寺跡・曾祢崎遺跡・長谷町遺跡、玉城町波瀬B遺跡<sup>⑨</sup>等が挙げられるが、戸峯A遺跡、戸峯B遺跡、堀田遺跡、発シA遺跡、発シB遺跡、垣場遺跡、北野遺跡、本郷遺跡、黒土遺跡、安養寺跡等では土師器焼成坑の他、土師器焼成に関わる遺構・遺物が確認されており、土師器生産との関わりが強い集落と考えられる。また、集落の立地環境から見た場合、丸野遺跡、中谷遺跡、琵琶垣内遺跡、横地高畑遺跡、城堀遺跡、織糸遺跡、コドノA遺跡、コドノB遺跡、堀田遺跡、北野遺跡、本郷遺跡、黒土遺跡、安養寺跡、曾祢崎遺跡などは平地や台地の縁辺に営まれた集落であり、これら以外は丘陵上に営まれた集落である。丘陵上に営まれた集落はほとんどが眼下に平地を見下ろす丘陵端に立地しているが、斎宮池遺跡と長谷町遺跡については丘陵地帯の奥部に位置し、眼下には狭小な谷筋しか臨めない丘陵端の狭小な緩斜面に立地している。調査の結果や付近の地形から単独もしくはごく少規模の集落跡の可能性が高く、この2遺跡のあり方は特異な状況と言えよう。斎宮池遺跡では土師器焼成坑の可能性のある焼土坑も確認されていることから、土師器生産に関わる集落とも考えられるが、前述のようにごく小規模な集落と考えられるため、本遺跡周辺で確認されている土師器生産遺跡のような、組織的に大量生産していた集落とは考えにくい。大量に必要であったと考えられている焼成時の燃料材を求めて丘陵奥部まで進出し、生産集落が形成されたが、その規模としては地形的な制約から小規模とならざるを得なかったのかも知れない。

本遺跡が位置する丘陵部は500基を超える古墳が所在する古墳の密集地帯であることが早くから知られていたが、樹木が繁茂する丘陵地は地形の表面観察で確認可能な古墳以外の遺跡の発見は極めて困難である。しかしながら、当丘陵内では、斎宮池遺跡等と同様の立地環境にある場所に未知の遺跡が存在する可能性があり、注意を要する。（小山憲一）

## （2）遺物について

### ①縄文土器について

今回の調査で出土した縄文土器は、中期初頭をわずかにまじえるが、ほとんどが中期末葉を中心とし、

後期初頭の中津式相当の時期までの土器で占められている。従来、中期末～後期初頭の土器は、複数時期の縄文土器型式が混在して散発的に出土することが多く、当遺跡のように比較的短い期間に限られた出土事例というのはほとんどなかった。竪穴住居の可能性も考えられるSK7の遺物出土には、床面直上のもので埋土中で床面から浮いたものも一括で取り上げられているため資料の一括性に厳密さを欠くが、比較的個体数も多く良好な資料が得られたといえよう。包含層出土遺物も型式的にはやや幅があるものの、量的にも恵まれている。

三重県下の中期末葉は、竪穴住居跡や土坑などの遺構の検出にも比較的恵まれ、豊富な資料が得られてはいるものの、いまだ伊勢湾西岸地域における編年を編むところまでは至っていない。そのため研究の進んでいる東海地方西部の土器編年<sup>⑩</sup>や、北白川追分町遺跡出土資料の型式学的操作によって設定された北白川C式4期区分を参考にしてきた。

しかし、これまでは近畿地方においても良好な一括資料になかなか恵まれてこなかったが、最近になって各地で一括資料が増加するにおよび、地域的な特徴が明らかになりつつある。このような中で北白川C式4期区分は、かえって適用が困難な状況となってきた。そのため、北白川C式を新古の二分にとどめる再編論<sup>⑪</sup>も提起されている。また北白川C式とその周辺の土器に関する研究会<sup>⑫</sup>も開催されるなどして、北白川C式土器様式についての研究も活性化しつつある。

今回の調査で出土した中期末葉の縄文土器については、若干の型式幅が認められるものの、技法や文様表出・モチーフ等に共通点が多く認められ、時期的にかなりまとまった資料群と判断でき、以下のような特徴をあげることができよう。

- ①縄文を施文する土器が極めて少なく、ほとんどが太い沈線文主体の土器である。
- ②しっかりとした隆帯とそれを縁取る太い沈線によって渦文と楕円形区画文が繋がるもの（加曾利E式系、東海での取組式に相当）はなく、後出的なものがわずかに残る程度であること。
- ③渦文・楕円形区画文が分離し、隆帯の退化が進んだものが目立ち、隆帯表出のものも少ない。

④楕円形区画文の幅が狭くなり、内部にヘラで施文される羽状沈線文には「ハ」字もしくは「く」字状のものもあるが、むしろ短沈線のものが多い。さらに省略化された刺突文列となるものも多く、退化および省略化傾向が著しい。

⑤橋状把手の付く器種では、把手がブリッジとならずに体部に密着するものも多く、さらに痕跡的な隆起部として残る例などもあり、退化および省略化傾向が著しい。

⑥頸部と体部を分ける多重沈線（弧状沈線）をもつものがきわめて少ない。

⑦体部文様は羽状沈線文が主体だが、垂下する逆U字状文や平行沈線文間に羽状沈線を施すものが多いなか、沈線が細くなるものや崩れたものがあり、施文に手抜き傾向がうかがえる。

⑧当遺跡分類における深鉢B類は北白川C式B類系に相当するが、口縁部よりやや下がったところに楕円形区画文が配されるものはほとんどなく、口縁部直下に配されるものが多い。しかも、楕円形区画文のつなぎ部は橋状把手になるものではなく、突起となるもので、これも新しい様相と考えられる。

⑨北白川C式C類系の山形口縁土器でも施文手法やモチーフに退化・省略化が著しく、在地化が進んだ様子がうかがえる。

⑩さらに口縁部文様帯の省略されたものや体部文様を簡略化したものも存在する。

以上のような特徴を有し、本遺跡出土の縄文土器に類似する遺構一括資料を県内に求めれば、員弁郡東員町の村前遺跡SK69・鈴鹿市起A遺跡SK15・大石遺跡SH48などがある。

そこで本遺跡の中期末葉土器群について東海西部の編年を参考にみていくと、まず取組式に見られる加曾利E3式類似の土器が見られないことで取組式より後出型式であることが言える。続く島崎Ⅲ式の特徴とされる低い隆帯や太沈線による区画文で口縁部文様帯を構成し、区画内に横軸羽状沈線を充填するとされるものもほとんどなく、多くは口縁部文様帯を有するものの、隆帯は低く痕跡的なものとなり文様も簡略化したものであることから、島崎Ⅲ式よりも後出と思われる。

続く山の神I式の特徴は、島崎Ⅲ式の伝統を残す

口縁部文様帯を有することである。同Ⅱ式では島崎Ⅲ式の伝統を伝えるものの口縁部区画文を持たず、文様は細い棒とヘラ沈線、半裁竹管で描き出す。また、口縁部を肥厚させる特徴も有する。

したがって当遺跡出土中期末葉土器は、形式的には一部に古く位置づけできるものもあるが、主体をなす土器群は山の神Ⅰ式に併行するものと思われ、その中でもより新しい様相を見ることができる。

S K 7 出土土器や、第25図・第27図・第28図147～162などがこれに相当しよう。また一部を山ノ神Ⅱ式（口縁部が段状に肥厚する第25図75～78や、第26図123～132・第28図163～170など）に対比できると思われるが、両者を明確に区別することが難しい個体も多い。

そして第26図90～122・第28図171～180、第29図の182などのような北白川C式系の最末期に位置付けできるような沈線文主体の土器が多数を占める一群がある。一部には縄文を沈線帯に充填したりして磨消縄文につながりそうなものも含まれるが、定型的な磨消縄文土器はない。

近年、吉野C遺跡S B 02出土土器をもって中期最末の型式として吉野C式<sup>⑩</sup>が設定されたが、これは山の神Ⅱ式系に北白川C式4期が共伴する組成であり、山の神Ⅱ式直後の中期最終末型式となる。本遺跡の新しい部分についても一括資料ではないが、当該期の組成が一部含まれるものと思われる。

後期土器についてみると、その後続く初頭の中津Ⅰ式古段階に相当する時期に断絶が認められる。第30図187～189は縦位に展開する鈎状沈線文が体部で横位に連携して全周するモチーフを描くものと思われるが、一部にスペード文を追加している部分があり、全体の文様構成が崩れた展開をなしている。この土器は称名寺式とも関連が深く、中津Ⅰ式でも新段階に相当しよう。この段階にあたる破片資料が一定量存在（第31図）し、以後斎宮池遺跡から人の暮らしの痕跡が途絶える。

以上のように本遺跡出土縄文土器は、山ノ神Ⅰ式を盛期とし、同Ⅱ式・中期最末期と継続し、少しの期間の断絶を経た中津Ⅰ式新段階の土器群からなることがわかった。今回の調査により伊勢湾西岸地域中期末の状況を垣間見ることができたが、検討材料

となる良好な一括資料は依然不十分な状況であり、今後さらに各型式の良好な一括資料が発見され、伊勢湾西岸地域における縄文土器の地域編年が整備されていくことを期待し、資料の蓄積を待ちたいと思う。（田村陽一）

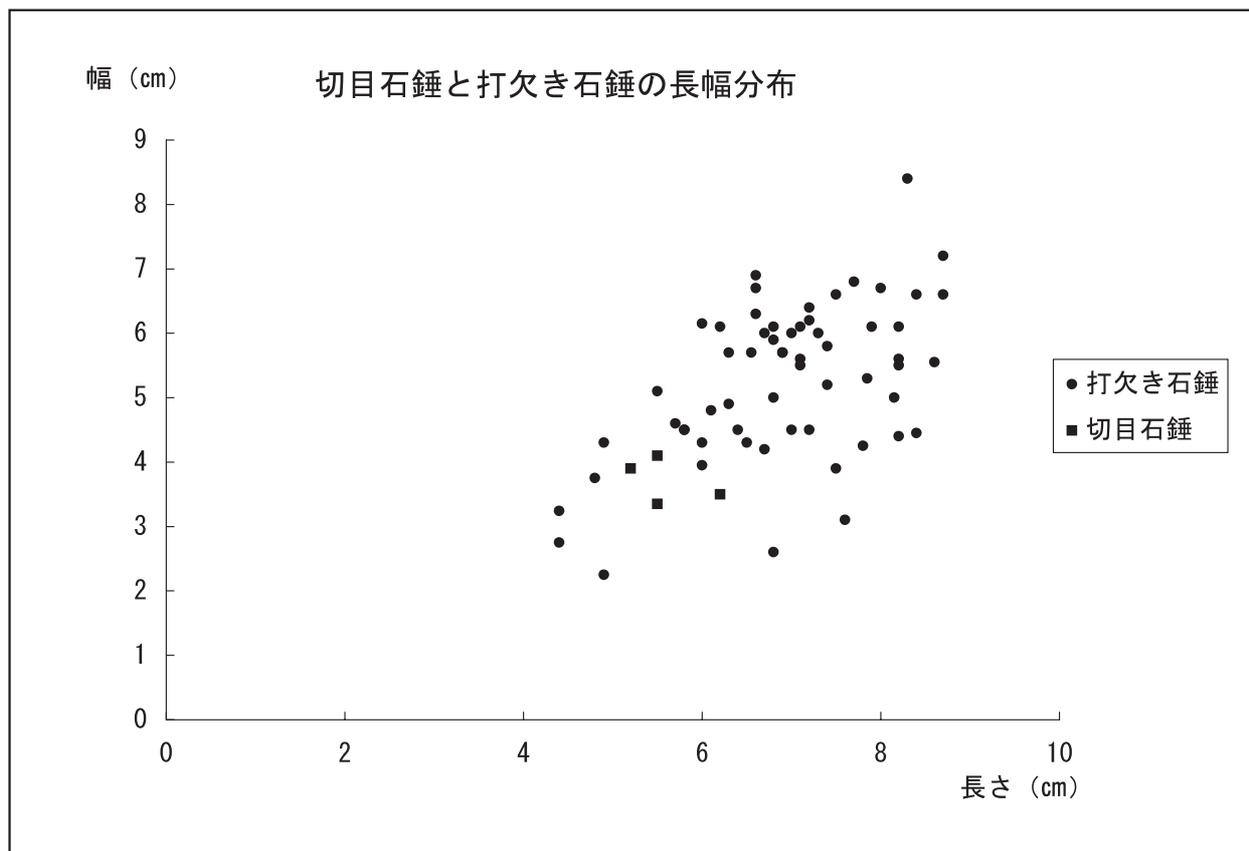
## ②石器・石製品について

今回出土した石器群の所属時期は、大半が中期末を主体とする土器群に伴うと理解される。器種構成や各器種の形態的特徴も土器群の時期と齟齬は見られない。

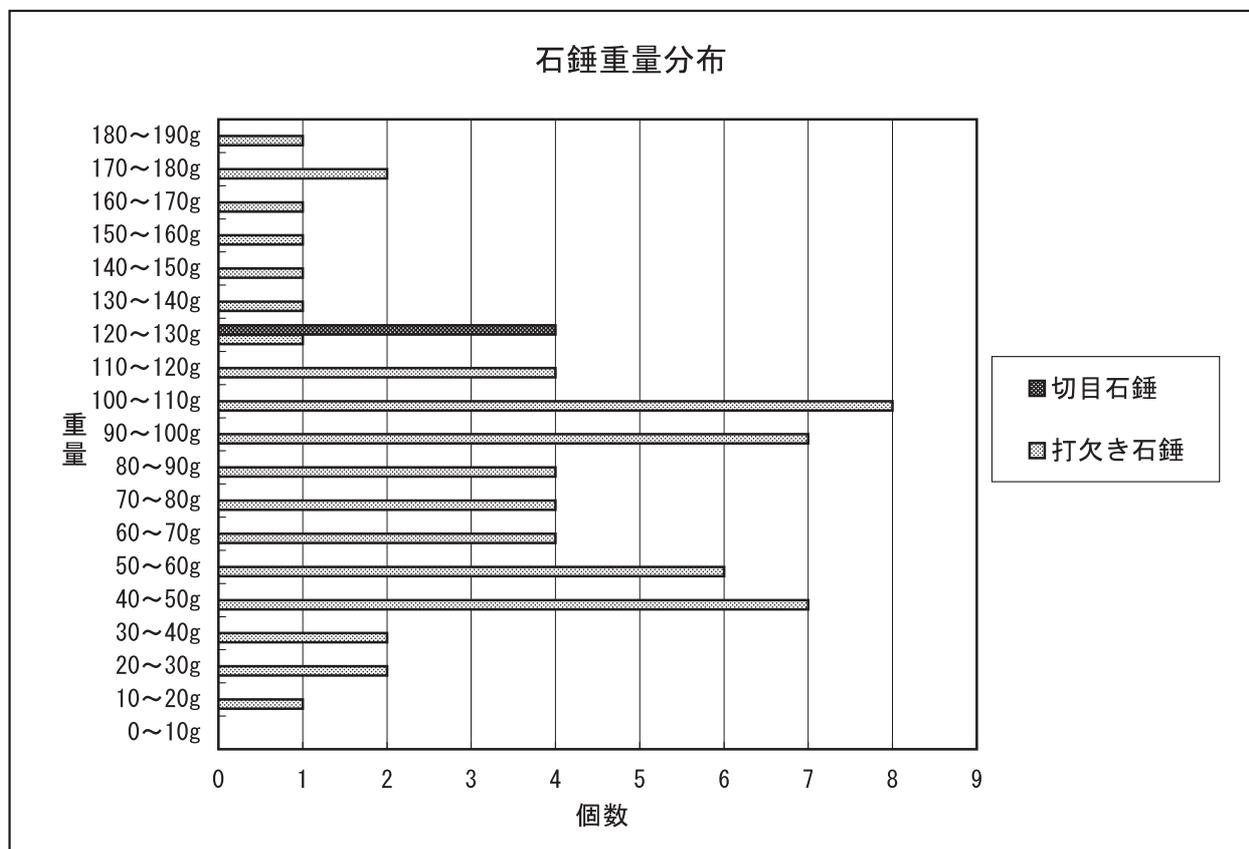
石材では、チャートを主体にしてサヌカイトがそれに伴う在り方は、後期中葉までの三重県下での典型的な様相といえよう。但し、定型的器種の石材を見てみると、石鏃27点中、サヌカイトが19点と極めて高率を示している。同じ遠隔地からの搬入石材でも、黒曜石は定型的器種には使用されていない。また、搬入石材では、下呂石が出土していないことにも注意しておきたい。

次に器種構成と組成をみると、石錘が62点と組成の主体を占め、石鏃がその半数弱の27点でそれに次いでいる。全体としては、狩猟・漁撈・植物食採集に関わる三者と生活維持に関わる石器がバランス良く出土しているともいえる。敢えて挙げるならば、打製石斧が全くみられないことがあるが、調査範囲の問題もあるのかもしれない。石器は器種によって一点ごとの意味が異なるため、組成比のみで単純に各生業活動の比重を云々することはできないが、少なくとも各生業活動がすべて行われていたことは、この遺跡の集落としての安定性を示す一つの証左であるともいえよう。

次に最も多く出土している打欠き石錘について考えてみよう。本遺跡は櫛田川中流域右岸の入り組んだ丘陵上に位置する。中流域に位置する遺跡では、打欠き石錘と切目石錘は、ほぼ同数か切目石錘のほうが多く出土することが通例だが、本遺跡では圧倒的に多く打欠き石錘が出土している。例えば、同じ三重県下の新徳寺遺跡（多気町）では、やや時期は下がるものの、打欠き石錘80点に対して、83点とほぼ同数が出土している<sup>⑪</sup>。打欠き石錘は、本遺跡で小型品とした40～50gのものが主体で、100gを越えるものはごく少数であった。ところが、本遺跡では



第55図 齋宮池遺跡出土石錘の長幅分布図



第56図 齋宮池遺跡出土石錘の重量分布図

大型品とした100 g前後の一群が約半数あり、様相が異なる。打欠き石錘は、河川の上流域から下流の汽水域や沿岸部に向かうに従って、重量が重いものが増えると考えられるが<sup>⑧</sup>、本遺跡では他の中流域の遺跡に対して、大型のものが多く、それらは内水面での漁撈でも、網そのものを動かす漁法ではなく、「刺し網」のような陥穽漁に用いられた可能性が想定される。本遺跡の場合は、その活動地として櫛田川が考えられるが、他の池沼などでも使用されたのかもしれない。

また、個別記載で述べたように、打欠き石錘の小型品の416や大型品とした439・451・469・470などは両端もしくは一端の凹部形成が明瞭ではなく直線的で、一部はつぶれ状の面を形成するものもある。これらは、筆者らが鴻ノ木遺跡の報告書で「円礫素材の楔形石器」としたものと共通の特徴をもつといえる。しかし、その他の凹部形成が明瞭な打欠き石錘と比較すると、すでに述べたように法量などの他の要素は斉一性が高いことから、直線的な縁辺をもつものも石錘と理解した。

垂飾とした資料は、そのいびつな形態から、块状耳飾の半欠品を再生したものである可能性も想定される。この場合、今回の調査資料には、块状耳飾が多く出土する早期末から中期前葉の土器はみられないことから、他所から採集してきたものを垂飾として使用していた可能性も考えられる。再利用とするならば、孔は块状耳飾の補修孔として、もともと開いていた可能性も考えられる。(大下 明)

#### 【註】

- ①『天王山遺跡・天王山古墳群発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター 2006年)
- ②『曾祢崎遺跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター1996年)
- ③本書「第三章 長谷町遺跡」参照。
- ④木立雅朗「土師器焼成坑を定義するために」(『古代の土師器生産と焼成遺構』窯跡研究会編 真陽社 1997年)
- ⑤下記の文献から抜粋・整理して記述している。  
上村安生「三重県内の土師器焼成坑について」(『研究紀要』第7号 三重県埋蔵文化財センター 1998年)
- ⑥後掲の自然科学分析報告「斎宮池遺跡から出土した炭化

材・種実遺体の種類」(第七章 第5節)に拠る。

- ⑦本書「第三章 長谷町遺跡」「第五章 真木谷遺跡」参照。
- ⑧『宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅷ 小金・高塚・斎宮池古墳群発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター 2010年)
- ⑨以下の文献等に所収されている。
  - ・『丸野・中谷遺跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター 2003年)
  - ・『天王山遺跡・天王山古墳群発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター 2006年)
  - ・『琵琶垣内遺跡(第1・4次)発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター 2006年)
  - ・『横地高畑遺跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター 1998年)
  - ・『城堀遺跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター 2003年)
  - ・『織糸遺跡』(三重県埋蔵文化財センター 2006年)
  - ・『コドノA遺跡・コドノB遺跡(第1次)発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター 1998年)
  - ・『コドノB遺跡(第2次・第3次)発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター 2000年)
  - ・『戸峯A遺跡調査概要』(明和町教育委員会 1991年)
  - ・『戸峯古墳群調査概要』(明和町教育委員会 1991年)
  - ・『堀田遺跡』(『昭和55年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財調査報告』三重県教育委員会 1981年)
  - ・『三重県埋蔵文化財年報一昭和47年度一』(三重県教育委員会 1973年)
  - ・『発シA遺跡発掘調査概要』(明和町教育委員会 1993年)
  - ・『宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅴ 発シA遺跡一第2次調査一』(三重県埋蔵文化財センター 2003年)
  - ・『発シB遺跡現地説明会資料』(明和町教育委員会 1982年)
  - ・『発シB遺跡試掘調査概要報告』(明和町教育委員会 1982年)
  - ・『発シB遺跡(6G0B)』(現地説明会資料)(明和町教育委員会 1987年)
  - ・『発シC遺跡発掘調査概要』(明和町教育委員会 1984年)

- ・「北野遺跡」(『平成2年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財調査報告—第2分冊—』三重県教育委員会 三重県埋蔵文化財センター 1991年)
  - ・『北野遺跡(第2・3・4次)発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター 1995年)
  - ・『北野遺跡(第5次)発掘調査概報』(三重県埋蔵文化財センター 1996年)
  - ・「本郷遺跡」(『平成元年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財調査報告—第1分冊—』三重県教育委員会 三重県埋蔵文化財センター 1991年)
  - ・『本郷遺跡(第2次)・曲里中遺跡』(三重県埋蔵文化財センター 1992年)
  - ・『三重県埋蔵文化財年報16—昭和60年度』(三重県教育委員会 1986年)
  - ・『平成11年度三重県埋蔵文化財年報』(三重県埋蔵文化財センター 2000年)
  - ・『安養寺跡(第2次)発掘調査現地説明会資料』(明和町 2003年)
  - ・『曾祢崎遺跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター 1996年)
  - ・本書「第三章 長谷町遺跡」
  - ・『波瀬B遺跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター 1992年)
  - ⑩増子康真「東海西部の縄文中期末土器型式—山の神式土器の細別—」(『古代人』38号 名古屋考古学会 1981年)
  - ⑪泉 拓良「中期末縄文土器の分析」(『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ』京都大学埋蔵文化財研究センター 1985年)
  - ⑫富井 真「北白川C式土器」(『総覧 縄文土器』同刊行委員会 2008年)
  - ⑬第9回 関西縄文文化研究会『関西の縄文中期末土器—北白川C式とその周辺—』(関西縄文文化研究会 2008年)
  - ⑭増子康真「伊勢湾沿岸地域の縄文後期初頭土器群—東海西部と近畿東部の地域圏の結合と再分離—」(『古代人』65号 名古屋考古学会 2005年)
  - ⑮『一般国道42号松阪・多気バイパス建設地内埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ 新徳寺遺跡』(三重県埋蔵文化財センター 1997年)
  - ⑯大下 明「関西における縄文時代前・中期石器群の概要と組成の検討」(『縄文時代の石器—関西の前期・中期—』関西縄文文化研究会 2003年)
  - ⑰『一般国道42号松阪・多気バイパス建設地内埋蔵文化財発掘調査報告Ⅳ 鴻ノ木遺跡(下層編)』(三重県埋蔵文化財センター 1998年)
- 【参考文献】**
- ・『明和町史 史料編 第一巻 自然・考古』(明和町 2004年)
  - ・田中久生「三重県下古墳時代後期竪穴住居内の造り付け竈の構造について」(『研究紀要』第8号 三重県埋蔵文化財センター 1999年)
  - ・『研究紀要』第7号(三重県埋蔵文化財センター 1998年)
  - ・『古代の土師器生産と焼成遺構』(窯跡研究会編 真陽社 1997年)

# 第V章 真木谷遺跡

## 第1節 遺構

### (1) 遺跡の位置・地形と基本層序

#### ① 遺跡の位置・地形

真木谷遺跡は、多気郡明和町池村に所在する斎宮調整池の中央部西側に半島状に突き出た丘陵尾根の東側緩斜面に位置し、池の貯水によって常時水没する範囲に遺跡は立地する。東側対岸には斎宮池遺跡が所在する。

#### ② 基本層序

基本層序は、第Ⅰ層：にぶい黄褐色砂、第Ⅱ層：やや粘性のある褐色土、第Ⅲ層：粘性のある明赤褐色～橙色土（地山）である。遺構は第Ⅲ層上面で検出した。なお、調査区は西から東に向けて緩やかに傾斜しているが、東端で急激に落ち込み、ヘドロ状の土砂が厚く堆積する。

### (2) 検出遺構

確認できた遺構は、土坑3基、ピット3基である。しかし、これらからの出土遺物は皆無のため、遺構

の時期・性格などは不明である。

**SK1** 調査区の北側で検出した。長径1.1m、短径0.6mの不定形で、底部は径約0.4mの円形である。埋土は黒褐色粘質土1層で、検出面からの深さは約0.5mである。

**SK2** 調査区中央付近の西壁に接する形で検出した。長径約0.8mで西端は調査区外である。底部中央には径約0.4mのピットがある。埋土は黒褐色粘質土1層で、検出面からの深さはそれぞれ約0.3m、約0.7mである。

**SK3** 調査区の中央やや南側で検出した。長径約1.0m、短径約0.8mの不定形の土坑である。埋土は黒褐色粘質土1層で、検出面からの深さは約0.4mである。

**Pit** B3・B5・A8グリッドに位置するいずれも径約0.3m、検出面からの深さ約0.06m～0.1mの小穴である。

## 第2節 遺物

### (1) 出土遺物の概要

今回の調査で出土した遺物は、表土上及び表土掘削時に採集したものがほとんどで、遺構出土のものは皆無である。遺物としては、平安時代の中頃と思われる土師器碗の底部1点、敲石1点、調査区東端の落ち込みから出土した石錘1点の他、砂岩製礫器2点、サヌカイト石核1点（17.42g）、チャート剥片2点（21.04g）、砂岩剥片2点（22.79g）にとどまり、出土量も僅少であった。以下、出土遺物について記述するが、1・2・4～6については、平成12年度の範囲確認調査で出土したものである。

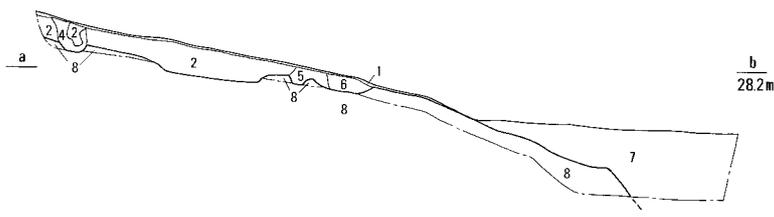
### (2) 出土遺物

1・2は土師器杯で、ともに法量が口径12cm余り、器高約3cmである。1は底部が平坦で、体部が外反気味に開き、口縁部がわずかに内弯する。器面の調整はヨコナデ・ナデである。2は口縁部がわずかに外反し、口縁部端がやや内弯する。器面の調整はヨコナデ・ナデである。底部外面には指オサエ痕が残

存する。これらはともに斎宮編年第Ⅱ期第1～2段階（8世紀後半9世紀前半）頃のものと思われる。

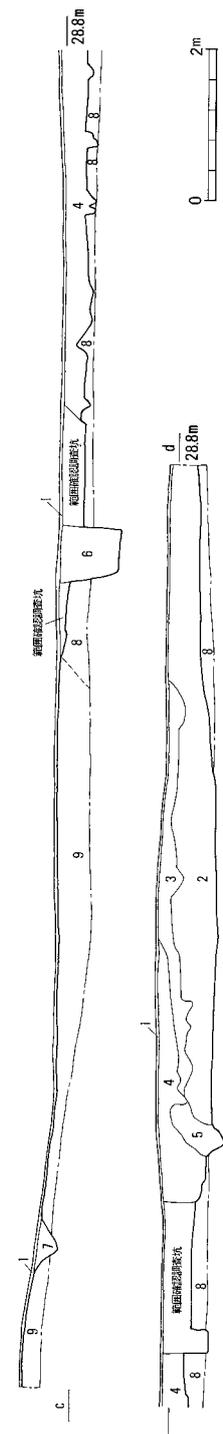
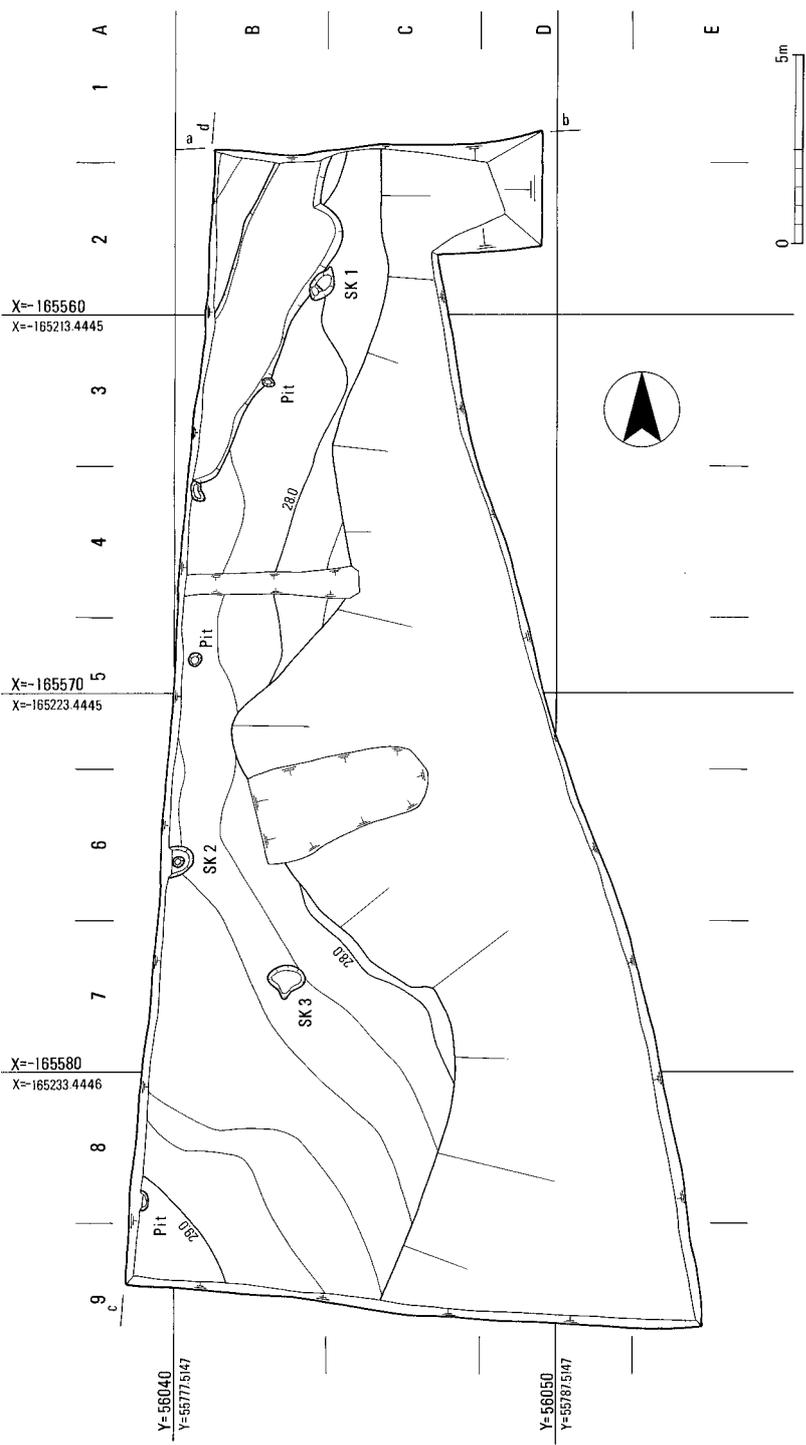
3は土師器碗の底部である。径11cm程度の高台が貼り付けられ、ナデ調整で仕上げられる。色調はにぶい橙色を呈し、底部内面の中央部がやや窪む。斎宮編年第Ⅲ期第1～2段階（10世紀後半～11世紀前半）頃のものと思われる。

4～6は土師器甕である。4は口径約16cmで口縁部が大きく外反し、内面が肥厚する。器面の調整はヨコナデ・ナデのみで、残存部にハケメ調整は認められない。5は口縁部が外反気味に立ち上がり、内面がやや肥厚する。口縁部は上方につまみあげられ、外面に面を有する。器面の調整はヨコナデ・ナデのみで、残存部にハケメ調整は認められない。6は口縁部の肥厚は認められず、くの字状に開く。また、端部はわずかに内弯する。口縁部はヨコナデされ、体部外面に粗いハケメ、内面に工具によるナデが施される。4・5は飛鳥～奈良時代、6は平安時



a~b間土層

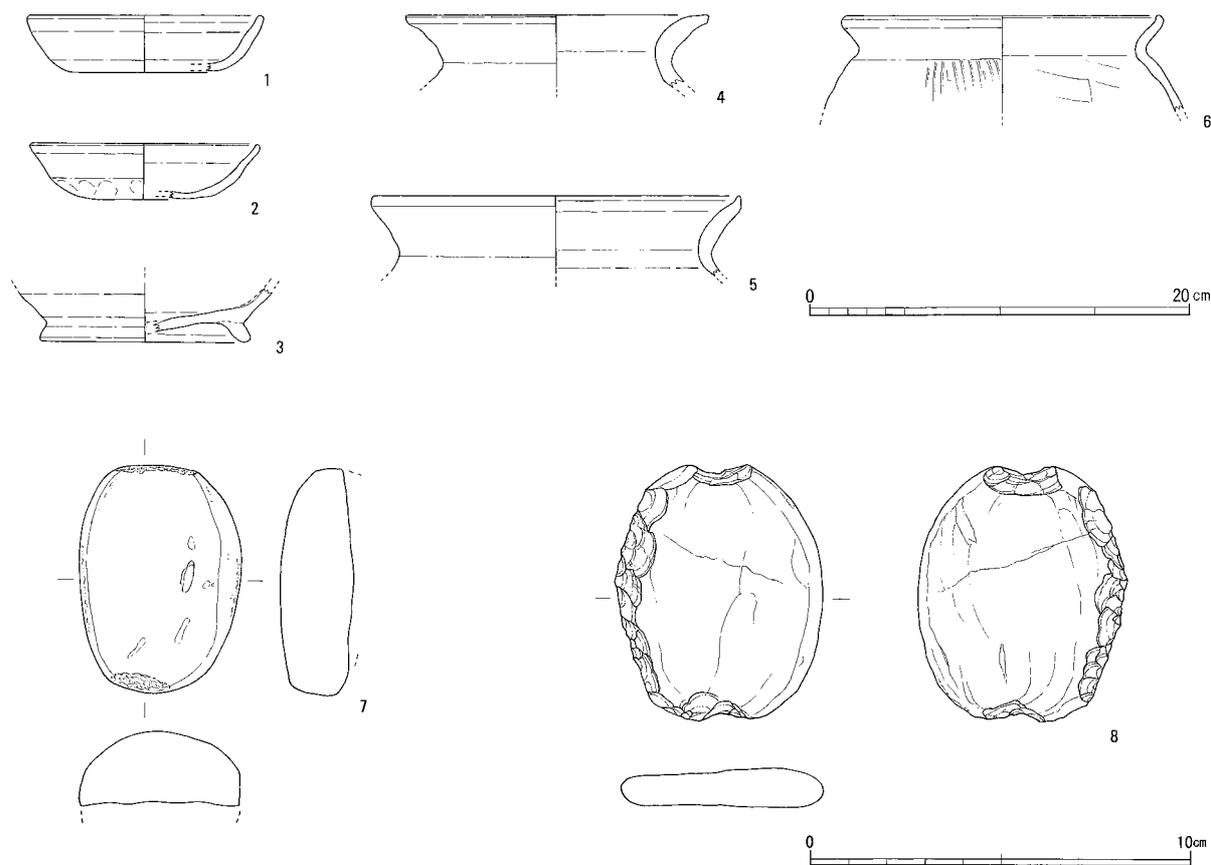
- 1 10YR5/4 にふい黄褐色砂
- 2 7.5YR4/6 褐色土 (やや粘性あり)
- 3 7.5YR4/3 褐色土 (炭化物混じる やや粘性あり)
- 4 7.5YR5/6 明褐色土 (地山土まばらに混じる やや粘性あり)
- 5 7.5YR5/6 明褐色土 (黒褐色土まばらに混じる やや粘性あり)
- 6 7.5YR4/6 褐色土 (明褐色土と地山土混じる)
- 7 2.5Y5/4 黄褐色土 (明褐色土と地山土混じる 粘性あり) : 池の堆積土
- 8 2.5YR5/6 明赤褐色土 (粘性あり) : 地山



c~d間土層

- 1 10YR5/4 にふい黄褐色砂
- 2 7.5YR4/6 褐色土 (やや粘性あり)
- 3 7.5YR4/4 褐色土 (やや粘性あり)
- 4 5YR4/4 にふい黄褐色土 (やや粘性あり)
- 5 5YR4/4 にふい黄褐色土 (黒褐色土全体に混じる やや粘性あり)
- 6 7.5YR5/4 明褐色土 : SK2
- 7 7.5YR4/4 褐色土 (黒褐色土まばらに混じる やや粘性あり) : Pit 3
- 8 2.5YR5/6 明赤褐色土 (粘性あり) : 地山
- 9 7.5YR5/8 褐色土 (やや粘性あり) : 地山

第57図 真木谷遺跡遺構平面図 (1:200)・土層断面図 (1:100) ※座標値上段: 日本測地系・座標値下段: 世界測地系



第58図 真木谷遺跡出土遺物実測図（1～6＝1：4、7・8＝1：2）

遺物 番号	登録 番号	器 種	出土 地区	出土 遺構	出土 位置	出土 層位	法量 (cm)			調整 (技法) の特徴	胎 土	焼 成	色 調	残存度	備 考
							口径	器高	その他						
1	001-04	土師器 杯	C 地区	範囲 確認 調査 坑	No.7 付近	表面 採集	12.4	3.0	-	外：ヨコナデ・ナデ 内：ヨコナデ・ナデ	やや密	並 橙 5YR6/6	口縁部 2/12		
2	001-02	土師器 杯	C 地区	範囲 確認 調査 坑	No.3	表土	12.1	2.9	-	外：ヨコナデ・ナデ・オサエ 内：ヨコナデ・ナデ	やや粗 (2.5mm以 下の砂粒 含む)	並 外：橙 7.5YR7/6 内：浅黄橙 10Y8/4	口縁部 3/12	・外面摩滅激しい	
3	002-02	土師器 碗	-	-	-	表面 採集	-	-	高台径 11.0	外：ナデ・高台貼付後ナデ 内：ナデ	密 (2mm以 下の砂粒 含む)	並 にぶい橙 7.5YR6/4	高台部 5/12	・内外面黒変	
4	001-03	土師器 甕	C 地区	範囲 確認 調査 坑	No.3	排土	15.9	-	-	外：ヨコナデ・ナデ 内：ヨコナデ・ナデ	やや粗 (2mm以 下の砂粒 多く 含む)	並 外：淡黄 2.5Y8/3 内：にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部 2/12		
5	001-05	土師器 甕	C 地区	範囲 確認 調査 坑	No.5	表土	19.4	-	-	外：ヨコナデ・ナデ 内：ヨコナデ・ナデ	やや粗 (2mm以 下の砂粒 多く 含む)	並 浅黄 2.5Y7/4 (一部灰黄褐 10YR4/2)	口縁部 2/12	・外面摩滅激しい	
6	001-01	土師器 甕	C 地区	範囲 確認 調査 坑	No.6	-	16.8	-	-	外：ヨコナデ・ハケメ (3本/1cm) 内：ヨコナデ・工具ナデ	やや粗 (2mm以 下の砂粒 少量 含む)	並 外：浅黄 2.5Y7/4 内：淡黄 2.5Y8/3	肩部 2/12		
7	002-03	敲石	-	-	-	表面 採集	全長 6.0	全幅 4.2	残存厚 2.0	-	-	-	約1/2	・残存重77.11g ・砂岩	
8	002-01	石錘	C5	落ち 込み	落ち 込み	黒褐 色土	全長 6.7	全幅 5.45	全厚 1.0	-	-	-	完存	・重量59.47g ・砂岩	

【凡 例】

- ・遺物番号：挿図掲載番号を示す。
- ・登録番号：実測段階の登録番号を示す。
- ・出土地区：4m方眼の小区区または範囲確認調査の調査坑設定地区を示す。
- ・出土遺構：報告書の遺構番号等を示す。
- ・出土位置：現地調査段階の遺構番号・出土位置等を示す。
- ・出土層位：現地調査段階の出土層位等を示す。
- ・色 調：『新版標準土色帖』1998年度版による。複数の色調が存在する場合は併記した。
- ・残 存 度：当該部位を12分割した際の残存度を示す。

第34表 真木谷遺跡出土遺物観察表

代後半期の所産であろう。

7は残存長6cm・残存幅約4cmの敲石である。縦方向に剥離しているが、上下に敲打痕が残存する。また、被熱によるものか、片側が黒く変色している。石材は砂岩である。

### 第3節 結語

真木谷遺跡の東側対岸に位置する齋宮池遺跡では、縄文時代中期末～後期初頭及び奈良時代の遺構が検出され、多数の縄文土器や石鏃・石斧・石錘等の石器、奈良時代の土師器等が出土している。これに対し、真木谷遺跡では遺構・遺物とも非常に少なく、人間の営為の痕跡としては、希薄と言わざるを得ない。ただし、痕跡が希薄とは言え、時期・性格不明ながら遺構が検出され、縄文時代及び奈良～平安時代の遺物が採取されたことから、何らかの目的で土地利用がなされたことは確かであろう。今回の調査では調査区の東側が地形的に大きく落ち込むことが確認されたが、対岸の齋宮池遺跡同様、丘陵端の狭小な緩斜面で遺構・遺物が確認された。調整池の中央部はヘドロ状の土砂が分厚く堆積しているため自然地形は判然としないが、齋宮池遺跡・真木谷遺跡の調査結果からは深い谷地形であることが推定できる。前述の通りこの地形は江戸時代のため池の築造、昭和期の宮川用水第一期事業による池の改修工事、さらには貯水による浸食・土砂の堆積などにより、自然地形が大きく改変されたと推定されるが、これらの後代の影響により当該遺跡の情報が少なからず失われた可能性が高い。発掘調査によって比較的多くの情報が得られた周辺の遺跡との関係から考えると、東約80mに位置する齋宮池遺跡では縄文時代中期末～後期初頭及び奈良時代の遺構・遺物が確認されており、真木谷遺跡と同様の時期の遺跡と考えられる。また、南西約300mに位置する長谷町遺跡では、奈良時代の竪穴住居や平安時代の火葬墓の他、縄文時代の所産と考えられる石器類が出土している。これらの遺跡所在地は、明和町・玉城町・多気町に跨る周囲を平野部に囲まれた低位の丘陵地帯であり、縄文時代について言えば、狩猟・採集の場であったと考えられる。また、古墳時代には多数の古墳が造営され、古代には小規模ながら住居跡や墓跡が確認

8は残存長約7cm、残存幅約5cmの石錘で、上下に打欠痕があり、片側側辺にも加工痕が認められる。石材は砂岩である。同程度の大きさ・形態の石錘が対岸の齋宮池遺跡からも多数出土している。

されていることから、丘陵端の緩斜面等、地形的に好条件の場所が様々な目的で土地利用されていたと推定される。真木谷遺跡では、遺構・遺物ともに僅少であったため、齋宮池遺跡や長谷町遺跡のように遺跡の性格を推定できる材料に乏しいが、所属時期が重複するこれらの遺跡と何らかの関係がある可能性は否定できないと考えられる。

(西口剛司・小山憲一)

#### 【註】

古代の土師器の編年・時期判断については、下記の文献に拠った。

- ・『齋宮跡発掘調査報告Ⅰ 内院地区の調査 本文編』  
(齋宮歴史博物館 2001年)
- ・上村安生「伊勢・伊賀における古代土師器煮炊具の様相」(『鍋と甕そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム 1996年)

# 第VI章 与五郎谷遺跡

## 第1節 遺構

### (1) 遺跡の位置・地形と基本層序

#### ① 遺跡の位置・地形

与五郎谷遺跡は、多気郡明和町、同郡多気町、度会郡玉城町の3町に跨る通称玉城丘陵の南端部に位置し、丘陵裾部の南面する緩斜面に立地する。現況はJR参宮線「外城田」駅の北側に敷設された農業用水路及び果樹園・畑地で、遺跡の前面には水田低地が広がる。行政上は多気郡多気町土羽に所属するが、多気町の東限に当たり、度会郡玉城町上田辺(かみたぬい)に隣接する。

#### ② 基本層序

基本層序は、調査区北壁(a～b間)で見ると、第I層：整地土(1層)、第II層：明褐色～暗褐色系土(2・3・7・8層)、第III層：黒褐色～暗褐色系粘質土(4・5層)、第IV層：締まりの強い橙色粘質土(6層)で、第IV層が地山である。遺構は第IV層上面で検出した。なお、第II層は整地土の可能性もある。

### (2) 検出遺構

検出した遺構は溝1条とピット数基のみである。また、出土遺物も小片かつ僅少であるため、遺構の時期・性格等は不明である。

**SD1** 調査区の東半部南側に位置し、南壁に平行してほぼ東西に延びる溝である。西端は攪乱により残存していない。規模は、残存長10.7m、幅約0.2～0.7m、検出面からの深さが0.02～0.12m程度で、浅く細長い溝である。埋土は黒褐色土一層で、土師器・須恵器の小片が少量出土したが時期は不明である。

**Pit** 調査区の東半部に点在する。建物等としてまとまるものは認められない。小規模かつ不定形の

ものもあり、これらは植物由来の可能性もある。

### (3) 工事立会調査

#### ① 調査区の位置

工事立会調査は、平成18年度と20年度に行った。平成18年度に実施した工事立会調査区は、平成20年度本調査区の東側に隣接する既設水路下で、改修工事施工時に調査を行った。平成20年度に実施した工事立会調査区は、平成20年度本調査区の南側に隣接する果樹園及び畑地で、水路改修工事に先行して整備される仮設作業ヤード範囲の樹木抜根作業時に調査を行った(第59図)。

#### ② 平成18年度の調査

調査の結果、18年度工事施工範囲の西端部(約25㎡)でピットと焼土を検出し、土師器片・須恵器片が出土した。ピット等を確認した位置より東側は既設水路建設時に削平されたと判断できたが、西側については既設水路下部に自然地形の残存が確認されたため、立会調査範囲の西側を要本調査とした。なお、当該の調査で検出した遺構は遺構平面図(第60図)の東南端に合成して作図している。

#### ③ 平成20年度の調査

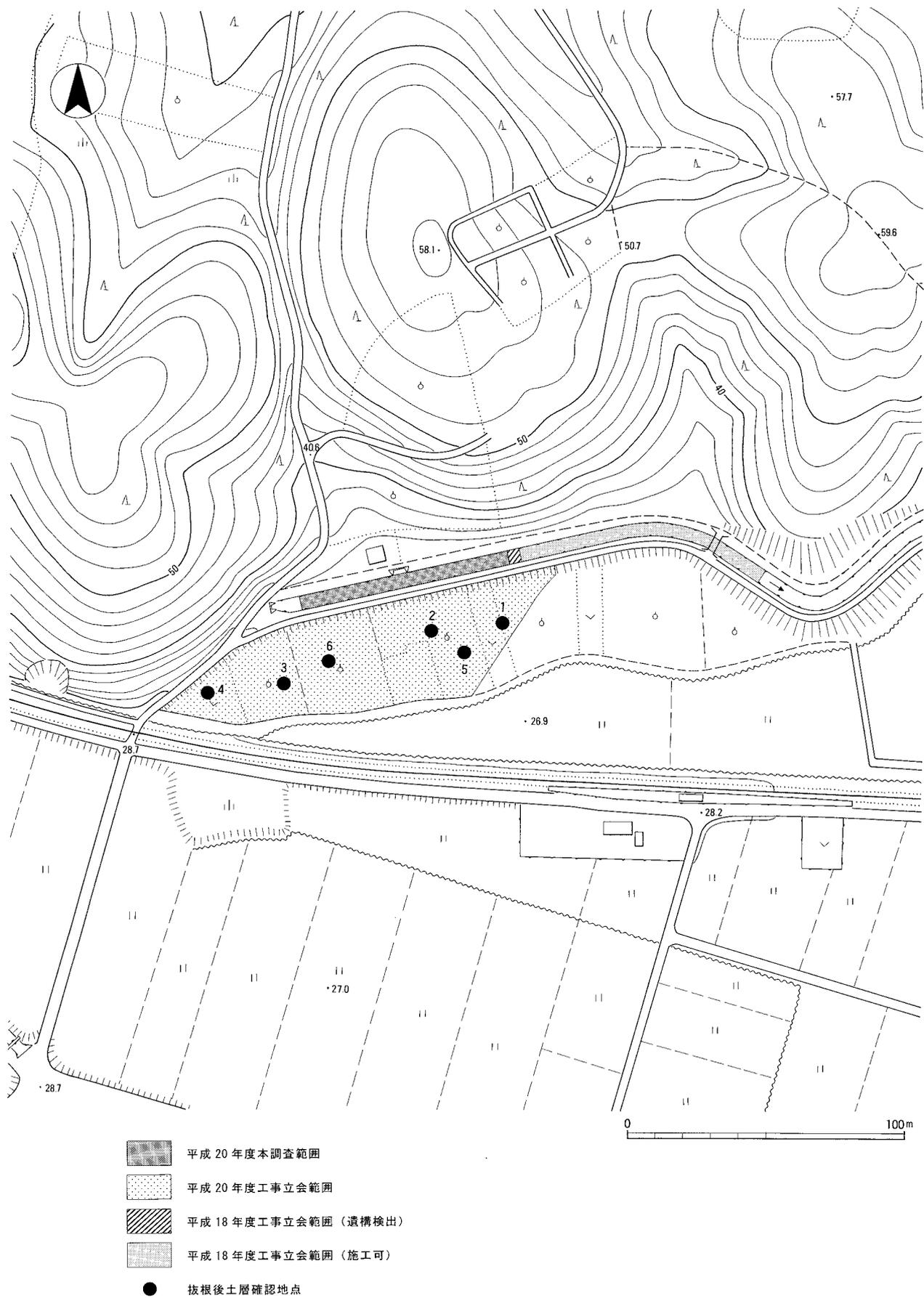
抜根作業の対象となる樹木は、生育度または樹種により概ね表土の攪乱のみで抜根できるものがある一方、地山を大きく攪乱するものもあり、後者の地点を中心に出土遺物の採取及び土層の観察を行った。遺物は第59図の地点1～4で出土し、地点3では平安期の完形に近い土師器杯が出土するなど、比較的まとまって出土した。遺構については抜根後の平面的な観察が不可能であったため確認はできなかったが、地表下20～60cmで暗褐色粘質土及び黒ボクの遺物包含層を確認した。

## 第2節 遺物

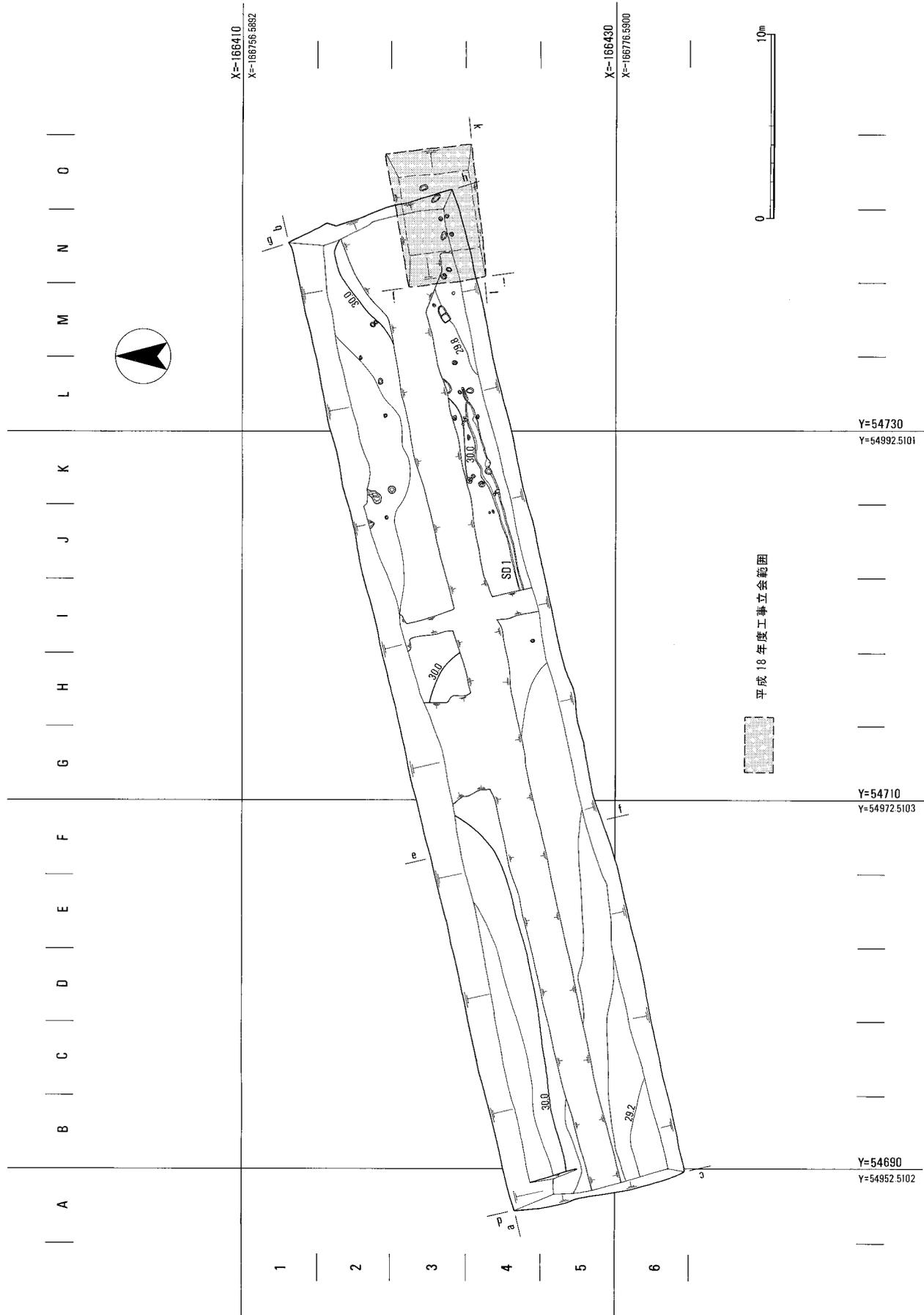
### (1) 出土遺物の概要

平成20年度の本調査では、遺構等から土師器片・須恵器片等が出土したが、いずれも小片のため図化できるものはなかった。平成18年度と20年度の工事

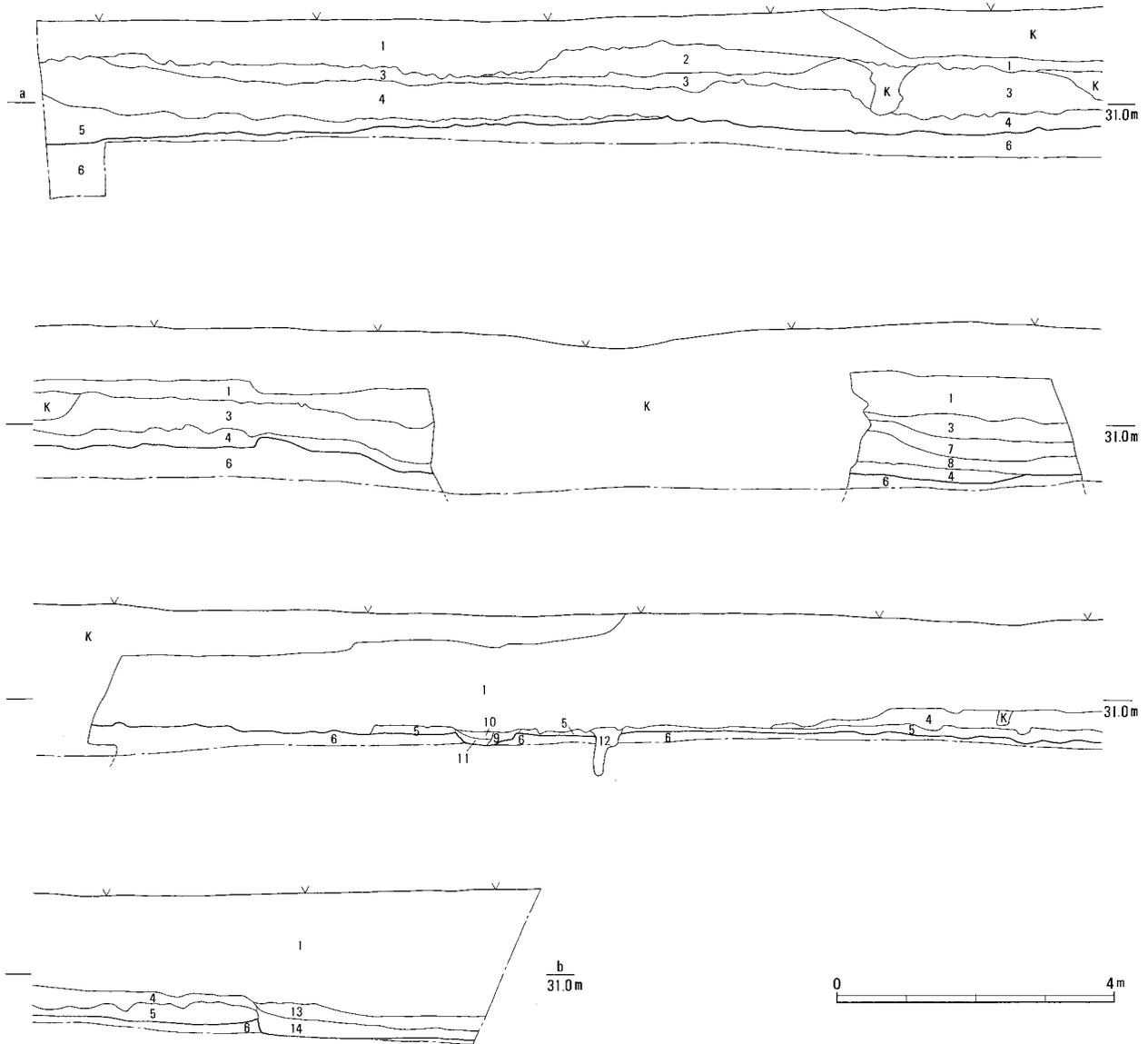
立会調査では、古墳時代の土師器台付甕や須恵器脚付壺、奈良・平安時代の土師器杯・甕等が出土した。以下、出土遺物の概要について記述するが、各遺物の詳細については後掲の遺物観察表を参照されたい。



第59図 与五郎谷遺跡調査区位置図（1：2,000）



第60図 与五郎谷遺跡遺構平面図 (1:300) ※座標値上段：世界測地系・座標値下段：日本測地系



a~b間土層

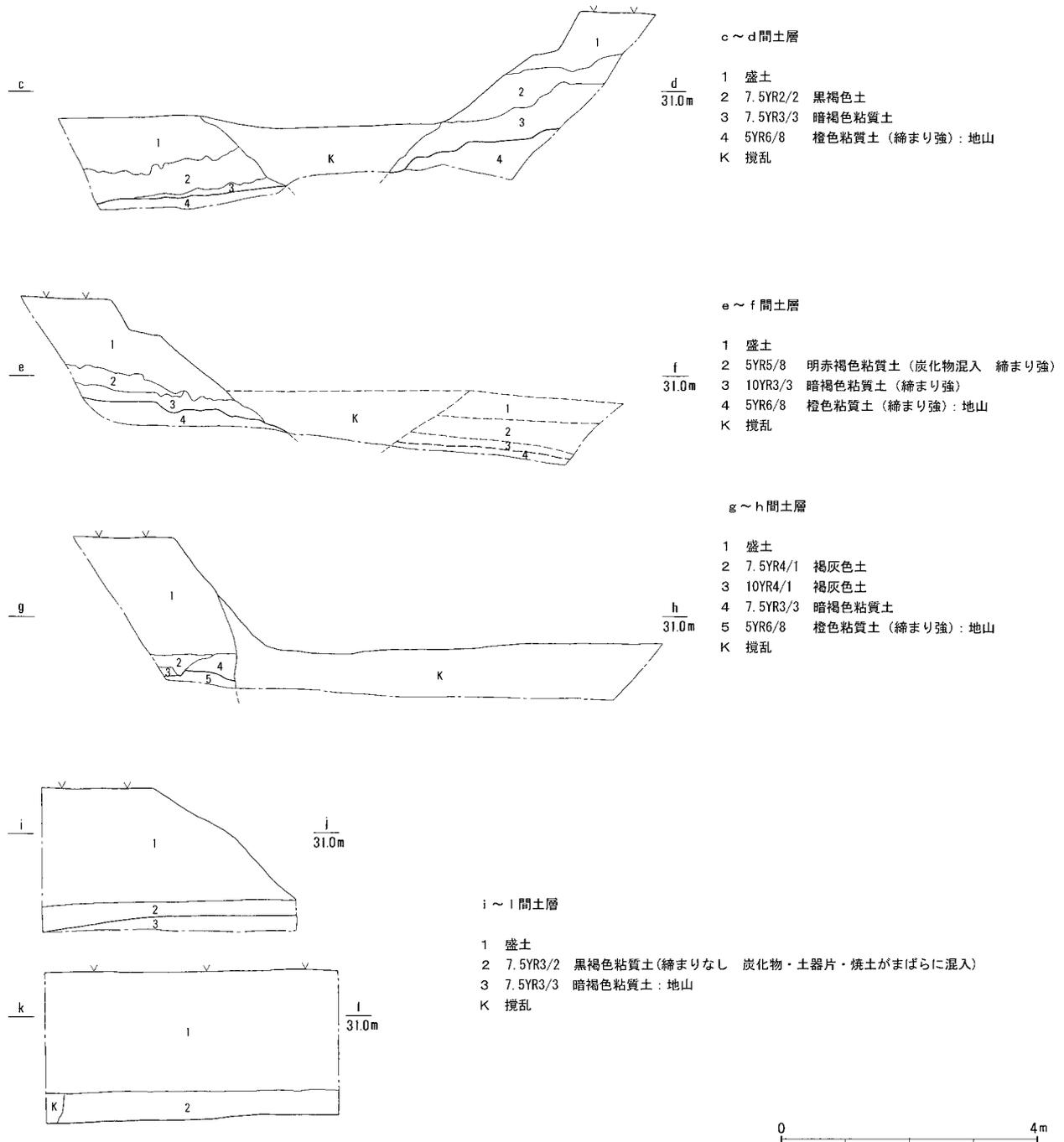
- |   |          |                   |            |                         |                          |
|---|----------|-------------------|------------|-------------------------|--------------------------|
| 1 | 盛土       | 9                 | 7.5YR1.7/1 | 黒色土 (褐色土ブロック混入) : ビット埋土 |                          |
| 2 | 7.5YR5/6 | 明褐色砂質土            | 10         | 5YR1.7/1                | 黒色土 (暗褐色土ブロック混入) : ビット埋土 |
| 3 | 7.5YR5/6 | 明褐色土              | 11         | 5YR3/2                  | 暗赤褐色土 : ビット埋土            |
| 4 | 7.5YR2/2 | 黒褐色土              | 12         | 5YR4/3                  | にぶい赤褐色砂質土 : ビット埋土        |
| 5 | 7.5YR3/3 | 暗褐色粘質土            | 13         | 7.5YR4/1                | 褐灰色土                     |
| 6 | 5YR6/8   | 橙色粘質土 (締まり強) : 地山 | 14         | 10YR4/1                 | 褐灰色土                     |
| 7 | 7.5YR3/4 | 暗褐色土              | K          | 攪乱                      |                          |
| 8 | 7.5YR4/4 | 褐色土               |            |                         |                          |

第61図 与五郎谷遺跡土層断面図① (1:100)

## (2) 18・20年度工事立会の出土遺物

1は土師器台付甕の台部である。灰褐色の色調を呈し、外面には比較的密なやや深いハケメが施される。2は須恵器脚付壺の脚部である。脚端部の上方5cm程の外面に波状文が認められる。3は土師器杯である。口縁部が内弯気味に立ち上がり、端部が摘み上げられる。残存部僅少のため判然としないが、体部外面にヘラケズリの痕跡が認められる。斎宮編年第Ⅰ期第3～4段階<sup>①</sup>に相当するか。4は土師器杯

である。口径15cm、器高3.6cmで、丸みを帯びた底部から体部が内弯気味に立ち上がり、口縁部が外反する。器面はヨコナデとオサエ・ナデにより調整され、底部外面にはユビオサエの痕跡が残される。斎宮編年第Ⅱ期第3段階に相当すると思われる。5は土師器甕である。器壁はやや厚く口縁端部外面に面を有する。6は土師器鍋である。器壁は薄く、口縁端部が折り返され、丸く収められる。伊藤裕偉氏の南伊勢系土師器鍋編年による第1段階<sup>②</sup>に相当する



第62図 与五郎谷遺跡土層断面図② (1:100)

か。なお、1・2・5は18年度工事立会範囲出土、3は20年度工事立会範囲地点1、4・6は地点3で

出土した(第59図)。

### 第3節 結語

今回の調査は、平成18年度の工事立会によって既設水路の下部に遺構が残存していることが判明したことにより行ったものである。調査は改修工事施工時に既設水路の構造物が撤去された後に行ったが、調査区中央部は既設水路建設時に破壊されていたものの、東半部に遺構が残存しており、溝やピットが検出できた。遺構出土の遺物は小片かつ僅少で遺構の時期は判然としないが、隣接の工事立会範囲出土遺物等から奈良～平安時代頃の遺構と推測される。本調査区南側での工事立会調査は「点」的な調査であったため、遺構の有無など詳細は不明であるが、奈良～平安時代頃の遺物を含む遺物包含層が確認された。従って、僅かに遺構が確認された本調査範囲は遺跡の北限と認識でき、工事立会を行った範囲を含む既設用水路からJR参宮線の路線までの南面する緩斜面に奈良～平安時代を中心とした遺跡が展開しているものと考えられる。

多気町史によれば、当遺跡ではチャート製尖頭器片が出土しており<sup>③</sup>、今回の調査でもピットからチャートの剥片が出土している。周辺で確認されている遺跡を概観すると、当遺跡と同様の立地環境にある場所に旧石器・縄文時代の遺跡が点在しており、付近の丘陵部が狩猟・採集等の生業の場であったことが窺える。また、当遺跡の所在する丘陵部ではこれまで多数の古墳が確認されているが、これらの造営を支えていたような集落跡はほとんど確認されおらず、当遺跡の周辺部にも古墳時代の遺跡はあまりない。当遺跡では当該期の遺物が僅かではあるが出

土しており、当該期集落が今後確認される可能性もある(第64図・第36表)。

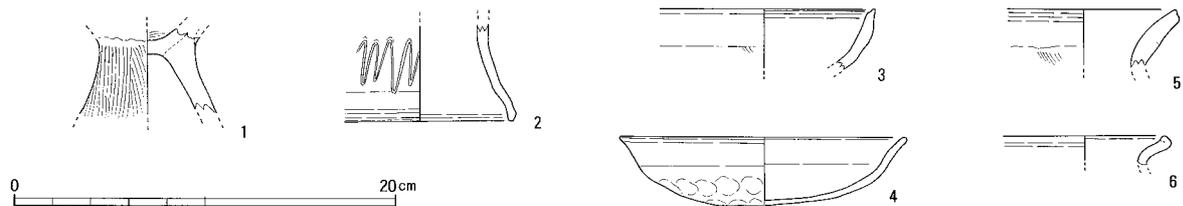
当遺跡は南面する丘陵裾部緩斜面に位置し、前面に水田低地を望む好立地であることから、今回確認された以外の時期にも繰り返し集落等が営まれていた可能性も認められよう。(山口田美・小山憲一)

#### 【註】

- ①『斎宮跡発掘調査報告Ⅰ 内院地区の調査 本文編』(斎宮歴史博物館 2001年)  
以下、古代の土師器の編年については上記の文献に拠る。
- ②伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」(『Mie history』vol. 1 三重歴史文化研究会 1990年)  
伊藤裕偉「伊勢の中世煮沸用土器から東海を見る」(『鍋と甕そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム 1996年)
- ③『多気町史 通史』(多気町 1992年)

#### 【参考文献】

- ・『鍋と甕そのデザイン』(第4回東海考古学フォーラム 1996年)
- ・『S字甕を考える』(第7回東海考古学フォーラム三重大会 2000年)
- ・田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』(平安学園考古学クラブ 1966年)
- ・田辺昭三『須恵器大成』(角川書店 1995年)
- ・西村美幸「玉城丘陵と周辺の群集墳」(『Mie history～特集 三重の群集墳を考える～』vol. 10 三重歴史文化研究会 1999年)



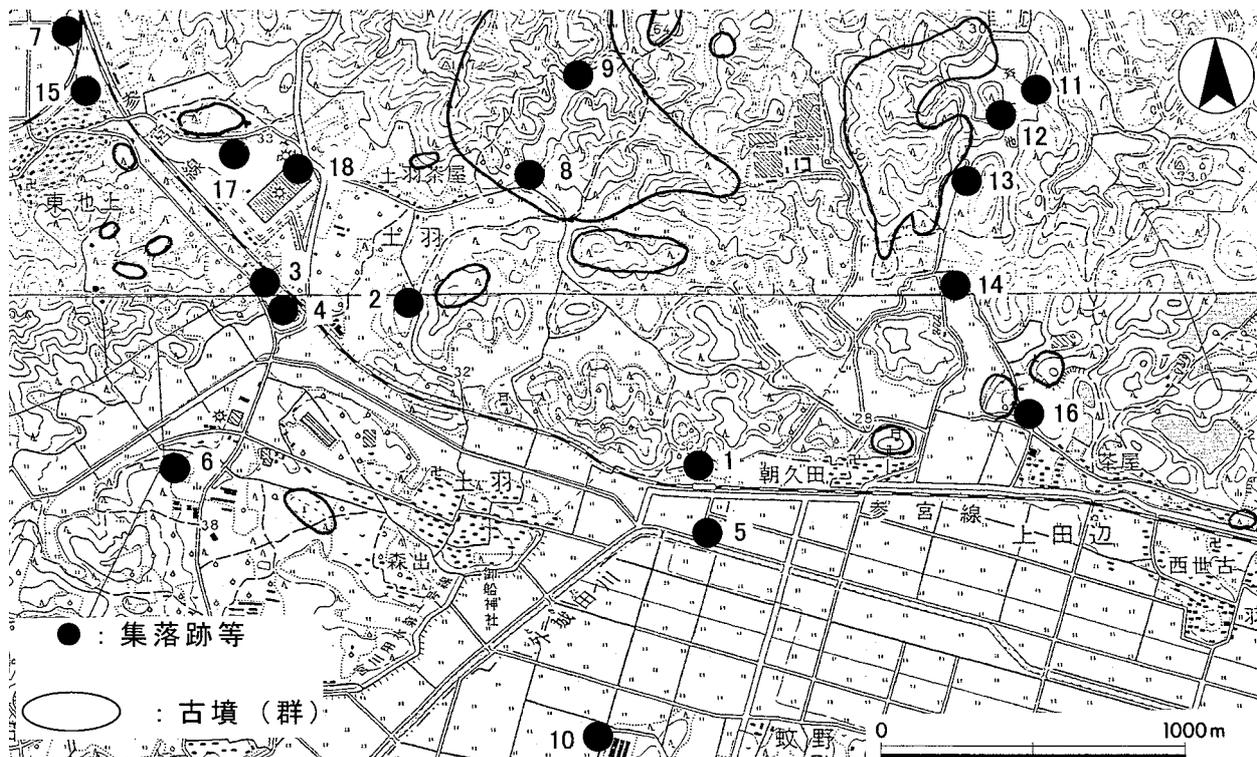
第63図 与五郎谷遺跡出土遺物実測図 (1:4)

遺物番号	登録番号	器種	出土地区	出土遺構	出土位置	出土層位	法量 (cm)			調整 (技法) の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
							口径	器高	その他						
1	001-03	土師器 台付甕	H18 工事立会区	-	-	包含層	-	-	-	外:ハケメ (4本/1cm) 内:ナデ	やや密 (2mm以下の砂粒含む)	並	外:灰褐 7.5YR5/2 内:にぶい黄橙 10YR7/3	台部 6/12	
2	001-01	須恵器 脚付壺	H18 工事立会区	-	-	包含層	-	-	-	外:ロクロナデ・波状文 内:ロクロナデ	密	良	外:N5/ 内:にぶい黄橙 2.5YR6/4	脚部 小片	
3	001-05	土師器 杯	H20 工事立会区	-	抜根確認地点1	-	-	-	-	外:ヨコナデ・ケズリ? 内:ヨコナデ	密	並	外:にぶい橙 7.5YR7/4 内:にぶい橙 2.5YR6/4	口縁部 小片	
4	002-01	土師器 杯	H20 工事立会区	-	抜根確認地点3	-	15.0	3.6	-	外:ヨコナデ・オサエ・ナデ 内:ナデ・ヨコナデ	密 (0.5mm以下の砂粒含む)	並	外:橙 5YR7/6 内:橙 2.5YR7/8	口縁部 9/12	
5	001-02	土師器 甕	H18 工事立会区	-	-	包含層	-	-	-	外:ヨコナデ・ハケメ? 内:ヨコナデ	やや密 (金雲母含む)	並	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部 小片	
6	001-04	土師器 鍋	H20 工事立会区	-	抜根確認地点3	-	-	-	-	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密 (雲母含む)	並	外:橙 5YR8/3 内:灰褐 7.5YR6/2	口縁部 小片	

【凡例】

- ・遺物番号: 挿図掲載番号を示す。
- ・登録番号: 実測段階の登録番号を示す。
- ・出土地区: 調査区を示す。H18は平成18年度、H20は平成20年度を示す。
- ・出土遺構: 報告書の遺構番号等を示す。
- ・出土位置: 現地調査段階の出土地点等を示す。
- ・出土層位: 現地調査段階の出土層位等を示す。
- ・色調: 『新版標準土色帖』1998年度版による。複数の色調が存在する場合は併記した。
- ・残存度: 当該部位を12分割した際の残存度を示し、残存度僅少の場合は「小片」と表記した。

第35表 与五郎谷遺跡出土遺物観察表



第64図 与五郎谷遺跡周辺遺跡分布図 (1:25,000) [国土地理院「松阪」「国東山」1:25,000より]

No.	遺跡名	所在地	立地	時代	遺構・遺物等
1	与五郎谷遺跡	多気町土羽	丘陵端部	縄文・古墳・奈良・平安	尖頭器（チャート製）・土師器・須恵器等
2	大口遺跡	多気町土羽	丘陵端部	縄文以降	剥片・土師器・須恵器
3	平林遺跡	多気町土羽	丘陵端部	旧石器・縄文	ナイフ形石器・木葉形尖頭器等
4	平林東遺跡	多気町土羽	丘陵端部	縄文～古墳・室町	チャート剥片・弥生土器・土師器・須恵器・陶器等
5	畑ノ田遺跡	多気町土羽	平地	旧石器・縄文・古墳	有舌尖頭器（チャート製）・石鏃・土師器片等
6	東ノ谷遺跡	多気町笠木	丘陵端部	旧石器・縄文・弥生	スクレイパー・石錘・石皿・磨石・石斧・縄文土器・弥生土器・土錘等
7	坂倉遺跡	多気町東池上	丘陵端部	縄文～中世	縄文土器・石鏃・有舌尖頭器（チャート製）・山茶椀・土師器等
8	上村池B遺跡	明和町上村	山腹	旧石器・縄文	有舌尖頭器・細石刃・石鏃・縄文土器
9	上村池A遺跡	明和町上村	山腹	縄文	ナイフ形石器・木葉形尖頭器・有舌尖頭器・石鏃・石錘・縄文土器・土師器・須恵器
10	ゑなど遺跡	玉城町蚊野	丘陵端部	縄文・弥生	石鏃・チャート剥片・弥生土器・土師器・須恵器・山茶椀等
11	斎宮池遺跡	明和町池村	丘陵端部	縄文・奈良	土坑（縄文）・竪穴住居（奈良）等 石鏃・磨製石斧・磨石・敲石・石皿・石錘・縄文土器・土師器等
12	真木谷遺跡	明和町池村	丘陵端部	縄文・奈良・平安	石錘・敲石・土師器等
13	長谷町遺跡	明和町池村	丘陵端部	縄文・奈良・平安	竪穴住居（奈良）・火葬墓（平安）等 石鏃・楔形石器・土師器・灰釉陶器等
14	大谷遺跡	玉城町上田辺	丘陵端部の谷筋	縄文～室町	土坑・自然流路等 敲石・縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・山茶椀・陶磁器類等
15	東池上東方遺跡	多気町東池上	丘陵端部	古墳	剥片・土師器・須恵器
16	師子焼遺跡	玉城町上田辺	丘陵端部	古代～中世	須恵器・土師器・山茶椀・緑釉陶器・灰釉陶器等
17	長迫間A遺跡	多気町東池上	丘陵端部	飛鳥・奈良	掘立柱建物 須恵器・土師器
18	長迫間B遺跡	多気町東池上	丘陵端部	飛鳥・奈良	掘立柱建物 須恵器・土師器

第36表 与五郎谷遺跡周辺遺跡一覧表

## 第Ⅶ章 自然科学分析

### 第1節 分析の目的

#### (1)長谷町遺跡の分析

##### ①はじめに

長谷町遺跡では、9世紀末頃に比定される火葬墓(SX5)を1基確認した。この火葬墓は蔵骨器や供献品の埋納状況が詳細に把握できた上、蔵骨器内には火葬人骨が良好な状態で遺存していた。また、前述の火葬墓との関連が疑われる土坑(SF3・SK7)も検出した。以上のことから、遺跡の性格を検討する手がかりとして、以下のような目的で自然科学分析を行った。

##### ②SX5出土蔵骨器内火葬人骨分析

SX5出土蔵骨器内に遺存していた火葬人骨を分析することにより、死亡年齢・性別・被火葬者数・身長等の被葬者の情報とともに、火葬時の焼成温度や火葬方法に関わる情報の取得が期待された。また、火葬人骨の蔵骨器からの取り上げを上部から下部へ人工層位で行うことにより、どの部位の火葬骨をどのような順序で蔵骨器へ収骨したかという、当該期火葬の収骨方法が確認されることが期待されたため、蔵骨器からの火葬骨取り上げ作業及び火葬骨の分析・鑑定を行った。

##### ③SX5出土蔵骨器内炭化材の樹種同定

SX5出土蔵骨器の内部から炭化材が出土した。当該の蔵骨器は、出土状況からほぼ内部が密閉されていたことから、当該炭化材は火葬骨に付随したものであることは確実である。従って、この炭化材の性格は、「遺体を収納した木棺の一部」・「遺体を火葬した際の燃料材」の2つの可能性が想定できる。そこで、この炭化材の樹種同定を行うことで、どちらかの可能性に絞れることが期待されたため、樹種同定を行った。

##### ④SX5出土蔵骨器被覆炭化材の樹種同定

SX5の墓壇中央に埋納された蔵骨器は木炭で被覆されていた。蔵骨器を木炭で覆う目的としては、除湿をはじめとした蔵骨器の保護が考えられる。古代火葬墓において木炭で蔵骨器を覆う事例は少なくないが、周辺地で容易に採取できる雑木を使用している事例も多く、灰混じりの粗雑なものを使用している事例も多い。ここでは灰が混じらない「切り炭」のような木炭を使用しており、覆っている状況も「木炭嚙」と言え

るような状況である。従って、特定樹種を選択して木炭を製作していた可能性があるため、樹種同定を行った。なお、当該の炭化材は量的に膨大であったため、第65図に示した56点をピックアップし、同定を行った。

##### ⑤SX5出土土師器杯皿内採取の土壌分析

SX5出土の5組の合口土師器杯皿類は、蔵骨器に木炭を被覆したその上面に配置されており、出土状況から内部には何かが入れられていた可能性が高い。現場での取り上げ時には、上面の杯皿を取り上げた後に内部の土をほぐし、肉眼で確認できる遺物を探索したが、5組とも遺物は確認できなかった。内容物については不明であるが、5組という数から推測されるのは「五穀」である。五穀の内容は時代や地域によって一定していないようであるが、「米・麦・粟・豆・黍・稗」などの穀類であることから、採取した土からこれらの穀類の痕跡が抽出できれば、内容物の解明が期待できるため、植物珪酸体分析を行った。

##### ⑥SF3出土炭化材の樹種同定及び埋土篩いがけ残留物の微細物分析

SF3は出土遺物からSX5と同時期の遺構と推定される。遺構の平面形態や規模からSX5との関連が疑われる遺構であるが、関連性を高める根拠に乏しい。側壁が被熱により赤変・硬化し、炭化材が残存していたことから、燃焼作業が行われたことは確実である。SX5との関連性としては、遺体の火葬もしくは蔵骨器を被覆した木炭の製作などが想定できる。従って、当該遺構の性格あるいはSX5との関連性を考察する資料とするため、出土炭化材の樹種同定及び埋土篩いがけ残留物の微細物分析を行った。

##### ⑦SK7出土炭化材の年代測定・樹種同定及び埋土篩いがけ残留物の微細物分析

SK7は時期を特定する遺物が出土しておらず、遺構の時期は不明であるため、出土した炭化材をAMS法による<sup>14</sup>C年代測定を行い、遺構の時期を求めた。また、遺構の性格あるいはSX5・SF3との関連性を考察する資料とするため、出土炭化材の樹種同定及び埋土篩いがけ残留物の微細物分析を行った。

## (2) 斎宮池遺跡の分析

### ①はじめに

斎宮池遺跡では、縄文時代中期末～後期初頭の土坑・ピット及び、奈良時代の竪穴住居と焼土坑が検出された。奈良時代の竪穴住居は単独住居の可能性があり、同時代の焼土坑はこれとセットとなる可能性があるため、これら2遺構から出土した炭化材及び植物遺体を対象に以下のような目的で自然科学分析を行った。

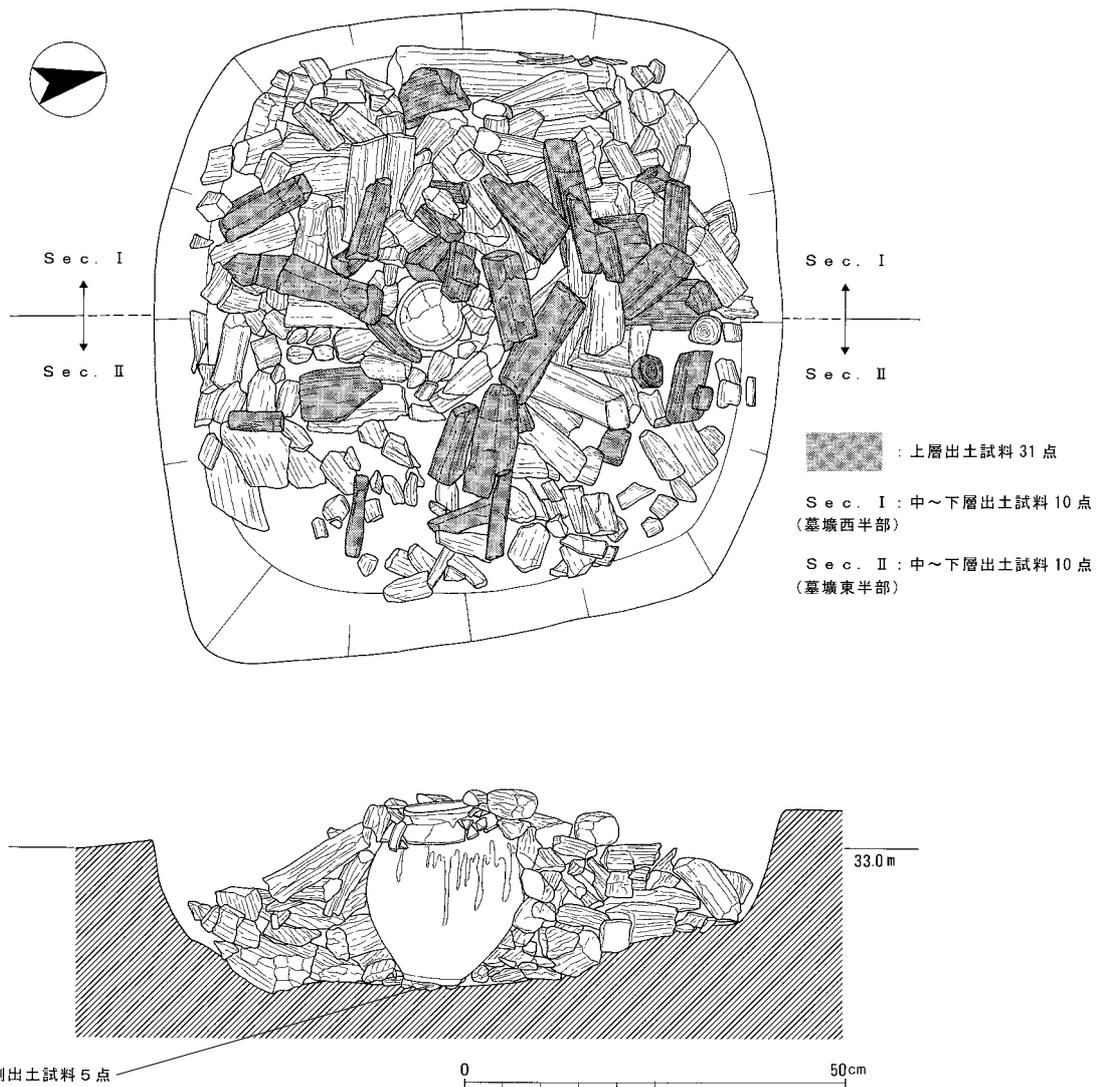
### ②SH3・SF10出土炭化材の樹種同定

竪穴住居SH3出土の炭化材はカマド内で採取したもので、炊事作業時の燃料材と考えられる。一方の焼土坑SF10は性格が不明であるが、当遺跡周辺で多数確認されている土師器焼成坑と立地条件や遺構の状況が類似していることから土師器焼成坑の可能性が想定

される。SF10出土の炭化材は、土師器焼成坑であるならば焼成作業時の燃料材と考えられる。これまで土師器焼成坑で使用された燃料材の樹種同定が行われた事例は少ないため、今回出土した炭化材の樹種同定を行い、遺構の性格検討に資するとともに、資料の蓄積を図った。また、SH3とSF10の燃料材は、それぞれの燃焼目的が異なるのであれば、作業時に求められる熱量に差がある可能性があり、これらの燃料材の樹種を同定することにより、目的によって燃料材の樹種選択が行われた可能性を検証した。

### ③SF10出土種実遺体の種実同定

焼土坑SF10では炭化材とともに炭化した種実遺体が出土したため、種実同定を行い、遺構の性格検討に資するとともに、資料の蓄積を図った。(小山憲一)



第65図 長谷町遺跡SX5炭化材樹種同定試料出土位置図(1:10)

## 第2節 長谷町遺跡出土火葬人骨

### (1)はじめに

長谷町遺跡は、三重県多気郡明和町池村字長谷町に所在する。三重県埋蔵文化財センターによる発掘調査が、平成18（2006）年11月～同年12月まで実施された。本遺跡の火葬墓S X 5より、古代の火葬人骨が出土したので以下に報告する。

この長谷町遺跡は、斎宮跡から南約4kmに所在し、近辺には約500基の古墳が確認されており、古墳時代から葬送の地であったことが推定される。

なお、三重県内の平安時代火葬墓は、本例で11例目となるが、火葬人骨の詳細な報告は今回が初めてである。

### (2)火葬人骨の出土状況

火葬人骨は、一辺約80cm・深さ約35cmの方形土坑の中央部に置かれた灰釉陶器長頸壺の蔵骨器に収められていた。

土坑には、木炭を敷き詰め、中央部に蔵骨器を置き、さらにその周りに合口の土師器皿5組10点を配置した状態で検出された。



写真1 火葬墓の検出状況（南から）

この蔵骨器は、頸の部分を持ち欠き、口の部分には碗を持ち欠いて高台部のみ状態にしたものを中蓋にし、さらに灰釉陶器碗を伏せて外蓋をした状態で検出されている。

なお、樹種同定の結果、蔵骨器内の炭化材3点はケヤキであり、土坑内の炭化材は32点がスダジイ・19点がコナラ属アカガシ亜属・3点が樹皮・2点がツブラジイであると推定されている。



写真2 蔵骨器の検出状況（東から）

### (3)火葬人骨の年代

火葬人骨の年代は、出土遺物より、9世紀末頃の平安時代に比定されている。

### (4)火葬人骨の取り上げ

本火葬人骨は、本報告者が平成19（2007）年3月に三重県埋蔵文化財センターに出向き、センター及び斎宮歴史博物館職員の協力を得ながら2日間かけて取り上げた。

取り上げ方法は、蔵骨器の口縁部からピンセットを使用して口縁部からの深さを測りながら200に分けて取り上げた。



写真3 蔵骨器内の火葬人骨

### (5)火葬人骨鑑定

#### ①火葬人骨の焼成方法

火葬人骨の色は、焼成温度が高温になるにつれ、白色を呈する傾向がある。本火葬人骨の場合、ほとんどが白色を呈しているため、焼成温度は約900度以上であると推定される。

しかしながら、一部の火葬人骨は焦茶色を呈しており、一部に焼成ムラがあったと推定される。

## ②火葬人骨の火葬方法

火葬方法には、遺体をそのまま焼成した場合と、白骨化させたものを焼成する場合とがある。本火葬人骨の場合、歪み及び捻れが認められるため、遺体をそのまま焼成したものと推定される。

一部の火葬人骨が焦茶色を呈しており、一部に焼成ムラがあったということからも遺体をそのまま焼成したことの傍証となる。

## ③火葬人骨の出土部位

火葬人骨の出土部位は、頭蓋骨・脊椎骨・四肢骨とわずかずつであるが全身に及んでいる。

また、手や足の指骨も出土しており、白骨化させたものを焼成したのではなく、遺体をそのまま焼成したことの傍証となる。

## ④被火葬者の個体数

被火葬者の個体数推定は、火葬人骨の同一部位が検出されるか否か、あるいは、火葬人骨の大きさが揃っているか否かで推定することが可能である。

本火葬人骨の場合、左右側頭骨・左右上腕骨・左右膝蓋骨等が同定され、かつ、大きさも揃っていることから、被火葬者の個体数は1個体であると推定される。

## ⑤被火葬者の性別

被火葬者の性別推定は、土葬人骨であれば頭蓋骨や寛骨の形態、歯や四肢骨の大きさ等でかなりの確立で推定可能である。しかしながら、火葬人骨の場合、焼成による骨の収縮や破片化により性別推定が困難になる場合が多い。

本火葬人骨の場合、焼成による収縮を考慮したとしても頭蓋骨の骨壁は比較的薄く、四肢骨も華奢である。また、右上顎骨歯槽骨の犬歯部は小さく、右側頭骨の乳様突起が比較的小さく華奢であるため、被火葬者の性別は女性であると推定される。

## ⑥被火葬者の死亡年齢

被火葬者の死亡年齢は、土葬人骨であれば頭蓋骨縫合の癒合度・歯の咬耗度等でかなりの確率で推定が可能である。しかしながら、火葬人骨の場合、頭蓋骨の破片化や歯のエナメル質の熱による破壊等により、観察不能である場合が多い。

本火葬人骨の場合も、歯は歯根のみでエナメル質は検出されなかった。下顎骨を観察すると、M3（第3大臼歯）が萌出したことが推定され、四肢骨の骨端部は癒合している。このことは、被火葬者が少なくとも約18歳以上の成人であることを示す。また、頭蓋骨の縫合は、内板及び外板共にまだ癒合していない状態である。

したがって、被火葬者の死亡年齢は、約18歳以上で約30歳以下であると推定される。

## ⑦被火葬者の生前の身長

生前の身長を推定するためには、四肢骨が完全な状態で出土しなければ不可能である。したがって、本被火葬者の生前の身長は不明である。また、平安時代の土葬人骨は全国的に保存状態が悪く、事例が少ないために平均身長は不明である。

元北里大学の故平本嘉助による中世人骨の大腿骨を使用した研究では、鎌倉時代人の平均身長は男性159.0cm [最大166.8cm・最小153.0cm]・女性144.9cm [最大148.6cm・最小140.0cm]であり、室町時代人の平均身長は男性156.8cm [最大166.3cm・最小148.8cm]・女性146.6cm [最大152.9cm・最小137.7cm]である。

## ⑧収（拾）骨方法

現代日本では、フォッサマグナ（糸魚川・静岡構造線）の東西で収骨方法に差異があることが知られており、東では火葬人骨すべてを収骨する全部収骨であるのに対し、西では火葬人骨の一部しか収骨しない部分収骨であることが知られている（日本葬送文化学会編、2007）。

もし、この習俗が古代にまで遡って行われたと仮定すると、蔵骨器内の火葬人骨は、東では多く西では少ない傾向が認められるはずである。

本火葬人骨は、三重県という西に位置する遺跡から出土しているが、残存量は少なく、明らかに全部収骨をした結果ではなく、部分収骨をしたものと推定される。恐らく、分骨をした結果であろう。

## ⑨収（拾）骨の順番

現代の西日本では、火葬人骨の一部しか収骨しない部分収骨であるが、その作法は、足の部分から頭にかけて順番に収骨するというものである。もし、この作法が古代にもあったと仮定すると、蔵骨器の

下に足の骨があり、上に頭蓋骨があるはずである。

今回の火葬人骨の取り上げは、蔵骨器の上から深さを測りながら順番に番号を付けながら取り上げた。そうすると、蔵骨器の上に頭蓋骨片が多く、下に足の骨等が多いと仮定される。

番号を付与されて取り上げられた200の内、頭蓋骨に注目すると、No.4～6・12・22・25・28・37・41・42・73・77・84～88・91・93・94・103・107・113・116・118・121・124・127・130・131・142・143・145・149・150・153・156・172・175・177・180・182と上から下にまで認められた。したがって、今回、収骨の順番の規則性は認められなかった。

この理由として、古代には現代西日本のような作法が無かったことあるいは、分骨をした等が考えられる。

## (6)被火葬者像

長谷町遺跡は、斎宮跡から直線距離で約4km南に位置する丘陵地帯に位置する。前出のように、この丘陵地帯には約500基を超える古墳が確認されており、少なくとも、古墳時代から葬送地として認識されていたと推定される。

火葬遺構の立地条件は、山地や丘陵台地の頂上・上腹部・中腹部・下腹部の南面や東面の荒地が多く、「山中他界」の観念と関連があるという指摘がある(芳賀、1996)。

本被火葬者は、斎宮と関連があるのであろうか？本火葬墓の年代は、9世紀末頃の平安時代に比定されている。

この時代周辺の斎宮で該当するのは、退下理由が不明で寛平9(897)年に退下した宇多元子・承平6(936)年5月1日に逝去した朱雀斉子・天慶9(946)年9月16日に逝去した村上英子の3人が相当する(泉、2006;駒田、2009)。

3人中、宇多元子及び朱雀斉子の没年齢は不明であるが、村上英子は没年齢が26歳で本火葬人骨の被葬者像とも合致する。今回の火葬跡には墓碑銘が伴っていないために、詳細は不明である。想像することが許されるならば、朱雀斉子及び村上英子は、斎宮としての在任期間が1年に満たないので、どちらかの斎宮に関連性があると推定される。花粉分析で季節性が同定できれば、興味深い。

## (7)まとめ

長谷町遺跡の火葬墓S X 5より検出された、蔵骨器より、平安時代の火葬人骨が検出された。鑑定の結果、被葬者は、約18歳～30歳の女性1個体であると推定された。

火葬方法は、死体をそのまま火葬にし、一部の火葬人骨を収(拾)骨して蔵骨器に収めたものと推定された。

場所が斎宮と近いこと、歴代斎宮の内、宇多元子・朱雀斉子・村上英子の3人と関連があるのではないかと推定される。

(生物考古学研究所 榎崎 修一郎)

## 謝辞

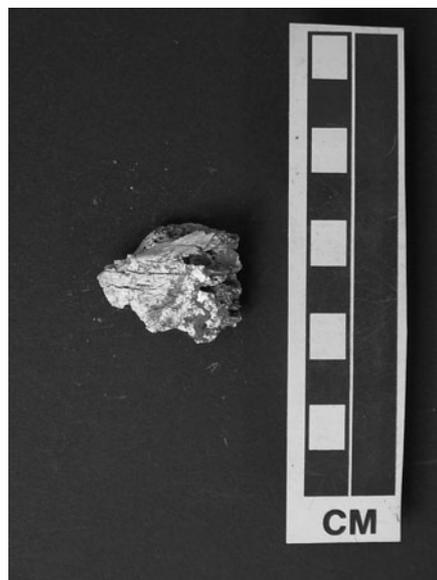
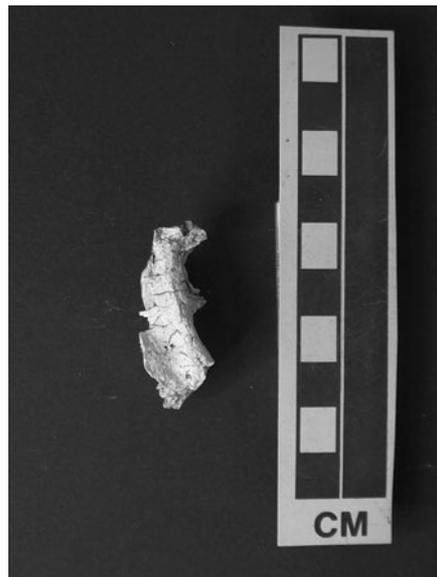
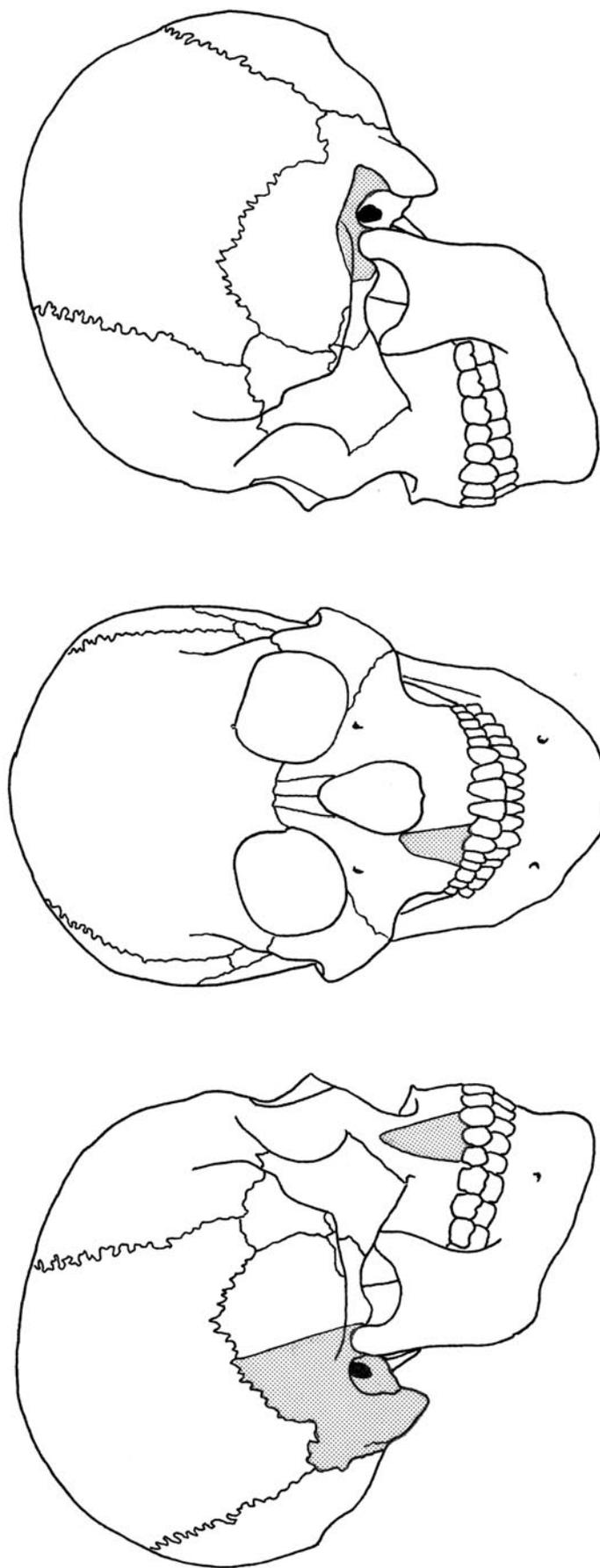
本遺跡出土火葬人骨を記載する機会を与えていただき、考古学的情報を与えていただいた、三重県埋蔵文化財センターの小山憲一氏に感謝いたします。

## 【引用文献・参考文献】

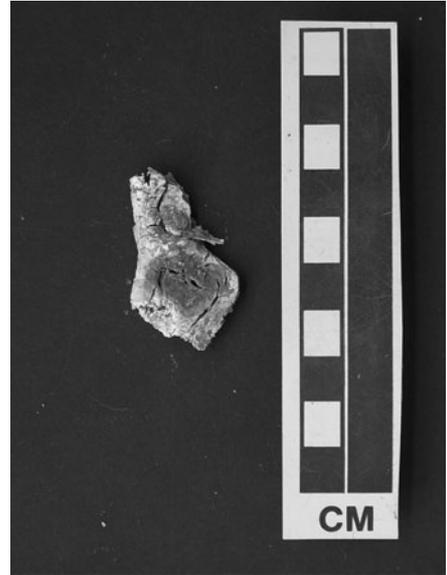
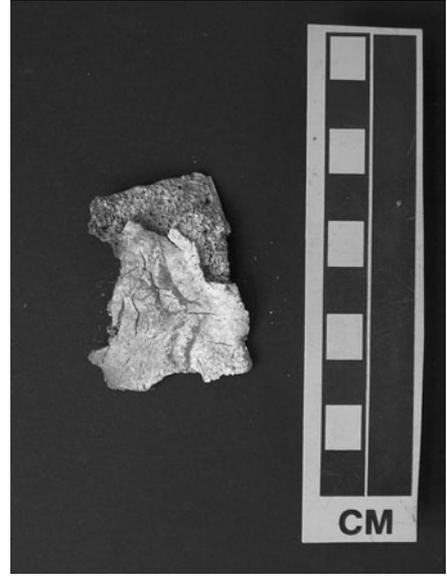
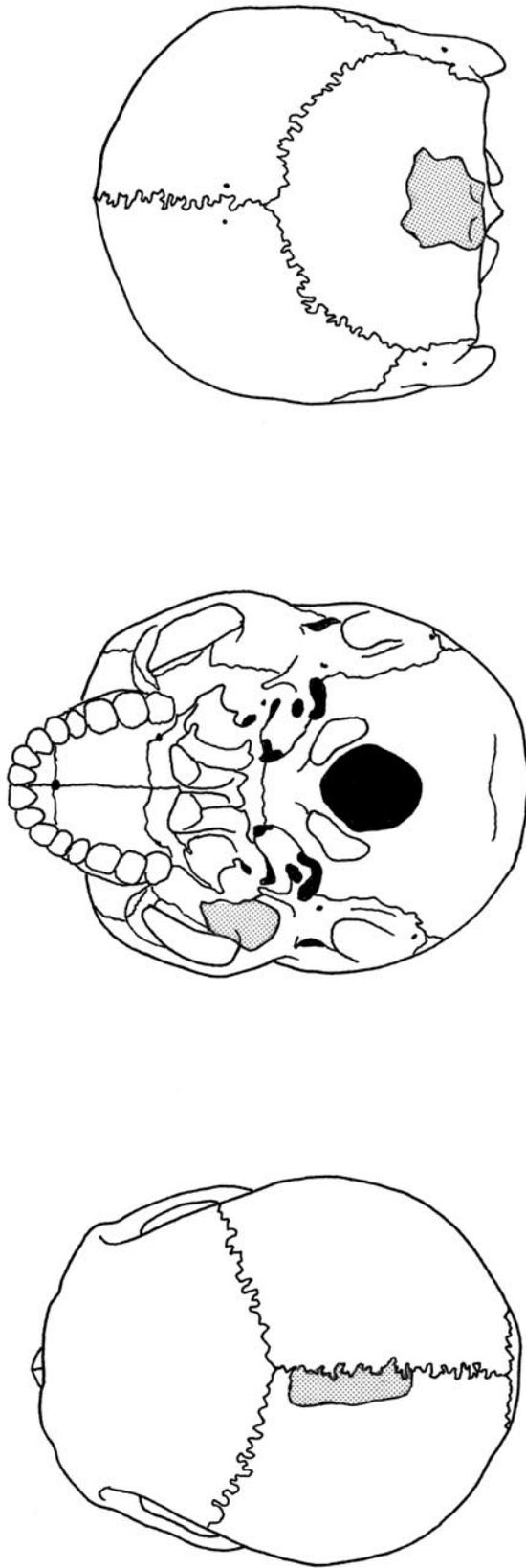
- ・泉 雄二 2006 『日本の遺跡9. 伊勢斎宮跡』,同成社
- ・駒田利治 2009 『遺跡を学ぶ058. 伊勢神宮に仕える皇女・斎宮跡』,新泉社
- ・斎宮歴史博物館 1999 『幻の宮・伊勢斎宮』,朝日新聞社
- ・日本葬送文化学会編 2007 『火葬後拾骨の東と西』
- ・芳賀 登 1996 『葬儀の歴史(増訂版)』,雄山閣
- ・三重県埋蔵文化財センター 2007a 「古代の火葬墓を発見!・長谷町遺跡発掘調査速報」,三重県埋蔵文化財センター
- ・三重県埋蔵文化財センター 2007b 「宮川用水第二期地区埋蔵文化財・発掘調査だより」,三重県埋蔵文化財センター

No.	出土部位	No.	出土部位	No.	出土部位	No.	出土部位
1	骨片	51	手の末節骨	101	四肢骨片	151	四肢骨片
2	四肢骨片	52	脊椎骨	102	四肢骨片	152	四肢骨片
3	骨片	53	骨片	103	頭蓋骨片	153	頭蓋骨片
4	頭蓋骨片	54	脊椎骨	104	脊椎骨	154	脊椎骨
5	頭蓋骨片	55	骨片	105	腓骨片	155	寛骨片
6	頭蓋骨片	56	骨片	106	四肢骨片	156	右側頭骨
7	四肢骨片	57	骨頭片	107	頭蓋骨片	157	四肢骨片
8	四肢骨片	58	骨頭片	108	寛骨片	158	四肢骨片
9	尺骨?	59	脊椎骨	109	大腿骨片	159	上腕骨遠位端
10	骨片	60	肋骨	110	大腿骨片	160	胸骨片
11	四肢骨片	61	骨片	111	指骨片	161	四肢骨片
12	頭蓋骨片	62	距骨	112	四肢骨片	162	骨頭片
13	膝蓋骨	63	肋骨	113	頭蓋骨片	163	大腿骨片
14	左大腿骨	64	骨片	114	脊椎骨	164	寛骨片
15	肋骨片	65	大腿骨片	115	四肢骨片	165	四肢骨片
16	寛骨片	66	骨片	116	左側頭骨片	166	四肢骨片
17	四肢骨片	67	脊椎骨	117	大腿骨片	167	肋骨
18	四肢骨片	68	骨片	118	頭蓋骨片	168	上腕骨骨頭
19	指骨	69	骨片	119	寛骨片	169	足根骨
20	骨片	70	上腕骨遠位端	120	鎖骨	170	四肢骨片
21	鎖骨?	71	尺骨	121	後頭骨片	171	大腿骨片
22	頭蓋骨片	72	肩甲骨	122	脊椎骨片	172	頭蓋骨片
23	四肢骨片	73	頭蓋骨・側頭骨	123	脊椎骨片	173	中足骨
24	踵骨	74	胸骨片	124	頭蓋骨片	174	四肢骨片
25	頭蓋骨片	75	四肢骨片	125	四肢骨片	175	頭蓋骨片
26	大腿骨	76	四肢骨片	126	四肢骨片	176	仙骨片
27	四肢骨片	77	頭蓋骨片	127	頭蓋骨片	177	齒根
28	頭蓋骨・四肢骨片	78	下顎骨片	128	齒根	178	四肢骨片
29	骨頭部	79	骨片	129	手の末節骨	179	四肢骨片
30	仙骨	80	膝蓋骨	130	頭蓋骨片	180	頭蓋骨片
31	骨片	81	上腕骨片	131	頭蓋骨片	181	手の基節骨
32	四肢骨片	82	四肢骨片	132	尺骨片	182	頭蓋骨片(頭頂骨)
33	上腕骨片	83	骨片	133	脛骨遠位端	183	骨片
34	肋骨片	84	頭蓋骨片	134	大腿骨骨頭片	184	尺骨片
35	大腿骨片	85	頭蓋骨片	135	上腕骨骨頭	185	骨片
36	骨頭部	86	頭蓋骨片	136	尺骨	186	骨片
37	頭蓋骨片	87	頭蓋骨片	137	距骨	187	骨片
38	骨片	88	頭蓋骨片(右上顎骨)	138	骨片	188	上顎骨片
39	肋骨片	89	四肢骨片	139	脊椎骨	189	四肢骨片
40	大腿骨遠位端	90	脊椎骨	140	四肢骨片	190	指骨
41	頭蓋骨片	91	頭蓋骨片	141	大腿骨遠位端	191	四肢骨片
42	頭蓋骨片	92	脊椎骨	142	頭蓋骨・四肢骨片	192	中足骨
43	骨片	93	頭蓋骨片	143	後頭骨片	193	骨片
44	骨片	94	頭蓋骨片	144	中足骨片	194	骨片
45	第1中足骨	95	足の親指	145	頭蓋骨片	195	骨片
46	四肢骨片	96	骨片	146	骨頭部	196	骨片
47	骨片	97	脊椎骨	147	骨頭部	197	骨片
48	脊椎骨	98	四肢骨片	148	脊椎骨	198	骨片
49	四肢骨片	99	上腕骨片	149	頭蓋骨片	199	骨片
50	第1中手骨	100	大腿骨下端部	150	頭蓋骨片	200	骨片

第37表 長谷町遺跡出土火葬人骨一覧表



第66図 長谷町遺跡火葬人骨出土部位①（左から、右側頭骨（No.156）・右上顎骨（No.88）・左側頭骨（No.116））



第67図 長谷町遺跡火葬人骨出土部位②（左から、左頭頂骨（No.182）・右側頭骨（No.156）・後頭骨（No.143））

## 第3節 長谷町遺跡の自然科学分析

### (1)はじめに

長谷町遺跡は、斎宮池の南側の低位丘陵に位置する。発掘調査により、平安時代前期（9世紀末頃）の火葬墓S X 5と、その関連施設の可能性がある土坑が検出されている。

今回の分析調査では、火葬墓S X 5に埋納された土師器杯・皿の内容物を推定するため、植物珪酸体分析を実施する。また、S F 3とS K 7の埋土を篩いかけた後の残留物について微細物分析を行い、残留物の種類を明らかにすると共に、得られた炭化材の樹種同定を行い、炭化材の種類構成を明らかにする。S K 7については、炭化材を用いて放射性炭素年代測定を行い、遺構の構築時期に関する資料を得る。

### (2)－1 焼土坑・土坑の微細物分析

#### ①試料

試料は、平安時代前期（9世紀末頃）の火葬関連遺構の可能性がある焼土坑S F 3 (No41)と、土坑S K 7 (No42-44)より採取された堆積物4点である。

#### ②分析方法

試料を粒径別に篩別後、双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて大型の炭化材や土器などを抽出する。抽出後の試料を70℃48時間乾燥後、水を満たした容器に投入し、容器を傾斜させて浮いた炭化材や植物片を粒径0.5mmの篩に回収する。容器内の残土に水を入れて軽く攪拌した後、容器を傾斜させて浮遊物を回収する作業を浮遊物がなくなるまで（30回程度）繰り返す。容器内の残土を粒径0.5mmの篩を通して水洗する。浮遊回収物および篩内の残渣を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定可能な種実や炭化材などを抽出する。

抽出された種類は、重量（付着する土の重量を含む）を求めて表示し、木材、土器、石器？、岩片は個数も併記する。炭化材は、各試料の一部を樹種同定対象とし、詳細を別項に記す。種実は、現生標本および石川（1994）、中山ほか（2000）等の図鑑との対照から種類と部位を同定し、個数を表示する。水洗後に抽出した種類と分析残渣は、70℃48時間乾燥後の重量を表示する。分析後は、種類毎に袋に入れて保管する。

### ③結果

分析結果を第38表に示す。焼土坑S F 3（試料229.95g）からは、炭化材6.3g、植物片0.35g、土器29.74g（16個）が検出された。一方、土坑S K 7では、1層（試料66.12g）から、炭化材16.92g、植物片0.17g、土器12.38g（4個）が、2層（試料333.52g）から、炭化材118.36g、木材0.83g（1個）、植物片0.41g、土器15.96g（4個）、3層（試料245.65g）から、炭化材8.06g、常緑広葉樹のヒサカキ属の種子<0.01g未満（1個）、広葉樹の葉先端部1個を含む植物片1.69g、土器1.47g（2個）、石器（チップ）？の可能性がある岩片1.11g（1個）、岩片82.7g（4個）が検出された。

以下に、ヒサカキ属種子の形態的特徴を記す。

・ヒサカキ属 (*Eurya*) ツバキ科

種子が検出された。茶－黒褐色、径1.5－1.8mm程度のやや扁平な不規則多角状広倒卵体。基部の臍に向かい薄くなる。種皮表面は臍を中心に楕円形や円形凹点による網目模様が指紋状に広がる。

現在の本地域に分布するヒサカキ属は、常緑広葉樹林内の林床に生育する低木または小高木のヒサカキ (*E. japonica* Thunberg)、海岸近くに生育する常緑小高木のハマヒサカキ (*E. emarginata* (Thunb.) Makino) の2種であるが、種子の実体顕微鏡下観察による区別は困難である。

#### ④考察

微細物分析の結果、焼土坑S F 3、土坑S K 7の各試料からは、炭化材や土器のほか、ヒサカキ属種子、木材、植物片、石器（チップ）？、岩片などが検出された。試料中に含まれる炭化材の割合（ただし水洗時に破壊し0.5mm篩を通り抜けた分は含まない）は、土坑S K 7の2層で35%、1層で26%であるのに対し、3層と焼土坑S F 3では3%と少ない。

なお、ヒサカキ属種子や、木材、植物片は、調査区周辺域に生育していたものに由来すると考えられるが、炭化が認められず、遺存状態も良好であることから、後代から混入した可能性が高い。

## (2)－2 炭化材の放射性炭素年代測定・樹種同定

### ①試料

土坑SK7の2層の微細物分析試料中から採取された炭化材1点について、放射性炭素年代測定を実施する。また、年代測定を実施する炭化材1点と、焼土坑SF3と土坑SK7の1～3層の微細物分析で得られた炭化材から各10点の合計41点について樹種同定を実施する。なお、微細物分析で得られた炭化材については、作業上の便宜と後の照合を容易にするために枝番号を付してある。

### ②分析方法

#### a) 放射性炭素年代測定

炭化材に土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HClにより炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理）。試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅(II)と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃(30分)850℃(2時間)で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO<sub>2</sub>を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO<sub>2</sub>と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に13C/12Cの測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}C$ を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma;68%)に相当する年代である。なお、放射性炭素年代は、 $\delta$

13Cの値を用いて同位体効果の補正を行った値(補正值)と、補正前の値を併記する。

補正年代を用いて、暦年較正を実施する。暦年較正とは、大気中の14C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動、及び半減期の違い(14Cの半減期5730±40年)を較正することである。暦年較正には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02(Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer)を用いる。その際、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表す。試料が炭化材であることから、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。

暦年較正は、測定誤差 $\sigma$ 、 $2\sigma$ 双方の値を計算する。 $\sigma$ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 $2\sigma$ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、 $\sigma$ 、 $2\sigma$ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

#### b) 樹種同定

試料を自然乾燥させた後、木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称および特徴については、島地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)、Richter他(2006)を参考にする。また、日本産木材の組織配列については、林(1991)や伊東(1995,1996,1997,1998,1999)を参考にする。

### ③結果

#### a) 放射性炭素年代測定

放射性炭素年代測定結果を第39表、暦年較正結果を第40表に示す。同位体効果の補正を行った年代値は、1,240±30BPを示す。また、測定誤差を $\sigma$ として計算させた暦年較正結果は、calAD688-853である。

b) 樹種同定

樹種同定結果を第41表に示す。炭化材は、針葉樹1分類群(イヌガヤ)と、広葉樹4分類群(コナラ属アカガシ亜属・スダジイ・シャシャンボ・ハイノキ属ハイノキ節)に同定された。なお、No.41-7は広葉樹であるが、節部分で組織配列が観察できなかったため

種類不明である。同定された各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・イヌガヤ (*Cephalotaxus harringtonia* (Knight) K. Koch f.) イヌガヤ科イヌガヤ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか。仮道管内壁

種類名	抽出状況等	地点・遺構名・層位・試料No.・分析量				備考
		F 11		F 12		
		焼土坑 S F 3		土坑 S K 7		
		3層	1層	2層	3層	
		41	42	43	44	
		229.95g	66.12g	333.52g	245.65g	
炭化材	水洗前抽出	6.2g	16.60g	111.77g	7.47g	一部樹種同定対象
	水洗後抽出	0.1g	0.32g	6.59g	0.59g	
	炭化材含量	3%	26%	35%	3%	
木材	水洗後抽出			0.83g(1個)		後代からの混入?
ヒサカキ属 種子	水洗後抽出				<0.01g(1個)	後代からの混入?
植物片	水洗前抽出				1.04g	後代からの混入? 広葉樹の葉先端部(1個)、植物片(約20個)
	水洗後抽出	0.35g	0.17g	0.41g	0.65g	
土器	水洗前抽出	29.74g(16個)	12.38g(4個)	15.96g(4個)	1.47g(2個)	
石器?	水洗前抽出				1.11g(1個)	チップ?
岩片	水洗前抽出				82.7g(4個)	
残渣	水洗後	93.9g	13.73g	31.27g	37.35g	

第38表 長谷町遺跡 S F 3・S K 7 微細物分析結果

試料No.	遺構	位置	層位	種類	補正年代 B P	δ 13C (‰)	測定年代 B P	Code No.
No.50	土坑 S K 7	F 12	2層	炭化材	1,240 ± 30	-26.78 ± 0.78	1,270 ± 30	IAAA-81005

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
- 2) B P年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差σ (測定値の68%が入る範囲) を年代値に換算した値。

第39表 長谷町遺跡 S K 7 出土炭化材放射性炭素年代測定結果

試料No.	遺構	補正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)				Code No.	
			誤差	calAD		calBP		相対比
No.50	土坑 S K 7	1,243 ± 34	σ	cal AD	688 - 753	cal BP	1,262 - 1,197	0.616
				cal AD	759 - 782	cal BP	1,191 - 1,168	0.202
				cal AD	789 - 810	cal BP	1,161 - 1,140	0.152
				cal AD	848 - 853	cal BP	1,102 - 1,097	0.030
				2σ	cal AD	682 - 875	cal BP	1,268 - 1,075

- 1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を使用した。
- 2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- 3) 1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- 4) 統計的に真の値が入る確率はσは68%、2σは95%である。
- 5) 相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

第40表 長谷町遺跡 S K 7 暦年較正結果

にはらせん肥厚が認められる。樹脂細胞は早材部および晩材部に散在する。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型で、1分野に1~2個。放射組織は単列、1~10細胞高。

・コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸~厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~15細胞高のものと複合放射組織とがある。

・スタジイ (*Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii* (Makino) Nakai) ブナ科シイノキ属  
環孔性放射孔材で、孔圏部は3~4列、孔圏外でや

や急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~20細胞高。

・シャシャンボ (*Vaccinium bracteatum* Thunb.) ツツジ科スノキ属

散孔材で、道管はほぼ単独で年輪界一様に分布し、その分布密度は高い。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、単列で8細胞高前後のものと5~7細胞幅、30~60細胞高のものがある。放射組織には鞘細胞が認められる。

・ハイノキ属ハイノキ節 (*Symplocos* sect. *Lodhra*) ハイノキ科

試料番号	遺構名	位置	枝番号	形状	樹種	備考
No.41	焼土坑SF3	F11 SF3 3層	-1	破片	シャシャンボ	
			-2	破片	シャシャンボ	
			-3	破片	シャシャンボ	
			-4	芯持丸木	コナラ属アカガシ亜属	直径約1cm
			-5	破片	シャシャンボ	
			-6	破片	シャシャンボ	
			-7	節	広葉樹(節)	
			-8	破片	シャシャンボ	
			-9	破片	イヌガヤ	
			-10	破片	スタジイ	
No.42	土坑SK7	F12 SK7 1層	-1	破片	コナラ属アカガシ亜属	
			-2	半裁状	コナラ属アカガシ亜属	直径約1cm
			-3	ミカン割状	コナラ属アカガシ亜属	直径約1cm
			-4	破片	コナラ属アカガシ亜属	
			-5	節	コナラ属アカガシ亜属	
			-6	節	コナラ属アカガシ亜属	
			-7	破片	コナラ属アカガシ亜属	
			-8	破片	コナラ属アカガシ亜属	
			-9	破片	コナラ属アカガシ亜属	
			-10	破片	コナラ属アカガシ亜属	
No.43	土坑SK7	F12 SK7 2層	-1	半裁状	コナラ属アカガシ亜属	直径約1cm
			-2	半裁状	ハイノキ属ハイノキ節	直径約2cm
			-3	半裁状	コナラ属アカガシ亜属	直径約2cm
			-4	破片	コナラ属アカガシ亜属	
			-5	破片	コナラ属アカガシ亜属	
			-6	ミカン割状	コナラ属アカガシ亜属	直径約2cm
			-7	芯持丸木	コナラ属アカガシ亜属	直径約1.5cm
			-8	ミカン割状	コナラ属アカガシ亜属	半径3cm以上
			-9	破片	コナラ属アカガシ亜属	
			-10	破片	ハイノキ属ハイノキ節	
No.44	土坑SK7	F12 SK7 3層	-1	破片	コナラ属アカガシ亜属	
			-2	破片	コナラ属アカガシ亜属	
			-3	破片	コナラ属アカガシ亜属	
			-4	破片	コナラ属アカガシ亜属	
			-5	破片	コナラ属アカガシ亜属	
			-6	破片	コナラ属アカガシ亜属	
			-7	破片	コナラ属アカガシ亜属	
			-8	破片	コナラ属アカガシ亜属	
			-9	破片	コナラ属アカガシ亜属	
			-10	破片	コナラ属アカガシ亜属	
No.50	土坑SK7	F12 SK7 2層	-		コナラ属アカガシ亜属	AMS試料

第41表 長谷町遺跡SF3・SK7樹種同定結果

散孔材で、管壁は薄く、横断面では多角形～角張った楕円形、単独および2～5個が複合して散在し、道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性、1～2細胞幅、1～20細胞高。

#### ④考察

焼土坑SF3は、平安時代前期（9世紀末頃）の火葬墓SX5の南側で検出されており、出土遺物からSX5と同時期の遺構と考えられている。側壁が被熱により赤変・硬化していることと、炭化物が残存していることから燃焼作業が行われたことが推定される。SX5に関連する可能性があり、炭化材は遺体の火葬または蔵骨器を被覆するために利用した木炭を製作した際の残渣の可能性があると考えられる。炭化材には、常緑広葉樹のアカガシ亜属、シャシャンボ、スダジイ、針葉樹のイヌガヤが認められ、少なくとも4種類の木材が利用されていたことが推定される。針葉樹のイヌガヤも含めて、比較的硬い材質の木材で構成されている。いずれも暖温帯常緑広葉樹林中に生育し、現在の遺跡周辺で見られる種類であることから、周囲で入手可能な木材を利用したことが推定される。SX5との関連性については、SX5から出土した炭化材と樹種を照合することが今後必要である。

土坑SK7は、SX5の南側から検出されており、埋土の状況からSX5やSF3と同様の時期と考えられているが、時期を特定できる遺物は出土していない。2層の炭化材の年代測定結果は、calAD688-853であり、SX5やSF3よりも若干古い時期に構築・使用された可能性がある。炭化材は、いずれの層も数cm程度の破片が多く、芯持丸木はNo.43（2層）で1点認められたのみである。芯持丸木、半裁状、ミカン割状等の炭化材から直径を推定すると、No.43-8が直径で6cm以上と考えられる他は、直径1～2cm程度の小枝である。これらの炭化材の樹種をみると、No.43（2層）でハイノキ節が2点認められた他は全てアカガシ亜属であり、アカガシ亜属を主とした構成であったことが推定される。ハイノキ節も暖温帯常緑広葉樹林中に生育する種類であり、アカガシ亜属と共に入手可能であったと考えられる。

SF3の同定結果と比較すると、硬い木材で構成されている点は似ているが、SF3のように雑多な組成にならず、ほぼアカガシ亜属で構成されており、樹種

構成に違いが認められることから、用途・目的が異なる可能性がある。SX5と関連があるかについては、SF3と同様にSX5の炭化材と樹種構成を比較することが必要である。

### (3) SX5の埋設土器内堆積物表面の植物珪酸体分析

#### ①試料

SX5では、墓壇中央に蔵骨器を据え置き、その上に木炭を覆うように山状に盛り、土師器杯と皿を合口にしたもの5セット配置している。植物珪酸体分析を行う試料は、各セットの上面の杯皿を取り上げた後の内部から採取した堆積物で、各セット1点、合計5点（試料番号45-49）である。

#### ②分析方法

今回の調査では、珪化組織片の産状に着目する。植物体の種実や葉などに存在する植物珪酸体は、珪化細胞列などの組織構造を呈している。植物体が土壤中に取り込まれた後は、植物体を形成する有機物のほとんどが土壌化や攪乱などの影響によって分解され、消失する。しかし、植物珪酸体を含む組織構造は珪酸で構成されているために分解されにくく、珪化組織片などの形で残されている場合がある。

今回の試料中には、植物の灰などが認められないことから、以下の方法を用いて植物珪酸体や珪化組織片の分離・濃集を試みる。湿重5g前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行う。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリウラックスで封入してプレパラートを作製する。

400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）、およびこれらを含む珪化組織片を近藤（2004）の分類に基づいて同定し、計数する。

#### ③結果

試料番号45～49では、試料番号48を除いて、珪化組織片が全く検出されない。試料番号48では珪化組織片1個体が認められるが、特徴的な形態を有する植物珪酸体が認められず、種類の特定に至らない。

#### ④考察

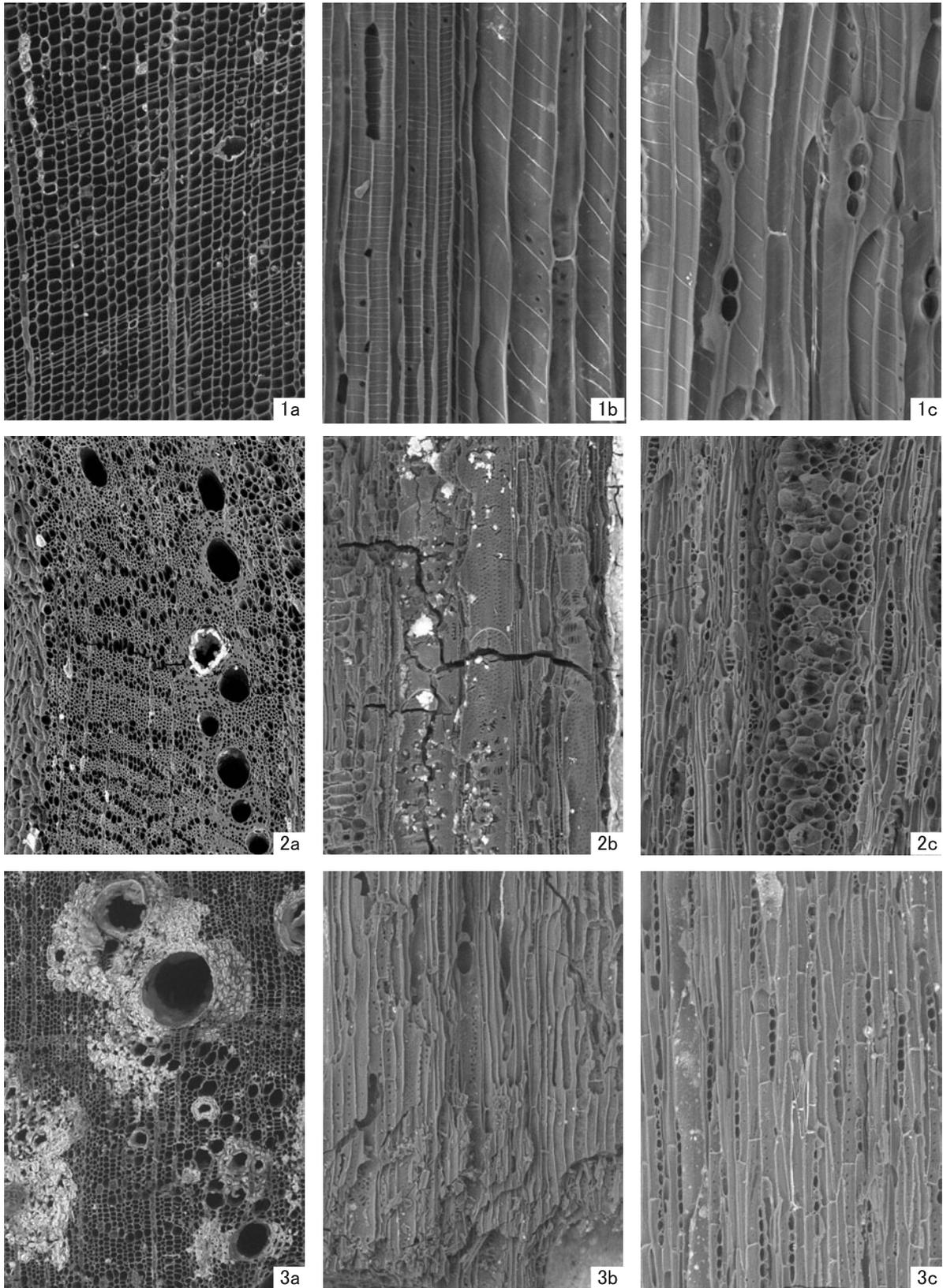
火葬墓S X 5では、土師器杯・皿を合口にしたものが5セット確認されており、そのセット数から五穀が推測されている。五穀は、時代や地域によって異なるが、概ね米・麦・粟・豆・黍・稗等の穀物であることが多い。豆を除けば、いずれもイネ科の栽培植物である。各セットの土壌を肉眼観察した範囲では、これらの遺物はみつかっておらず、穀物等の圧痕等の痕跡も確認されていない。

植物珪酸体分析では、試料番号48で種類不明の珪化組織片が認められ、何らかの植物体が存在した可能性があるが、他のセットでは珪化組織片は全く認められず、植物体の痕跡は確認できない。植物珪酸体は、イネ科植物の穎（籾殻）や葉には形成されるが、食用とする胚乳には形成されないため、脱穀した穀物が納められていたとすれば痕跡として残らない可能性がある。

(パリノ・サーヴェイ株式会社)

#### 【引用文献】

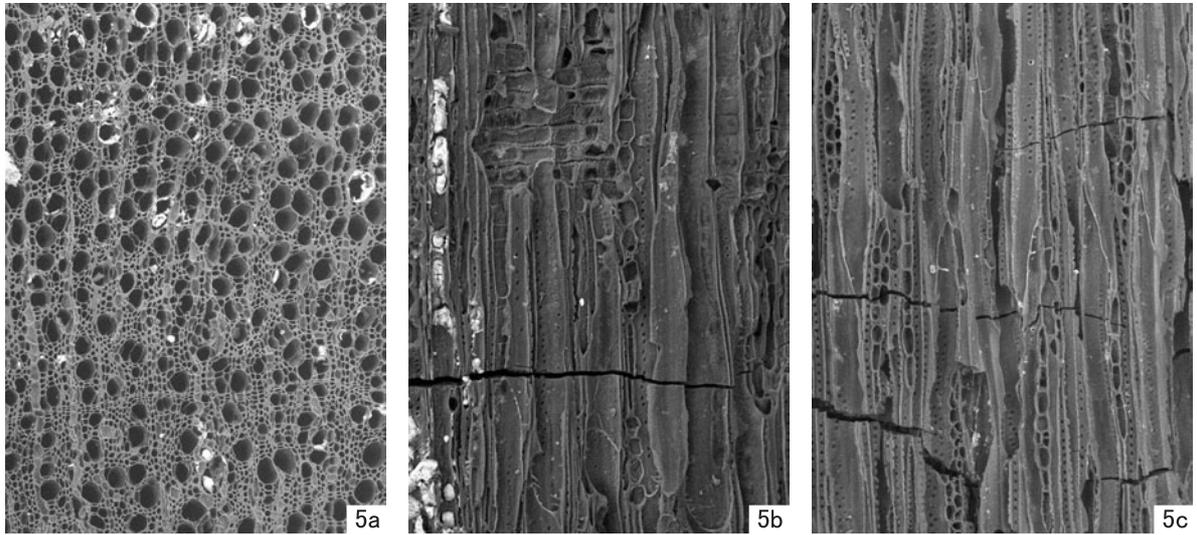
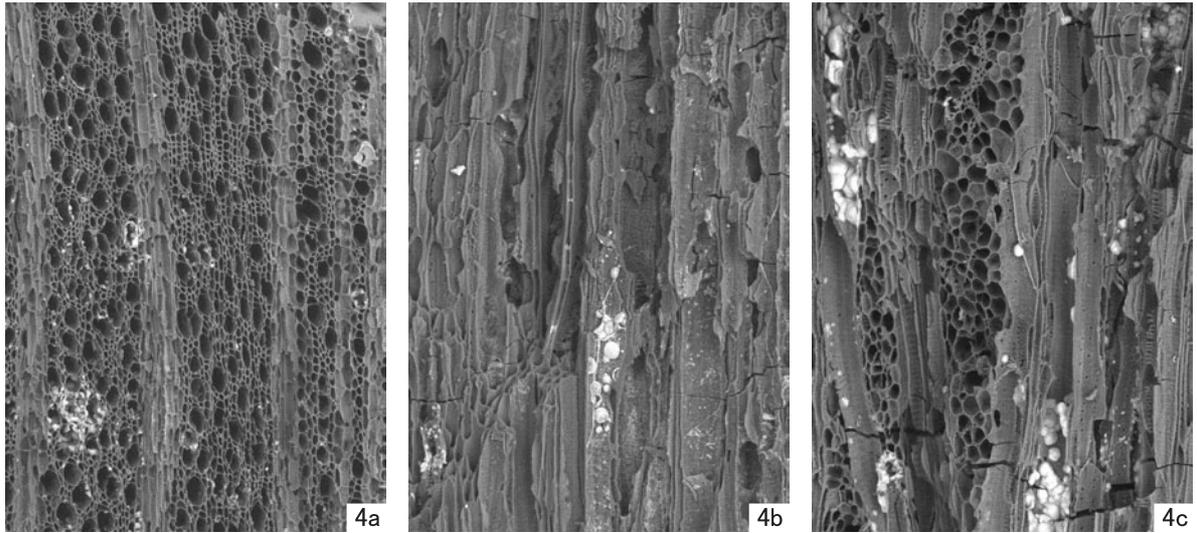
- ・林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.
- ・石川茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑.石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.
- ・伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.
- ・伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所.66-176.
- ・伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.
- ・伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.
- ・伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.
- ・近藤錬三,2004,植物ケイ酸体研究.ペドロジスト,48,46-64.
- ・中山至大・井之口希秀・南谷忠志,2000,日本植物種子図鑑.東北大学出版会,642p.
- ・Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (編),2006,針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修),海青社,70p. [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (2004) *IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*].
- ・島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.
- ・Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*].



1. イヌガヤ(試料番号41-9)  
 2. コナラ属アカガシ亜属(試料番号50)  
 3. スダジイ(試料番号41-10)  
 a:木口,b:柁目,c:板目

200 μ m:2-3a  
 200 μ m:1a,2-3b,c  
 100 μ m:1b,c

写真4 長谷町遺跡の炭化材・種実遺体①

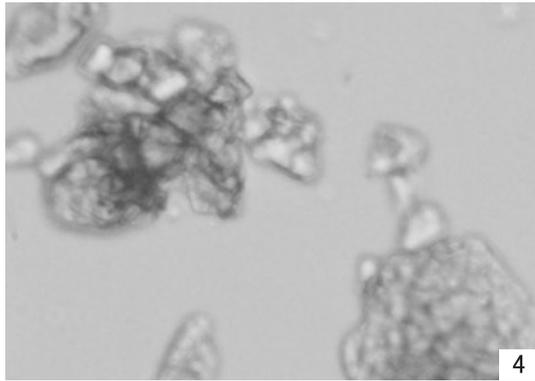
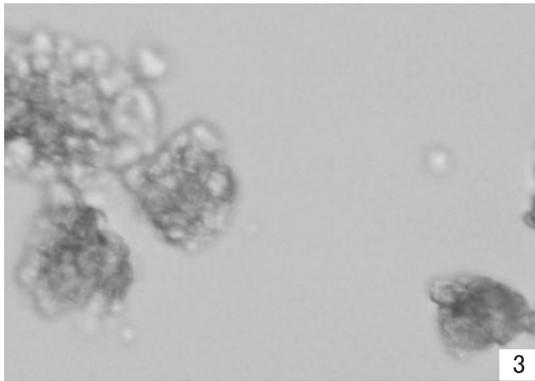
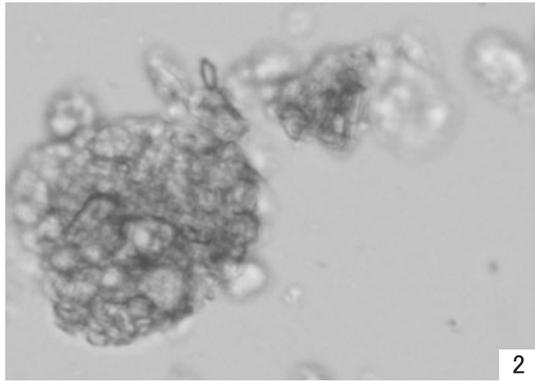
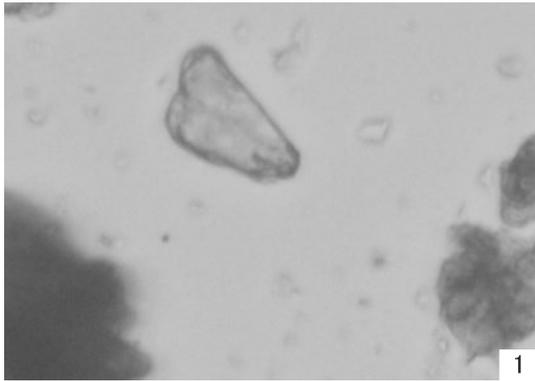


6

4. シヤシャンボ(試料番号41-1) a:木口,b:柾目,c:板目  
 5. ハイノキ属ハイノキ節(試料番号43-2) a:木口,b:柾目,c:板目  
 6. ヒサカキ属 種子(試料番号44)

200  $\mu$  m:4-5a  
 200  $\mu$  m:4-5b,c  
 1mm:6

写真5 長谷町遺跡の炭化材・種実遺体②



50  $\mu$ m



1. 鉍物粒子が散在(試料番号45)
3. 鉍物粒子が散在(試料番号47)
5. 種類不明の珪化組織片(試料番号48)

2. 鉍物粒子が散在(試料番号46)
4. 鉍物粒子が散在(試料番号49)

写真6 植物珪酸体プレパラートの状況

## 第4節 長谷町遺跡から出土した炭化材の樹種

### (1)はじめに

長谷町遺跡は斎宮池南側の低位丘陵に位置し、発掘調査により、平安時代前期（9世紀末頃）の火葬墓SX5と、平安時代前期（9世紀後半頃）の火葬関連施設の可能性のある焼土坑が検出されている。

今回の分析調査では、火葬墓SX5と焼土坑SF3の性格に関する情報を得ることを目的として、各遺構から出土した炭化材について樹種同定を実施する。

### (2)試料

試料は、火葬墓SX5の炭化材35試料（試料番号1～35）と、焼土坑SF3の炭化材1試料（試料番号36）である。このうち、複数の炭化材片が認められた試料番号1は3点、試料番号33・34は各10点、試料番号35は5点を抽出して樹種同定を実施する。したがって、合計点数は、36試料60点である。

### (3)分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称および特徴については、島地・伊東（1982）やWheeler他（1998）を参考にする。また、日本産木材の組織配列については、林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

### (4)結果

樹種同定結果を第42表に示す。炭化材は、広葉樹5分類群（コナラ属アカガシ亜属・ツブラジイ・スダジイ・ケヤキ・シャシャンボ）に同定された。なお、試料番号34・35には、樹皮が合計3点認められた。断面組織から広葉樹の樹皮と考えられるが、種類等は不明である。同定された各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・コナラ属アカガシ亜属（*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*） ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1

～15細胞高のものと複合放射組織とがある。

・ツブラジイ（*Castanopsis cuspidata* (Thunberg) Schottky） ブナ科シイノキ属

環孔性放射孔材で、道管は接線方向に1～2個幅で放射方向に配列する。孔圏部は3～4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管の穿孔板は、基本的に単穿孔であるが、希に段数の少ない階段穿孔が認められることがある。道管内壁の壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高。木口面で集合～複合放射組織が認められる。

・スダジイ（*Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii* (Makino) Nakai） ブナ科シイノキ属

環孔性放射孔材で、道管は接線方向に1～2個幅で放射方向に配列する。孔圏部は3～4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管の穿孔板は、基本的に単穿孔であるが、希に段数の少ない階段穿孔が認められることがある。道管内壁の壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高。

ツブラジイとスダジイは、集合～複合放射組織の有無で区別しているが、ツブラジイの集合～複合放射組織は、現生標本の観察では出現頻度が少ない個体もある。そのため、スダジイとした中には、集合～複合放射組織の出現頻度が少ないツブラジイが混在している可能性がある。本報告では、集合～複合放射組織が認められた試料をツブラジイ、認められなかった試料をスダジイとして区別した。

・ケヤキ（*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino） ニレ科ケヤキ属

環孔材で、孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、塊状に複合して接線・斜方向に紋様状あるいは帯状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1～6細胞幅、1～50細胞高。放射組織の上下縁辺部を中心に結晶細胞が認められる。

・シャシャンボ（*Vaccinium bracteatum* Thunb.） ツツジ科スノキ属

散孔材で、道管はほぼ単独で年輪界一様に散在する。道管の分布密度は比較的高い。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、単列で8細胞高前後のものと5～7細胞幅、30～60細胞高のものがある。放射組織には鞘細胞が認められる。

## (5) 考察

### ① 火葬墓 S X 5

平安時代前期（9世紀末頃）の火葬墓 S X 5 は、南に面した緩斜面に位置し、一辺約80cm正方形を呈する。深さは約30cmで、中央に灰釉陶器を蓋にした壺（蔵骨器）が置かれており、周囲は木炭で完全に覆われている。木炭の上には、土師器杯と皿を合口にしたものが5セット配置され、供物等の可能性が考えられているが、昨年度実施した植物珪酸体分析では穀物等の痕跡は確認できていない。

蔵骨器周囲の木炭は、蔵骨器の保護や除湿のための配慮と考えられており、形状観察では、芯持丸木、ミカン割状、角棒状などが認められる。炭化材は、硬く焼き締まっているものが多く、木炭として製炭している可能性がある。蔵骨器周囲の炭化材は、常緑広葉樹のシイ属（ツブラジイ・スダジイ）とアカガシ亜属で構成されている。いずれも照葉樹林の構成種であり、現在の植生を考慮すれば、周囲にアカガシ亜属やシイ属の生育する森林が見られ、そこから木材を得たことが推定される。形状別にみると、芯持丸木は、直径2.2～5.5cmで、アカガシ亜属とシイ属が混在しており、径の大きさなどによる樹種の違いも認められない。一方、ミカン割状の炭化材は、半径で1.3～6.9cmまであり、全体的に芯持丸木よりも径の大きい木材が利用される傾向がある。ミカン割状の炭化材について、樹種別に大きさを見ると、アカガシ亜属では、半径5.2cm以上の試料も1点があるが、6点中5点は半径2.2～3.7cmであり、シイ属は半径1.3～6.9cmで、3.5cm以上の試料が多い。この結果から、ミカン割状の炭化材では、シイ属の方がアカガシ亜属よりも径の大きな木材を利用していることが推定される。

また、sec. I、sec. II、蔵骨器外側底の炭化材は、芯持丸木やミカン割状等の形状が判断できる試料も一部あるが、多くは小さな破片であり、形状は不明である。形状が分かる試料についてみると、芯持丸木2点

がいずれも直径2.0cm、ミカン割状が半径1.3～3.0cmで、蔵骨器周囲の木炭と比較すると小径の木材を利用する傾向がある。樹種は、シイ属とアカガシ亜属であり、蔵骨器周囲の木炭と同様の木材利用が推定される。

一方、蔵骨器内の炭化材は、いずれも小型の破片であり、形状等は不明である。全て落葉広葉樹のケヤキに同定され、蔵骨器周囲の木炭等とは異なる樹種が利用されており、蔵骨器周囲の木炭とは由来・目的が異なることが窺える。発掘調査時の所見では、蔵骨器内の炭化材については、遺体を収納した木棺の一部、遺体を火葬した際の燃料材に由来する可能性が指摘されている。県内の調査事例では、古代～中世にケヤキを棺材として利用した事例は確認されておらず、六大A遺跡において鏡（古代～中世）、建築部材の蹴放し材（古墳中期～平安初期）に利用されている事例が存在するだけである（金原,2003）。

### ② 焼土坑 S F 3

焼土坑 S F 3 は、火葬墓 S X 5 の南側で検出されており、出土遺物から S X 5 と同時期の遺構と考えられている。側壁が被熱により赤変・硬化していることと、炭化物が残存していることから燃焼作業が行われたことが推定される。S X 5 に関連する可能性があり、炭化材は遺体の火葬または蔵骨器を被覆するために利用した木炭を製作した際の残渣の可能性があるとされる。昨年度の調査で、常緑広葉樹のアカガシ亜属、スダジイ、シャシャンボ、針葉樹のイヌガヤが確認されており、少なくとも4種類の木材が混在していたことが確認されている。今回の炭化材もシャシャンボに同定され、これまでの調査結果と同様の結果が得られた。アカガシ亜属やスダジイは S X 5 でも確認されている樹種であるが、シャシャンボやイヌガヤは S X 5 では確認されていない。種類構成が S X 5 と異なることを考慮すると、少なくとも S X 5 の蔵骨器周囲の木炭を焼成した際の残渣とは考えにくい。

三重県内では、火葬墓の燃料材や、蔵骨器周囲の除湿等を目的とした木炭の樹種を明らかにした例は、本遺跡の他には知られていない。一方、奈良県では、いくつかの調査事例が知られている。8世紀前半とされる太安萬侶墓では、木炭槲から出土した除湿などを目的としたと考えられる炭化材に、エゴノキ属？、カエ

デ属、アカガシ亜属、カバノキ属、ブナ科、サクラ属、クマシデ属、ツバキ属?が確認されている(小清水・嶋倉,1981)。また、9世紀前半とされる白川火葬墓群から出土した炭化材には、マツ属、コナラ節、クスギ節、ハイノキ類、クリ、アカガシ亜属が確認されている(嶋倉,1996)。硬い材質の木材が多い点は、S X 5における木材利用傾向と似ている。

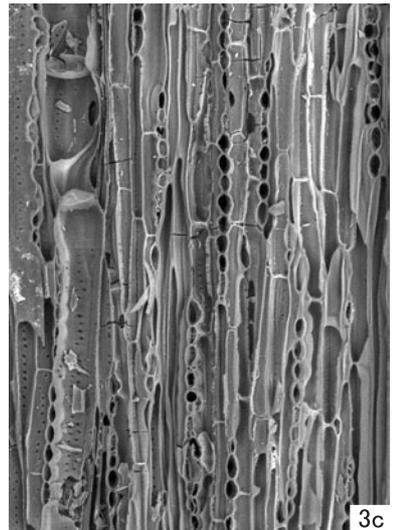
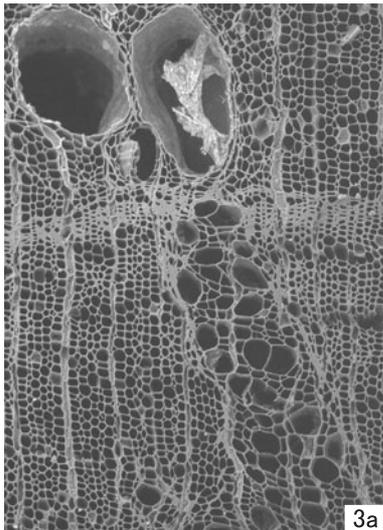
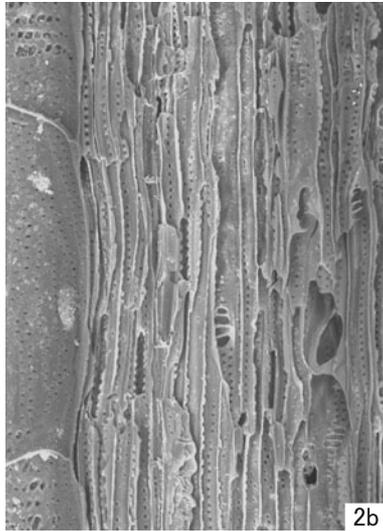
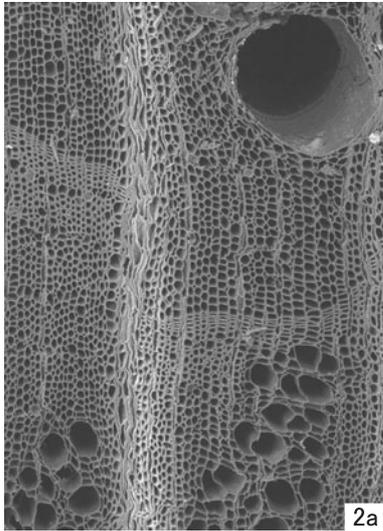
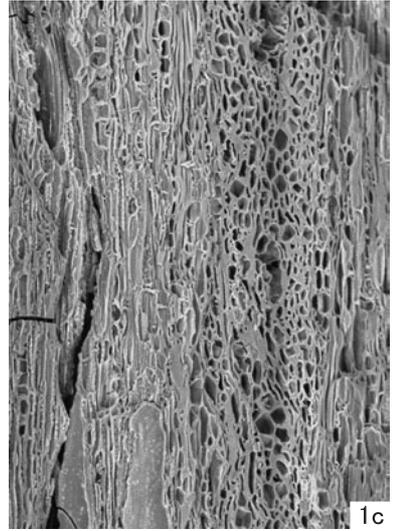
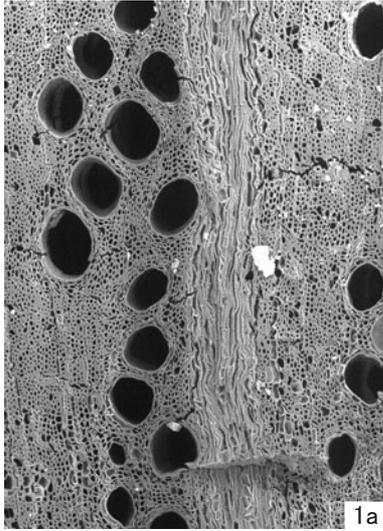
(パリノ・サーヴェイ株式会社)

#### 【引用文献】

- ・林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.
- ・伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.
- ・伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所.66-176.
- ・伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.
- ・伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.
- ・伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.
- ・金原正明,2003,樹種同定。「一般国道23号中勢道路(8工区)建設事業に伴う六大A遺跡発掘調査報告(木製品編)」,三重県埋蔵文化財調査報告115-17,三重県埋蔵文化財センター,18-22.
- ・小清水卓二・嶋倉巳三郎,1981,木炭の樹種。「太安萬侶墓」,奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第43冊,奈良県立橿原考古学研究所,89-91.
- ・島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.
- ・嶋倉巳三郎,1996,鉄錆材と木炭の樹種。「福ヶ谷遺跡・白川火葬墓群」,奈良県文化財調査報告書第73集,奈良県立橿原考古学研究所,74-79.
- ・Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*].

番号	遺構	取上番号等	点数	形状	樹種
1	火葬墓 S X 5	蔵骨器内	3	破片 (小片)	ケヤキ
				破片 (小片)	ケヤキ
				破片 (小片)	ケヤキ
2	火葬墓 S X 5	No.12	1	角棒状 (木口2.9×4.0cm)	スダジイ
3	火葬墓 S X 5	No.14	1	ミカン割状 (半径5.2cm以上)	コナラ属アカガシ亜属
4	火葬墓 S X 5	No.15	1	芯持丸木 (直径5.2cm)	コナラ属アカガシ亜属
5	火葬墓 S X 5	No.16	1	ミカン割状 (半径3.5cm以上)	スダジイ
6	火葬墓 S X 5	No.17	1	ミカン割状 (半径6.9cm)	スダジイ
7	火葬墓 S X 5	No.18	1	芯持丸木 (直径2.5cm)	ツブラジイ
8	火葬墓 S X 5	No.19	1	ミカン割状 (半径4.4cm以上)	スダジイ
9	火葬墓 S X 5	No.20	1	芯持丸木 (直径2.2cm)	コナラ属アカガシ亜属
10	火葬墓 S X 5	No.21	1	芯持丸木 (直径2.5cm)	スダジイ
11	火葬墓 S X 5	No.23	1	ミカン割状 (半径3.2cm以上)	コナラ属アカガシ亜属
12	火葬墓 S X 5	No.48	1	ミカン割状 (半径5.2cm以上)	スダジイ
13	火葬墓 S X 5	No.49	1	芯持丸木 (直径3.5cm)	コナラ属アカガシ亜属
14	火葬墓 S X 5	No.57	1	ミカン割状 (半径5.2cm)	スダジイ
15	火葬墓 S X 5	No.73	1	角棒状 (木口2.4×3.0cm)	スダジイ
16	火葬墓 S X 5	No.79	1	破片	スダジイ
17	火葬墓 S X 5	No.86	1	ミカン割状 (半径4.6cm)	スダジイ
18	火葬墓 S X 5	No.88	1	破片 (半径4.0cm以上)	スダジイ
19	火葬墓 S X 5	No.89	1	ミカン割状 (半径2.2cm)	コナラ属アカガシ亜属
20	火葬墓 S X 5	No.90	1	ミカン割状 (半径4.5cm以上)	スダジイ
21	火葬墓 S X 5	No.92	1	芯持丸木 (直径5.5cm)	スダジイ
22	火葬墓 S X 5	No.93	1	ミカン割状 (半径3.5cm以上)	スダジイ
23	火葬墓 S X 5	No.95	1	ミカン割状 (半径2.4cm)	コナラ属アカガシ亜属
24	火葬墓 S X 5	No.97	1	ミカン割状 (半径3.5cm以上)	スダジイ
25	火葬墓 S X 5	No.100	1	ミカン割状 (半径3.0cm以上)	コナラ属アカガシ亜属
26	火葬墓 S X 5	No.101	1	角棒状 (木口3.2×2.6cm)	スダジイ
27	火葬墓 S X 5	No.102	1	ミカン割状 (半径4.5cm)	スダジイ
28	火葬墓 S X 5	No.105	1	角棒状 (木口3.7×5.0cm)	スダジイ
29	火葬墓 S X 5	No.112	1	ミカン割状 (半径3.7cm)	コナラ属アカガシ亜属
30	火葬墓 S X 5	No.113	1	ミカン割状 (半径5.3cm以上)	スダジイ
31	火葬墓 S X 5	No.118	1	芯持丸木 (直径4.5cm)	スダジイ
32	火葬墓 S X 5	No.121	1	芯持丸木 (直径5.0cm)	コナラ属アカガシ亜属
33	火葬墓 S X 5	sec. I	10	ミカン割状 (半径1.3cm)	スダジイ
				ミカン割状 (半径3.0cm以上)	スダジイ
				破片 (小片)	スダジイ
				破片 (小片)	スダジイ
				破片 (小片)	ツブラジイ
				芯持丸木 (直径2.0cm)	コナラ属アカガシ亜属
				ミカン割状 (半径2.5cm)	コナラ属アカガシ亜属
				破片 (小片)	コナラ属アカガシ亜属
				破片 (小片)	コナラ属アカガシ亜属
破片 (小片)	コナラ属アカガシ亜属				
34	火葬墓 S X 5	sec. II	10	芯持丸木 (直径2.0cm)	スダジイ
				ミカン割状 (半径3.0cm)	スダジイ
				ミカン割状 (半径2.3cm)	スダジイ
				破片 (小片)	スダジイ
				破片 (小片)	スダジイ
				破片 (小片)	スダジイ
				破片 (小片)	スダジイ
				破片 (小片)	コナラ属アカガシ亜属
				破片 (小片)	コナラ属アカガシ亜属
破片 (小片)	樹皮				
35	火葬墓 S X 5	蔵骨器外側底	5	破片 (小片)	コナラ属アカガシ亜属
				破片 (小片)	コナラ属アカガシ亜属
				破片 (小片)	スダジイ
				破片 (小片)	樹皮
				破片 (小片)	樹皮
36	焼土坑 S F 3	1層	1	破片 (小片)	シャシャンボ

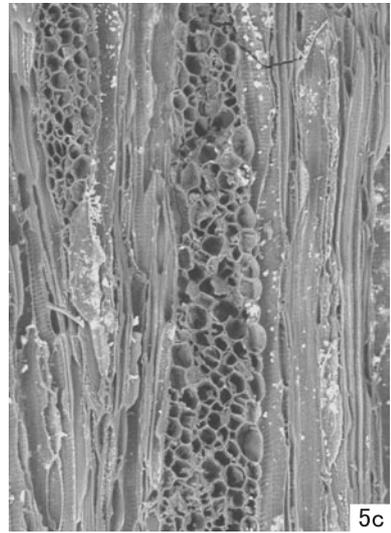
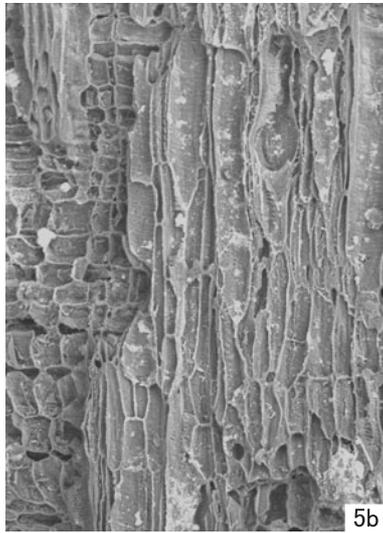
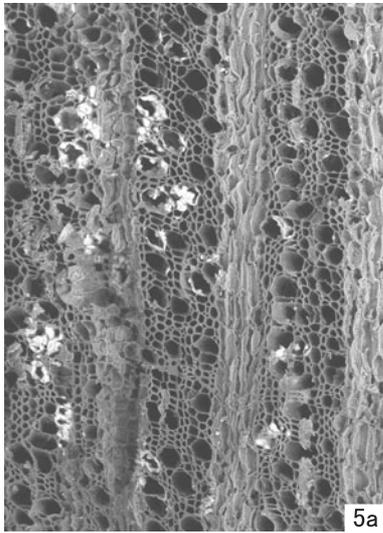
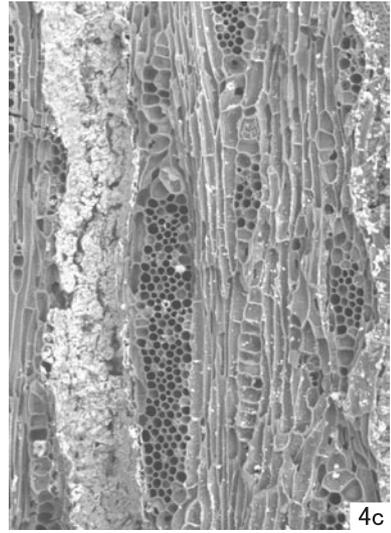
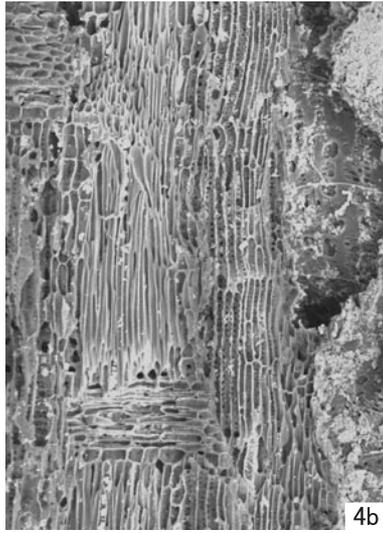
第42表 長谷町遺跡 S X 5・S F 3 樹種同定結果



1. コナラ属アカガシ亜属(試料番号13)
  2. ツブラジイ(試料番号33)
  3. スダジイ(試料番号2)
- a:木口,b:柁目,c:板目

200 μm:a  
200 μm:b,c

写真7 長谷町遺跡の炭化材①



4. ケヤキ(試料番号1)  
 5. シャシヤンボ(試料番号36)  
 a:木口,b:柁目,c:板目

200 μ m:a  
 200 μ m:b,c

写真8 長谷町遺跡の炭化材②

## 第5節 齋宮池遺跡から出土した炭化材・種実遺体の種類

### (1)はじめに

齋宮池遺跡は、南北に延びる丘陵支脈の西側縁辺部緩斜面に立地しており、大部分が江戸時代中期に築造された灌漑用の溜池である齋宮池の湖底に水没している。今回の発掘調査では、縄文時代中期末～後期初頭の土坑やピット、奈良時代の竪穴住居跡や焼土坑が検出されている。

今回の分析調査では、奈良時代の竪穴住居跡のカマドと土師器焼成坑から出土した炭化材について樹種同定を実施し、燃料材の樹種に違いがあるかを確認するため、両遺構から出土した炭化材の樹種同定を実施する。また、土師器焼成坑から出土した種実遺体の種類を明らかにするため、種実同定を実施する。

### (2)試料

**炭化材** 試料は、奈良時代の竪穴住居跡SH3のカマドと、奈良時代の土師器焼成坑と考えられる焼土坑SF10から出土した炭化材である。それぞれ一括採取された中から各3点、合計6点を抽出する。

**種実** 試料は、奈良時代の土師器焼成坑と考えられる焼土坑SF10から出土した種実1点である。

### (3)分析方法

**樹種同定** 試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柀目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称および特徴については、島地・伊東（1982）、Wheeler他（1998）、Richter他（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列については、林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

**種実同定** 試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定可能な種実を抽出する。現生標本および石川（1994）、中山ほか（2000）等との対照から、種実の種類と部位を同定し、個数を数えて表示する。分析後は、種実を種類毎に容器に入れて保管する。

### (4)結果

**樹種同定** 樹種同定結果を第43表に示す。炭化材は、

針葉樹1分類群（スギ）と、広葉樹3分類群（コナラ属コナラ亜属コナラ節・コナラ属アカガシ亜属・アジサイ属）に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

- ・スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don)  
スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。

- ・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus*) ブナ科

環孔材であるが、孔圏部は破損しており、2列のみ残存している。孔圏外の小道管は、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと同定された。

- ・コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高のものと同定された。

- ・アジサイ属 (*Hydrangea*) ユキノシタ科

散孔材で、道管は小径、単独または2～3個が複合して年輪界にほぼ均一に散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は階段状に配列する。放射組織は異性、1～2細胞幅、1～30細胞高。単列部が上下に長く延び、時に連結する。

**種実同定** 栽培種のみモモの核1個が同定された（第44表）。その他に、炭化材11個（最大2.6cm角）が確認された。以下に、モモ核の形態的特徴を記載する。

<木本>

- ・モモ (*Prunus persica* Batsch) バラ科サクラ属  
核（内果皮）が検出された。炭化しており黒色。完形ならば長さ1.5～3cm、幅1.2～2cm、厚さ1.2～1.7cm程度のやや偏平な楕円形体。頂部はやや尖り、

基部は切形で中央部に湾入した臍がある。1本の明瞭な縦の縫合線が発達し背面正中線上に細い縦隆条が、腹面正中線には浅い縦溝とその両側に幅の狭い帯状部がある。

確認された破片は縫合線に沿って半割した半分未満で、長さ13.91mm、幅12.35mm。内果皮は厚く硬く、表面は縦に流れる不規則な線状の深い窪みがあり、全体として粗いしわ状にみえる。核の内側表面は平滑で、種子1個が入る長さ8.4mm、幅6.7mmの楕円状の窪みがみられる。

## (5) 考察

竪穴住居跡SH3のカマドから出土した炭化材は、針葉樹のスギと広葉樹のアカガシ亜属に同定された。この炭化材は炊事作業時の燃料材の可能性があり、少なくとも2種類が利用されていたことになる。スギは、木理が通直で割裂性が高く、比較的軽軟で燃焼性が高い。アカガシ亜属は、重硬で強度が高く、火付きが悪いが薪炭材としては国産材の中でも優良な部類に入り、熱量は高い。住居のカマドでは、柔らかい木材と硬い木材が混在して利用されていたことになる。

一方、土師器焼成坑と考えられるSF10から出土した炭化材は、土師器焼成時の燃料材と考えられる。樹種同定結果から、コナラ節とアジサイ属が確認され、少なくとも2種類が利用されていることが推定される。コナラ節は、重硬で強度が高く、薪炭材としては特に優良な部類に入り、熱量が高い。アジサイ属は、比較的強度が高いが大径木は少ない。実際に、今回のアジサイ属は、いずれも直径約5mmの芯持丸木であり、小径の枝あるいは樹木自体が小径のアジサイ属（コアジサイ等）が利用されたと考えられる。したがって、SF10では、コナラ節が燃料材の主体であり、火付け剤や補助的な燃料材としてアジサイ属が利用された可能性がある。

竪穴住居跡と土器焼成坑を比較すると、両者で燃料材の樹種が異なっており、目的に応じて木材利用が異なっていた可能性がある。当該期の燃料材に関する資料は少ないことから、今後類例を蓄積することで木材利用の傾向をより詳細に明らかにできると考えられる。

なお、土師器焼成坑では、燃料材と考えられる炭化材に混じって種実遺体も確認され、モモの核に同定された。モモは、大陸より渡来した栽培種であり、觀賞

用の他、果実が食用、薬用等に広く利用される。炭化材と共に出土し、炭化していることから、土師器焼成時に熱を受けて炭化している可能性がある。確認した範囲では1個体のみであり、モモ核が偶然混入したのか、意図的に混入されたのかは不明である。現時点では、土師器焼成坑からモモの核が出土した事例は確認できないが、他にもこうした事例があるのか、今後資料を蓄積することが必要である。

(パリーノ・サーヴェイ株式会社)

## 【引用文献】

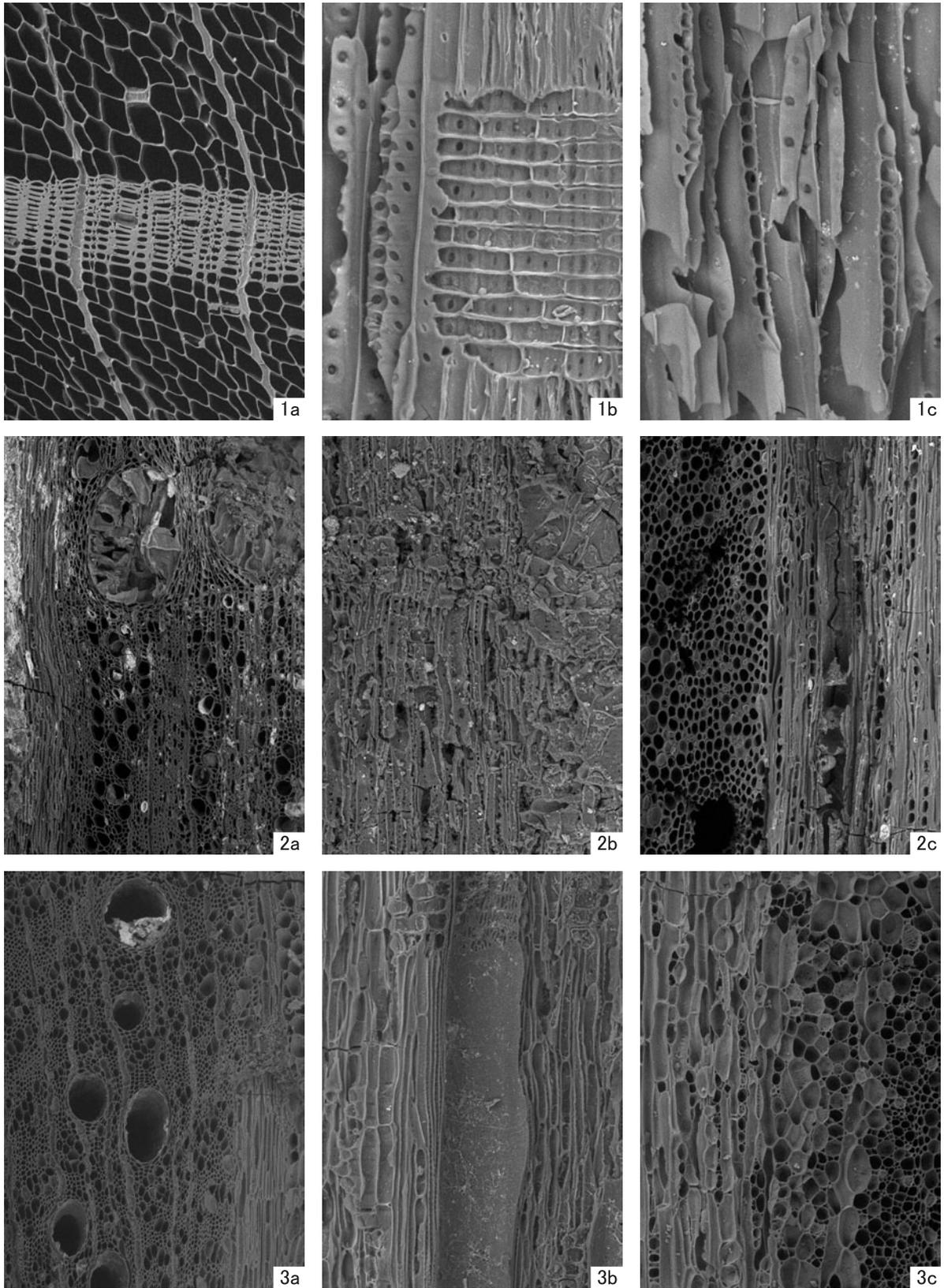
- ・林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.
- ・石川茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑.石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.
- ・伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.
- ・伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所.66-176.
- ・伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.
- ・伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.
- ・伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.
- ・中山至大・井之口希秀・南谷忠志,2000,日本植物種子図鑑.東北大学出版会,642p.
- ・Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (編),2006,針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修),海青社,70p. [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (2004) *IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*].
- ・島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.
- ・Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*].

遺構名	採取地点	点数	樹種
SH3 (竪穴住居跡)	C16 SK3カマド	3	スギ
			コナラ属アカガシ亜属
			コナラ属アカガシ亜属
SF10 (焼土坑)	C15 SF10 No.6	3	コナラ属コナラ亜属コナラ節
			アジサイ属
			アジサイ属

第43表 斎宮池遺跡樹種同定結果

遺構名	採取地点	備考	分類群	部位	状態		個数	計測値	
					破片	炭化		長さ	幅
焼土坑SF10	C15 SF10	奈良時代 土師器焼成坑?	モモ	核	破片	炭化	1	長さ 13.91mm 幅 12.35mm	

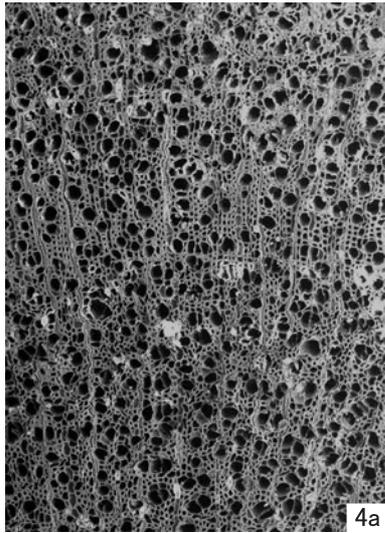
第44表 斎宮池遺跡種実同定結果



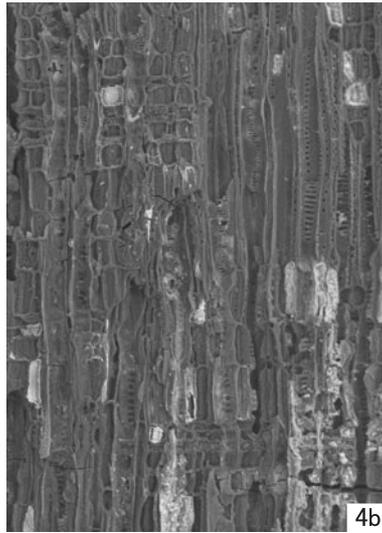
1. スギ(SH3カマド)  
 2. コナラ属コナラ亜属コナラ節(SF10;No.6)  
 3. コナラ属アカガシ亜属(SH3カマド)  
 a:木口,b:柁目,c:板目

─────────── 200 μ m:2-3a  
 ─────────── 200 μ m:1a,2-3b,c  
 ─────────── 100 μ m:1b,c

写真9 斎宮池遺跡の炭化材・種実遺体①



4a



4b



4c



5a

5b

 200 μm:4a  
 200 μm:4b,c  
 1cm:5a,b

4. アジサイ属(SF10;No.6) a:木口,b:柁目,c:板目

5. モモ核(SF10)

写真10 齋宮池遺跡の炭化材・種実遺体②

## 附章 玉城丘陵内の表面採集資料について

### — 古代火葬墓関連資料の紹介 —

本稿で紹介する資料は度会郡玉城町上田辺字大山田と下田辺字土山において採集したもので、出土状況から蔵骨器として用いられた可能性がある。

上田辺字大山田で採集されたのは、灰釉陶器の壺（1）である。出土地点は坂手国生神社の南方約300m、竹林・果樹園として利用されていた東向きの緩斜面である。一帯は辻ノ長古墳群の範囲に含まれており、採集地点の南方約50mには人物埴輪・馬形埴輪などが採集された辻ノ長15号墳が所在している<sup>①</sup>。出土状況は土取り工事の崖面、地表下30cm程に正位で露出していた。一部重機により欠損しているがほぼ完形品である。周辺では須恵器・土師器・山茶碗・円筒埴輪・チャート片などが採集できたものの、この灰釉陶器に共伴する遺物や蓋、木炭・焼土などは確認できなかった。1の残存部分の器高は14.3cm、底径は7.9cmである。頸部は打ち欠かれており、断面はやや摩滅している。外面には全面に灰釉が施され、肩部より下は篋削りにより調整されている。10世紀後半の猿投窯の製品（折戸53窯式）と推測される<sup>②</sup>。骨片などの内容物は見られなかったが、一部に茶褐色の付着物が認められる。

下田辺字土山で採集されたのは須恵器の壺（2）である。出土地点は土山古墳群が立地する丘陵で、広域農道の法面に正位で露出していた。遺存状態は悪く、道路工事により半分近くが失われていた。内部には重機により破砕された破片が入り込んでいたが、頸部・口縁部の破片は見られず、もともと頸部以上を取り去っていたと見られる。辻ノ長古墳群内で採集した灰釉陶器と同じく、共伴する遺物や蓋、木炭・焼土などは認められなかった。2の残存部分は器高15cm、底部径は10.2cmで高台が付く。内部には篋削りによる粘土屑が付着している。肩部に三段構成の痕跡が認められることから、8世紀代の長頸壺と見られる<sup>③</sup>。周辺では須恵器・土師器・円筒埴輪を採集したが、現在のところこの長頸壺と同時期の遺物は確認できていない。

玉城丘陵南部では明和町池村の長谷町遺跡におい

て平安時代の火葬墓が確認されており、被葬者としては斎宮関係者或いは内宮禰宜荒木田氏（二門）が推定されている<sup>④</sup>。今回紹介した蔵骨器と見られる2例は、いずれも荒木田氏（二門）の氏神、田辺神社推定地付近で採集されている。

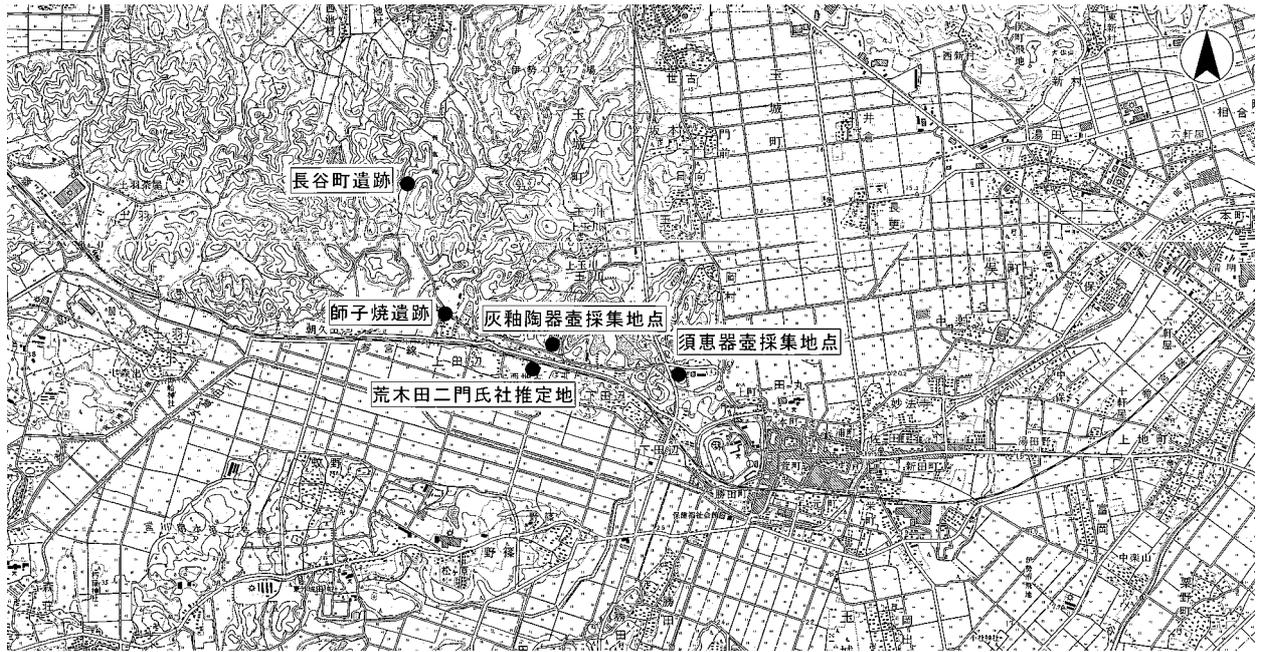
古代において、貴族豪族層の墓地に付属する山林は排他的権利を有する地として認識されていたと見られることから、この2例が蔵骨器とすれば、被葬者は荒木田氏（二門）関係者の可能性が高い。また辻ノ長古墳群周辺からは、ほぼ完形に復元可能な浄瓶が金子延夫氏により採集されていることから、周辺には未発見の墓地が複数存在していると思われる<sup>⑥</sup>。

今回紹介した資料は開発工事に伴って偶然採集されたものである。近年、玉城丘陵一帯では住宅建設などによる改変が加速している。玉城丘陵のような山林では地表面で観察が可能な古墳や中世城館以外の確認は困難であるものの、丘陵内の耕作地や道路法面、土取り場などの踏査、あるいはヒアリング等により、ある程度遺跡の存在を把握することは可能である。未調査のまま遺跡が破壊されるのを防ぐためにも、早急な分布調査および周知の遺跡の現状把握が望まれる。

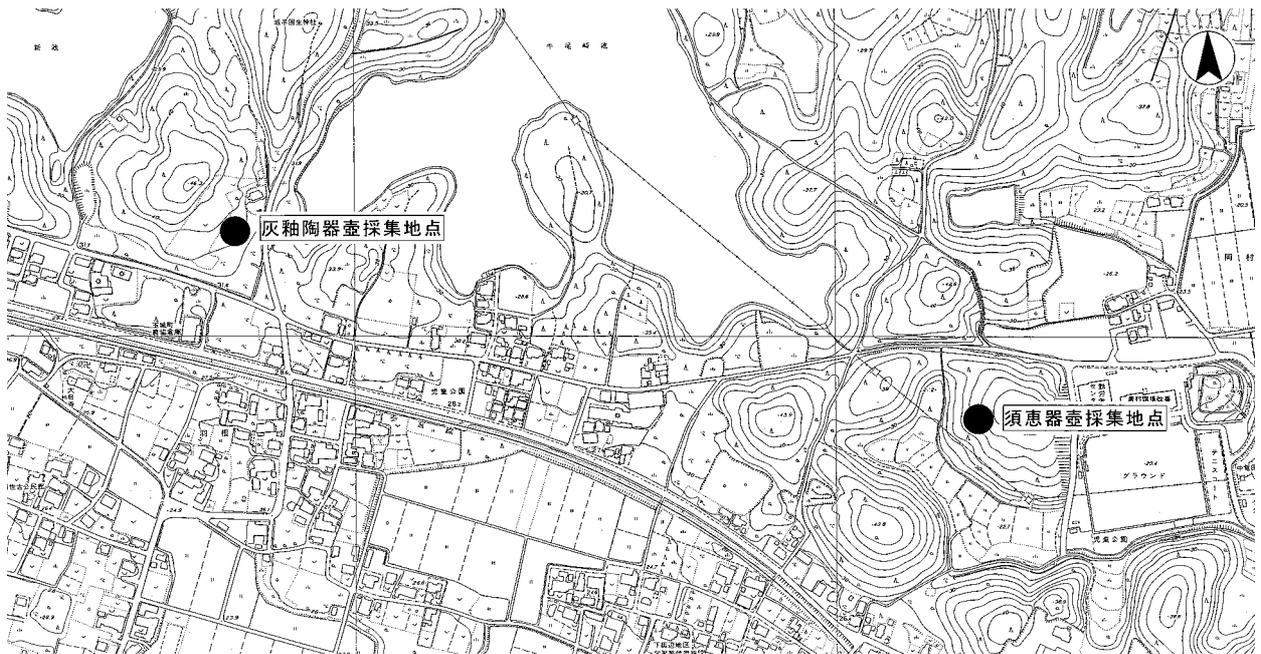
（成瀬匡章）

#### 【註】

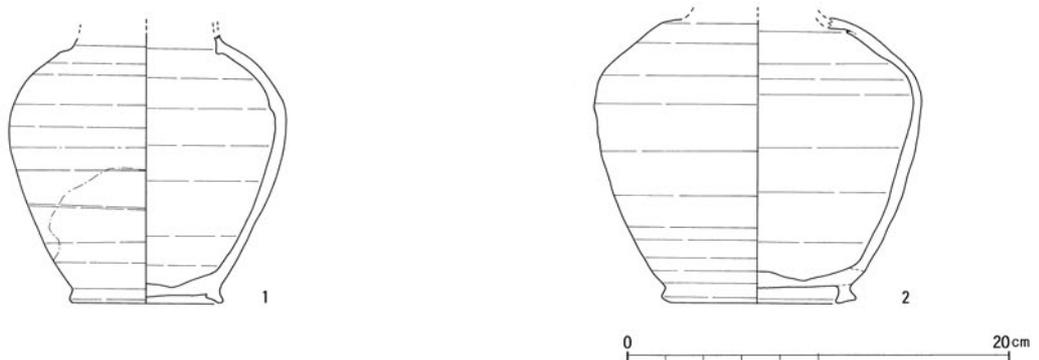
- ①玉城町史編纂委員会『玉城町史』上巻（1995年）
- ②藤澤良祐氏のご教示による。
- ③平尾正幸「須恵器製作技法の検討にむけて」（『古代の土器研究—律令的土器様式の西・東6 須恵器の製作技法とその転換—』古代の土器研究会 2001年）
- ④三重県埋蔵文化財センター『宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査だより』第5号（2007年）  
三重県埋蔵文化財センター『師子焼遺跡発掘調査報告』（2009年）
- ⑤北村安裕「古代の「林」と土地経営」（『日本歴史』第734号 2009年）
- ⑥金子延夫『玉城町史』第三巻（三重県郷土資料刊行会 1984年）



第68図 遺物出土地・周辺遺跡等位置図 (1 : 50,000) [国土地理院「松阪」「明野」「国東山」「伊勢」1 : 25,000より]



第69図 遺物出土地周辺地形図 (1 : 8,000) [開発工事前]



第70図 出土遺物実測図 (1 : 4)

# 写 真 图 版





火葬墓 S X 5 合口土師器皿出土状況（北西から）



火葬墓 S X 5 合口土師器皿出土状況（西から）



火葬墓 S X 5 木炭柳検出状況 (西から)



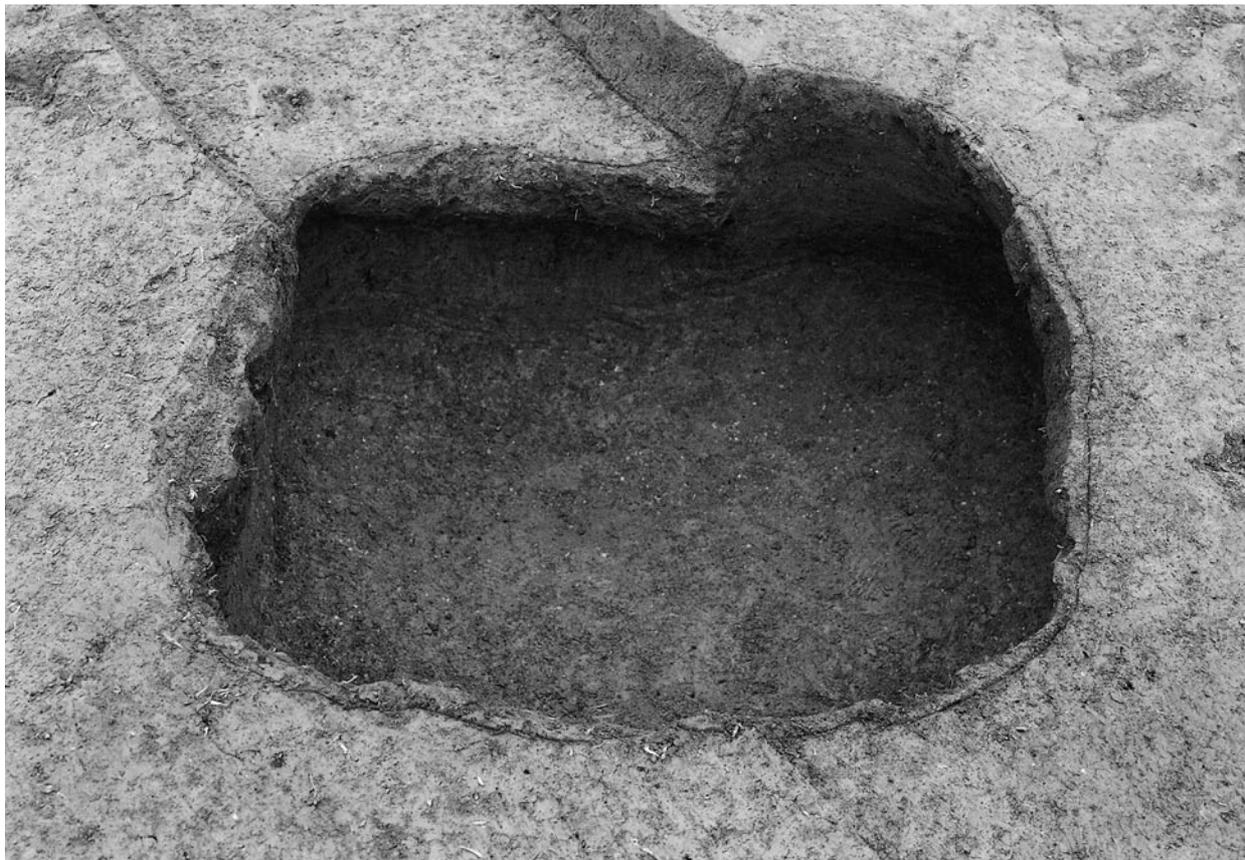
火葬墓 S X 5 蔵骨器出土状況 (東から)



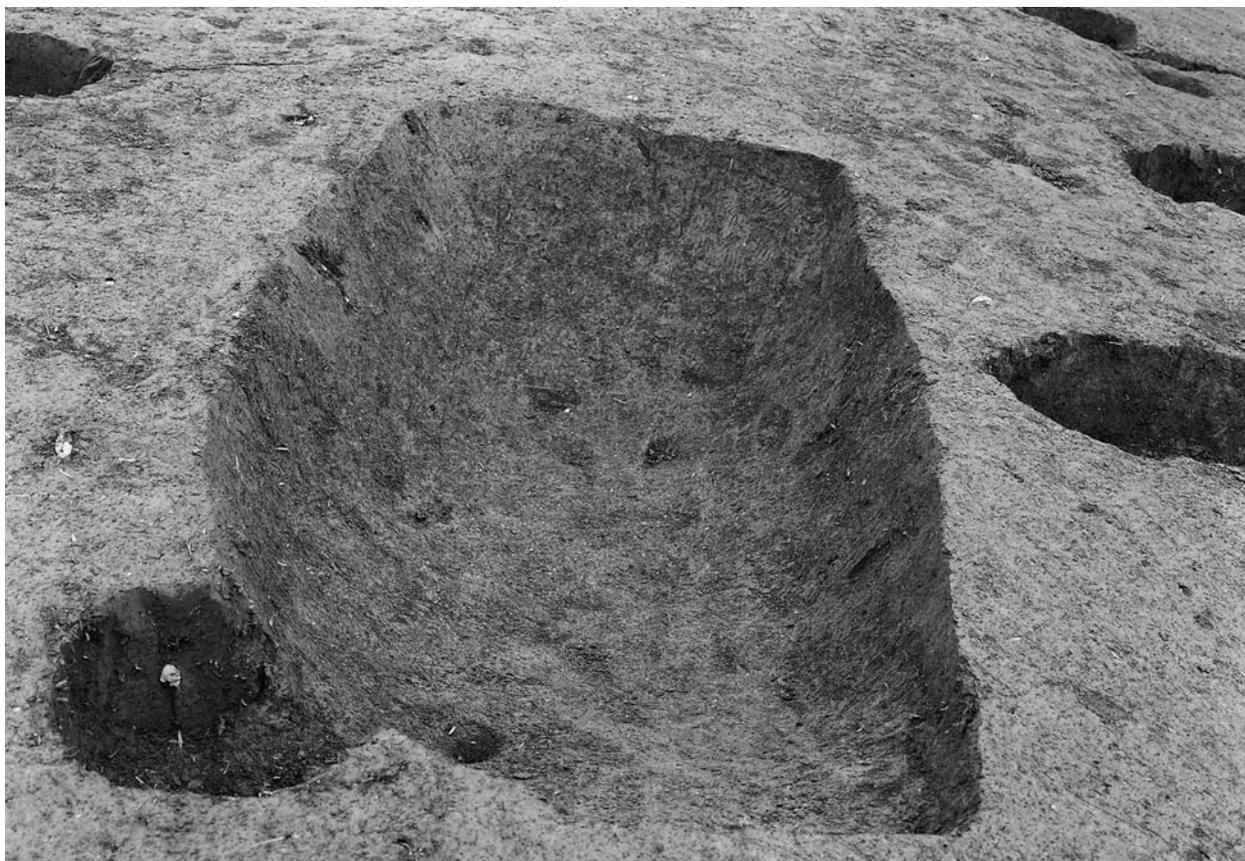
火葬墓 S X 5 木炭柳半截状況（東から）



火葬墓 S X 5 完掘状況（西から）



焼土坑 S F 3 完掘状況 (南西から)



土坑 S K 7 完掘状況 (西から)



土坑SK 6 遺物出土状況（南から）



竪穴住居SH 1・火葬墓SX 5 全景（北東から）



調査区南斜面遠景（南西から）



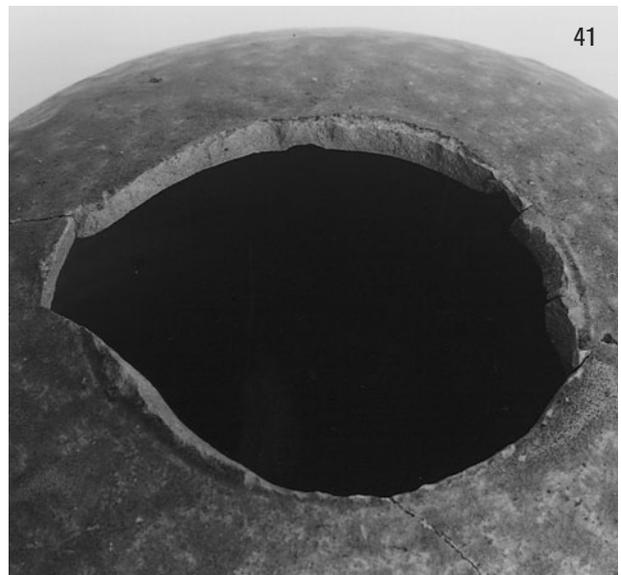
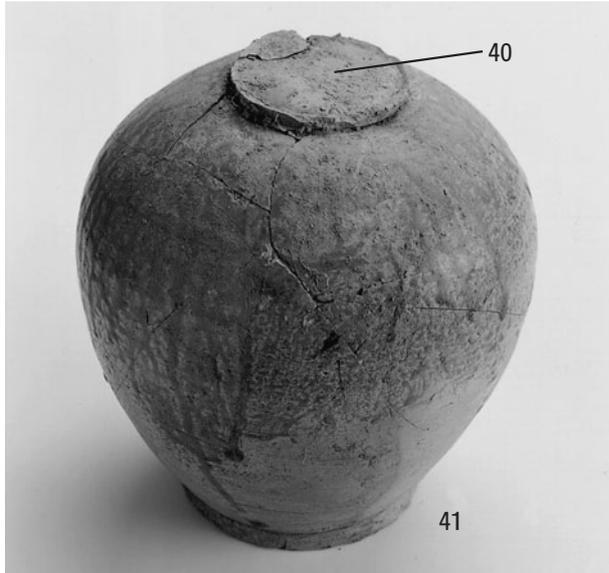
調査区全景（東上空から）



火葬墓S X 5 出土火葬人骨取上状況



火葬墓S X 5 出土蔵骨器内の火葬人骨



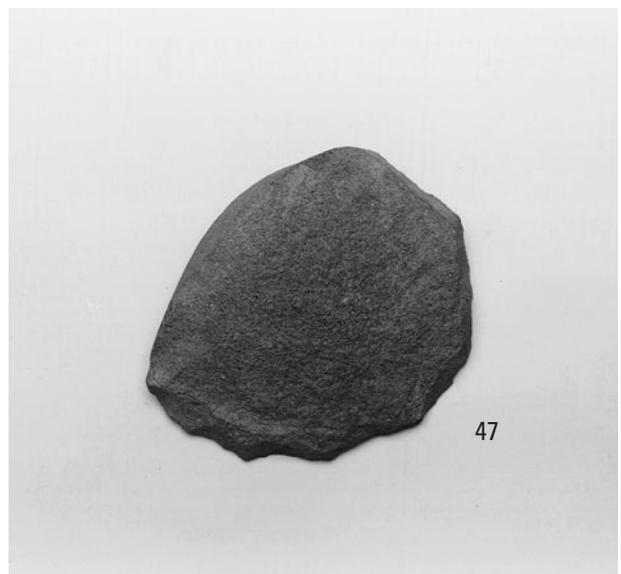
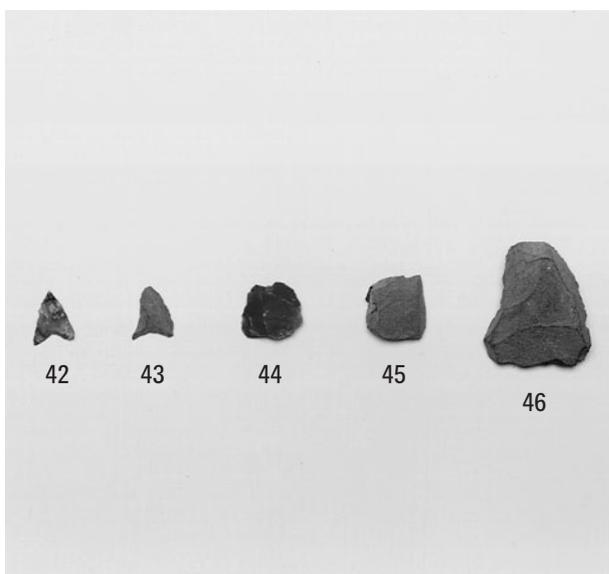
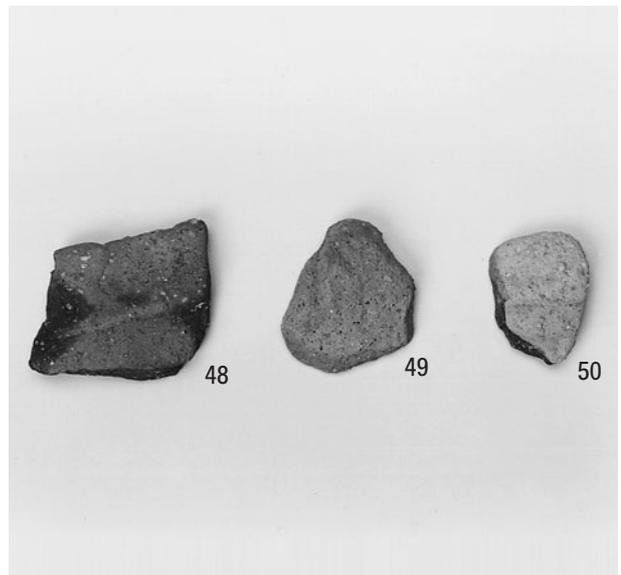
火葬墓 S X 5 出土遺物



火葬墓 S X 5 出土遺物



火葬墓SX5・竪穴住居SH1・焼土坑SF3出土遺物



竪穴住居SH1・土坑SK6・包含層他出土遺物



調査前状況（北から）



土坑SK7完掘状況（北から）



竪穴住居SH3カマド遺物出土状況（西から）



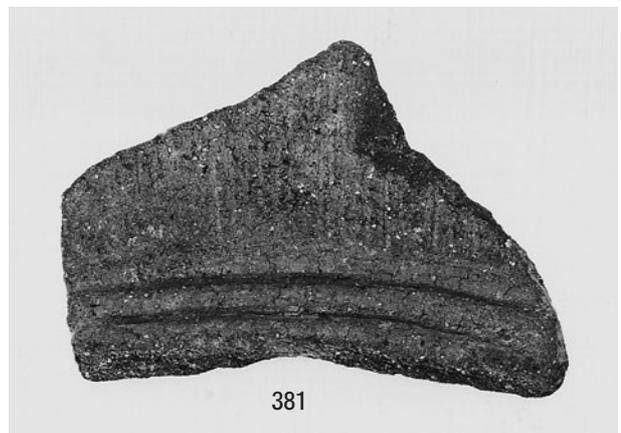
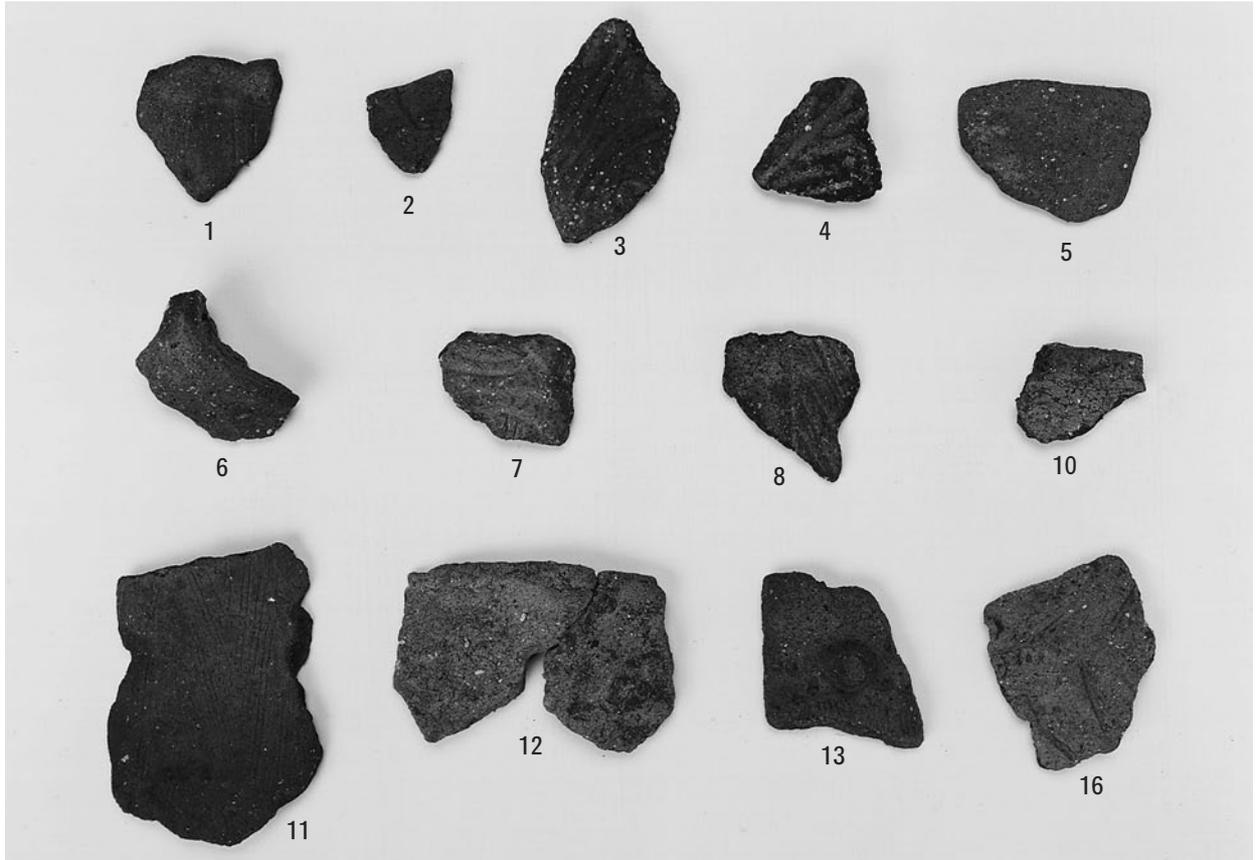
竪穴住居SH3カマド完掘状況（西から）



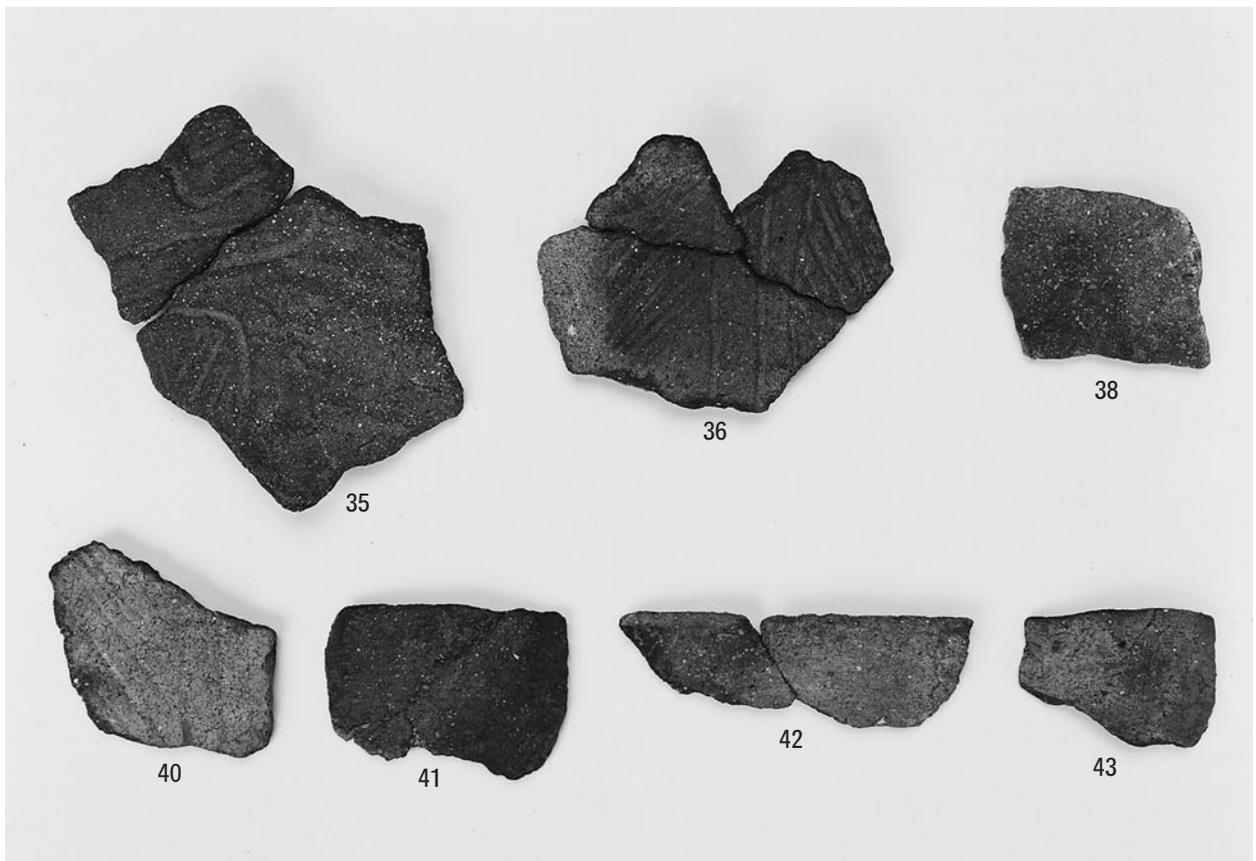
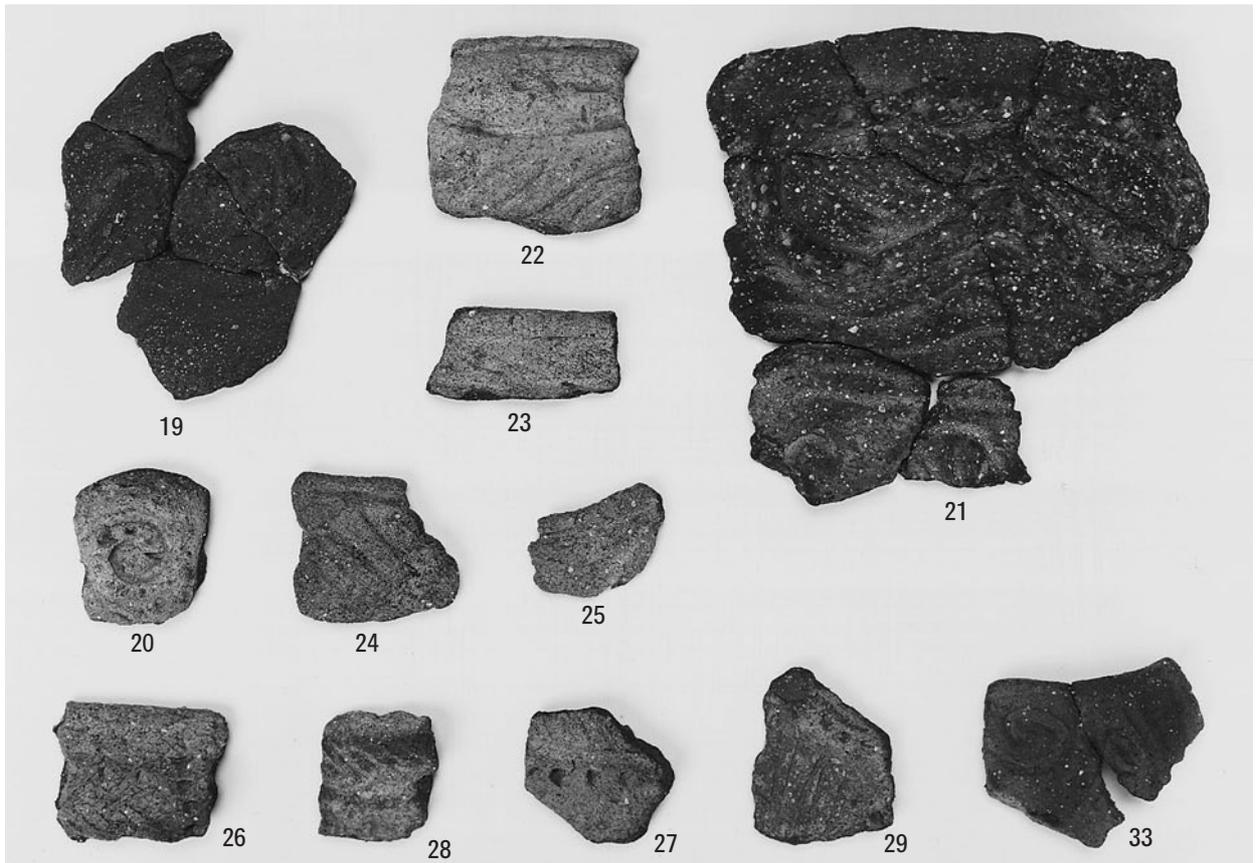
焼土坑S F 10遺物出土状況（北から）



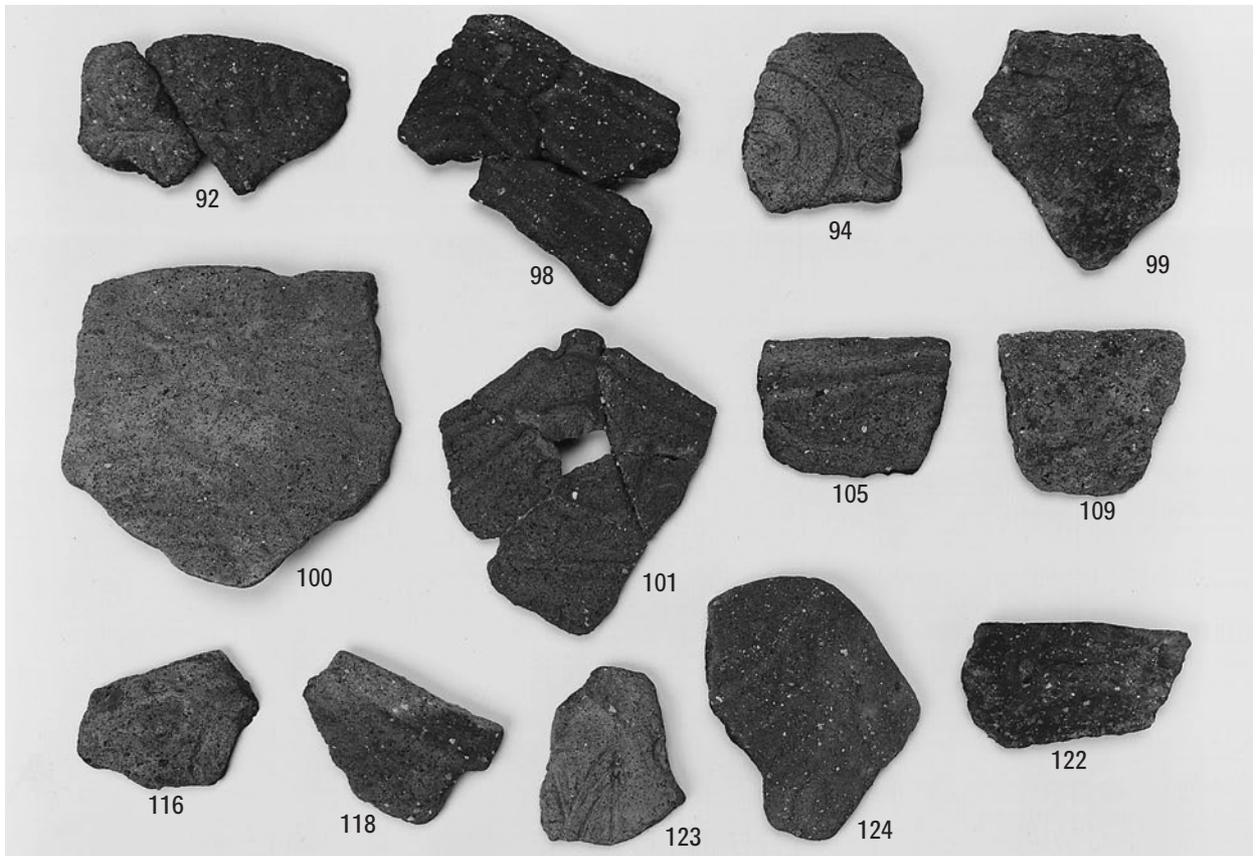
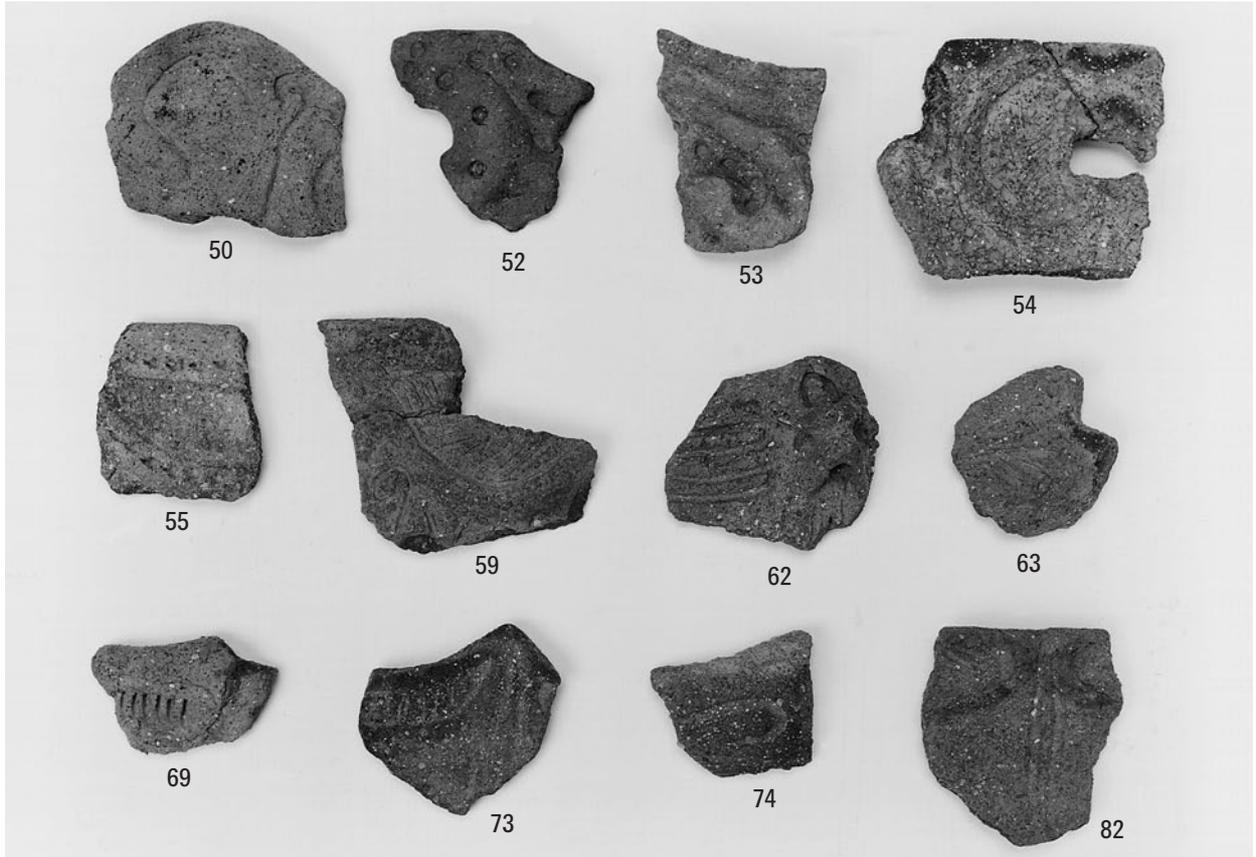
調査区全景（南上空から）



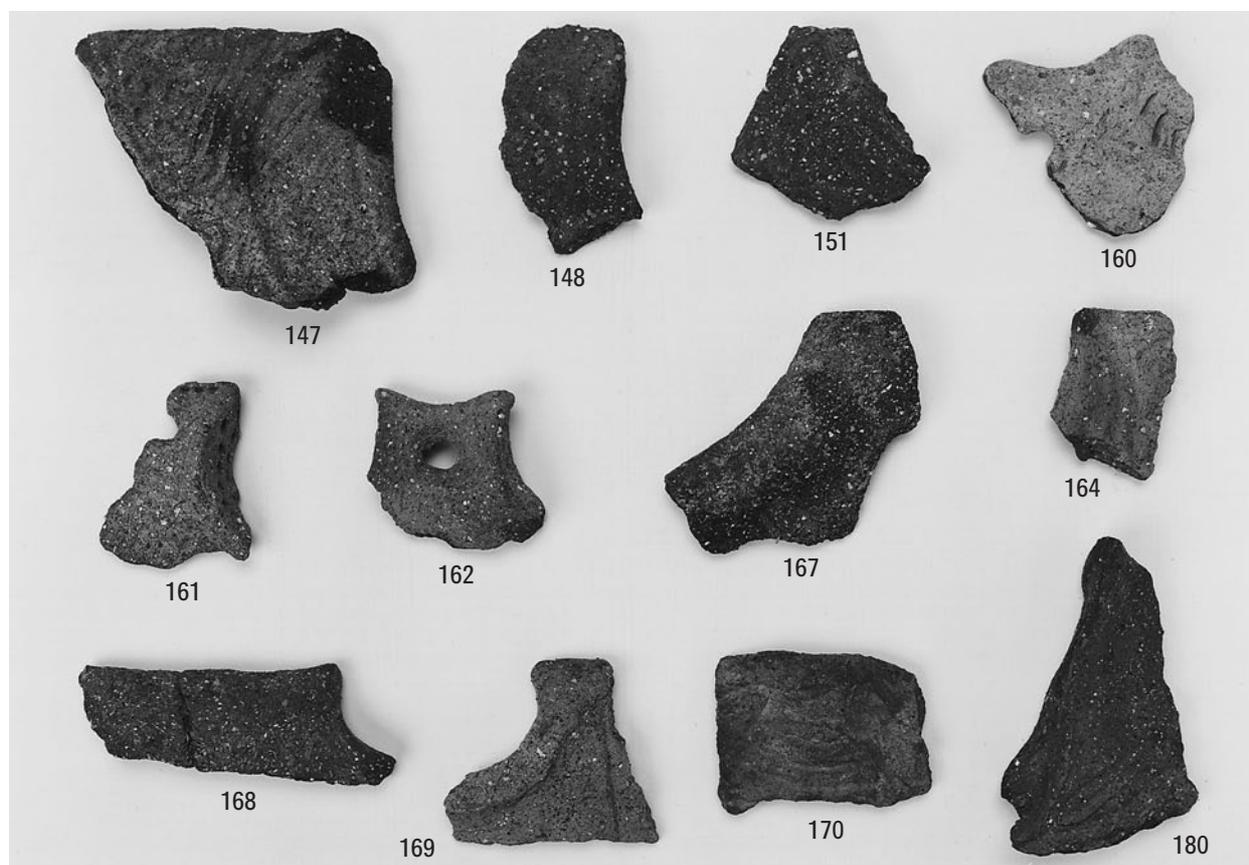
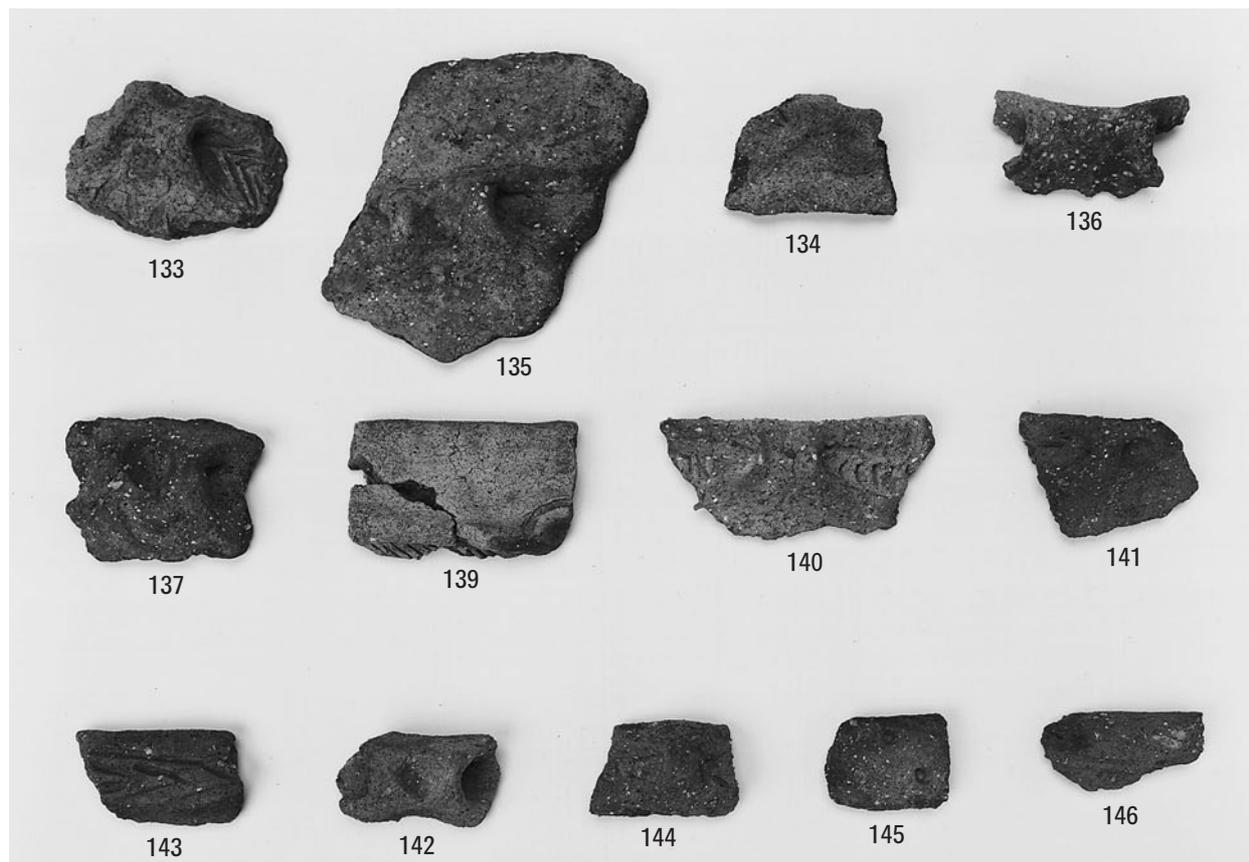
出土遺物①（縄文土器）



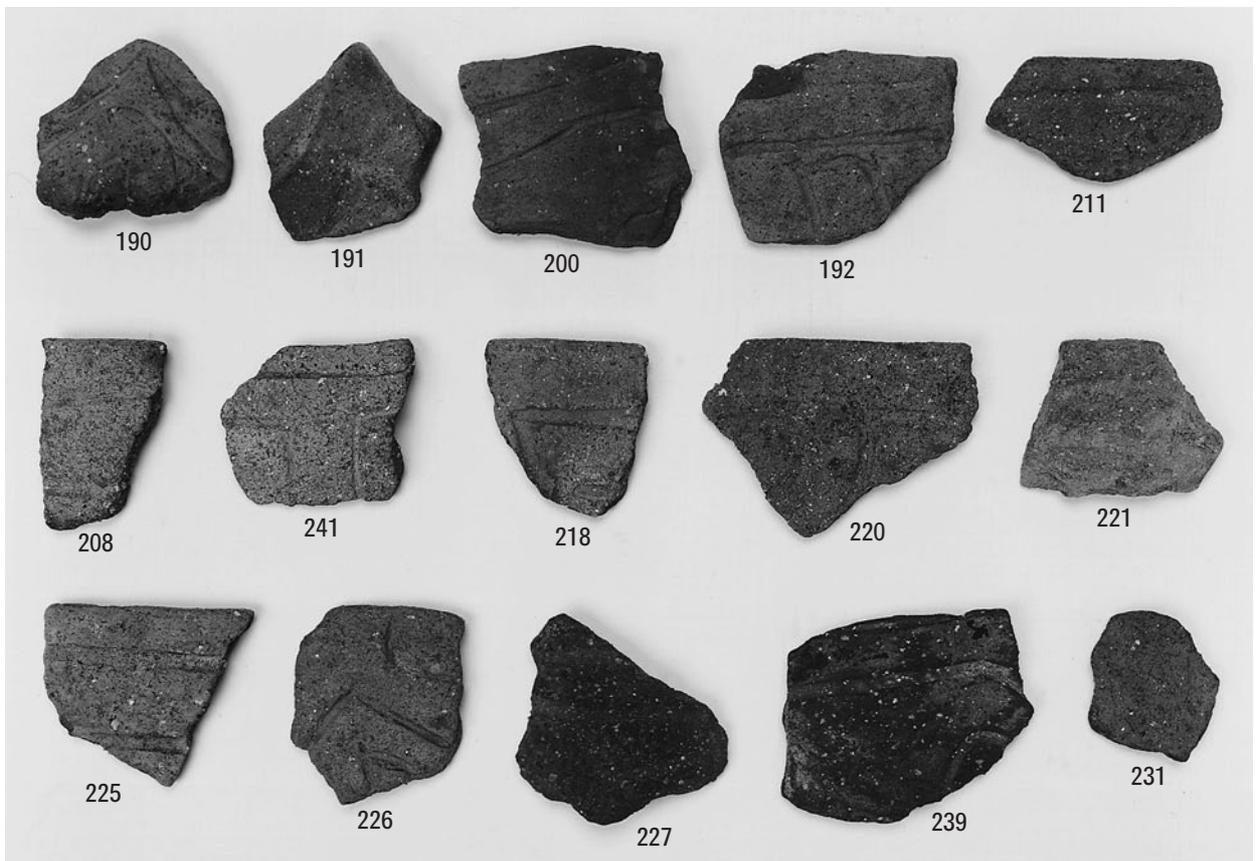
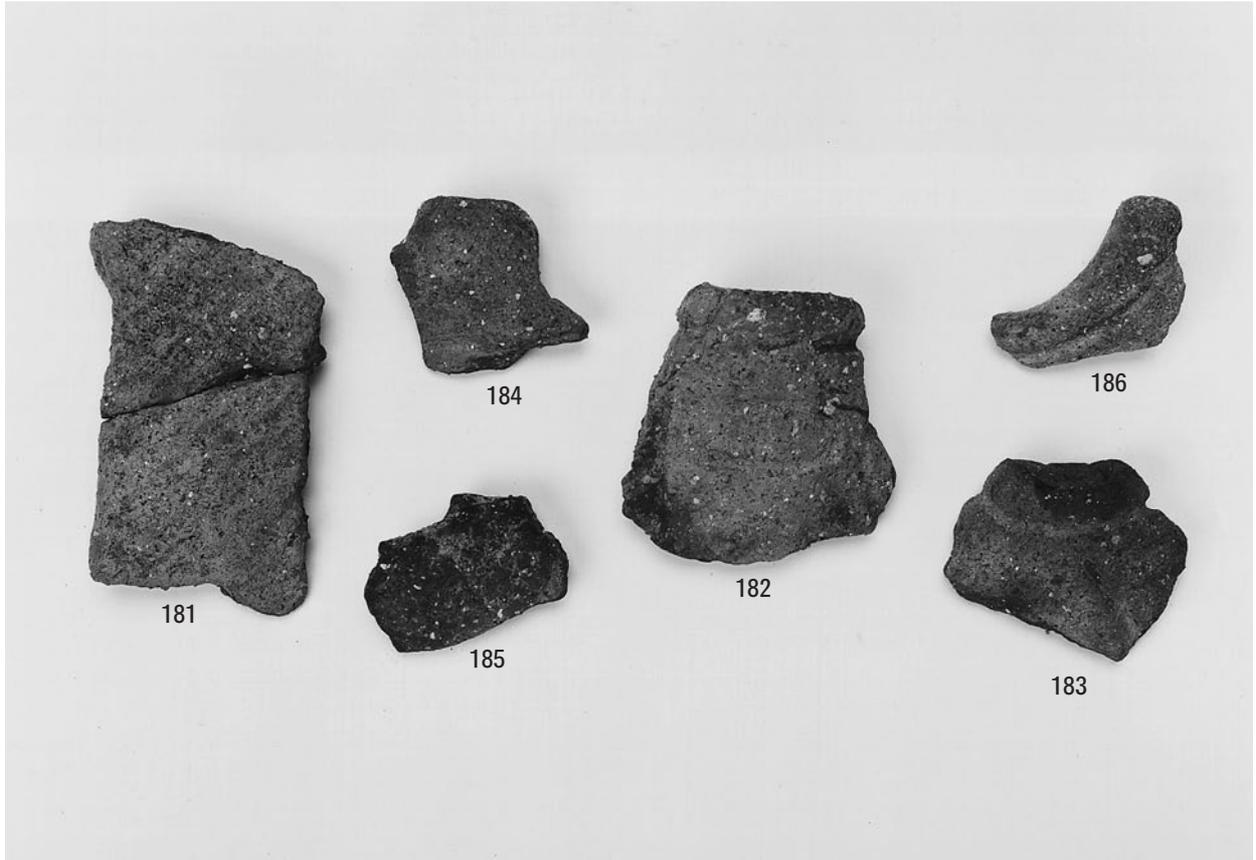
出土遺物②（縄文土器）



出土遺物③（縄文土器）



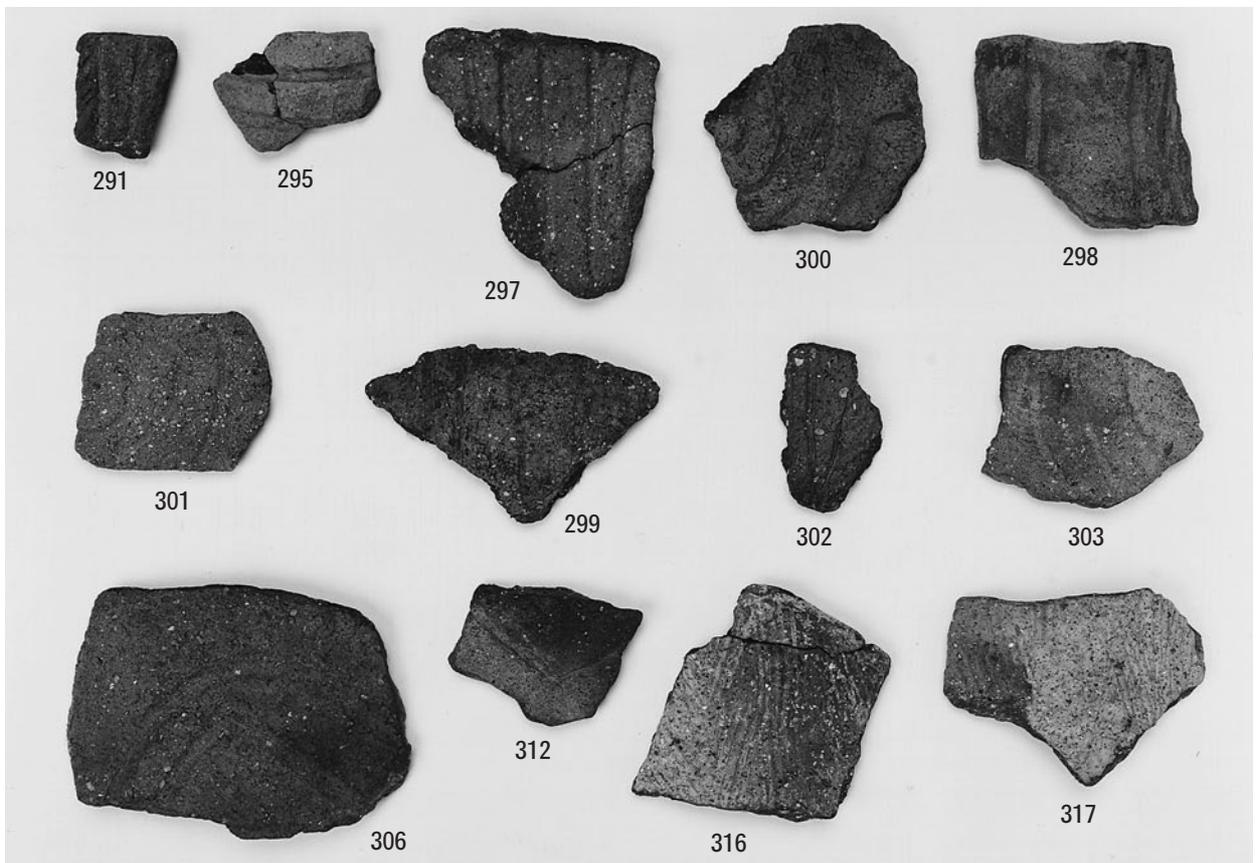
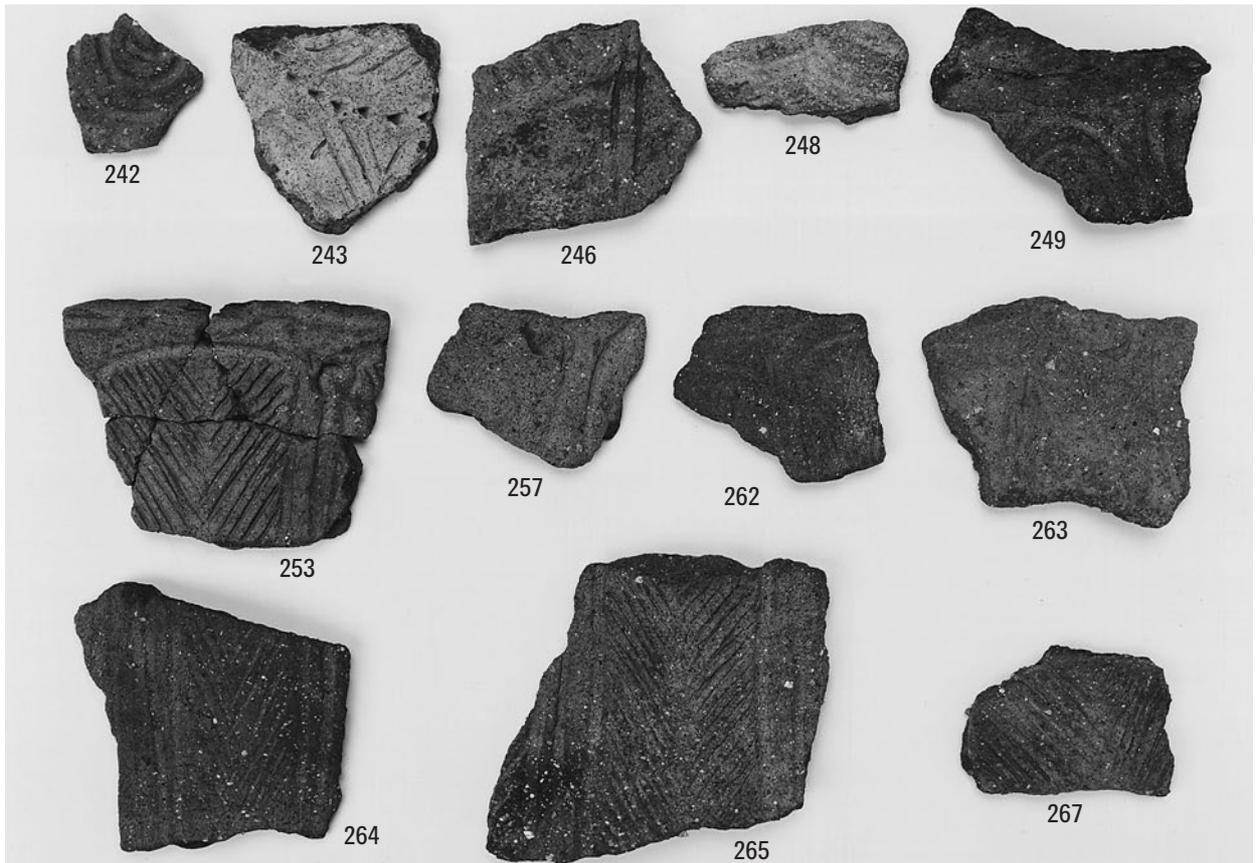
出土遺物④（縄文土器）



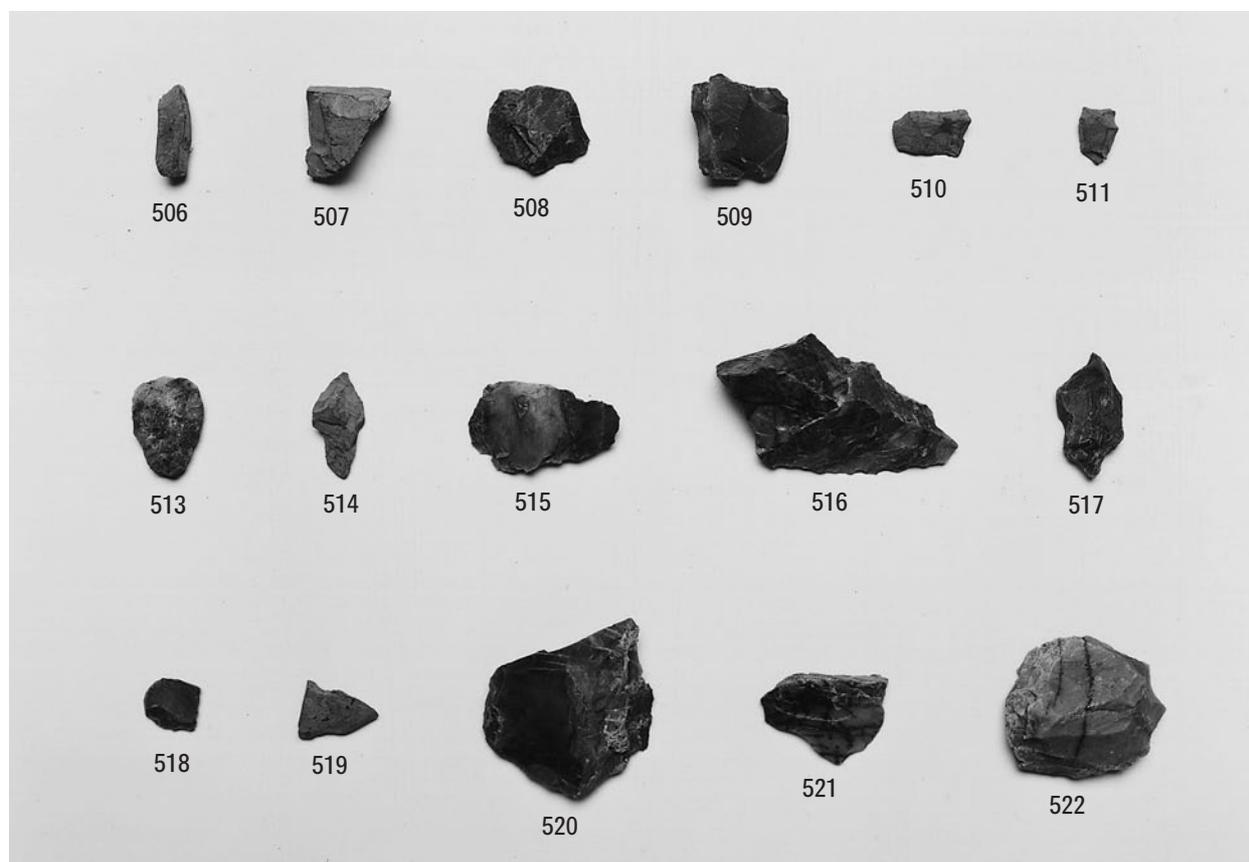
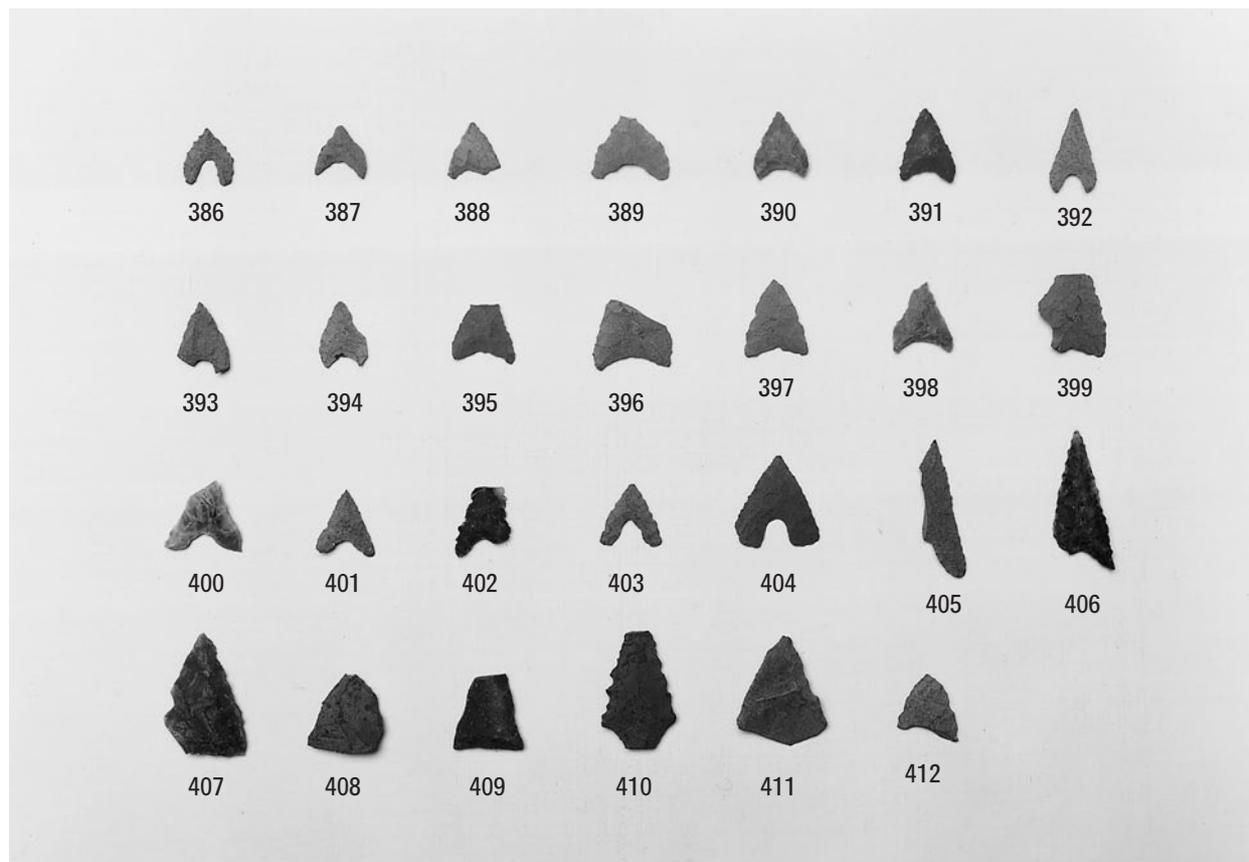
出土遺物⑤（縄文土器）



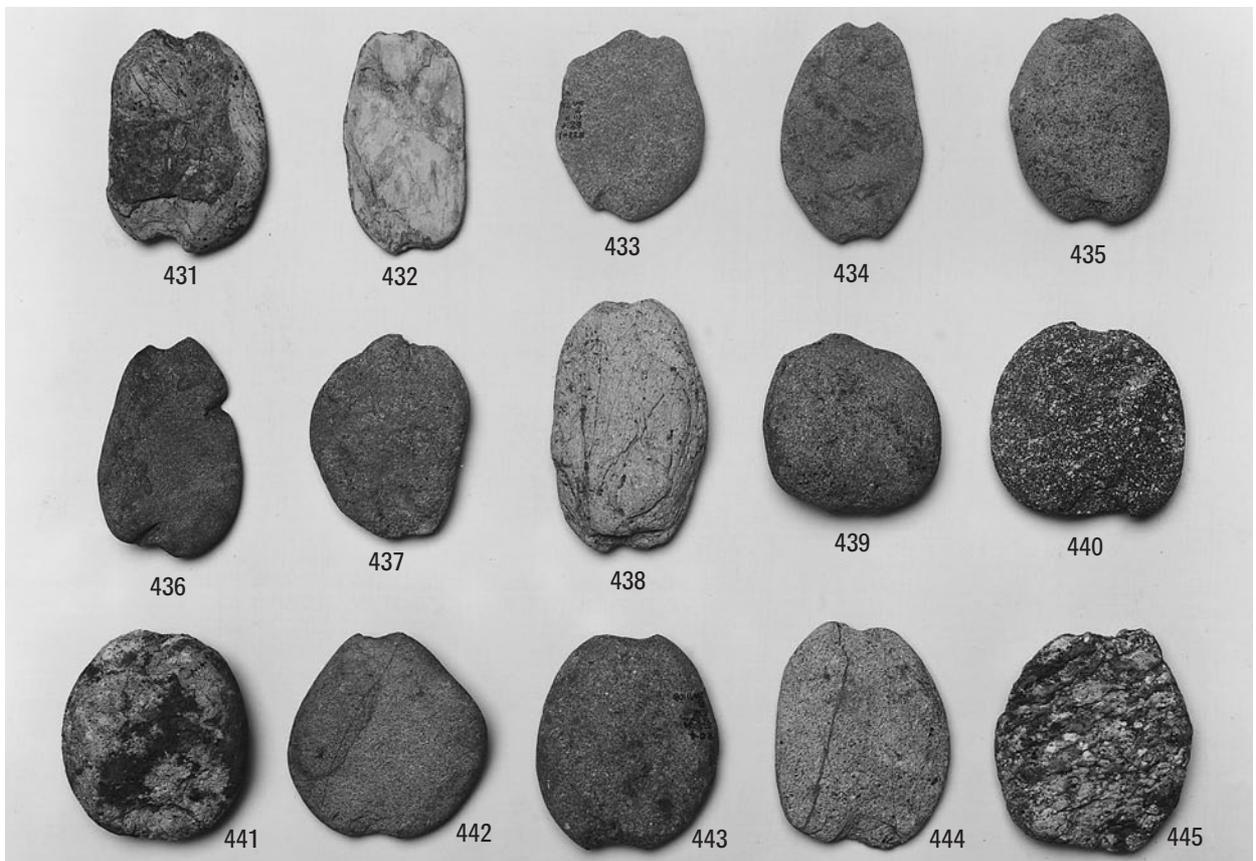
出土遺物⑥（縄文土器）



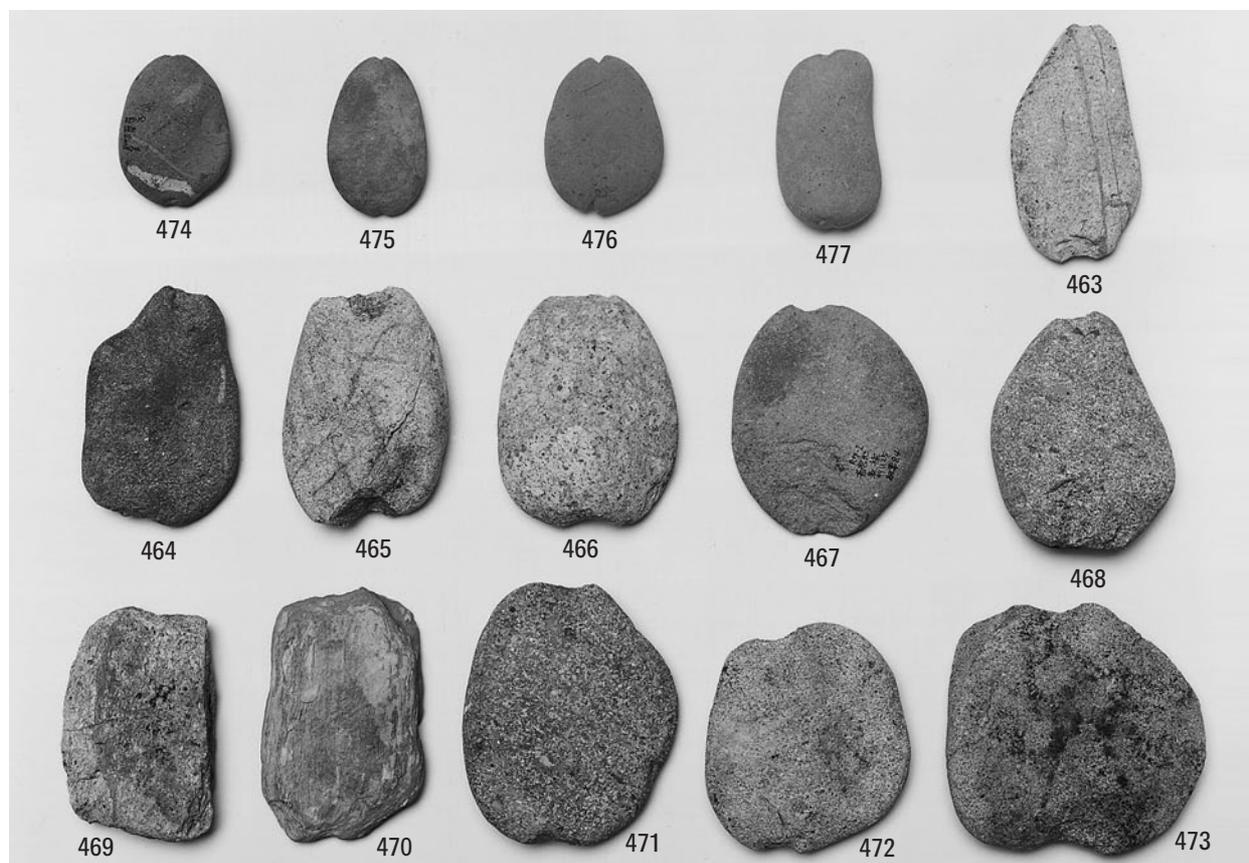
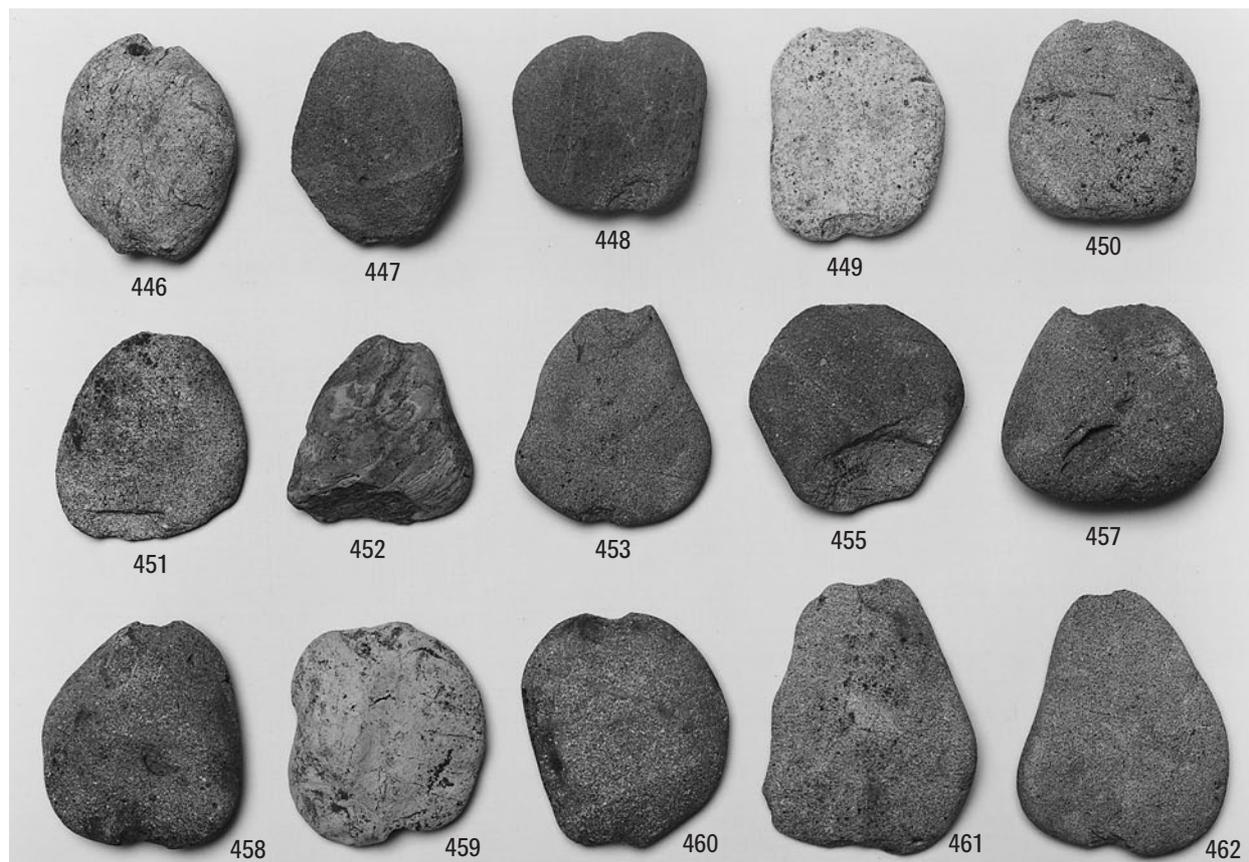
出土遺物⑦（縄文土器）



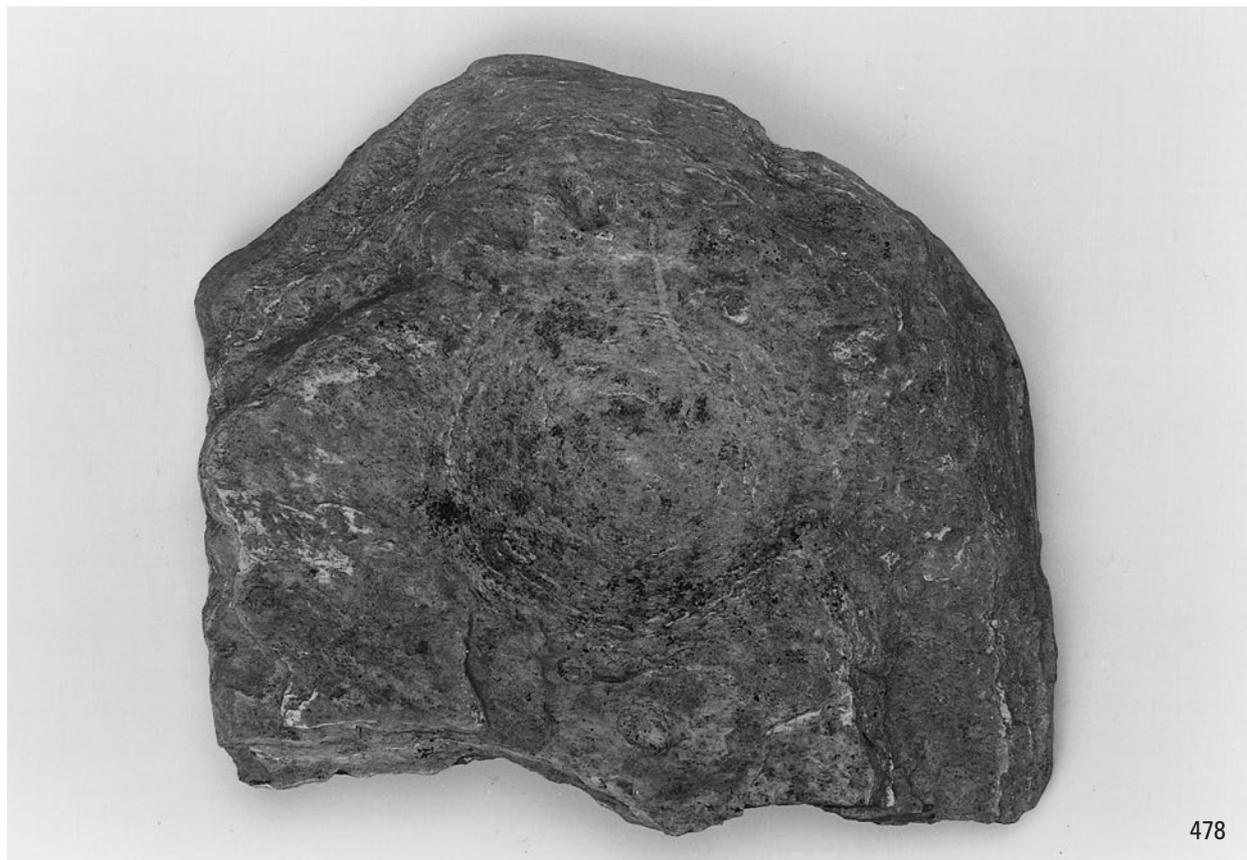
出土遺物⑧（石器）



出土遺物⑨（石器）



出土遺物⑩ (石器)



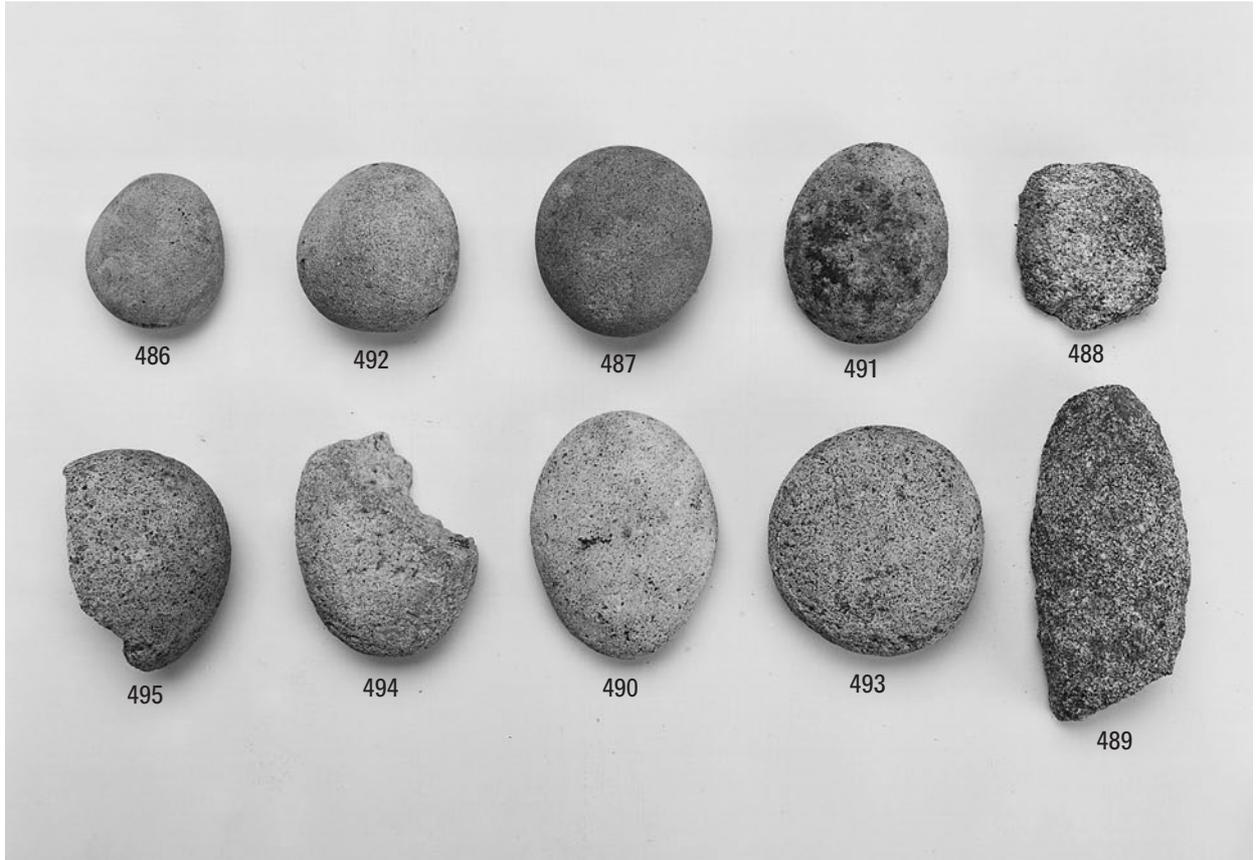
出土遺物⑩（石器）



出土遺物⑫ (石器)



出土遺物⑬（石器）



出土遺物⑭ (石器)



出土遺物⑮ (石器・石製品)



出土遺物⑩（土師器）



遺跡遠景（東から）



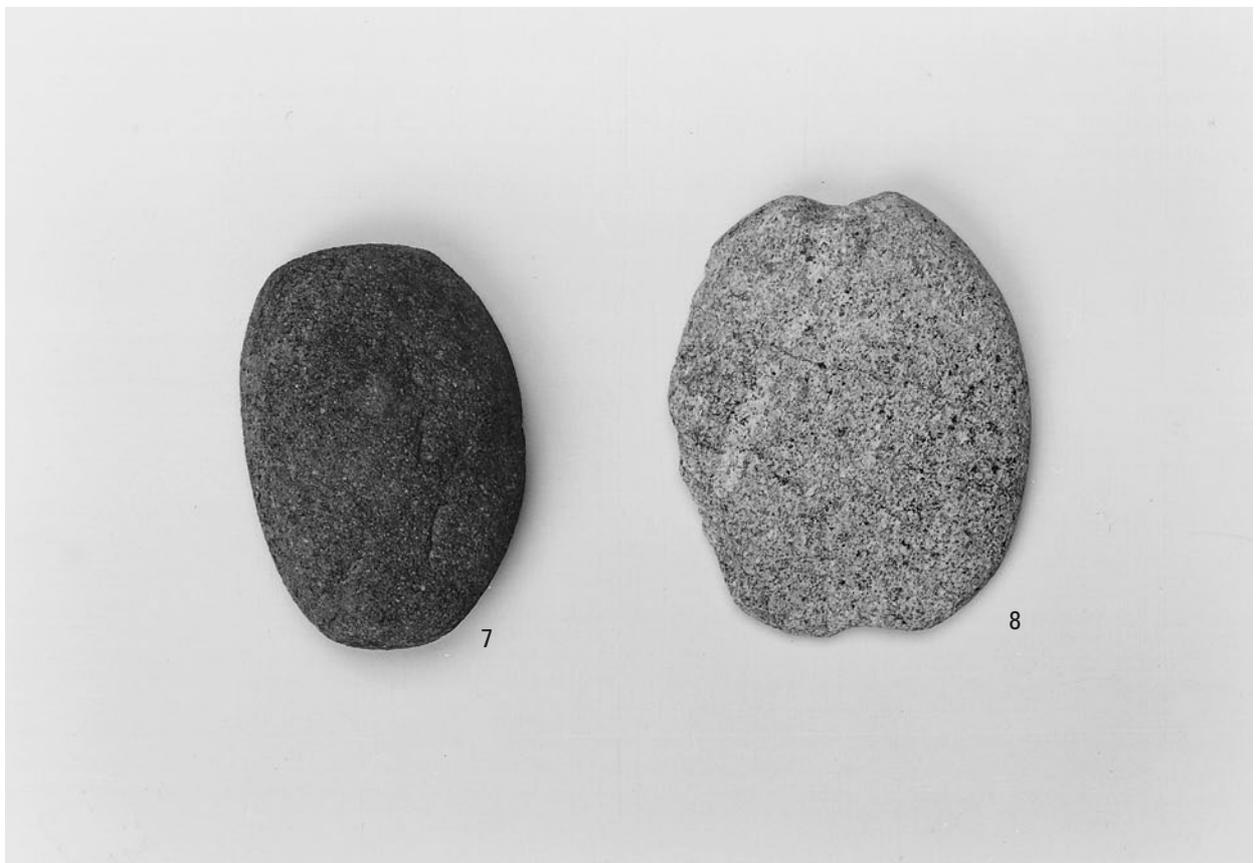
調査区全景（東から）



調査区全景（南から）



調査区全景（北から）



出土遺物



遺跡遠景（南から）



調査前状況（西から）



調査区全景（東から）



平成18年度工事立会調査区全景（東から）



出土遺物

# 報告書抄録

ふりがな	はせまちいせき・さいくういけいせき・まきだにいせき・よごろうだにいせき はつくつちようさほうこく							
書名	長谷町遺跡・斎宮池遺跡・真木谷遺跡・与五郎谷遺跡発掘調査報告							
副書名	宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ							
巻次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	208-7							
編著者名	小山憲一、田村陽一、林 義男、山口田美、西口剛司、大下 明、久保勝正、 檜崎修一郎、パリノ・サーヴェイ株式会社、成瀬匡章							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL0596-52-1732							
発行年月日	西暦2010年3月19日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はせまちいせき 長谷町遺跡	たきぐんめいわらう 多気郡明和町 いけむら 池村	442	717	34° 30′ 13″	136° 36′ 31″	20061106 ～ 20061222	946㎡  824㎡  300㎡  523㎡	平成18～ 20年度国 営宮川用 水第二期 土地改良 事業
さいくういけいせき 斎宮池遺跡	たきぐんめいわらう 多気郡明和町 いけむら 池村	442	693	34° 30′ 21″	136° 36′ 40″	20071005 ～ 20071213		
まきだにいせき 真木谷遺跡	たきぐんめいわらう 多気郡明和町 いけむら 池村	442	716	34° 30′ 20″	136° 36′ 37″	20071001 ～ 20071022		
よごろうだにいせき 与五郎谷遺跡	たきぐんたきちゆう 多気郡多気町 とよ 土羽	441	a152	34° 29′ 53″	136° 35′ 45″	20080917 ～ 20081017		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
長谷町遺跡	墓 集落	奈良・平安	竪穴住居・火葬 墓・焼土坑・土坑	土師器・灰釉陶 器・火葬人骨等		遺物重量：22.80kg		
斎宮池遺跡	集落	縄文・奈良	竪穴住居・土坑・ 焼土坑	縄文土器・土師 器・石鏃・石錘・ 敲石・磨石等		遺物重量：221.30kg		
真木谷遺跡	散布地	縄文 奈良・平安	土坑・ピット	土師器・石錘・ 敲石等		遺物重量：1.10kg		
与五郎谷遺跡	集落	奈良・平安	溝・ピット	土師器・須恵器等		遺物重量：2.03kg		
所収遺跡名	要 約							
長谷町遺跡	県内では11例目となる遺存状態の非常に良好な平安時代の火葬墓1基を検出。埋納された蔵骨器内には火葬人骨も残存し、蔵骨器を被覆する大量の木炭や供献品と考えられる5組の合口土師器杯皿類も出土した。また、当該火葬墓との関連が推定される焼土坑も検出された。							
斎宮池遺跡	縄文時代中期末～後期初頭の土坑・ピット等を検出。同時期の縄文土器や石鏃・磨製石斧・石錘・磨石・敲石・石皿等の石器も出土した。また、比較的遺存状態の良好な煙道付のカマドを伴う奈良時代の竪穴住居1棟と同時期の焼土坑1基も確認した。							
真木谷遺跡	時期不詳の土坑・ピット等を検出。遺物は石錘・敲石等の石器の他、奈良～平安時代の土師器片が出土した。							
与五郎谷遺跡	南面する丘陵端の緩斜面に立地する遺跡の北限付近を調査。時期不詳の溝・ピット等を検出し、奈良～平安時代を中心とした土師器等が出土した。							

三重県埋蔵文化財調査報告208-7

宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ

長谷町遺跡・斎宮池遺跡・真木谷遺跡・与五郎谷遺跡  
発掘調査報告

2010（平成22）年3月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター  
印刷 光出版印刷株式会社